

CA SiteMinder®

ポリシー サーバ インストール ガイド

r12.0 SP3



このドキュメント(組み込みヘルプ システムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」)は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社(以下「CA」)により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複写、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または (ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2010 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

CA SiteMinder®

CA への連絡先

テクニカル サポートの詳細については、弊社テクニカル サポートの **Web** サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

目次

第 1 章: インストールの概要	17
対象読者	17
サンプル SiteMinder のインストール	17
ポリシー サーバ	18
Federation セキュリティ サービスの管理 UI	19
ポリシー ストア	19
SiteMinder 管理 UI	20
CA Business Intelligence	20
SiteMinder 監査データベース	21
エージェント	22
管理ユーザ インターフェースの概要	23
SiteMinder のドキュメント	24
インストール前チェックリスト	24
 第 2 章: ポリシー サーバのインストール要件	 25
ポリシー サーバのシステム要件	25
Windows	25
UNIX	26
 第 3 章: 管理 UI インストール要件	 27
システム要件	27
Windows	27
UNIX	28
 第 4 章: レポート サーバ インストール要件	 29
システム要件	29
Windows	29
Windows の必要な更新	30
UNIX	30
Solaris で必要なパッチ クラスタ	30
レポート データベース要件	31

接続要件	31

第 5 章: Windows システムでのポリシー サーバのインストール 33

インストール ロード マップ	34
ポリシー サーバをインストールする前に	35
IIS 7.0 Web サーバのインストール前提条件	36
ポリシー サーバのインストール方法	37
ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項	37
ポリシー ストアの考慮事項	39
FIPS の考慮点	41
インストーラのための情報の収集	42
ポリシー サーバ インストーラの実行	48
ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング	51
SNMP イベントトラップの有効化	52
ポリシー ストアの設定	52
ポリシー サーバの無人インストール	53
ポリシー サーバ設定ウィザード	53
設定ウィザードを使用する方法	54
ポリシー サーバの再インストール	63
ポリシー サーバをアンインストールする方法	63
Path 変数での JRE の設定	63
エージェント ホスト ファイルからのポリシー サーバの参照の削除	64
ポリシー サーバのアンインストール	64
残存アイテムの削除	65
残りのサービスの削除	66
スクリプト インターフェース	66

第 6 章: UNIX システムでのポリシー サーバのインストール 69

インストール ロード マップ	70
Solaris 10 ゾーン サポート	71
グローバル ゾーン サポート	71
疎ルート ゾーン サポート	72
完全ルート ゾーン サポート	72
Solaris パッチ	73
ポリシー サーバのインストールの準備方法	73

必要とされる Linux ライブラリ	73
新規 UNIX アカウントの作成	74
UNIX システム パラメータの変更	74
ローカライズ変数の設定解除	75
LANG 環境変数の設定解除	75
ポリシー サーバをインストールする前に	76
ポリシー サーバのインストール方法	77
ポリシー サーバコンポーネントの考慮事項	78
ポリシー ストアの考慮事項	79
FIPS の考慮点	81
インストーラのための情報の収集	82
GUI モードによるポリシー サーバのインストール	88
コンソール モードによるポリシー サーバのインストール	91
ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング	94
SNMP デーモンの再起動	94
ポリシー ストアの設定	95
自動スタートアップの設定	95
ポリシー サーバの無人インストール	96
ポリシー サーバ設定ウィザード	96
設定ウィザードを使用する方法	97
Obj.conf と Magnus.conf ファイルのバックアップ バージョン	108
ポリシー サーバをアンインストールする方法	108
エージェント ホスト ファイルからのポリシー サーバの参照の削除	108
PATH 変数での JRE の設定	109
すべての SiteMinder プロセスの停止	109
ポリシー サーバのアンインストール	110
IWS からの SiteMinder 参照の削除	111
StartServletExec からの SiteMinder 参照の削除	112
スクリプト インターフェース	113

第 7 章: ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバ の設定 115

ポリシーまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバ	115
インストール ロード マップ	116
重要な考慮事項	117
ポリシー ストアとしての CA Directory	118

ディレクトリ サーバ情報の収集	118
ポリシー ストアを設定する方法	118
ポリシー ストアとしての Oracle Directory Server Enterprise Edition	133
ディレクトリ サーバ情報の収集	133
ポリシー ストアを設定する方法	134
ポリシー ストアとしての Active Directory	146
ディレクトリ サーバ情報の収集	147
ポリシー ストアを設定する方法	148
Active Directory ObjectCategory インデックス属性のサポート	158
ObjectCategory 属性サポートの有効化または無効化	159
ポリシー ストアとしての Microsoft ADAM/AD LDS	160
ADAM/AD LDS 要件	160
ディレクトリ サーバ情報の収集	161
ポリシー ストアを設定する方法	162
SiteMinder キー ストアの概要	173
既存ポリシー ストアでのキー ストアの設定	174
個別キー ストアの設定	174

第 8 章: リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定 177

ポリシーまたはキーのストアとしてのリレーショナル データベース	177
インストール ロード マップ	178
重要な考慮事項	180
リレーショナル データベース用のスキーマ ファイル	180
SQL Server のスキーマ ファイル	181
Oracle スキーマ ファイル	182
SQL Server ポリシー ストアの設定	183
データベース情報の収集	183
ポリシー ストアを設定する方法	184
Oracle ポリシー ストアの設定	200
Oracle 10 g データベースに対する前提条件	200
データベース情報の収集	202
ポリシー ストアを設定する方法	204
SQL Server データ ストアの設定	224
SQL Server 内にキー情報を格納する方法	224
SQL Server 内に監査ログを格納する方法	232
SQL Server 内にセッション情報を格納する方法	239

Oracle データストアの設定	247
Oracle でキー情報を格納する方法	247
Oracle で監査ログを格納する方法	261
Oracle でセッション情報を格納する方法	275
サンプル ユーザ ディレクトリ	288
Oracle サンプル ユーザ ディレクトリの設定	289
SQL Server サンプル ユーザ ディレクトリの設定	290

第 9 章: 管理 UI のインストール 291

インストール ロード マップ	291
管理 UI インストール オプション	292
ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ	293
管理 UI インストール チェックリスト	294
管理 UI をインストールする方法	294
必要とされる Linux ライブラリ	295
インストーラのための情報の収集	295
管理 UI 登録ウィンドウのリセット	296
管理 UI のインストール	299
管理 UI インストールのトラブルシューティング	303
管理 UI を登録する方法	304
アプリケーション サーバの起動	305
管理 UI の登録	305
アプリケーション サーバを停止します。	306
管理者クレデンシャル	307
管理 UI の高可用性	307
追加ポリシー サーバの接続を設定する方法	308
登録ツールの実行	308
登録情報の収集	311
ポリシー サーバへの接続設定	312
デフォルトポリシー サーバ接続の変更	313
ポリシー サーバ接続の削除	313
無人 管理 UI インストール	314
Windows 上の 管理 UI のアンインストール	314
UNIX 上の 管理 UI のアンインストール	316
Web エージェントのインストールの準備	317

第 10 章: Federation セキュリティ サービスの管理 UI の登録 319

FSS 管理 UI の登録	319
インストール ロード マップ	320
登録前のチェックリスト	321
FSS 管理 UI を登録する前に	322
FSS 管理 UI を登録する方法	323
FSS 管理 UI 用の登録クレデンシャルの作成	324
FSS 管理 UI へのログイン	325

第 11 章: レポートのインストール 327

インストール ロード マップ	327
レポート サーバ インストール オプション	329
インストール チェックリストのレポート	329
レポート サーバ	330
レポート データベースおよび監査データベース	332
レポートの考慮事項	334
レポート インストールのしくみ	335
レポート サーバをインストールする方法	336
インストーラのための情報の収集	336
レポート サーバのインストール	340
レポート サーバ インストールのトラブルシューティング	350
レポート テンプレートをインストールする方法	350
インストーラのための情報の収集	351
レポート テンプレートのインストール	351
ジョブ サーバ サービス タイムアウト値の増加	355
レポート サーバを登録する方法	356
クライアント名とパスフレーズの作成	357
登録情報の収集	359
ポリシー サーバにレポート サーバを登録します	360
レポート サーバを再起動します。	362
管理 UI への接続の設定	363
監査データベースを設定する方法	364
管理 UI での監査データベースの登録	365
監査データベースおよびレポート サーバの接続性	367
レポート スケジューラの開始	367

レポートサーバの停止	369
レポートをアンインストールする方法	370
Windows からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール	370
UNIX からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール	371
Windows からのレポート サーバのアンインストール	371
UNIX からのレポート サーバのアンインストール	372
Windows アイテムの削除	373
UNIX アイテムの削除	373
レポートデータベース テーブルの削除	374
管理 UI へのレポート サーバ接続の削除	374
レポートサーバの再インストール	375

第 12 章: OneView モニタの設定 377

OneView モニタの概要	377
OneView モニタのシステム要件	378
OneView モニタの設定	378
同じマシン上の OneView モニタ GUI/IIS Web エージェントの制限	379
Windows/IIS 上で OneView モニタ GUI を設定する方法	379
Windows に ServletExec をインストールするための前提条件	379
Windows IIS 上での ServletExec/ISAPI のインストール	380
ServletExec インストール後の IIS ユーザ用権限の設定	380
UNIX/Sun Java System 上で OneView モニタ GUI を設定する方法	380
ServletExec をインストールするための前提条件	381
Sun Java System 6.0 でのサーブレットの無効化	381
UNIX/Sun Java システムでの ServletExec/AS のインストール	382
OneView モニタ サービスの起動	383
OneView モニタ GUI へのアクセス	383
ポリシー サーバ クラスタの監視	384

第 13 章: SNMP サポート 385

SNMP サポートの概要	385
Windows と UNIX のシステムの場合の前提条件	387
Windows の前提条件	387
UNIX システムの前提条件	388
Windows 上での SNMP エージェントの設定	388

Windows で SNMP イベントトラップを設定する方法	389
UNIX システムでの SNMP エージェントの設定	391
UNIX システムで SNMP イベントトラップを設定する方法	391
Red Hat Enterprise Linux Advanced Server に対する SNMP Get のテスト	393
 付録 A: 既存アプリケーション サーバへの 管理 UI のインストール	395
管理 UI インストール オプション	395
管理 UI インストール要件	396
管理 UI システム要件	396
アプリケーション サーバ要件	397
ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ	401
管理 UI インストール チェックリスト	401
管理 UI をインストールする方法	402
必要とされる Linux ライブラリ	402
アプリケーション サーバ情報の収集	403
管理 UI のインストール	405
管理 UI を登録する方法	409
管理 UI 登録ウィンドウのリセット	410
アプリケーション サーバの起動	413
管理 UI の登録	414
アプリケーション サーバを停止します。	415
管理者クレデンシャル	416
管理 UI の高可用性	417
Windows での管理 UI のアンインストール	417
UNIX での管理 UI のアンインストール	418
 付録 B: インストール ワークシート	421
ポリシー サーバのワークシート	421
必要な情報のワークシート	421
OneView モニタ情報のワークシート	421
Microsoft ADAM/AD LDS サーバ情報ワークシート	422
Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート	422
SQL Server 情報のワークシート	423
Oracle RDBMS ワークシート	423
SM キー データベース情報のワークシート	424

ポリシーおよびデータ ストアのワークシート	424
CA Directory 情報ワークシート	424
Oracle Directory Server 情報ワークシート	425
Active Directory 情報ワークシート	425
Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート	426
SQL Server 情報のワークシート	426
Oracle 情報のワークシート	427
Oracle RAC 情報のワークシート	427
管理 UI のインストールのワークシート	428
必須インストーラワークシート	428
JBoss ワークシート	429
WebLogic ワークシート	429
WebSphere ワークシート	430
ポリシー サーバ登録ワークシート	430
ワークシートのレポート	431
インストール認証情報ワークシート	431
MySQL レポート データベース ワークシート	431
SQL Server レポート データベース ワークシート	432
Oracle Report データベースのワークシート	432
Apache Tomcat ワークシート	432
レポート サーバ設定ワークシート	433
レポート サーバの登録のワークシート	433

付録 C: トラブルシューティング 435

ポリシー サーバのトラブルシューティング	435
Solaris 上の NETE_PS_ALT_CONF_FILE 環境変数	435
ポリシー サーバがインストール後に起動しない	436
SiteMinder 環境変数がプロファイル ファイルに設定されていない	436
Winsock エラー 10054 メッセージ	437
SiteMinder ライセンスの使用	437
ポリシー ストアのトラブルシューティング	439
多数のオブジェクトを含むポリシー ストア	439
SSL 初期化に失敗する	440
ODBC ポリシー ストア インポートが UserDirectory エラーで失敗する	440
OneView モニタのトラブルシューティング	441
変更された UNIX/Sun Java System Web Server 設定ファイルの修正	442

/sitemindermonitor への Windows/IIS 仮想パスが存在しない	443
管理 UI のトラブルシューティング	444
ポリシー サーバ接続が登録できない	444
API エラーが表示される	445
「ファイルに登録がありません」エラーが表示される	445
「無効な登録ファイルです」エラーが表示される	447
タイムアウトすることなく登録が失敗する	449
管理 UI 登録ログが見つからない	450
検索がタイムアウト エラーで失敗する	450
デフォルトのログ ファイルが見つからない場合	451
デフォルトのログ ファイルは、十分な情報を提供しません。	452
FSS 管理 UI のトラブルシューティング	452
IE で FSS 管理 UI が起動しない	453
FSS 管理 UI が Windows 上で表示されない	453
FSS 管理 UI が Sun Java Web Server 上で起動に失敗する	454
IIS 6.0 の使用後に IIS 7.0 で正しい FSS 管理 UI を表示	455
レポート サーバのトラブルシューティング	455
レポート サーバ インストーラにファイル不足エラーが表示される	455
アンインストールでアプリケーションを閉じるよう要求される	456
レポート サーバのインストールは、文字に関するエラーで失敗します。	456
監査を基にしたレポートが結果を返さない	457
ポリシー分析レポートが実行できない	457
アンインストール中に Java エラー メッセージが表示される	458
Windows 上で PATH 変数に JRE を設定します	459
Solaris 上の PATH 変数での JRE の設定	459
Adobe Acrobat Reader がインストールされない	460
ユーザ ストアとしての Active Directory の使用に関する問題	460
AE がライブラリ「smjavaapi」のロードに失敗した システム エラー	461

付録 D: 無人インストール 463

無人インストール	463
無人インストールのガイドライン	463
デフォルト プロパティ ファイル	464
ポリシー サーバ プロパティ ファイル	464
管理 UI プロパティ ファイル	465
レポート プロパティ ファイル	466

ポリシー サーバの無人インストールを実行する方法	466
ポリシー サーバ インストーラのプロパティファイルの変更	467
ポリシー サーバ インストーラの実行	481
ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング	483
ポリシー サーバの無人インストールの停止	484
管理 UI の無人インストールを実行する方法	484
必須インストーラのプロパティファイルの変更	485
管理 UI インストーラのプロパティファイルの変更	486
管理 UI インストーラの実行	489
レポート サーバの無人インストールを実行する方法	492
Windows 用レポート サーバ応答ファイルの変更	493
UNIX 用レポート サーバ応答ファイルの変更	512
SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのプロパティファイルの変更	525
レポート サーバ インストーラの実行	526
レポート テンプレートのインストール	529

付録 E: 国際環境用のポリシー サーバの設定 533

国際環境内のポリシー サーバ	533
ポリシー サーバのインストールを計画する際の注意事項	533
マルチバイト文字をサポートするユーザ インターフェース フィールド	534
マルチバイト文字をサポートしているポリシー サーバ コンポーネント	537
マルチバイト文字 URL のサポート	538
国際文字をサポートする SiteMinder データストアの設定	541
SQL Server 内の国際 SiteMinder データストアの設定	541
Oracle での国際 SiteMinder データストアの設定	542
SQL Server 内の日本語ユーザストアの設定	543
Oracle 内での日本語ユーザストアの設定	544

付録 F: 変更される環境変数 547

変更された Windows 環境変数	547
変更された UNIX 環境変数	548

付録 G: プラットフォーム サポートおよびインストール メディア 551

SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス	551
マニュアル選択メニューの使用	552

インストール メディアの検索	552

索引	555

第 1 章：インストールの概要

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[対象読者](#) (P. 17)

[サンプル SiteMinder のインストール](#) (P. 17)

[管理ユーザ インターフェースの概要](#) (P. 23)

[SiteMinder のドキュメント](#) (P. 24)

[インストール前チェックリスト](#) (P. 24)

対象読者

このガイドは、以下についての実用的な知識を持っているユーザを対象としています。

- ディレクトリ サーバ
- リレーショナル データベース
- Web サーバ

本書では、読者が Java、J2EE 標準、およびアプリケーション サーバ技術に精通しており、以下の技術知識を持っていることを想定しています。

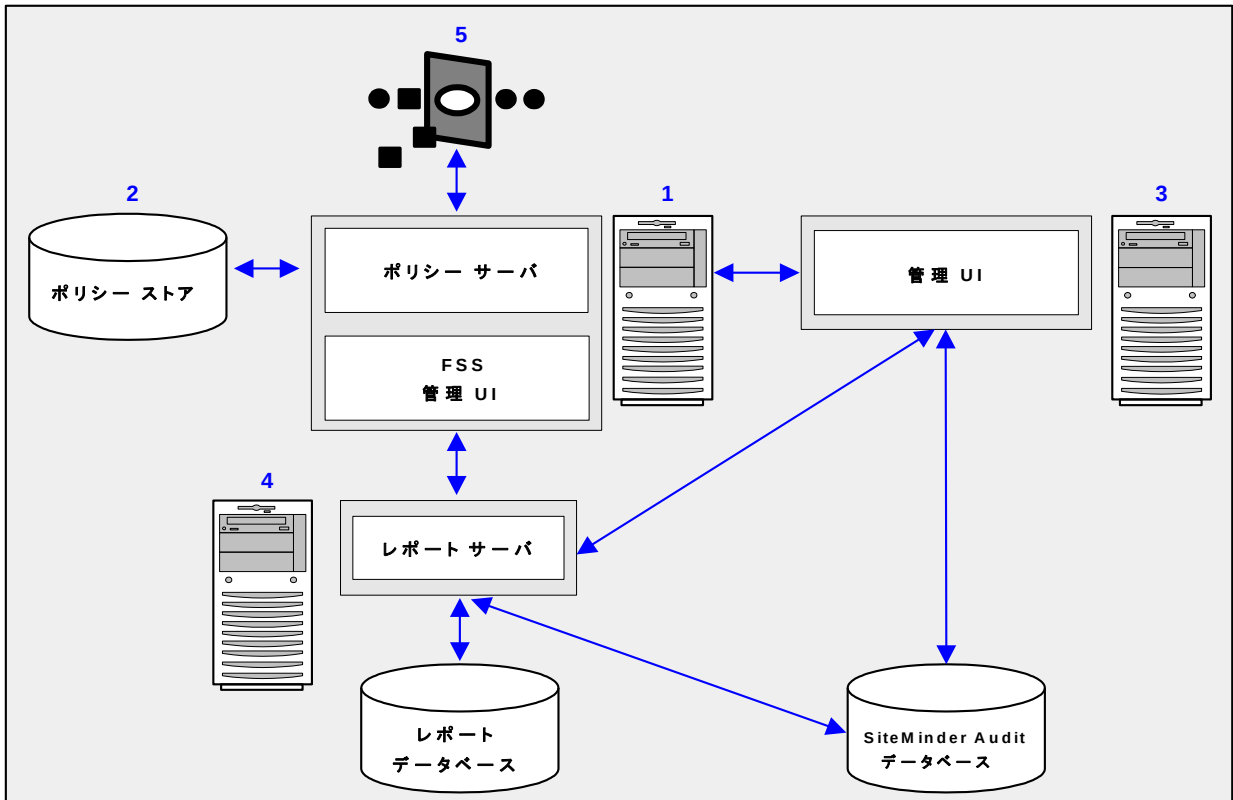
- J2EE アプリケーション サーバおよび多層アーキテクチャについての理解。
- アプリケーション サーバの管理経験。

サンプル SiteMinder のインストール

SiteMinder のインストールには、いくつかのコンポーネントのインストールおよび設定が必要です。次の図では、以下の要素を示しています。

- 1 つ目のシステムにインストールおよび設定されたポリシー サーバ、SiteMinder Federation セキュリティ サービス UI (FSS 管理 UI) およびポリシー ストア
- 2 つ目のシステムにインストールされた SiteMinder 管理 UI (管理 UI)

- 3 つ目のシステムにインストールおよび設定された CA Business Intelligence (レポート サーバ)
- 各コンポーネントのインストールおよび設定の指示。



ポリシー サーバ

(必須) SiteMinder ポリシー サーバ (ポリシー サーバ) は、ポリシー決定ポイント (PDP) として働きます。ポリシー サーバの目的は、アクセス制御ポリシーを評価および実行することです。その際、ポリシー サーバは SiteMinder エージェントと通信します。ポリシー サーバは、以下を提供します。

- ポリシー ベースのユーザ管理
- 認証サービス
- 認可サービス
- パスワード サービス
- セッション管理
- 監査サービス

ポリシー サーバは、これらのタスクを実行するために他のすべての主要コンポーネントと交信します。

Federation セキュリティ サービスの管理 UI

(オプション) **SiteMinder Federation セキュリティ サービス 管理 UI (FSS 管理 UI)** は、ポリシー サーバとともにオプションでインストールされる、アプレットベースのアプリケーションです。**Federation セキュリティ サービス** コンポーネントは、アプリエイト(コンシューマ、サービス プロバイダ、リソース パートナー)と、2 つのパートナー間のフェデレーション通信をサポートするために設定する **SAML 認証** 方式で構成されます。

FSS 管理 UI は **SiteMinder Federation セキュリティ サービス** に関連するタスクの管理のみを目的としています。

ポリシー ストア

(必須) **SiteMinder ポリシー ストア (ポリシー ストア)** は、**LDAP** ディレクトリ サーバまたは **ODBC** データベース内に存在する資格情報ストアです。このコンポーネントの目的は、以下を含むすべてのポリシー関連のオブジェクトを格納することです。

- **SiteMinder** が保護しているリソース
- それらのリソースを保護するために使用されるメソッド
- それらのリソースにアクセス可能またはアクセス不可能な、ユーザまたはグループ
- ユーザが保護されたリソースへのアクセスを許可または拒否されたときに実行されるべきアクション

ポリシー サーバは、ポリシーと総称されるリソースを保護するかどうか、そして認証されたユーザによるリクエストされたリソースへのアクセスを許可するかどうかを決定するために、この情報を使用します。

注: ポリシー ストアの設定の詳細については、ドキュメント ロードマップを参照してください。

SiteMinder 管理 UI

(必須) SiteMinder 管理 UI (管理 UI) は、ポリシー サーバから独立してインストールされる Web ベースの管理コンソールです。管理 UI は SiteMinder の実装でプライマリ UI として機能し、以下のようなアクセス制御関連のすべてのタスクを管理することを目的としています。

- 認証と許可のポリシー
- エンタープライズ ポリシー管理 (EPM)
- レポートおよびポリシー分析

管理 UI は、Federation セキュリティ サービス (FSS) に関連するオブジェクト以外のすべてのポリシー サーバ オブジェクトの表示、変更、および削除を目的としています。フェデレーション関連の設定タスクはすべて FSS 管理 UI を使用して管理されます。

CA Business Intelligence

(オプション) CA Business Intelligence は、レポーティングおよび分析ソフトウェアのセットです。情報の提示およびビジネス意思決定をサポートするために、さまざまな CA 製品により使用されます。CA 製品は、CA Business Intelligence を使用して、さまざまなレポート オプションによって、効果的な企業 IT 管理に必要な情報を統合、分析、および表示します。

CA Business Intelligence には、情報管理、レポート、クエリ、および分析用の各ツールからなる完全なスイートである BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3 が含まれています。CA Business Intelligence は BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3 をスタンドアロン コンポーネントとしてインストールします。このガイドでは、このスタンドアロン コンポーネントをレポート サーバと呼びます。レポート サーバのインストールは全体的な SiteMinder インストール プロセス内の独立した手順です。SiteMinder 固有のコンポーネントとは別にレポート サーバをインストールすると、他の CA 製品が同じ Business Intelligence Services を共有できるようになります。

レポート サーバは SiteMinder 環境の分析を助けるためにレポートをコンパイルします。このコンポーネントの目的は、以下のタイプのレポートを作成することです。

- 監査
- ポリシー分析

レポートサーバは、レポートを編集するために以下のコンポーネントと通信します。

- 集中管理サーバ (CMS) データベース (レポート データベース)
- 管理 UI
- ポリシー サーバ
- SiteMinder 監査データベース

SiteMinder 監査データベース

(オプション) デフォルトでは、ポリシー サーバは監査イベントをテキスト ファイルに書き込みます。これはポリシー サーバ ログとして知られています。監査ログの目的は、以下を含むすべてのユーザ アクティビティに関する情報を追跡することです。

- すべての成功した認証
- すべての失敗した認証
- すべての成功した認可試行
- すべての失敗した認可試行
- すべての管理ログイン試行
- 管理者パスワードの変更、ポリシー ストア オブジェクトの作成およびポリシー ストア オブジェクトの変更といった、すべての管理アクション

ただし、スタンドアロン SiteMinder 監査データベース (監査データベース) を設定することができます。監査イベントの格納場所を決定するときは、以下を考慮します。

- レポート サーバは、監査ベースのレポートを作成するために監査データベースへの接続を必要とします。レポート サーバは、テキスト ファイルに書き込まれたポリシー サーバ ログから監査ベースのレポートを作成することはできません。
- テキスト ファイルに情報を記録するよりも、監査ログをデータベースに格納する方が安全です。
- サポートされている場合は、ポリシー ストアは監査データベースとしても機能することができます。

注: 監査データベースの設定する詳細については、ドキュメント ロードマップを参照してください。

エージェント

(必須) SiteMinder エージェントは、Web サーバ、J2EE アプリケーション サーバ、Enterprise Resource Planning (ERP) システムまたはカスタム アプリケーション上に存在することができます。エージェントは、リソース用ユーザリクエストをインターセプトし、リソースが保護されるかどうか決定するためにポリシー サーバと通信して、ポリシー実行ポイント(PEP)として働きます。

リソースが保護されない場合、エージェントはアクセスを許可します。リソースが保護されている場合、エージェントはユーザを認証および認可するためにポリシー サーバとの通信を続行します。認可が正しく行われると、エージェントはリソースリクエストをサーバに送るよう要求されます。さらにエージェントは以下のような働きをします。

- コンテンツのパーソナライズを有効にするために、Web アプリケーションに情報を提供します。
- 認証されたユーザおよび保護されたリソースに関する情報をキャッシュして、リソースへのより迅速なアクセスを可能にします。
- シングル サインオン(SSO)の有効化

管理ユーザ インターフェースの概要

以下に示すように、特定の SiteMinder ポリシー オブジェクトを設定する 2 つのグラフィカル ユーザ インターフェースがあります。

- **SiteMinder 管理 UI** (管理 UI) - 管理 UI は、ポリシー サーバから独立してインストールされる Web ベースの管理コンソールです。管理 UI は、認証および許可ポリシー、EPM (Enterprise Policy Management)、レポートおよびポリシー分析のようなアクセス制御に関連するほとんどのタスクを設定するためのツールです。

Federation セキュリティ サービスに関連するオブジェクト以外のすべてのポリシー サーバ オブジェクトを表示、変更および削除するために、管理 UI を使用します。フェデレーション関連の設定タスクはすべて FSS 管理 UI を使用して管理できます。

- **SiteMinder Federation セキュリティ サービスの管理 UI** (FSS 管理 UI) - FSS 管理 UI は、ポリシー サーバと同時にインストールされるアプレットベースのアプリケーションです。Federation セキュリティ サービス コンポーネントは、アフィリエイト (コンシューマ、サービス プロバイダ、リソース パートナー) と、2 つのパートナー間のフェデレーション通信をサポートするために設定する SAML 認証方式で構成されます。SiteMinder Federation セキュリティ サービスのみを設定するために、FSS 管理 UI を使用します。

FSS 管理 UI は、SiteMinder Federation セキュリティ サービスを管理するために用意されています。以前のバージョンの SiteMinder ポリシー サーバのユーザ インターフェースと異なり、すべての SiteMinder オブジェクトが FSS 管理 UI に表示されることがわかります。表示されないオブジェクトは、EPM (Enterprise Policy Management) およびレポートに関連するオブジェクトだけです。FSS 管理 UI を使用すると、SiteMinder オブジェクトを管理できます。FSS 管理 UI を使用しているときに情報が必要となった場合は、FSS 管理 UI オンライン ヘルプ システムを調べます。

注: FSS 管理 UI はポリシー サーバでインストールされましたが、使用するためにはポリシー サーバに登録する必要があります。FSS 管理 UI の登録には、管理 UI を使用する必要があります。そのため、FSS 管理 UI を登録する前に 管理 UI をインストールおよび設定します。組織とパートナーとの間でフェデレーションが実現していない場合は、Federation セキュリティ サービスを登録せず安全にポリシー サーバ ホストシステム上に残すことができます。

SiteMinder のドキュメント

SiteMinder マニュアル選択メニューには、主な SiteMinder ドキュメントがすべて含まれています。これらのドキュメントはそれぞれ HTML と PDF で提供されています。SiteMinder マニュアル選択メニューを使用すると、以下のことを実行できます。

- 1 つのコンソールを通じてすべての主要ドキュメントを参照する。
- 1 つのアルファベット順索引を使用して、任意のマニュアル内のトピックを見つける。
- すべてのマニュアルで 1 つ以上の単語を検索する。

SiteMinder マニュアル選択メニューは、CA テクニカル サポート サイトからアクセスでき、その際サイトにログインする必要はありません。

詳細情報:

[マニュアル選択メニューの使用](#) (P. 552)

インストール前チェックリスト

ポリシー サーバ、管理 UI およびレポート サーバをインストールする前に以下を印刷して、必要なシステムおよびソフトウェア要件をすべて満たしていることを確認するチェックリストとして使用することをお勧めします。

- ☐ SiteMinder 書庫 をインストールします。
- ☐ ポリシー サーバをホストする Windows または UNIX のシステムが、最小の[システム要件](#) (P. 25)を満たすことを確認します。
- ☐ 管理 UI をホストする Windows または UNIX のシステムが、最小の[システム要件](#) (P. 27)を満たすことを確認します。
- ☐ レポート サーバをホストする Windows または UNIX のシステムが、最小の[システム要件](#) (P. 29)を満たすことを確認します。
- ☐ [レポートデータベース要件](#) (P. 31)を満たすデータベース インスタンスが環境に含まれていることを確認します。

第 2 章: ポリシー サーバのインストール要件

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[ポリシー サーバのシステム要件](#) (P. 25)

ポリシー サーバのシステム要件

以下のセクションでは、Windows システムと UNIX のシステムにポリシー サーバをインストールするための最小システム要件について詳しく説明します。

Windows

ポリシー サーバがインストールされる Windows システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- **CPU** - Pentium III 以上
 - **メモリ** - 512 MB RAM
 - **使用可能なディスク領域**
 - インストール場所に 270 MB の空きディスク領域
 - システムの一時ファイル場所に 180 MB の空き領域
- 注: これらの要件は、およそ 1,000 ポリシーの中規模ポリシー データベースに基づきます。
- **JRE** - JRE の必要なバージョンは、ポリシー サーバをインストールするシステム上にインストールされます。
 - **LDAP ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベース** - ポリシー ストアとして使用する予定の LDAP ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベースがサポートされていることを確認してください。
 - **Web サーバ** - サポートされている Web サーバ

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポートマトリックスを参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

UNIX

ポリシー サーバがインストールされる UNIX システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- **メモリ** - 512 MB RAM
- **使用可能なディスク領域**
 - 300 MB の空きディスク領域
 - /tmp 内に 200 MB の空きディスク領域

注: ポリシー サーバの日常運用には、通常 /tmp 内に最大 10 MB の空きディスク領域が必要です。ポリシー サーバは、/tmp の下にファイルおよび名前付きパイプを作成します。これらのファイルおよびパイプが作成されたパスは変更できません。

- **JRE** - JRE の必要なバージョンは、ポリシー サーバをインストールするシステム上にインストールされます。
- **LDAP ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベース** - ポリシー ストアとして使用する予定の LDAP ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベースがサポートされていることを確認してください。
- **Web サーバ** - サポートされている Web サーバ

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの [SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックス](#)を参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

第 3 章：管理 UI インストール要件

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[システム要件](#) (P. 27)

システム要件

以下のセクションは、スタンドアロン インストール オプションを使用して 管理 UI をインストールするための最小のシステム要件を詳述します。

注： サポートされている CA およびサードパーティコンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3** プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

Windows

管理 UI がインストールされる Windows システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- **CPU** - シングルまたはデュアル プロセッサ、Intel Pentium III (またはその互換)、700～900 MHz
- **メモリ** - 512 MB RAM 1 GB をお勧めします。
- **使用可能なディスク領域** - 540 MB
- **一時ディレクトリ領域** - 450 MB
- **画面解像度** - 管理 UI を正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

UNIX

管理 UI がインストールされる UNIX システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- **CPU**
 - Solaris - Sparc Workstation 440 MHz
 - Red Hat Linux - シングルまたはデュアル プロセッサ、Intel Pentium III (またはその互換)、700～900 MHz
- **メモリ** - 512 MB RAM 1 GB をお勧めします。
- **使用可能なディスク領域** - 540 MB
- **一時ディレクトリ領域** - 450 MB
- **画面解像度** - 管理 UI を正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

第 4 章: レポート サーバ インストール要件

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[システム要件](#) (P. 29)

[レポート データベース要件](#) (P. 31)

[接続要件](#) (P. 31)

システム要件

以下のセクションは、レポート サーバをインストールするための最小のシステム要件を詳述します。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム** のサポート マトリックスを参照してください。

Windows

レポート サーバをインストールする **Windows** システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- **CPU** - シングルまたはデュアル プロセッサ、Intel Pentium III (またはその互換)、2.5 GHz
- **メモリ** - 2 GB RAM
- **使用可能なディスク領域** - 10 GB

注: この要件は、レポート サーバをインストールするために必要なスペースです。この要件は、レポートを格納するのに必要なディスク スペースを示したものではありません。

- **一時ディレクトリ領域** - 1 GB
- **画面解像度** - 管理 UI でレポートを正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

Windows の必要な更新

レポートサーバでは、Windows 2003 R2 に適用する特定の Windows 2003 更新プログラムを必要とします。レポートサーバをインストールする前に、Windows システムを更新してください。

重要: 必要な更新をインストールしないと、レポートサーバのインストールは失敗します。

注: 更新の詳細については、「ポリシー サーバリリース ノート」を参照してください。

UNIX

レポートサーバをインストールする UNIX システムは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

- CPU - Sparc Workstation 2.5 GHz
- メモリ - 2 GB RAM
- 使用可能なディスク領域 - 10 GB

注: この要件は、レポートサーバをインストールするために必要なスペースです。この要件は、レポートを格納するのに必要なディスクスペースを示したものではありません。

- 一時ディレクトリ領域 - 1 GB
- 画面解像度 - 管理 UI でレポートを正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

Solaris で必要なパッチ クラスタ

レポートサーバは特定の Solaris パッチ クラスタを必要とします。レポートサーバをインストールする前に、Solaris システムを更新します。

重要: 必要なパッチをインストールしない場合、レポートサーバのインストールは失敗します。

注: Solaris パッチ クラスタの詳細については、「ポリシー サーバリリース ノート」を参照してください。

レポート データベース要件

レポートサーバは、レポートを実行するためにレポート データベースを必要とします。レポートサーバ インストーラは、Sun Microsystems MySQL™ (MySQL) の埋め込みバージョンを、レポート データベースとして機能するようにインストールすることができます。

MySQL の埋め込みバージョンをインストールしない場合は、以下のサポートされているバージョンが使用できます。

- Microsoft® SQL Server® (SQL Server)
- Oracle®

重要: レポートサーバは、CA 製品が共有できる CA の共通コンポーネントです。そのため、SiteMinder を除く他の製品でサポートされるデータベースのタイプおよびバージョンに及ぶまで、レポート データベースとしてインストーラで設定することができます。サポートされているデータベースのタイプおよびバージョンのリストについては、「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

接続要件

レポートサーバは、以下と通信するためにドライバを必要とします。

- SQL Server または Oracle のレポート データベース

注: MySQL の埋め込みバージョンを使用する場合は、レポート データベースの接続要件はありません。

- SiteMinder 監査ストア

サポートされている Microsoft SQL Server ドライバまたは Oracle Net クライアントを、必ずレポートサーバ ホストシステムにインストールしてください。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリクスを参照してください。

第 5 章: Windows システムでのポリシー サーバのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ロード マップ](#) (P. 34)

[ポリシー サーバをインストールする前に](#) (P. 35)

[ポリシー サーバのインストール方法](#) (P. 37)

[ポリシー サーバの無人インストール](#) (P. 53)

[ポリシー サーバ設定ウィザード](#) (P. 53)

[ポリシー サーバの再インストール](#) (P. 63)

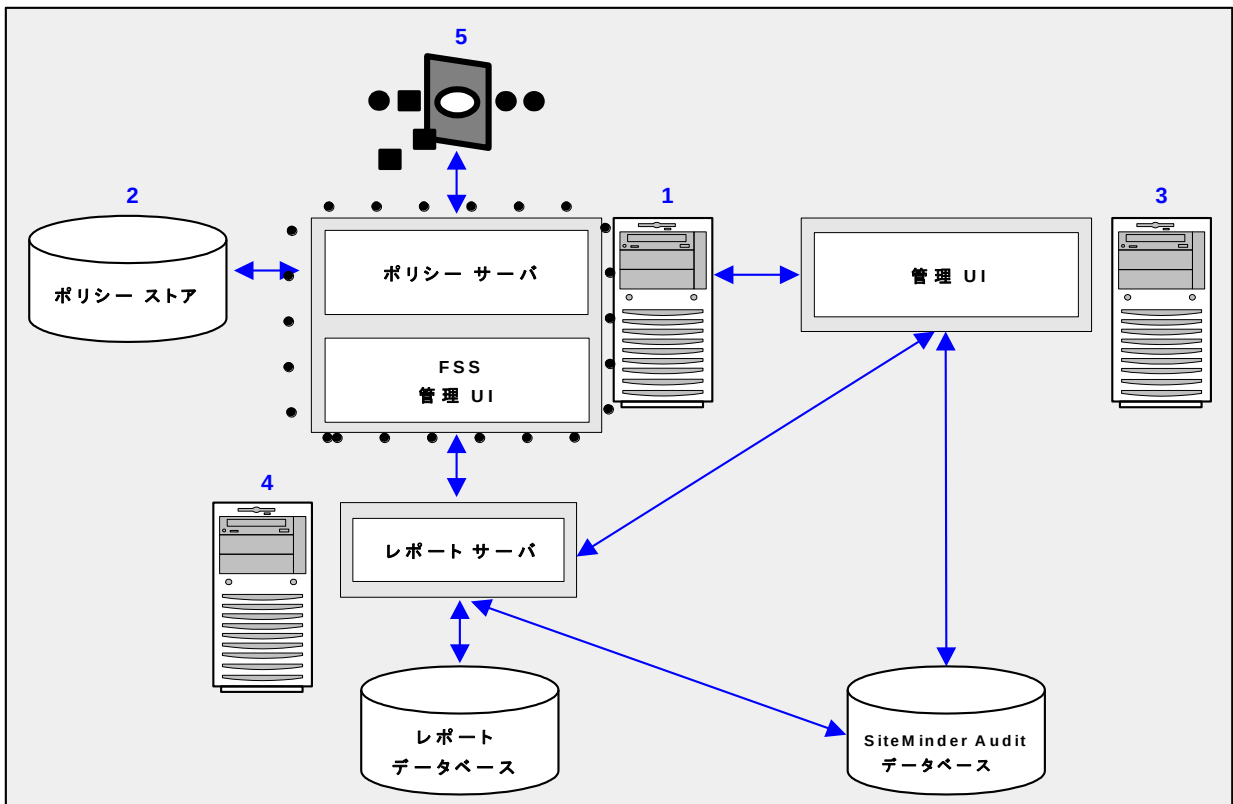
[ポリシー サーバをアンインストールする方法](#) (P. 63)

[スクリプトインターフェース](#) (P. 66)

インストール ロード マップ

以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。以下の点について考慮してください。

- ポリシー サーバのホストシステムが、最小のシステム要件を満たすことを確認します。ポリシー サーバのインストールする前に確認することをお勧めします。
- 点線で囲まれたコンポーネントは、これからインストールされるポリシー サーバおよび FSS 管理 UI です。



詳細情報:

[ポリシー サーバ](#) (P. 18)

[管理ユーザ インターフェースの概要](#) (P. 23)

ポリシー サーバをインストールする前に

ポリシー サーバをインストールする前に以下の点に注意してください。

- **管理者権限** -- ポリシー サーバをインストールするには、ローカル管理者権限を備えた **Windows** アカウントにログインする必要があります。
- **システム パスの長さ** -- SiteMinder によって追加されたディレクトリの有無に関わらず、システム パスの長さが **1024** 文字を超える場合、ポリシー サーバのインストールは失敗します。

注: 最適の結果を得るには、SiteMinder の前のシステム パスを約 **700** 文字にトリミングすることをお勧めします。

- **Web サーバ インスタンス** -- Sun Java System または IIS Web サーバ インスタンスが停止していることを確認します。Web サーバを停止すると、ポリシー サーバ インストーラによって、選択された Web サーバ インスタンスで動作するように FSS 管理 UI が設定されます。
- **環境変数** -- ポリシー サーバ インストールによって環境変数を変更されます。
- **IBM Directory Server のみ** - IBM Directory Server を SiteMinder 環境で使用するには、V3.matchingrules ファイルに以下の行を追加して編集する必要があります。

```
MatchingRules=(2.5.13.15 NAME 'integerOrderingMatch' SYNTAX  
1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.27)
```

V3.matchingrules ファイルをこのように変更していない場合、ディレクトリストアは正しく設定されず、ポリシー ストアに必要な SiteMinder オブジェクトは作成できません。

- **(IIS 7.0) FSS UI を使用するための前提条件** -- [IIS 7.0 Web サーバ上で FSS UI](#) (P. 36) を実行するには、完了しておく必要がある手順があります。

IIS 7.0 Web サーバのインストール前提条件

アプレット ベースの FSS 管理 UI は、ポリシー サーバと共に自動的にインストールされます。IIS 7.0 Web サーバ上で FSS 管理 UI を操作するには、いくつかの前提条件があります。

IIS 7.0 が Web サーバ オプションとして使用できるようにするには、ポリシー サーバをインストールして設定ウィザードを実行する前に、以下の手順を完了します。

FSS 管理 UI の Web サーバとして IIS 7.0 を選択する方法

1. Windows 2008 システム上の Windows Server Manager にアクセスします。
2. 以下のロール サービスがインストールされた IIS 7.0 Web サーバをサーバロールとして追加します。
 - CGI
 - ISAPI 機能拡張
 - ISAPI フィルタ
3. Server Manager を終了します。
4. [スタート]-[管理ツール]-[IIS]を選択して、インターネット情報サービス(IIS) マネージャにアクセスします。
5. サーバのサーバ ノードを展開し、Application Pools を選択します。
6. DefaultAppPool をクリックし、[Actions]ペインの[Basic Settings]を選択します。
7. [Managed pipeline mode]リストで、設定を[pool]から[Classic]に変更します。
8. [OK]をクリックします。
9. IIS 7.0 を再起動します。
10. Web ページも開いて、アプリケーション プールを開始します。

ポリシー サーバ設定ウィザードを実行したときに IIS 7.0 が Web サーバ オプションとして選択できるようになりました。

ポリシー サーバのインストール方法

ポリシー サーバをインストールするには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項を確認します。
2. ポリシー ストアの考慮事項を確認します。
3. FIPS の注意事項を確認します。
4. ポリシー サーバ インストーラ用の情報を収集します。
5. ポリシー サーバのインストーラを実行します。
6. (オプション) SNMP を設定した場合は、SNMP イベントトラッピングを有効にします。
7. (オプション) ポリシー ストアを設定するためにポリシー サーバ インストーラを使用しない場合は、手動でポリシー ストアを設定します。

詳細情報:

[ポリシー サーバの再インストール \(P. 63\)](#)

ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項

ポリシー サーバのインストーラは、以下のコンポーネントを設定できます。ポリシー サーバのインストーラを実行する前に、以下を確認します。

- **FSS 管理 UI** - FSS 管理 UI は Federation セキュリティ サービス の管理のためにあり、ポリシー サーバでインストールされます。組織とパートナーとの間でフェデレーションが実現していない場合、FSS 管理 UI の使用は必須ではありません。注: FSS 管理 UI はポリシー サーバのインストールにおける主要部の 1 つですが、使用するためにはポリシー サーバに登録する必要があります。FSS 管理 UI の登録には、管理 UI を使用する必要があります。そのため、FSS 管理 UI を登録する前に 管理 UI をインストールおよび設定します。
- **Web サーバ** - FSS 管理 UI を設定するために、サポートされている Web サーバが必要です。ポリシー サーバのインストーラは、選択された Web サーバで FSS 管理 UI を設定します。

- **OneView モニタ** - OneView モニタは、SiteMinder コンポーネントの監視を有効にします。

注: OneView モニタを使用するためには、サポートされている Java SDK および ServletExec ISAPI Windows/IIS がインストールされている必要があります。

- **SNMP** - ポリシー サーバをインストールする前に、Windows オペレーティングシステムでインストールされた SNMP サービス (マスタ OS エージェント) があることを確認してください。

注: Windows オンライン ヘルプ システムに、SNMP サービスのインストールの詳細情報があります。

- **ポリシー ストア** - ポリシー ストアは、ポリシー サーバ オブジェクトおよびポリシー情報用のリポジトリです。

- **SiteMinder キー データベース (smkeydatabase)** - キー データベースは、SiteMinder 消費権限と SiteMinder 生産権限との間の署名、確認、暗号化および復号化のために使用されるキー ストアです。キー データベースは、以下の場合のみ必要となります。

- Federation セキュリティ サービスに関連する機能を使用する予定である場合
- たとえば Microsoft CardSpace のサポート用など、SiteMinder Information Card 認証方式を設定する予定である場合

インストール中にキー データベースを設定するように決定すると、デフォルトの証明機関 (CA) の証明書をインストールするよう要求されます。インストール後に、キー データベースへの追加の証明書および秘密キーを追加することができます。

注: キー データベースの詳細と、追加の証明書および秘密キーを追加する方法の詳細については、「*Federation Security Services Guide*」を参照してください。

- **監査ログ** - リレーショナル データベースまたはテキストファイルのいずれかに、監査ログを格納することができます。ポリシー サーバをインストールした後、デフォルトでは監査ログは ODBC ではなくテキストファイルに設定されます。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

ポリシー ストアの考慮事項

ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードを実行する前に、以下を考慮します。

- ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、以下のいずれかをポリシー ストアとして自動的に設定できます。

- Microsoft® Active Directory® in Application Mode (ADAM)
- Microsoft Active Directory 軽量ディレクトリ サービス (AD LDS)

注: ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するための要件を満たしていることを確認してください。

- Oracle® Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition)
- Microsoft SQL Server® (SQL Server)
- Oracle RDBMS

重要: ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、SSL で接続されているポリシー ストアを自動的に設定することができません。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードは、特定のデータベース情報を使用してポリシー ストア データソースを作成します。ポリシー サーバは、このデータソースを使用してポリシー ストアと通信します。以下の点について考慮してください。

- データソースの名前は **CA SiteMinder DSN** です。
- (Windows) インストーラは、Microsoft ODBC データソース管理ツールの [システム DSN] タブにこのデータソースを保存します。
- (UNIX) インストーラは、**system_odbc.ini** ファイル (siteminder_home/db 内) にこのデータソースを保存します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー ストアをホストするデータベース サーバが UTF-8 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。この設定によってポリシー ストア破損の可能性を回避します。
 - (Oracle) データベースが UTF-8 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。Oracle は、多くのユニコードの文字セットをサポートします。オブジェクトを UTF-8 形式で格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
 - (SQL Server) データベースがデフォルトの照合 (SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS) を使用して設定されていることを確認してください。大文字/小文字を区別した照合を使用すると、予期しない動作をする場合があります。デフォルトの照合を使用してオブジェクトを格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- ポリシー サーバをインストールした後に、他のサポートされたディレクトリ サーバまたはポリシー ストアとしてのリレーショナル データベースを手動で設定します。ポリシー ストアの手動設定については、このガイド内に詳述されています。

詳細情報:

[ADAM/AD LDS 要件](#) (P. 160)

[ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定](#) (P. 115)

[リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定](#) (P. 177)

FIPS の考慮点

ポリシー サーバは、米国連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 準拠と認定された暗号ライブラリを使用します。FIPS は、AES (Advanced Encryption Standard: 高度暗号化標準) に適合する暗号モジュールを信用するために使用される米国政府のコンピュータ セキュリティ標準です。SiteMinder 環境が機密データを暗号化するために FIPS 準拠のアルゴリズムを使用する場合のみ、ライブラリは FIPS 操作モードを提供します。

以下の FIPS 操作モードのうちの 1 つで、ポリシー サーバをインストールすることができます。

注: ポリシー サーバが作動する FIPS モードは、システム固有のものです。詳細については、テクニカル サポート サイトの「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

- **FIPS 互換モード** - インストール中のデフォルト FIPS 操作モードは、FIPS 互換モードです。FIPS 互換モードでは、環境は機密データを暗号化するために既存の SiteMinder アルゴリズムを使用し、旧バージョンの SiteMinder と互換性があります。
 - 環境内での FIPS 準拠のアルゴリズムの使用はオプションです。
 - 組織が FIPS 準拠のアルゴリズムの使用を必要としない場合は、FIPS 互換モードでポリシー サーバをインストールします。追加設定は必要ありません。

- **FIPS 移行モード** - FIPS 移行モードでは、FIPS 互換モードで実行されている r12.0 SP3 環境を FIPS 専用モードに移行することができます。

FIPS 移行モードでは、FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するために r12.0 SP3 環境を移行する間、r12.0 SP3 ポリシー サーバは既存の SiteMinder 暗号化アルゴリズムを使用し続けます。

FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するために既存の環境を設定している途中の場合は、FIPS 移行モードでポリシー サーバをインストールします。

- **FIPS 専用モード** - FIPS 専用モードでは、環境は機密データを暗号化するために FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用します。

既存の環境が r12.0 SP3 にアップグレードされ、FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するように設定される場合は、FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールします。

重要: FIPS 専用モードで実行されている **r12.0 SP3** 環境は、**SiteMinder** の旧バージョンで動作できないか、下位互換になりえません。これには、すべてのエージェント、以前のバージョンのエージェント **API** を使用しているカスタムソフトウェア、および **PM API** またはポリシー サーバが公開する他の **API** を使用しているカスタムソフトウェアが含まれます。完全 **FIPS** モードのための必要なサポートを得るために、すべてのそのようなソフトウェアを各 **SDK** の **r12.0 SP3** バージョンと再リンクします。

注: FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用した環境への移行の詳細については、「アップグレード ガイド」を参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス \(P. 551\)](#)

インストーラのための情報の収集

ポリシー サーバ インストーラは、ポリシー サーバおよびオプション コンポーネントをインストールするために、特定の情報を必要とします。

注: インストール ワークシートは、ポリシー サーバ インストール ウィザードまたはポリシー サーバ設定ウィザードを使用して、ポリシー サーバ コンポーネントをインストールまたは設定する前に情報を収集し、記録するのに役立つように提供されています。これらのワークシートを印刷し、いずれかのウィザードを実行する前に必要な情報を記録するために使用することをお勧めします。

必要な情報

ポリシー サーバ インストーラまたは設定ウィザードを実行する前に以下の必要な情報を収集します。値を記録するために、必要な情報のワークシートを使用できます。

- **JRE の場所** - インストーラがサポートされている **JRE** を見つけることができるフォルダを特定し、**JAVA_HOME** システム変数が正しい場所に設定されていることを確認します。**JAVA_HOME** システム変数が不正確に設定されている場合、インストーラは **JRE** を見つけることができません。
- **ポリシー サーバのインストール場所** - インストーラがポリシー サーバをインストールする場所を決定します。

デフォルト: C:\Program Files\CA

- **暗号化キー値** - 暗号化キー値を決定します。暗号化キーは、大文字小文字の区別がある英数字のキーであり、ポリシー サーバとポリシー ストアの間で送信されるデータを保護します。1 つのポリシー ストアを共有するポリシー サーバはすべて同じ暗号化キーを使用して設定する必要があります。セキュリティ保護を強化する場合には、長い暗号化キーを定義します。

制限: 6 ～ 24 文字

SiteMinder のキー データベース情報

SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)情報を収集する必要があるのは、以下の場合のみです。

- **Federation** セキュリティ サービスに関連する機能を使用する予定である場合。
- たとえば **Microsoft CardSpace** のサポート用など、**SiteMinder Information Card** 認証方式を設定する予定である場合。

ポリシー サーバ インストーラでは、smkeydatabase を設定するときにパスワードを入力する必要があります。smkeydatabase パスワードは、キー データベース内のキーと証明書のデータを暗号化するために使用されます。値を記録するために SiteMinder キー データベース情報のワークシートを使用できます。

OneView モニタ情報

OneView モニタ情報を収集する必要があるのは、OneView モニタを設定する場合のみです。

OneView モニタを設定するには、以下の必要な情報を収集します。OneView モニタ情報のワークシートを使用して値を記録できます。

- **JDK パス** - 必要な JDK バージョンへのパスを特定します。
- **ServletExec インストール ディレクトリ** - ServletExec のインストール ディレクトリを特定します。

例: /usr/local/NewAtlanta/ServletExecAS

- **ServletExec ポート番号** - インスタンス用のポート番号を決定します。
- **Sun Java System 管理者ディレクトリ** - 以下の情報を判別します。
 - Sun Java System のインストール場所。
 - Sun Java System Web サーバのインストール場所。

例: /sunjavasystem_home/location

sunjavasystem home

Sun Java System のインストール場所を指定します。

場所

Sun Java System Web サーバのインストール場所を指定します。

- 複数の **ServletExec** インスタンス - 複数の **ServletExec** インスタンスがある場合、**OneView** モニタ GUI を設定するインスタンスを決定します。

ADAM および AD LDS サーバ情報

Microsoft ADAM または AD LDS をポリシー ストアとして機能するように設定する場合は、以下の必要な情報を収集します。

- システム IP アドレス - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを識別します。
- ポート番号 - ディレクトリ サーバがリスンしているポート番号を識別します。
- アプリケーション パーティションのルート DN - ポリシー ストア スキーマ データがインストールされるべきディレクトリ サーバ内の、アプリケーション パーティションのルート DN の場所を識別します。

例: dc=ca,dc=com

- 管理者ドメイン名 - guid 値を含む、ディレクトリ管理者のフルドメイン名を識別します。

例: CN=user1、CN=people、CN=Configuration、CN=guid

- 管理者パスワード - ディレクトリ管理者のパスワードを識別します。
- 代替ユーザ アカウント - デフォルトでは、**SiteMinder** はディレクトリ サーバと通信するために管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別のユーザ アカウントを使用できます。代替ユーザ アカウントを使用してポリシー ストアを管理するように **SiteMinder** を設定するための、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder** スーパーユーザ パスワード - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート](#) (P. 426)

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報

Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして設定している場合、Oracle Directory Server Enterprise Edition ワークシートを使用して、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを特定します。
- **ディレクトリ インスタンス ポート番号** - ディレクトリ サーバ インスタンスのポート番号を決定します。

デフォルト: 389

- **ルート DN** - ディレクトリ サーバのルート DN を特定します。

例: o=yourorg.com

- **管理者アカウント** - LDAP 管理者アカウント用のユーザ名 (バインド DN) を識別します。

例: cn=Directory Manager

- **管理者パスワード** - ディレクトリ サーバ管理者用のパスワードを特定します。

- **代替 LDAP 管理者** - デフォルトでは、SiteMinder は LDAP サーバと通信するために LDAP 管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別の LDAP ユーザ アカウントを使用することができます。このように SiteMinder を設定するために、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート \(P. 422\)](#)

SQL Server 情報

ポリシー ストアとして機能するよう SQL Server を設定している場合は、SQL Server ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホストシステムの IP アドレスまたは名前を特定します。

注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。

- **データベース名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースの名前または名前付きインスタンスを特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。

- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[SQL Server 情報のワークシート](#) (P. 423)

Oracle RDBMS 情報

ポリシー ストアとして機能するよう Oracle RDBMS を設定している場合は、Oracle RDBMS ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベースサーバ名** -- データベース ホストシステムの IP アドレスまたは名前を特定します。

注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。
- **データベース サービス名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースのサービス名を特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。

- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント (siteminder) は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle RDBMS ワークシート](#) (P. 423)

ポリシー サーバ インストーラの実行

テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用してポリシー サーバをインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

ポリシー サーバ インストーラを実行する方法

1. システムが **Windows** 要件を満たすことを確認してください。
2. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。

3. *installation_media* をダブルクリックします。

installation_media

ポリシー サーバのインストール実行可能ファイルの名前を指定します。
インストーラが起動します。

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、実行ファイルを管理者権限で実行します。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネント用のリリース ノートを参照してください。

4. ポリシー サーバのインストールおよびポリシー サーバコンポーネントの設定のために収集された、システムおよびコンポーネント情報を使用します。インストーラを実行するときは、以下の点を考慮します。

- FIPS 操作モードを選択するよう要求されます。環境内での FIPS 準拠のアルゴリズムの使用はオプションです。組織がこのタイプの暗号化を必要としない場合は、FIPS 互換モードでポリシー サーバをインストールします。
- 設定するコンポーネントを選択するように要求された場合は、以下を実行します。
 - 「[ポリシー ストアの考慮事項 \(P. 39\)](#)」に説明されているとおり、ポリシー サーバ インストーラは自動的にポリシー ストアを設定できます。このトピックに含まれていないベンダーを使用しているか、または必要な情報を持っていない場合は、[ポリシー ストア]チェック ボックスをオフにします。ポリシー サーバをインストールした後にポリシー ストアを手動で設定することができます。
 - Federation セキュリティ サービスに関連する機能を使用する場合は、「Web サーバ」および「SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する」のチェック ボックスを必ずオンにしてください。

注: Web サーバを設定すると FSS 管理 UI がインストールされます。Federation セキュリティ サービスを使用しない場合、FSS 管理 UI は必要ではありません。

- たとえば Microsoft CardSpace のサポートのために SiteMinder Information Card 認証方式を設定する場合は、「SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する」のチェック ボックスをオンにします。

注: SiteMinder キー データベースの作成を決定すると、デフォルトの CA 証明書をインストールするよう要求されます。CA のデフォルト証明書をインポートのチェック ボックスをオンのままにし、証明書をインストールします。インストール後に、キー データベースへの追加の証明書および秘密キーを追加することができます。

- ポリシー ストアを初期化する場合、デフォルトの SiteMinder ユーザ アカウント用パスワードを入力するよう要求されます。デフォルトのアカウント名は「siteminder」です。
- IPv6 アドレスを使用する場合は、エントリに角かっこが含まれていることを確認してください。

例: [2001:db8::1428:57ab]

- パス情報を切り取ってウィザードに貼り付ける場合は、文字を入力して [次へ] ボタンを有効にします。

5. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

ポリシー サーバおよび他の選択されたコンポーネントが、インストールおよび設定されます。

注: FSS 管理 UI のインストールを選択した場合、管理 UI のインストールおよび設定後に 管理 UI をポリシー サーバに登録します。

注: インストール中に問題があった場合は、インストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを `siteminder_home¥siteminder¥install_config_info` に置くことができます。

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[インストールメディアの検索](#) (P. 552)

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティングには、以下のファイルを使用します。

- CA_SiteMinder_Policy_Server_release_InstallLog.log

インストール ログは、インストール中に発生した成功、警告、致命的でないエラーおよびエラーの数をリスト表示するサマリ セクションを含みます。個別のインストール アクションは、それぞれのステータスと共にリスト表示されます。

release

ポリシー サーバのリリースを指定します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\install_config_info

- ca-ps-details.log

ポリシー ストア ログは、ポリシー ストア ステータスを詳述します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\install_config_info

- smps.log

smps.log は、ポリシー サーバが開始されるときに作成されます。ポリシー サーバが正常にインストールされた場合、このログは以下の行を含みます。

[Info]ジャーナル スレッドが開始され、60 分以上前のコマンドを削除します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

SNMP イベントトラップの有効化

この手順はオプションです。**SNMP**トラッピングを有効にする必要があるのは、ポリシー サーバをインストールするときにこの機能を設定した場合のみです。

注: この手順を完了する前に、**Windows** システムに **SNMP** サービスがインストールされていることを確認します。

SNMP のイベントトラップを有効にするには、**XPSCConfig** ユーティリティを使用して、**XPSAudit** リストにイベント ハンドラ ライブラリ (**eventsnmp.dll**) を設定します。**eventsnmp.dll** のデフォルトの場所は **policy_server_home\bin** です。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール場所を示します。

注: イベント ハンドラ ライブラリを設定するための **XPSCConfig** ユーティリティの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

SNMP イベントトラッピングの設定を完了するには、**snmptrap.conf** ファイルを設定します。必要な **SNMP** 前提条件および手順の詳細については、**SNMP** サポートを参照してください。

ポリシー ストアの設定

ポリシー サーバ インストーラを使用してポリシー ストアを自動的に設定しなかった場合は、サポートされている **LDAP** ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベースを手動でポリシー ストアとして設定します。

ポリシー サーバの無人インストール

ポリシー サーバを 1 台のマシンに手動でインストールした後、無人インストールモードを使用してそれを再インストールしたり、別のマシンにインストールできます。無人インストールでは、ユーザが操作することなく、ポリシー サーバをインストールまたはアンインストールすることができます。

インストーラは、ユーザがインストール変数を定義できる `ca-ps-installer.properties` テンプレートファイルを提供します。このファイル内のデフォルトのパラメータ、パスワードおよびパスは、最初のポリシー サーバインストール中に入力した情報を反映します。このファイルには、暗号化パスワードとプレーン テキストパスワードのいずれも保存できます。たとえば、共有秘密キーや SiteMinder のスーパーユーザなど暗号化されたパスワードを使用する場合、最初のインストール中に入力したのと同じものを使用する必要があります。それは、それらはファイル内で暗号化されており、変更できないためです。ただし、ファイルを変更してプレーン テキストパスワードを使用することもできます。

ポリシー サーバ設定ウィザード

ポリシー サーバのインストール後、以下のコンポーネントを設定または再設定するためにポリシー サーバ設定ウィザードを使用します。

- FSS 管理 UI
- OneView モニタ GUI
- SNMP サポート
- SiteMinder キー データベース
- ポリシー ストア(「ポリシー ストアの考慮事項」を参照)

注: ポリシー サーバ設定ウィザードを使用してポリシー サーバ **FIPS** 操作モードを変更することはできません。ポリシー サーバ **FIPS** 操作モードの変更についての詳細は、「**SiteMinder アップグレード ガイド**」を参照してください。

重要: Oracle iPlanet Web サーバ(以前の Sun Java System Web サーバ)インスタンスが OneView モニタ GUI または SNMP に対して設定されている場合、ポリシー サーバ設定ウィザードを使用して新規インスタンスを設定しないでください。新しい Web サーバ インスタンスを設定するためにウィザードを実行すると、既存の設定済み Web サーバ インスタンスが失敗する場合があります。

詳細情報:

[ポリシー ストアの考慮事項 \(P. 39\)](#)

設定ウィザードを使用する方法

ポリシー サーバ設定ウィザードを使用するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー ストアの考慮事項を確認します。
2. 以下を設定する場合は、ウィザード用の情報を収集します。
 - SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)
 - OneView モニタ
 - ポリシー ストア(「ポリシー ストアの考慮事項」を参照)
3. ポリシー サーバ設定ウィザードを実行します。

ポリシー ストアの考慮事項

ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードを実行する前に、以下を考慮します。

- ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、以下のいずれかをポリシー ストアとして自動的に設定できます。
 - Microsoft® Active Directory® in Application Mode (ADAM)
 - Microsoft Active Directory 軽量ディレクトリ サービス(AD LDS)
注: ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するための要件を満たしていることを確認してください。
 - Oracle® Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition)
 - Microsoft SQL Server® (SQL Server)
 - Oracle RDBMS

重要: ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、SSL で接続されているポリシー ストアを自動的に設定することができません。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードは、特定のデータベース情報を使用してポリシー ストア データソースを作成します。ポリシー サーバは、このデータソースを使用してポリシー ストアと通信します。以下の点について考慮してください。
 - データソースの名前は **CA SiteMinder DSN** です。
 - (Windows) インストーラは、**Microsoft ODBC データソース管理ツール**の [システム DSN] タブにこのデータソースを保存します。
 - (UNIX) インストーラは、**system_odbc.ini** ファイル (**siteminder_home/db** 内) にこのデータソースを保存します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストールパスを指定します。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー ストアをホストするデータベース サーバが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。この設定によってポリシー ストア破損の可能性を回避します。
 - (Oracle) データベースが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。Oracle は、多くのユニコードの文字セットをサポートします。オブジェクトを **UTF-8** 形式で格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
 - (SQL Server) データベースがデフォルトの照合 (**SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS**) を使用して設定されていることを確認してください。大文字/小文字を区別した照合を使用すると、予期しない動作をする場合があります。デフォルトの照合を使用してオブジェクトを格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- ポリシー サーバをインストールした後に、他のサポートされたディレクトリ サーバまたはポリシー ストアとしてのリレーショナル データベースを手動で設定します。ポリシー ストアの手動設定については、このガイド内に詳述されています。

詳細情報:

[ADAM/AD LDS 要件 \(P. 160\)](#)

[ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定 \(P. 115\)](#)

[リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定 \(P. 177\)](#)

設定ウィザード用の情報の収集

ポリシー サーバ設定ウィザードは、ポリシー サーバ コンポーネントを設定するための具体的情報を必要とします。

注: インストール ワークシートは、ポリシー サーバ インストール ウィザードまたはポリシー サーバ設定ウィザードを使用して、ポリシー サーバ コンポーネントをインストールまたは設定する前に情報を収集し、記録するのに役立つように提供されています。これらのワークシートを印刷し、いずれかのウィザードを実行する前に必要な情報を記録するために使用することをお勧めします。

SiteMinder のキー データベース情報

SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)情報を収集する必要があるのは、以下の場合のみです。

- **Federation** セキュリティ サービスに関連する機能を使用する予定である場合。
- たとえば **Microsoft CardSpace** のサポート用など、**SiteMinder Information Card** 認証方式を設定する予定である場合。

ポリシー サーバ インストーラでは、smkeydatabase を設定するときにパスワードを入力することが必要です。smkeydatabase パスワードは、キー データベース内のキーと証明書のデータを暗号化するために使用されます。値を記録するために **SiteMinder** キー データベース情報のワークシートを使用できます。

OneView モニタ情報

OneView モニタ情報を収集する必要があるのは、**OneView** モニタを設定する場合のみです。

OneView モニタを設定するには、以下の必要な情報を収集します。OneView モニタ情報のワークシートを使用して値を記録できます。

- **JDK パス** - 必要な JDK バージョンへのパスを特定します。
- **ServletExec インストール ディレクトリ** - ServletExec のインストール ディレクトリを特定します。

例: /usr/local/NewAtlanta/ServletExecAS

- **ServletExec ポート番号** - インスタンス用のポート番号を決定します。
- **Sun Java System 管理者ディレクトリ** - 以下の情報を判別します。
 - Sun Java System のインストール場所。
 - Sun Java System Web サーバのインストール場所。

例: `/sunjavasystem_home/location`

`sunjavasystem home`

Sun Java System のインストール場所を指定します。

場所

Sun Java System Web サーバのインストール場所を指定します。

- **複数の ServletExec インスタンス** - 複数の ServletExec インスタンスがある場合、OneView モニタ GUI を設定するインスタンスを決定します。

ADAM および AD LDS サーバ情報

Microsoft ADAM または AD LDS をポリシー ストアとして機能するように設定する場合は、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを識別します。
- **ポート番号** - ディレクトリ サーバがリスンしているポート番号を識別します。
- **アプリケーション パーティションのルート DN** - ポリシー ストア スキーマ データがインストールされるべきディレクトリ サーバ内の、アプリケーション パーティションのルート DN の場所を識別します。

例: `dc=ca,dc=com`

- **管理者ドメイン名** - guid 値を含む、ディレクトリ管理者のフルドメイン名を識別します。

例: `CN=user1, CN=people, CN=Configuration, CN=guid`

- **管理者パスワード** - ディレクトリ管理者のパスワードを識別します。

- **代替ユーザ アカウント** - デフォルトでは、**SiteMinder** はディレクトリ サーバと通信するために管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別のユーザ アカウントを使用できます。代替ユーザ アカウントを使用してポリシー ストアを管理するように **SiteMinder** を設定するための、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント (**siteminder**) は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート](#) (P. 426)

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報

Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして設定している場合、Oracle Directory Server Enterprise Edition ワークシートを使用して、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを特定します。
- **ディレクトリ インスタンス ポート番号** - ディレクトリ サーバ インスタンスのポート番号を決定します。

デフォルト: 389

- **ルート DN** - ディレクトリ サーバのルート DN を特定します。
例: o=yourorg.com
 - **管理者アカウント** - LDAP 管理者アカウント用のユーザ名 (バインド DN) を識別します。
例: cn=Directory Manager
 - **管理者パスワード** - ディレクトリ サーバ管理者用のパスワードを特定します。
 - **代替 LDAP 管理者** - デフォルトでは、SiteMinder は LDAP サーバと通信するために LDAP 管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別の LDAP ユーザ アカウントを使用することができます。このように SiteMinder を設定するために、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。
- 注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート \(P. 422\)](#)

SQL Server 情報

ポリシー ストアとして機能するよう **SQL Server** を設定している場合は、**SQL Server** ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホスト システムの IP アドレスまたは名前を特定します。
注: IPv6 サポートの詳細については、**SiteMinder** プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。
- **データベース名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースの名前または名前付きインスタンスを特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。
- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[SQL Server 情報のワークシート](#) (P. 423)

Oracle RDBMS 情報

ポリシー ストアとして機能するよう Oracle RDBMS を設定している場合は、Oracle RDBMS ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホスト システムの IP アドレスまたは名前を特定します。
注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。
- **データベース サービス名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースのサービス名を特定します。
- **データベース ポート** -- データベース がリスンするポートを特定します。
- **データベース 管理者 ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者 アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース 管理者 パスワード** -- 管理者 アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント (siteminder) は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle RDBMS ワークシート](#) (P. 423)

設定ウィザードの実行

設定ウィザードを実行する方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. `siteminder_home\siteminder\install_config_info` に移動し、`ca-ps-config.exe` をダブルクリックします。

ポリシー サーバ設定ウィザードが起動します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、実行ファイルを管理者権限で実行します。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネント用のリリース ノートを参照してください。

3. ポリシー ストアおよび個別のコンポーネントを設定するために収集したシステムおよびコンポーネント情報を使用します。

注: LDAP インスタンスを初期化するように要求されたときは、新しいポリシー ストア インスタンスを設定するためにのみ、初期化します。

4. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

ウィザードによって、選択したコンポーネントをポリシー サーバと連動するように設定します。

注: これには数分間かかる場合があります。

5. [完了]をクリックし、システムを再起動します。

選択したコンポーネントが設定されます。

注: 問題が発生する場合、`siteminder_home\siteminder\install_config_info` にあるインストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを参照してください。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング \(P. 51\)](#)

ポリシー サーバの再インストール

同じバージョンの既存のポリシー サーバにポリシー サーバを再インストールすると、失われたアプリケーション ファイルをリストアしたり、ポリシー サーバのデフォルト インストール設定をリストアできます。

ポリシー サーバを再インストールする方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを使用して、ポリシー サーバを停止します。
注: ポリシー サーバの停止および起動の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。
2. ポリシー サーバ管理コンソールを閉じます。
3. ポリシー サーバをインストールします。
4. ポリシー サーバ管理コンソールを使用して、ポリシー サーバを起動します。

ポリシー サーバをアンインストールする方法

ポリシー サーバをアンインストールするには、以下の手順に従います。

1. パスシステム変数に JRE を設定します。
2. ポリシー サーバ管理コンソールのすべてのインスタンスをシャットダウンします。
3. エージェント ホスト ファイルからポリシー サーバの参照を削除します。
4. ポリシー サーバをアンインストールします。

Path 変数での JRE の設定

ポリシー サーバ、Web エージェントおよび SDK をアンインストールする際は、Path 変数に JRE を設定します。これにより、アンインストール プログラムが停止して以下のエラー メッセージを発行するのを防ぎます。

- "Could not find a valid Java virtual machine to load. You need to reinstall a supported Java virtual machine."
- "No Java virtual machine could be found from your PATH environment variable. You must install a VM prior to running this program."

PATH 変数に JRE を設定する方法

1. Windows のコントロール パネルを開きます。
2. [システム]をダブルクリックします。
3. [環境変数]ダイアログ ボックスで、Path システム変数に JRE の場所を追加します。

エージェント ホスト ファイルからのポリシー サーバの参照の削除

ポリシー サーバをアンインストールしたら、Web エージェントからの予期しない結果を防止するために、SmHost.conf ファイルからポリシー サーバの参照を削除します。

ポリシー サーバの参照を削除する方法

1. `web_agent_home/config` に移動します。

`web_agent_home`

Web エージェントのインストール ディレクトリを示します。

2. テキスト エディタで SmHost.conf ファイルを開きます。
3. 「policyserver=」から始まる行を削除します。

注: この行は、アンインストールしているポリシー サーバの IP アドレスおよびポート番号を含んでいます。

4. SmHost.conf を保存します。

これで SmHost.conf ファイルは、アンインストールするポリシー サーバを参照なくなります。

ポリシー サーバのアンインストール

ポリシー サーバが不要になった場合は、アンインストールします。

ポリシー サーバをアンインストールする方法

1. Windows のコントロール パネルを開き、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
インストールされたプログラムのリストが表示されます。
2. SiteMinder ポリシー サーバを選択し、[追加/削除]をクリックします。

3. アンインストール ウィザードの指示に従います。

注: 共有ファイルの削除についてのメッセージが表示された場合は、すべてに[いいえ]をクリックします。

4. 要求された場合はシステムを再起動します。

ポリシー サーバがアンインストールされます。

残存アイテムの削除

システムをできるだけクリーンに保つために、ポリシー サーバをアンインストールした後、以下のフォルダ、レジストリ設定および仮想ディレクトリを手動で削除します。

■ Windows システム

- `siteminder_home\bin`
- `siteminder_home\install_config_info`

注: ポリシー サーバを再インストールする予定がある場合は、これらのフォルダが削除されていることを確認します。

- **AdventNet ソフトウェア レジストリ エントリ** - AdventNet ソフトウェア エントリは、このソフトウェアがポリシー サーバをインストールする前はシステム上に存在していなかった場合にのみ削除します。このレジストリ エントリは、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Advent,Inc.` の下のレジストリ エントリの下にあります。
- **IIS 仮想ディレクトリ** - 以下の SiteMinder 仮想ディレクトリを IIS Microsoft 管理コンソールを使用して削除します。
 - 'SiteMinder'
 - 'SiteMinderCgi'
 - 'SiteMinderMonitor'
 - 'netegrity_docs'

残りのサービスの削除

ポリシー サーバをアンインストールし、マシンを再起動した後、以下のサービスが削除されていない場合があります。

- SiteMinder 状態監視サービス
- SiteMinder ポリシー サーバ
- SNMP エージェント

手動で残りのサービスを削除する方法

1. 各サービスを停止します。
2. 必要に応じて、以下の Windows レジストリ キーを削除します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\<Registry_Key_Name>

Registry_Key_Name

削除するサービスのレジストリ キー名を指定します。

- SMServMon (SiteMinder 状態監視サービス)
- SMPolicySrv (SiteMinder ポリシー サーバ)
- エージェント サービス (SNMP エージェント)

残りのサービスが削除されます。

スクリプト インターフェース

コマンドライン インターフェースでは、Perl のスクリプトを作成して、ポリシー ストアを設定および管理できます。インストール プログラムによって、Perl の完全版がインストールされ、*siteminder_installation/CLI* ディレクトリ内にインターフェース ファイルが配置されます。

siteminder_installation

SiteMinder のインストール場所を示します。

例: /home/smuser/siteminder/CLI

コマンドライン インターフェースを使用するには、ユーザのシステムの PATH 環境変数で、以下のディレクトリがユーザのマシン上の他の Perl の bin ディレクトリの前にあることを確認します。

例: /home/smuser/siteminder/CLI/bin

注: スクリプト インターフェースの詳細については、「Programming Guide for Perl」を参照してください。

第 6 章: UNIX システムでのポリシー サーバのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ロード マップ](#) (P. 70)

[Solaris 10 ゾーン サポート](#) (P. 71)

[Solaris パッチ](#) (P. 73)

[ポリシー サーバのインストールの準備方法](#) (P. 73)

[ポリシー サーバをインストールする前に](#) (P. 76)

[ポリシー サーバのインストール方法](#) (P. 77)

[自動スタートアップの設定](#) (P. 95)

[ポリシー サーバの無人インストール](#) (P. 96)

[ポリシー サーバ設定ウィザード](#) (P. 96)

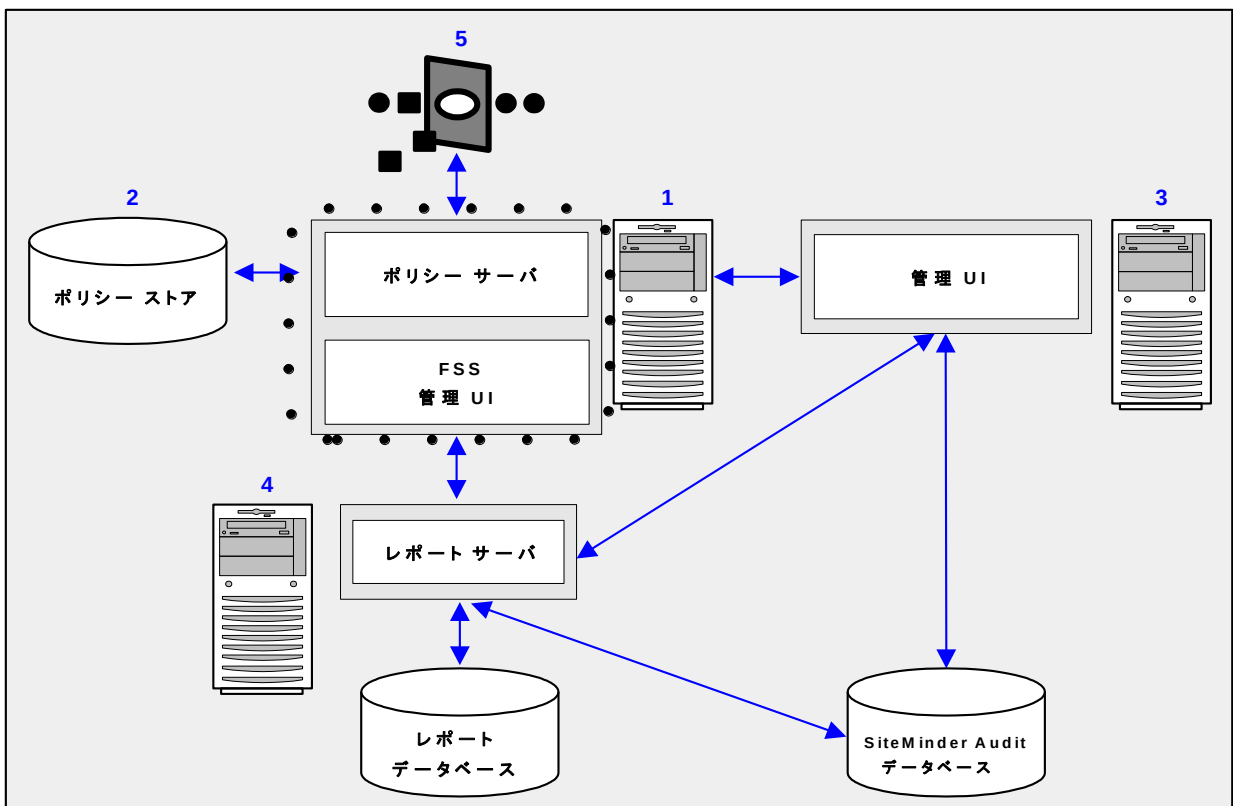
[ポリシー サーバをアンインストールする方法](#) (P. 108)

[スクリプト インターフェース](#) (P. 113)

インストール ロード マップ

以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。以下の点について考慮してください。

- ポリシー サーバのホストシステムが、最小のシステム要件を満たすことを確認します。ポリシー サーバのインストールする前に確認することをお勧めします。
- 点線で囲まれたコンポーネントは、これからインストールされるポリシー サーバおよび FSS 管理 UI です。



詳細情報:

[ポリシー サーバ](#) (P. 18)

[管理ユーザ インターフェースの概要](#) (P. 23)

Solaris 10 ゾーン サポート

SiteMinder ポリシー サーバは以下の場合にサポートされています。

- グローバル ゾーン
- 疎ルートゾーン
- 完全ルートゾーン

Solaris 10 環境で 1 つ以上のポリシー サーバの実行を予定する場合は、以下のシナリオを考慮します。

グローバル ゾーン サポート

グローバル ゾーン設定は、すべてのゾーンにわたって、実装を単一のポリシー サーバ インスタンスに限定します。具体的な内容は次のとおりです。

- 単一のポリシー サーバ インスタンスのみが、グローバル ゾーンでサポートされています。
- グローバル ゾーンに別のポリシー サーバ インスタンスがある場合、ポリシー サーバ インスタンスは疎ルートゾーンでサポートされません。
- グローバル ゾーンに別のポリシー サーバ インスタンスがある場合、ポリシー サーバ インスタンスは完全ルートゾーンでサポートされません。

例: グローバル ゾーン サポート

疎ルートまたは完全ルート ゾーン 1 (ポリシー サーバのサポートなし)	疎ルートまたは完全ルート ゾーン 2 (ポリシー サーバのサポートなし)	疎ルートまたは完全ルート ゾーン 3 (ポリシー サーバのサポートなし)
グローバル ゾーン (ポリシー サーバ 1)		

注: ただし、Web エージェントはいずれかのゾーンで同時に実行される場合があります。

疎ルート ゾーン サポート

疎ルートゾーン設定は、複数の疎ルートゾーンで実行されている複数のポリシー サーバ インスタンスをサポートします。具体的な内容は次のとおりです。

- 1つのポリシー サーバ インスタンスのみが、各疎ルートゾーンでサポートされています。
- 各疎ルートまたは完全ルートゾーンに1つのポリシー サーバ インスタンスがあれば、同時ポリシー サーバ インスタンスは疎ルートゾーンおよび完全ルートゾーンでサポートされます。
- グローバルゾーンおよび疎ルートゾーンでのポリシー サーバ インスタンスの同時実行はサポートされません。

例: 疎ルートゾーン サポート

疎ルート ゾーン 1 (ポリシー サーバ 1)	疎ルート ゾーン 2 (ポリシー サーバ 2)	疎ルート ゾーン 3 (ポリシー サーバ 3)	完全ルート ゾーン 1 (ポリシー サーバ 4)
グローバル ゾーン (ポリシー サーバのサポートなし)			

注: ただし、Web エージェントはいずれかのゾーンで同時に実行される場合があります。

完全ルートゾーン サポート

完全ルートゾーンの設定は、複数の完全ルートゾーンで実行されている複数のポリシー サーバ インスタンスをサポートします。具体的な内容は次のとおりです。

- 1つのポリシー サーバ インスタンスのみが、各完全ルートゾーンでサポートされています。
- 各完全ルートゾーンまたは疎ルートゾーンに1つのポリシー サーバ インスタンスがあれば、同時ポリシー サーバ インスタンスは完全ルートゾーンおよび疎ルートゾーンでサポートされます。
- グローバルゾーンおよび完全ルートゾーンでのポリシー サーバ インスタンスの同時実行はサポートされません。

例: 完全ルートゾーンサポート

疎ルートゾーン 1 (ポリシー サーバ 1)	疎ルートゾーン 2 (ポリシー サーバ 2)	疎ルートゾーン 3 (ポリシー サーバ 3)	完全ルートゾーン 1 (ポリシー サーバ 4)
グローバルゾーン (ポリシー サーバのサポートなし)			

注: ただし、Web エージェントはいずれかのゾーンで同時に実行される場合があります。

Solaris パッチ

必須および推奨される Solaris パッチのリストについては、「ポリシー サーバリリースノート」を参照してください。

ポリシー サーバのインストールの準備方法

UNIX システムにポリシー サーバをインストールする前に、必要に応じて、以下の手順を完了します。

1. (Linux) 必要な Linux ライブラリがポリシー サーバ ホストシステムにインストールされていることを確認します。
2. 新規 UNIX アカウントを作成します。
3. UNIX システム パラメータを変更します。
4. ローカライズ変数を設定解除します。
5. LANG 環境変数を設定解除します。

必要とされる Linux ライブラリ

このコンポーネントの Linux バージョンをインストールまたはアップグレードしている場合、ホストシステム上で以下が必要になります。

```
compat-libstdc++-33.3.2.3-patch_version.i386.rpm
```

この rpm をインストールして、お使いのオペレーティングシステム用の適切な 32 ビット C ランタイム ライブラリが使用できることを確認してください。

新規 UNIX アカウントの作成

ksh としてデフォルトシェルを持つ **smuser** という名前の新しい UNIX アカウントを作成します。さらに、この章で後述するように、**smuser** アカウントのプロファイルを変更することが必要な場合もあります。

重要: ポリシー サーバは、**smuser** UNIX アカウントを使用してインストールする必要がありますが、**FSS 管理 UI** または **OneView モニタ GUI** 用に **Linux Web** サーバ上の **Sun Java System** または **Apache** を設定しないでください。インストーラによって **Web** サーバの設定ファイルが変更され、**smuser** には適切な **root** 権限がないためです。したがって、ポリシー サーバ インストーラを実行する際は、コンポーネントを選択するように要求されたときに **Web** サーバや **OneView モニタ** を選択しないでください。

ポリシー サーバのインストールが完了した後、**root** としてポリシー サーバ設定ウィザード(場所: *siteminder_installation\install_config_info\ca-ps-config.bin*)を実行し、**FSS 管理 UI** または **OneView モニタ GUI** を設定します。

UNIX システム パラメータの変更

ポリシー サーバがロードの下に配置されると、多数のソケットおよびファイルを開きます。デフォルト制限パラメータがロードに対して適切でない場合、これが問題となることがあります。関連する問題を回避するためにデフォルト制限パラメータを変更します。

デフォルト制限パラメータを表示するには、「**ulimit -a**」と入力します。以下に類似したメッセージが表示されます。

```
$ ulimit -a
time(seconds)                unlimited
file(blocks)                  unlimited
data(kbytes)                   2097148
stack(kbytes)                   8192
coredump(blocks)               unlimited
nofiles(descriptors)           256
vmemory(kbytes)                unlimited
```

`nofiles` パラメータはこの例では **256** に設定されています。これは、このシェルとその子孫が割り当てられたファイル(ソケット + ファイル記述子)の総数です。このパラメータが十分に高い値に設定されていない場合、ポリシー サーバは多数のソケット エラーを返します。最もよく見られるソケット エラーは **10024**、つまり、開いているファイルが多すぎるというエラーです。

ロードでポリシー サーバが適切に動作するようにこのパラメータ値を増やす必要があります。この値は、`ulimit -n` コマンドを実行すると変更できます。たとえば、`nofiles` を **1024** に設定するには、`smuser` アカウントの `.profile` または `smprofile.ksh` に `ulimit -n 1024` コマンドを配置します。ポリシー サーバは、それへの接続数について、`smuser` の `ulimit` 内の `nofiles` パラメータによって制限されます。

ローカライズ変数の設定解除

`LC_*` 変数は、`smuser` アカウントの `.profile` または `smprofile.ksh` のファイルにデフォルトで設定されることがあります。`LC_*` 環境変数の使用は許可されていないため、ポリシー サーバをインストールする前にそれらを設定解除する必要があります。

`LC_*` 環境変数を設定解除するには、`smuser` アカウントの `.profile` または `smprofile.ksh` ファイルを開き、それらを設定解除します。

LANG 環境変数の設定解除

`LANG` 環境変数は許可されていないため、ポリシー サーバをインストールする前にそれらを設定解除する必要があります。

この変数を設定解除するには、`smprofile.ksh` ファイルに `unset LANG` コマンドを追加します。

ポリシー サーバをインストールする前に

ポリシー サーバをインストールする前に以下の点を考慮します。

- **Linux オペレーティング システム** -- 必要な Linux ライブラリがポリシー サーバ ホスト システムにインストールされていることを確認します。
注: 詳細については、「必要とされる Linux ライブラリ」を参照してください。
- **管理者の権限** - 新しい UNIX アカウントが作成されていることを確認し、どのコンポーネントが root 管理者権限を必要とするのかを把握します。
注: 必要な管理者の権限の詳細については、「ポリシー サーバのインストールの準備方法」を参照してください。
- **/tmp の空き容量** - ポリシー サーバのインストールには、/tmp に少なくとも 200 MB の空き容量を必要とします。
- **システム パスの長さ** -- SiteMinder によって追加されたディレクトリの有無に関わらず、システム パスの長さが 1024 文字を超える場合、ポリシー サーバのインストールは失敗します。
注: 最適の結果を得るには、SiteMinder の前のシステム パスを約 700 文字にトリミングすることをお勧めします。
- **Web サーバ インスタンス** - ポリシー サーバをインストールする前に Sun Java System Web サーバ インスタンスが停止していることを確認します。
- **Telnet または他の端末エミュレーション ソフトウェア** - Telnet または他の端末エミュレーション ソフトウェアを使用してポリシー サーバをインストールする予定である場合、コンソール ウィンドウを使用してポリシー サーバをインストールします。ユーザが telnet ウィンドウから GUI を実行しようとする、インストーラは Java 例外をスローし、終了します。
- **Exceed X-windows アプリケーション** - Exceed X-windows アプリケーションを使用してポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードを実行すると、Exceed で使用されているフォントがインストーラやウィザードで使用できないため、ダイアログ ボックス内のテキストが切り捨てられることがあります。この制限が、ポリシー サーバのインストールや設定に影響を与えることはありません。
- **環境変数** -- ポリシー サーバ インストールによって環境変数を変更されます。

- **IBM Directory Server のみ** - IBM Directory Server を SiteMinder 環境で使用するには、V3.matchingrules ファイルに以下の行を追加して編集する必要があります。

```
MatchingRules=(2.5.13.15 NAME 'integerOrderingMatch' SYNTAX  
1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.27)
```

V3.matchingrules ファイルにこの変更が含まれていない場合、ディレクトリストアが正しく設定されず、必要な SiteMinder ポリシー ストア オブジェクトを作成できません。

ポリシー サーバのインストール方法

ポリシー サーバをインストールするには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項を確認します。
2. ポリシー ストアの考慮事項を確認します。
3. FIPS の注意事項を確認します。
4. ポリシー サーバ インストーラ用の情報を収集します。
5. ポリシー サーバのインストーラを実行します。
6. ポリシー サーバのインストールを確認します。
7. (オプション)SNMP を設定した場合は、SNMP デーモンを再起動します。
8. (オプション)ポリシー ストアを設定するためにポリシー サーバ インストーラを使用しない場合は、手動でポリシー ストアを設定します。

ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項

ポリシー サーバのインストーラは、以下のコンポーネントを設定できます。ポリシー サーバのインストーラを実行する前に、以下を考慮します。

- **FSS 管理 UI** - FSS 管理 UI は Federation セキュリティ サービス の管理のためにあり、ポリシー サーバでインストールされます。組織とパートナーとの間でフェデレーションが実現していない場合、FSS 管理 UI の使用は必須ではありません。Federation セキュリティ サービス はポリシー サーバのインストールにおける主要部の 1 つですが、使用するためにはポリシー サーバに登録される必要があります。FSS 管理 UI の登録には、管理 UI を使用する必要があります。そのため、FSS 管理 UI を登録する前に 管理 UI をインストールおよび設定します。
- **Web サーバ** - FSS 管理 UI を設定するために、サポートされている Web サーバが必要です。ポリシー サーバのインストーラは、選択された Web サーバで FSS 管理 UI を設定します。
- **OneView モニタ** - OneView モニタは、SiteMinder コンポーネントの監視を有効にします。

注: OneView モニタを使用するためには、サポートされている Java SDK および ServletExec ISAPI Windows/IIS がインストールされている必要があります。

- **SNMP** - root ユーザのパスワードと、SNMP サポートを有効にするためのネイティブ SunSolstice マスタ エージェントが必要です。
- **ポリシー ストア** - ポリシー ストアは、ポリシー サーバ オブジェクトおよびポリシー情報用のリポジトリです。
- **SiteMinder キー データベース (smkeydatabase)** - キー データベースは、SiteMinder 消費権限と SiteMinder 生産権限との間の署名、確認、暗号化および復号化のために使用されるキー ストアです。キー データベースは、以下の場合のみ必要となります。
 - Federation セキュリティ サービス に関連する機能を使用する予定である場合
 - たとえば Microsoft CardSpace のサポート用など、SiteMinder Information Card 認証方式を設定する予定である場合インストール中にキー データベースを設定するように決定すると、デフォルトの証明機関 (CA) の証明書をインストールするよう要求されます。インストール後に、キー データベースへの追加の証明書および秘密キーを追加することができます。

注: キー データベースの詳細と、追加の証明書および秘密キーを追加する方法の詳細については、「*Federation Security Services Guide*」を参照してください。

- **監査ログ** - リレーショナル データベースまたはテキスト ファイルのいずれかに、監査ログを格納することができます。ポリシー サーバをインストールした後、デフォルトでは監査ログは ODBC ではなくテキスト ファイルに設定されます。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

ポリシー ストアの考慮事項

ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードを実行する前に、以下を考慮します。

- ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、以下のいずれかをポリシー ストアとして自動的に設定できます。
 - Microsoft® Active Directory® in Application Mode (ADAM)
 - Microsoft Active Directory 軽量ディレクトリ サービス (AD LDS)
注: ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するための要件を満たしていることを確認してください。
 - Oracle® Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition)
 - Microsoft SQL Server® (SQL Server)
 - Oracle RDBMS

重要: ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、SSL で接続されているポリシー ストアを自動的に設定することができません。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードは、特定のデータベース情報を使用してポリシー ストア データソースを作成します。ポリシー サーバは、このデータソースを使用してポリシー ストアと通信します。以下の点について考慮してください。
 - データソースの名前は **CA SiteMinder DSN** です。
 - (Windows) インストーラは、**Microsoft ODBC データソース管理ツール**の [システム DSN] タブにこのデータソースを保存します。
 - (UNIX) インストーラは、**system_odbc.ini** ファイル (**siteminder_home/db** 内) にこのデータソースを保存します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストールパスを指定します。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー ストアをホストするデータベース サーバが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。この設定によってポリシー ストア破損の可能性を回避します。
 - (Oracle) データベースが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。Oracle は、多くのユニコードの文字セットをサポートします。オブジェクトを **UTF-8** 形式で格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
 - (SQL Server) データベースがデフォルトの照合 (**SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS**) を使用して設定されていることを確認してください。大文字/小文字を区別した照合を使用すると、予期しない動作をする場合があります。デフォルトの照合を使用してオブジェクトを格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- ポリシー サーバをインストールした後に、他のサポートされたディレクトリサーバまたはポリシー ストアとしてのリレーショナル データベースを手動で設定します。ポリシー ストアの手動設定については、このガイド内に詳述されています。

詳細情報:

[ADAM/AD LDS 要件](#) (P. 160)

[ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定](#) (P. 115)

[リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定](#) (P. 177)

FIPS の考慮点

ポリシー サーバは、米国連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 準拠と認定された暗号ライブラリを使用します。FIPS は、AES (Advanced Encryption Standard: 高度暗号化標準) に適合する暗号モジュールを信用するために使用される米国政府のコンピュータ セキュリティ標準です。SiteMinder 環境が機密データを暗号化するために FIPS 準拠のアルゴリズムを使用する場合のみ、ライブラリは FIPS 操作モードを提供します。

以下の FIPS 操作モードのうちの 1 つで、ポリシー サーバをインストールすることができます。

注: ポリシー サーバが作動する FIPS モードは、システム固有のものです。詳細については、テクニカル サポート サイトの「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

- **FIPS 互換モード** - インストール中のデフォルト FIPS 操作モードは、FIPS 互換モードです。FIPS 互換モードでは、環境は機密データを暗号化するために既存の SiteMinder アルゴリズムを使用し、旧バージョンの SiteMinder と互換性があります。
 - 環境内での FIPS 準拠のアルゴリズムの使用はオプションです。
 - 組織が FIPS 準拠のアルゴリズムの使用を必要としない場合は、FIPS 互換モードでポリシー サーバをインストールします。追加設定は必要ありません。

- **FIPS 移行モード** - FIPS 移行モードでは、FIPS 互換モードで実行されている r12.0 SP3 環境を FIPS 専用モードに移行することができます。

FIPS 移行モードでは、FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するために r12.0 SP3 環境を移行する間、r12.0 SP3 ポリシー サーバは既存の SiteMinder 暗号化アルゴリズムを使用し続けます。

FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するために既存の環境を設定している途中の場合は、FIPS 移行モードでポリシー サーバをインストールします。

- **FIPS 専用モード** - FIPS 専用モードでは、環境は機密データを暗号化するために FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用します。

既存の環境が r12.0 SP3 にアップグレードされ、FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用するように設定される場合は、FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールします。

重要: FIPS 専用モードで実行されている **r12.0 SP3** 環境は、SiteMinder の旧バージョンで動作できないか、下位互換になりえません。これには、すべてのエージェント、以前のバージョンのエージェント API を使用しているカスタムソフトウェア、および PM API またはポリシー サーバが公開する他の API を使用しているカスタムソフトウェアが含まれます。完全 FIPS モードのための必要なサポートを得るために、すべてのそのようなソフトウェアを各 SDK の **r12.0 SP3** バージョンと再リンクします。

注: FIPS 準拠のアルゴリズムのみを使用した環境への移行の詳細については、「アップグレード ガイド」を参照してください。

詳細情報:

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス \(P. 551\)](#)

インストーラのための情報の収集

ポリシー サーバ インストーラは、ポリシー サーバおよびオプション コンポーネントをインストールするために、特定の情報を必要とします。

注: インストール ワークシートは、ポリシー サーバ インストール ウィザードまたはポリシー サーバ設定ウィザードを使用して、ポリシー サーバ コンポーネントをインストールまたは設定する前に情報を収集し、記録するのに役立つように提供されています。これらのワークシートを印刷し、いずれかのウィザードを実行する前に必要な情報を記録するために使用することをお勧めします。

必要な情報

ポリシー サーバ インストーラまたは設定ウィザードを実行する前に以下の必要な情報を収集します。値を記録するために、必要な情報のワークシートを使用できます。

- **JRE の場所** - インストーラがサポートされている JRE を見つけることができるフォルダを特定し、JRE が PATH 変数に正しく設定されていることを確認します。JRE が PATH 変数の中で正しく設定されていないと、インストーラは JRE を見つけることができません。
- **ポリシー サーバのインストール場所** - インストーラがポリシー サーバをインストールする場所を決定します。

- **暗号化キー値** - 暗号化キー値を決定します。暗号化キーは、大文字小文字の区別がある英数字のキーであり、ポリシー サーバとポリシー ストアの間で送信されるデータを保護します。1 つのポリシー ストアを共有するポリシー サーバはすべて同じ暗号化キーを使用して設定する必要があります。セキュリティ保護を強化する場合には、長い暗号化キーを定義します。

制限: 6 ～ 24 文字

SiteMinder のキー データベース情報

SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)情報を収集する必要があるのは、以下の場合のみです。

- **Federation** セキュリティ サービスに関連する機能を使用する予定である場合。
- たとえば **Microsoft CardSpace** のサポート用など、**SiteMinder Information Card** 認証方式を設定する予定である場合。

ポリシー サーバ インストーラでは、smkeydatabase を設定するときにパスワードを入力する必要があります。smkeydatabase パスワードは、キー データベース内のキーと証明書のデータを暗号化するために使用されます。値を記録するために SiteMinder キー データベース情報のワークシートを使用できます。

OneView モニタ情報

OneView モニタ情報を収集する必要があるのは、OneView モニタを設定する場合のみです。

OneView モニタを設定するには、以下の必要な情報を収集します。OneView モニタ情報のワークシートを使用して値を記録できます。

- **JDK パス** - 必要な JDK バージョンへのパスを特定します。
- **ServletExec インストール ディレクトリ** - ServletExec のインストール ディレクトリを特定します。

例: /usr/local/NewAtlanta/ServletExecAS

- **ServletExec ポート番号** - インスタンス用のポート番号を決定します。
- **Sun Java System 管理者ディレクトリ** - 以下の情報を判別します。
 - Sun Java System のインストール場所。
 - Sun Java System Web サーバのインストール場所。

例: /sunjavasystem_home/location

sunjavasystem home

Sun Java System のインストール場所を指定します。

場所

Sun Java System Web サーバのインストール場所を指定します。

- 複数の **ServletExec** インスタンス - 複数の **ServletExec** インスタンスがある場合、**OneView** モニタ GUI を設定するインスタンスを決定します。

ADAM および AD LDS サーバ情報

Microsoft ADAM または AD LDS をポリシー ストアとして機能するように設定する場合は、以下の必要な情報を収集します。

- システム IP アドレス - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを識別します。
- ポート番号 - ディレクトリ サーバがリスンしているポート番号を識別します。
- アプリケーション パーティションのルート DN - ポリシー ストア スキーマ データがインストールされるべきディレクトリ サーバ内の、アプリケーション パーティションのルート DN の場所を識別します。

例: dc=ca,dc=com

- 管理者ドメイン名 - guid 値を含む、ディレクトリ管理者のフルドメイン名を識別します。

例: CN=user1、CN=people、CN=Configuration、CN=guid

- 管理者パスワード - ディレクトリ管理者のパスワードを識別します。
- 代替ユーザ アカウント - デフォルトでは、**SiteMinder** はディレクトリ サーバと通信するために管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別のユーザ アカウントを使用できます。代替ユーザ アカウントを使用してポリシー ストアを管理するように **SiteMinder** を設定するための、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder** スーパーユーザ パスワード - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート](#) (P. 426)

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報

Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして設定している場合、Oracle Directory Server Enterprise Edition ワークシートを使用して、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを特定します。
- **ディレクトリ インスタンス ポート番号** - ディレクトリ サーバ インスタンスのポート番号を決定します。

デフォルト: 389

- **ルート DN** - ディレクトリ サーバのルート DN を特定します。

例: o=yourorg.com

- **管理者アカウント** - LDAP 管理者アカウント用のユーザ名 (バインド DN) を識別します。

例: cn=Directory Manager

- **管理者パスワード** - ディレクトリ サーバ管理者用のパスワードを特定します。

- **代替 LDAP 管理者** - デフォルトでは、SiteMinder は LDAP サーバと通信するために LDAP 管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別の LDAP ユーザ アカウントを使用することができます。このように SiteMinder を設定するために、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート \(P. 422\)](#)

SQL Server 情報

ポリシー ストアとして機能するよう SQL Server を設定している場合は、SQL Server ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホストシステムの IP アドレスまたは名前を特定します。

注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。

- **データベース名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースの名前または名前付きインスタンスを特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。

- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[SQL Server 情報のワークシート](#) (P. 423)

Oracle RDBMS 情報

ポリシー ストアとして機能するよう Oracle RDBMS を設定している場合は、Oracle RDBMS ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベースサーバ名** -- データベース ホストシステムの IP アドレスまたは名前を特定します。

注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。
- **データベース サービス名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースのサービス名を特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。

- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle RDBMS ワークシート](#) (P. 423)

GUI モードによるポリシー サーバのインストール

テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用してポリシー サーバをインストールします。以下の点について考慮してください。

- 権限に応じて、以下のコマンドの実行してインストール ファイルに実行可能権限を追加する必要がある場合があります。

```
chmod +x installation_media
```

```
installation_media
```

ポリシー サーバ インストーラの実行ファイルを指定します。

- 別のサブネットにわたってポリシー サーバ インストーラを実行すると、クラッシュする場合があります。その問題を回避するために、ホストシステムにポリシー サーバを直接インストールします。

ポリシー サーバをインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media gui  
installation_media
```

ポリシー サーバ インストーラの実行ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. ポリシー サーバをインストールするために収集した、システムおよびコンポーネント情報を使用します。

インストーラを実行する場合には、以下を考慮します。

- FIPS 操作モードを選択するよう要求されます。環境内での FIPS 準拠のアルゴリズムの使用はオプションです。組織がこのタイプの暗号化を必要としない場合は、FIPS 互換モードでポリシー サーバをインストールします。
- 設定するコンポーネントを選択するよう要求されます。
 - 「[ポリシー ストアの考慮事項 \(P. 39\)](#)」に説明されているとおり、ポリシー サーバ インストーラは自動的にポリシー ストアを設定できます。このトピックに含まれていないベンダーを使用しているか、または必要な情報を持っていない場合は、[ポリシー ストア]チェック ボックスをオフにします。ポリシー サーバをインストールした後にポリシー ストアを手動で設定することができます。
 - Federation セキュリティ サービスに関連する機能を使用する場合は、「Web サーバ」および「SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する」のチェック ボックスを必ずオンにしてください。Web サーバを設定すると FSS 管理 UI がインストールされます。Federation セキュリティ サービスを使用しない場合、FSS 管理 UI は必要ではありません。

注: このシステムに初めてポリシー サーバをインストールする場合には、Web サーバまたは OneView モニタ GUI を設定しないでください。

smuser UNIX アカウントを使用して、ポリシー サーバをインストールします。インストーラは Web サーバ設定ファイルを変更します。smuser アカウントには、そのための適切な root 権限がありません。ポリシー サーバのインストールが完了したら、FSS 管理 UI または OneView モニタ GUI 用の Web サーバを設定するために、ポリシー サーバ設定ウィザードを root として実行します。

- SiteMinder Information Card 認証方式を設定する場合は、「SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する」のチェック ボックスを必ずオンにしてください。たとえば、Microsoft CardSpace をサポートするために SiteMinder Information Card 認証方式を使用できます。

注: キー データベースの作成を決定すると、デフォルトの CA 証明書をインストールするよう要求されます。デフォルト CA 証明書をインポートするオプションが選択された状態で、これらの証明書をインストールします。

- ポリシー ストアを初期化する場合、デフォルトの SiteMinder ユーザ アカウント用パスワードを入力するよう要求されます。デフォルトのアカウント名は「siteminder」です。
- IPv6 アドレスを使用する場合は、エントリに角かっこが含まれていることを確認してください。

例: [2001:db8::1428:57ab]

- パス情報を切り取ってウィザードに貼り付ける場合は、文字を入力して [次へ] ボタンを有効にします。

5. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

ポリシー サーバおよび他の選択されたコンポーネントが、インストールおよび設定されます。

注: インストールには数分かかる場合があります。

6. [終了]をクリックします。

インストーラが閉じます。

注: FSS 管理 UI のインストールを選択した場合、管理 UI のインストールおよび設定後に 管理 UI をポリシー サーバに登録します。FSS 管理 UI の登録の詳細については、「Federation セキュリティ サービス UI の登録」を参照してください。

注: インストール中に問題があった場合は、インストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを *siteminder_home/siteminder/install_config_info* に置くことができます。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

[ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング](#) (P. 94)

コンソール モードによるポリシー サーバのインストール

テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用してポリシー サーバをインストールします。以下の点について考慮してください。

- 権限に応じて、以下のコマンドの実行してインストール ファイルに実行可能権限を追加する必要がある場合があります。

```
chmod +x installation_media
```

installation_media

ポリシー サーバ インストーラの実行ファイルを指定します。

- 別のサブネットにわたってポリシー サーバ インストーラを実行すると、クラッシュする場合があります。その問題を回避するために、ホストシステムにポリシー サーバを直接インストールします。

ポリシー サーバをインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
3. 以下のコマンドを実行します。

```
./installation_media -i console
```

installation_media

ポリシー サーバ インストーラの実行ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. ポリシー サーバをインストールするために収集した、システムおよびコンポーネント情報を使用します。

情報を入力する場合には、以下を考慮します。

- **FIPS 操作モード**を選択するよう要求されます。環境内での **FIPS 準拠**のアルゴリズムの使用はオプションです。組織がこのタイプの暗号化を必要としない場合は、**FIPS 互換モード**でポリシー サーバをインストールします。
- 設定するコンポーネントを選択するよう要求されます。数をカンマ(,)で区切って入力します。どの機能も選択しないためには、カンマのみを入力します。
 - 「[ポリシー ストアの考慮事項 \(P. 39\)](#)」に説明されているとおり、ポリシー サーバ インストーラは自動的にポリシー ストアを設定できます。このトピックに含まれていないベンダーを使用しているか、または必要な情報を持っていない場合は、[ポリシー ストア]チェック ボックスをオフにします。ポリシー サーバをインストールした後にポリシー ストアを手動で設定することができます。
 - **Federation セキュリティ サービス**に関連する機能を使用する場合は、「**Web サーバ**」および「**SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する**」を必ず選択してください。**Web サーバ**を設定すると **FSS 管理 UI** がインストールされます。**Federation セキュリティ サービス**を使用しない場合、**FSS 管理 UI** は必要ではありません。

注: このシステムに初めてポリシー サーバをインストールする場合には、**Web サーバ**または **OneView モニタ GUI** を設定しないでください。

smuser UNIX アカウントを使用して、ポリシー サーバをインストールします。インストーラは **Web サーバ**設定ファイルを変更します。**smuser アカウント**には、そのための適切な **root** 権限がありません。ポリシー サーバのインストールが完了したら、**FSS 管理 UI** または **OneView モニタ GUI** 用の **Web サーバ**を設定するために、ポリシー サーバ設定ウィザードを **root** として実行します。

- **SiteMinder Information Card** 認証方式を設定しようとする場合は、「**SM キー データベースを作成する/SM キー データベースのパスワードを変更する**」を必ず選択してください。たとえば、**Microsoft CardSpace** をサポートするために **SiteMinder Information Card** 認証方式を使用できます。

注: キー データベースの作成を決定すると、デフォルトの証明機関 (CA) 証明書をインストールするよう要求されます。デフォルト CA 証明書をインポートするオプションが選択された状態で、これらの証明書をインストールします。

- ポリシー ストアを初期化する場合、デフォルトの SiteMinder ユーザ アカウント用パスワードを入力するよう要求されます。デフォルトのアカウント名は「siteminder」です。
- IPv6 アドレスを使用する場合は、エントリに角かっこが含まれていることを確認してください。

例: [2001:db8::1428:57ab]

- LDAP インスタンスを初期化するように要求された場合は、新規ポリシー ストア インスタンスを設定する場合のみそうです。

5. インストール設定を確認し、Enter キーを押します。

ポリシー サーバおよび選択したコンポーネントが、インストールおよび設定されます。

注: インストールには数分かかる場合があります。

6. Enter キーを押します。

インストーラが閉じます。

注: FSS 管理 UI のインストールを選択した場合、管理 UI のインストールおよび設定後に 管理 UI をポリシー サーバに登録します。FSS 管理 UI の登録の詳細については、「Federation セキュリティ サービス UI の登録」を参照してください。

注: インストール中に問題があった場合は、インストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを `siteminder_home/siteminder/install_config_info` に置くことができます。

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[インストールメディアの検索](#) (P. 552)

[ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング](#) (P. 94)

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティングには、以下のファイルを使用します。

- CA_SiteMinder_Policy_Server_release_InstallLog.log

インストール ログは、インストール中に発生した成功、警告、致命的でないエラーおよびエラーの数をリスト表示するサマリ セクションを含みます。個別のインストール アクションは、それぞれのステータスと共にリスト表示されます。

release

ポリシー サーバのリリースを指定します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\install_config_info

- ca-ps-details.log

ポリシー ストア ログは、ポリシー ストア ステータスを詳述します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\install_config_info

- smps.log

smps.log は、ポリシー サーバが開始されるときに作成されます。ポリシー サーバが正常にインストールされた場合、このログは以下の行を含みます。

[Info]ジャーナル スレッドが開始され、60 分以上前のコマンドを削除します。

場所: *siteminder_home*\siteminder\log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

SNMP デーモンの再起動

SNMP デーモンを再起動する必要があるのは、ポリシー サーバのインストール中に SNMP を設定した場合のみです。

SNMP デーモンを再起動する方法

1. /etc/rc3.d 内で「S76snmpdx stop」と入力します。
SNMP デーモンが停止します。
2. /etc/rc3.d 内で「S76snmpdx start」と入力します。
SNMP デーモンが起動します。

ポリシー ストアの設定

ポリシー サーバ インストーラを使用してポリシー ストアを自動的に設定しなかった場合は、サポートされている LDAP ディレクトリ サーバまたはリレーショナル データベースを手動でポリシー ストアとして設定します。

自動スタートアップの設定

Solaris システムを再起動するときにポリシー サーバが自動的に再起動するように自動スタートアップを設定します。

自動スタートアップを設定する方法

1. 文字列「`nete_ps_root`」のすべてのインスタンスを SiteMinder インストール ディレクトリへの明示的なパスに置換することにより、S98M スクリプトを変更します。

例: `/export/ca/siteminder`

2. ディレクトリを `siteminder` インストール ディレクトリに変更します。
3. 「`su`」と入力して Enter キーを押します。
注: `suse` コマンドを使用しないでください。
パスワードの入力を要求されます。
4. `root` パスワードを入力し、Enter キーを押します。
5. 「`$ cp S98sm/etc/rc2.d`」と入力し、Enter キーを押します。

`s98sm` は `stop-all` および `start-all` 実行可能ファイルを自動的に呼び出します。これにより、Solaris システムが再起動するときに、ポリシー サーバのサービスが停止し、起動します。

注: ポリシー ストアとしてローカル LDAP ディレクトリ サーバを使用している場合、ポリシー サーバを自動的に起動する前に、LDAP ディレクトリが自動的に起動するように設定する必要があります。

ポリシー サーバの無人インストール

ポリシー サーバを 1 台のマシンに手動でインストールした後、無人インストールモードを使用してそれを再インストールしたり、別のマシンにインストールできます。無人インストールでは、ユーザが操作することなく、ポリシー サーバをインストールまたはアンインストールすることができます。

インストーラは、ユーザがインストール変数を定義できる `ca-ps-installer.properties` テンプレートファイルを提供します。このファイル内のデフォルトのパラメータ、パスワードおよびパスは、最初のポリシー サーバインストール中に入力した情報を反映します。このファイルには、暗号化パスワードとプレーン テキストパスワードのいずれも保存できます。たとえば、共有秘密キーや SiteMinder のスーパーユーザなど暗号化されたパスワードを使用する場合、最初のインストール中に入力したのと同じものを使用する必要があります。それは、それらはファイル内で暗号化されており、変更できないためです。ただし、ファイルを変更してプレーン テキストパスワードを使用することもできます。

ポリシー サーバ設定ウィザード

ポリシー サーバのインストール後、以下のコンポーネントを設定または再設定するためにポリシー サーバ設定ウィザードを使用します。

- FSS 管理 UI
- OneView モニタ GUI
- SNMP サポート
- SiteMinder キー データベース
- ポリシー ストア(「ポリシー ストアの考慮事項」を参照)

注: ポリシー サーバ設定ウィザードを使用してポリシー サーバ **FIPS** 操作モードを変更することはできません。ポリシー サーバ **FIPS** 操作モードの変更についての詳細は、「SiteMinder アップグレード ガイド」を参照してください。

重要: Oracle iPlanet Web サーバ(以前の Sun Java System Web サーバ)インスタンスが OneView モニタ GUI または SNMP に対して設定されている場合、ポリシー サーバ設定ウィザードを使用して新規インスタンスを設定しないでください。新しい Web サーバ インスタンスを設定するためにウィザードを実行すると、既存の設定済み Web サーバ インスタンスが失敗する場合があります。

詳細情報:

[ポリシー ストアの考慮事項](#) (P. 39)

設定ウィザードを使用する方法

ポリシー サーバ設定ウィザードを使用するには、以下の手順に従います。

1. 設定ウィザードシステム要件を確認します。
2. ポリシー ストアの考慮事項を確認します。
3. 以下を設定する場合は、ウィザード用の情報を収集します。
 - SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)
 - OneView モニタ
 - ポリシー ストア(「ポリシー ストアの考慮事項」を参照)
4. 設定ウィザードを実行します。

注: GUI またはコンソール モードのいずれかで設定ウィザードを実行することができます。

設定ウィザードの要件

ポリシー サーバ設定ウィザードを使用する前に、以下の要件を満たしていることを確認します。

- ポリシー サーバ設定ウィザードは、/tmp に少なくとも 150 MB の空き容量を必要とします。
- ローカル管理者権限を持つ UNIX ユーザとしてウィザードを実行します。
- Web サーバの設定ファイルを変更するのに十分な権限を持つ UNIX ユーザとしてウィザードを実行します。

ポリシー ストアの考慮事項

ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードを実行する前に、以下を考慮します。

- ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、以下のいずれかをポリシー ストアとして自動的に設定できます。

- Microsoft® Active Directory® in Application Mode (ADAM)
- Microsoft Active Directory 軽量ディレクトリ サービス (AD LDS)

注: ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するための要件を満たしていることを確認してください。

- Oracle® Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition)
- Microsoft SQL Server® (SQL Server)
- Oracle RDBMS

重要: ポリシー サーバ インストーラおよびポリシー サーバ設定ウィザードは、SSL で接続されているポリシー ストアを自動的に設定することができません。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー サーバ インストーラまたはポリシー サーバ設定ウィザードは、特定のデータベース情報を使用してポリシー ストア データソースを作成します。ポリシー サーバは、このデータソースを使用してポリシー ストアと通信します。以下の点について考慮してください。

- データソースの名前は CA SiteMinder DSN です。
- (Windows) インストーラは、Microsoft ODBC データソース管理ツールの [システム DSN] タブにこのデータソースを保存します。
- (UNIX) インストーラは、system_odbc.ini ファイル (siteminder_home/db 内) にこのデータソースを保存します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

- (RDB ポリシー ストア) ポリシー ストアをホストするデータベース サーバが UTF-8 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。この設定によってポリシー ストア破損の可能性を回避します。
 - (Oracle) データベースが UTF-8 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。Oracle は、多くのユニコードの文字セットをサポートします。オブジェクトを UTF-8 形式で格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
 - (SQL Server) データベースがデフォルトの照合 (SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS) を使用して設定されていることを確認してください。大文字/小文字を区別した照合を使用すると、予期しない動作をする場合があります。デフォルトの照合を使用してオブジェクトを格納するためのデータベース設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- ポリシー サーバをインストールした後に、他のサポートされたディレクトリ サーバまたはポリシー ストアとしてのリレーショナル データベースを手動で設定します。ポリシー ストアの手動設定については、このガイド内に詳述されています。

詳細情報:

[ADAM/AD LDS 要件 \(P. 160\)](#)

[ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定 \(P. 115\)](#)

[リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定 \(P. 177\)](#)

設定ウィザード用の情報の収集

ポリシー サーバ設定ウィザードは、ポリシー サーバ コンポーネントを設定するための具体的情報を必要とします。

注: インストール ワークシートは、ポリシー サーバ インストール ウィザードまたはポリシー サーバ設定ウィザードを使用して、ポリシー サーバ コンポーネントをインストールまたは設定する前に情報を収集し、記録するのに役立つように提供されています。これらのワークシートを印刷し、いずれかのウィザードを実行する前に必要な情報を記録するために使用することをお勧めします。

必要な情報

ポリシー サーバ インストーラまたは設定ウィザードを実行する前に以下の必要な情報を収集します。値を記録するために、必要な情報のワークシートを使用できます。

- **JRE の場所** - インストーラがサポートされている JRE を見つけることができるフォルダを特定し、JRE が PATH 変数に正しく設定されていることを確認します。JRE が PATH 変数の中で正しく設定されていないと、インストーラは JRE を見つけることができません。
- **ポリシー サーバのインストール場所** - インストーラがポリシー サーバをインストールする場所を決定します。
- **暗号化キー値** - 暗号化キー値を決定します。暗号化キーは、大文字小文字の区別がある英数字のキーであり、ポリシー サーバとポリシー ストアの間で送信されるデータを保護します。1 つのポリシー ストアを共有するポリシー サーバはすべて同じ暗号化キーを使用して設定する必要があります。セキュリティ保護を強化する場合には、長い暗号化キーを定義します。

制限: 6 ～ 24 文字

SiteMinder のキー データベース情報

SiteMinder キー データベース(smkeydatabase)情報を収集する必要があるのは、以下の場合のみです。

- **Federation** セキュリティ サービスに関連する機能を使用する予定である場合。
- たとえば **Microsoft CardSpace** のサポート用など、**SiteMinder Information Card** 認証方式を設定する予定である場合。

ポリシー サーバ インストーラでは、smkeydatabase を設定するときにパスワードを入力することが必要です。smkeydatabase パスワードは、キー データベース内のキーと証明書のデータを暗号化するために使用されます。値を記録するために SiteMinder キー データベース情報のワークシートを使用できます。

OneView モニタ情報

OneView モニタ情報を収集する必要があるのは、OneView モニタを設定する場合のみです。

OneView モニタを設定するには、以下の必要な情報を収集します。OneView モニタ情報のワークシートを使用して値を記録できます。

- **JDK パス** - 必要な JDK バージョンへのパスを特定します。
- **ServletExec インストール ディレクトリ** - ServletExec のインストール ディレクトリを特定します。

例: /usr/local/NewAtlanta/ServletExecAS

- **ServletExec ポート番号** - インスタンス用のポート番号を決定します。
- **Sun Java System 管理者ディレクトリ** - 以下の情報を判別します。
 - Sun Java System のインストール場所。
 - Sun Java System Web サーバのインストール場所。

例: /sunjavasystem_home/location

sunjavasystem home

Sun Java System のインストール場所を指定します。

場所

Sun Java System Web サーバのインストール場所を指定します。

- **複数の ServletExec インスタンス** - 複数の ServletExec インスタンスがある場合、OneView モニタ GUI を設定するインスタンスを決定します。

ADAM および AD LDS サーバ情報

Microsoft ADAM または AD LDS をポリシー ストアとして機能するように設定する場合は、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを識別します。
- **ポート番号** - ディレクトリ サーバがリスンしているポート番号を識別します。
- **アプリケーション パーティションのルート DN** - ポリシー ストアスキーマ データがインストールされるべきディレクトリ サーバ内の、アプリケーション パーティションのルート DN の場所を識別します。

例: dc=ca,dc=com

- **管理者ドメイン名** - guid 値を含む、ディレクトリ管理者のフルドメイン名を識別します。

例: CN=user1、CN=people、CN=Configuration、CN=guid

- **管理者パスワード** - ディレクトリ管理者のパスワードを識別します。

- **代替ユーザ アカウント** - デフォルトでは、**SiteMinder** はディレクトリ サーバと通信するために管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別のユーザ アカウントを使用できます。代替ユーザ アカウントを使用してポリシー ストアを管理するように **SiteMinder** を設定するための、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。

注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。

- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント (**siteminder**) は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート](#) (P. 426)

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報

Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして設定している場合、Oracle Directory Server Enterprise Edition ワークシートを使用して、以下の必要な情報を収集します。

- **システム IP アドレス** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの IP アドレスを特定します。
- **ディレクトリ インスタンス ポート番号** - ディレクトリ サーバ インスタンスのポート番号を決定します。

デフォルト: 389

- **ルート DN** - ディレクトリ サーバのルート DN を特定します。
例: o=yourorg.com
 - **管理者アカウント** - LDAP 管理者アカウント用のユーザ名 (バインド DN) を識別します。
例: cn=Directory Manager
 - **管理者パスワード** - ディレクトリ サーバ管理者用のパスワードを特定します。
 - **代替 LDAP 管理者** - デフォルトでは、SiteMinder は LDAP サーバと通信するために LDAP 管理者アカウントを使用します。ただし、ポリシー ストアを管理するために別の LDAP ユーザ アカウントを使用することができます。このように SiteMinder を設定するために、完全な管理者 DN およびパスワードを識別します。
- 注: このユーザは、属性およびパスワードを変更するための権限を持っている必要があります。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパーユーザを使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート \(P. 422\)](#)

SQL Server 情報

ポリシー ストアとして機能するよう **SQL Server** を設定している場合は、**SQL Server** ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホスト システムの IP アドレスまたは名前を特定します。
注: IPv6 サポートの詳細については、**SiteMinder** プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。
- **データベース名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースの名前または名前付きインスタンスを特定します。
- **データベース ポート** -- データベースがリスンするポートを特定します。
- **データベース管理者ユーザ名** -- 以下の権限を持つ管理者アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース管理者パスワード** -- 管理者アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパーユーザ パスワード** - デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント(siteminder)は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパーユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパーユーザを日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルトスーパーユーザを使用して **FSS 管理 UI** および **管理 UI** にアクセスし、それからスーパーユーザの権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[SQL Server 情報のワークシート](#) (P. 423)

Oracle RDBMS 情報

ポリシー ストアとして機能するよう Oracle RDBMS を設定している場合は、Oracle RDBMS ワークシートを使用して以下の必要な情報を収集します。

- **データベース サーバ名** -- データベース ホスト システムの IP アドレスまたは名前を特定します。

注: IPv6 サポートの詳細については、SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクスを参照してください。

- **データベース サービス名** -- ポリシー ストアとして機能するデータベースのサービス名を特定します。
- **データベース ポート** -- データベース がリスンするポートを特定します。
- **データベース 管理者 ユーザ 名** -- 以下の権限を持つ管理者 アカウントの名前を特定します。
 - スキーマの作成。
 - オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。
- **データベース 管理者 パスワード** -- 管理者 アカウントのパスワードを特定します。
- **SiteMinder スーパー ユーザ パスワード** - デフォルトの SiteMinder スーパー ユーザ アカウント (siteminder) は、最大の権限を持っています。デフォルトのスーパー ユーザ アカウントのパスワードを決定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) または アスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: デフォルトのスーパー ユーザ を日常の操作に使用しないことをお勧めします。正しくは、最初にデフォルト スーパー ユーザ を使用して FSS 管理 UI および 管理 UI にアクセスし、それからスーパー ユーザ の権限を持つ管理者を作成します。

詳細情報:

[Oracle RDBMS ワークシート](#) (P. 423)

GUI モードでの設定ウィザードの実行

ポリシー サーバ設定ウィザードを実行し、個別のポリシー サーバ コンポーネントを設定します。

GUI モードで設定ウィザードを実行する方法

1. 実行中のアプリケーションをすべて終了します。
2. SiteMinder インストール ディレクトリから ksh シェルで以下のスクリプトを実行します。

```
../ca_ps_env.ksh
```

注: スクリプトを実行するときは、ピリオドの間にスペースを入れてください (..)。

3. シェルを開き、以下のコマンドを実行します。

```
./ca-ps-config.bin gui
```

設定ウィザードが起動します。

4. ポリシー ストアおよび個別のコンポーネントを設定するために収集したシステムおよびコンポーネント情報を使用します。

注: ポリシー サーバ インスタンスの初期化を要求された場合、新しいポリシー ストア インスタンスを設定する目的でのみ実行します。

5. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

ウィザードによって、選択したコンポーネントをポリシー サーバと連動するように設定します。

注: インストールには数分かかる場合があります。

6. [終了]をクリックします。

選択したコンポーネントが設定されます。

注: 問題が発生する場合、*siteminder_home/siteminder/install_config_info* にあるインストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを参照してください。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング](#) (P. 94)

コンソール モードでの設定ウィザードの実行

ポリシー サーバ設定ウィザードを実行し、個別のポリシー サーバ コンポーネントを設定します。

コンソール モードで設定ウィザードを実行する方法

1. 実行中のアプリケーションをすべて終了します。
2. SiteMinder インストール ディレクトリから ksh シェルで以下のスクリプトを実行します。

```
../ca_ps_env.ksh
```

注: スクリプトを実行するときは、ピリオドの間にスペースを入れてください (..)。

3. シェルを開き、以下のコマンドを実行します。

```
./ca-ps-config.bin -i console
```

設定ウィザードが起動します。

4. ポリシー ストアおよび個別のコンポーネントを設定するために収集したシステムおよびコンポーネント情報を使用します。

注: ポリシー ストア インスタンスの初期化を要求された場合、新しいポリシー ストア インスタンスを設定する目的でのみ実行します。

5. インストール設定を確認し、Enter キーを押します。

ウィザードによって、選択したコンポーネントをポリシー サーバと連動するように設定します。

注: インストールには数分かかる場合があります。

6. Enter キーを押します。

インストーラが閉じます。選択したコンポーネントが設定されます。

注: 問題が発生する場合、*siteminder_home/siteminder/install_config_info* にあるインストール ログ ファイルおよびポリシー ストア詳細ファイルを参照してください。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

詳細情報:

[ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング \(P. 94\)](#)

Obj.conf と Magnus.conf ファイルのバックアップ バージョン

ポリシー サーバ設定ウィザードを実行するたびに、obj.conf および magnus.conf ファイルのバックアップ バージョンが作成されます。これらのファイルにより、ポリシー サーバ設定ウィザードまたはインストール プログラムを実行する前の元の Web サーバ設定に戻すことができます。これらのバックアップ バージョンは Web サーバの設定ディレクトリに以下の形式で保存されます。

obj.conf.<year>-<month>-<date>-<hour>-<minutes>-<seconds>.bak

magnus.conf.<year>-<month>-<date>-<hour>-<minutes>-<seconds>.bak

たとえば、バックアップ バージョンは、obj.conf.2003-11-25-16-58-47.bak および magnus.conf.2003-11-25-17-07-11.bak のようになります。

ポリシー サーバをアンインストールする方法

ポリシー サーバをアンインストールするには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールのすべてのインスタンスをシャットダウンします。

注: ポリシー サーバ管理コンソールのシャットダウンの詳細については、「ポリシー管理ガイド」を参照してください。

2. Path 変数に JRE を設定します。
3. エージェント ホスト ファイルからポリシー サーバの参照を削除します。
4. SiteMinder プロセスをすべて停止します。
5. ポリシー サーバをアンインストールします。
6. IWS から SiteMinder 参照を削除します。
7. ServletExec/AS からの SiteMinder 参照の削除

エージェント ホスト ファイルからのポリシー サーバの参照の削除

ポリシー サーバをアンインストールしたら、Web エージェントからの予期しない結果を防止するために、SmHost.conf ファイルからポリシー サーバの参照を削除します。

ポリシー サーバの参照を削除する方法

1. `web_agent_home/config` に移動します。

`web_agent_home`

Web エージェントのインストール ディレクトリを示します。

2. テキスト エディタで `SmHost.conf` ファイルを開きます。
3. 「`policyserver=`」から始まる行を削除します。

注: この行は、アンインストールしているポリシー サーバの IP アドレスおよびポート番号を含んでいます。

4. `SmHost.conf` を保存します。

これで `SmHost.conf` ファイルは、アンインストールするポリシー サーバを参照しなくなります。

PATH 変数での JRE の設定

ポリシー サーバ、Web エージェント、SDK、およびドキュメントをアンインストールする際は、PATH 変数に JRE を設定し、アンインストール プログラムが停止して、以下のエラー メッセージのいずれかが発行されるのを防止します。

PATH 変数に JRE を設定する方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
PATH=$PATH:<JRE>/bin
```

JRE

JRE の場所を指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
export PATH
```

JRE が PATH 変数に設定されます。

すべての SiteMinder プロセスの停止

SiteMinder プロセスをすべて停止し、ポリシー サーバファイルが安全に削除されるようにします。

SiteMinder プロセスをすべて停止する方法

1. `smuser` アカウントを使用して UNIX システムにログインします。
2. `stop-all` を実行します。これは、`/siteminder` ディレクトリにあります。
すべての SiteMinder プロセスが停止します。

ポリシー サーバのアンインストール

ポリシー サーバが不要になった場合は、アンインストールします。ポリシー サーバの削除には、SiteMinder インストール ディレクトリの削除と、`.profile` からの `smprofile.ksh` の削除が含まれます。

ポリシー サーバをアンインストールする方法

1. コンソール ウィンドウ内の以下のディレクトリに移動します。

```
siteminder_home/siteminder/install_config_info/ca-ps-uninstall
```



```
siteminder_home
```


ポリシー サーバのインストール パスを指定します。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
./uninstall
```


アンインストール プログラムが表示されます。
3. Enter キーを押します。
ステータス インジケータは、ポリシー サーバがアンインストールされており、正常な完了を示すメッセージを表示します。
4. ディレクトリを SiteMinder インストール ディレクトリの 1 つ上に変更します。
例: `/export/smuser/ca` (SiteMinder インストール ディレクトリが `/export/smuser/ca/siteminder` の場合)
5. 「`$ rm -rf siteminder`」と入力し、Enter キーを押します。
SiteMinder インストール ディレクトリが削除されます。
6. HOME ディレクトリから `.profile` を開きます。
7. `smprofile.ksh` を含む行を見つけて削除します。
例: `./export/smuser/siteminder/smprofile.ksh`
8. `.profile` を保存します。
ポリシー サーバがアンインストールされます。

IWS からの SiteMinder 参照の削除

ポリシー サーバをアンインストールした後に IWS から手動で SiteMinder 参照を削除します。SiteMinder 参照が obj.conf ファイルおよび magnus.conf ファイルの中に残されています。

IWS から SiteMinder 参照を削除する方法

1. Web サーバの設定にアクセスおよび変更する権限を持つアカウントにログインします。
2. Solaris コマンドラインで、以下に移動します。

```
<SunJavaSystem_home>/https-<hostname>/config
```

obj.conf および magnus.conf ファイルがコンフィグ フォルダ内に表示されます。

3. obj.conf を開き、以下の行を削除します。

```
NameTrans fn="assign-name" from="/servlet/*" name="<MySQLServletExec_instance
name>"
NameTrans fn="assign-name" from="*.jsp*" name="<ServletExec_instance name>"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/sitemindermonitor"
dir="<WebSpheresiteminder_installation>/monitor"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/sitemindercgi"
dir="<MySQLsiteminder_installation>/admin" name="cgi"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminder"
dir="<IWSsiteminder_installation>/admin"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/netegrity_docs"
dir="/netegrity/netegrity_documents"
<Object name="<ServletExec_instance name>">
Service fn="ServletExecService" group="<ServletExec_instance name>"
</Object>
```

4. obj.conf ファイルを保存して閉じます。
5. magnus.conf を開き、以下の行を削ぎします。

```
Init fn="init-cgi" SM_ADM_UDP_PORT="44444" SM_ADM_TCP_PORT="44444"
Init fn="load-modules"
shlib="/<Servlet_Exec_Install>/bin/ServletExec_Adapter.so"
funcs="ServletExecInit,ServletExecService"
Init fn="ServletExecInit" <ServletExec_instance
name>.instances="<IP_Address>:<port_number>"
```

6. magnus.conf を保存して閉じます。
7. Web サーバを再起動します。
SiteMinder 参照が IWS から削除されます。
SiteMinder 参照は、IWS 内に表示されなくなります。

StartServletExec からの SiteMinder 参照の削除

StartServletExec から参照を削除する方法

1. ServletExec 設定にアクセスおよび変更する権限を持つアカウントにログインします。
2. Solaris コマンドラインで、
`/usr/NewAtlanta/ServletExecAS/ServletExec_instance name` フォルダに移動します。
3. StartServletExec スクリプトから以下の行を削除します。

```
CLASSPATH=${NA_LIB}/servlet-api.jar:${NA_LIB}/jsp-  
api.jar:${NA_LIB}/ServletExec60.jar:${NA_LIB}/ServletExecAdmin.jar:${NA_LIB}/  
el-  
api.jar:${NA_LIB}/jasper-el.jar:${JL}/tools.jar:${NA_LIB}/jstl.jar:${NA_LIB}/  
appserv-  
jstl.jar:${NA_LIB}/activation.jar:${NA_LIB}/mail.jar:${HOMEDIRPATH}/classes:/  
siteminder_home/monitor/  
smmonui.jar:/siteminder_home/lib/smconapi.jar:/siteminder_home/lib/smmonclien  
tapi.jar  
$SENAME $HOMEDIR $MIMEFILE $DOCR00TDIR -allow 127.0.0.1 -port $PORT $SEOPTS"  
$SENAME $HOMEDIR $MIMEFILE $DOCR00TDIR -allow 127.0.0.1 -port $PORT $SEOPTS -addl  
"/sitemindermonitor=/siteminder_home/monitor"
```

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

4. StartServletExec スクリプトを保存して閉じます。
5. ServletExec を再起動します。
アンインストールが完了します。

スクリプト インターフェース

コマンドライン インターフェースでは、Perl のスクリプトを作成して、ポリシー ストアを設定および管理できます。インストール プログラムによって、Perl の完全版がインストールされ、*siteminder_installation/CLI* ディレクトリ内にインターフェース ファイルが配置されます。

siteminder_installation

SiteMinder のインストール場所を示します。

例: `/home/smuser/siteminder/CLI`

コマンドライン インターフェースを使用するには、ユーザのシステムの `PATH` 環境変数で、以下のディレクトリがユーザのマシン上の他の Perl の `bin` ディレクトリの前にあることを確認します。

例: `/home/smuser/siteminder/CLI/bin`

注: スクリプト インターフェースの詳細については、「Programming Guide for Perl」を参照してください。

第 7 章: ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[ポリシーまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバ](#) (P. 115)

[インストール ロード マップ](#) (P. 116)

[重要な考慮事項](#) (P. 117)

[ポリシー ストアとしての CA Directory](#) (P. 118)

[ポリシー ストアとしての Oracle Directory Server Enterprise Edition](#) (P. 133)

[ポリシー ストアとしての Active Directory](#) (P. 146)

[ポリシー ストアとしての Microsoft ADAM/AD LDS](#) (P. 160)

[SiteMinder キー ストアの概要](#) (P. 173)

ポリシーまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバ

SiteMinder ポリシー ストアとは、すべてのポリシー関連情報のためのリポジトリです。SiteMinder インストールでのすべてのポリシー サーバは、直接またはレプリケーションを通じて、同じポリシー ストア データを共有する必要があります。SiteMinder は、管理者がポリシー ストア データをある格納場所から別の格納場所に移動できるツールを使用してインストールされます。

ポリシー サーバをインストールするとき、自動的にポリシー ストアとして以下のディレクトリ サーバのうちの 1 つを設定できます。

- Microsoft Active Directory アプリケーション モード (ADAM)
- Microsoft Active Directory 軽量ディレクトリ サービス (AD LDS)
- Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition)

ポリシー ストアを自動的に設定するためにポリシー サーバを使用しない場合は、ポリシー サーバのインストール後に手動でポリシー ストアを設定することができます。さらに、ポリシー サーバのインストール後、ポリシー サーバ管理コンソールを使用してポリシー サーバを既存のポリシー ストアに示すことができます。

注: サポートされている CA およびサードパーティコンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム** のサポート マトリックスを参照してください。

詳細情報:

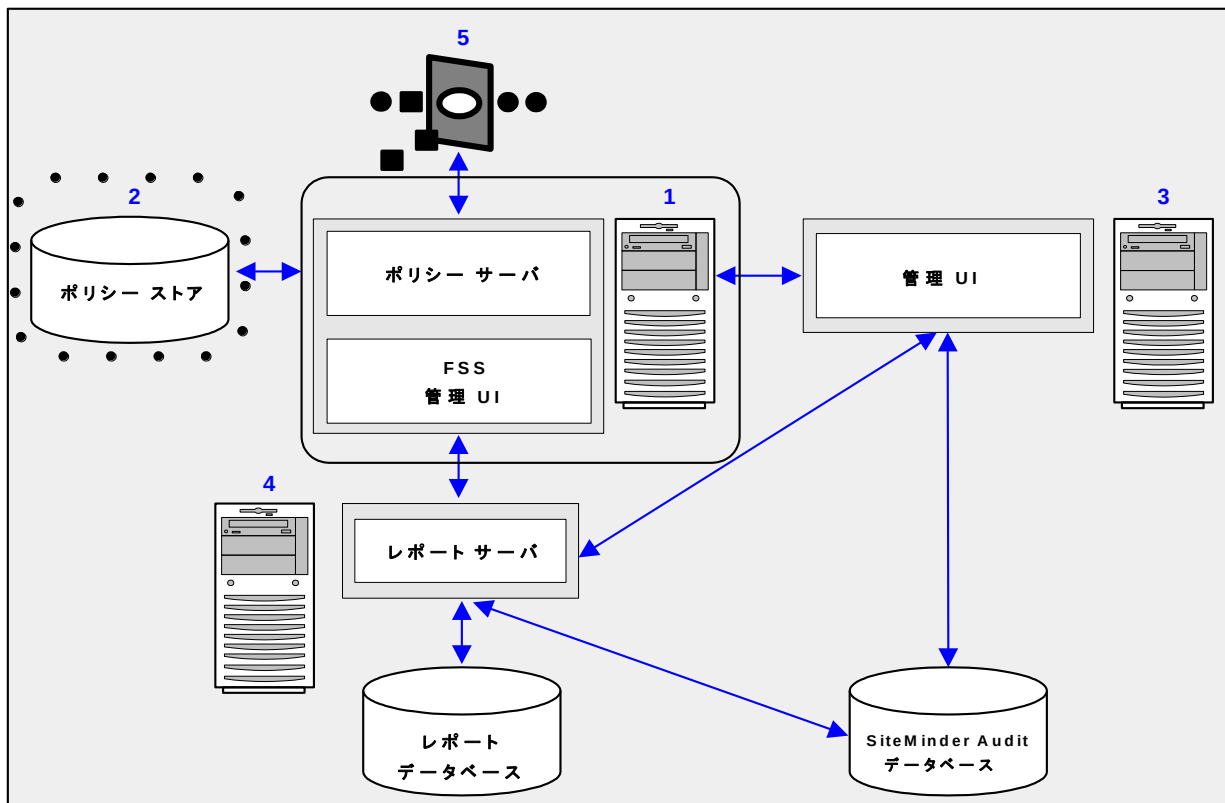
[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

インストール ロード マップ

以下の図はサンプル **SiteMinder** のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。

- 実線で囲まれているのは、ポリシー ストアの設定前に必要なコンポーネントです。コンポーネントには、以下のものが含まれます。
 - ポリシー サーバ
 - 未登録の FSS 管理 UIポリシー サーバが環境に含まれていない場合は、決してインストール処理を続行しないでください。
- 緑色の点線で囲まれたコンポーネントは、今から設定するポリシー ストアです。

以下の図は、単一のポリシー/キー ストア インスタンスを示します。図示されていませんが、環境は個別のポリシーおよびキー ストア用の個別のインスタンスを使用できます。



注: SiteMinder プラットフォームのサポート マトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

重要な考慮事項

ポリシー ストアの破損を回避するには、ポリシー ストアを配置するサーバが、UTF-8 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認します。UTF-8 形式でオブジェクトを格納するためのサーバの設定の詳細については、そのサーバ用のドキュメントを参照してください。

ポリシー ストアとしての CA Directory

Windows または UNIX システムのいずれかにインストールされたポリシー サーバは、ポリシー ストアとして **CA Directory** を使用できます。以下のセクションでは、ポリシー ストアとしてディレクトリ サーバを設定する方法について詳しく説明します。

ディレクトリ サーバ情報の収集

CA Directory をポリシー ストアとして設定するには、特定のディレクトリ サーバ情報が必要です。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、**SiteMinder** データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

ポリシー ストアを設定する前に、以下の情報を収集します。値を記録するためにポリシー ストアのワークシートを使用できます。

- **ホスト情報** - **CA Directory** が実行されているシステムの完全修飾ホスト名または IP アドレスを決定します
- **DSA ポート番号** - DSA がリスニングするポートを決定します。
- **ベース DN** - ポリシー ストア オブジェクトが定義される LDAP ツリーのノードの識別名を決定します。
- **管理 DN** - DSA 内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限を持つユーザの LDAP ユーザ名を決定します。
- **管理者パスワード** - InfoView 管理ユーザのパスワードを決定します。

ポリシー ストアを設定する方法

ポリシー ストアとして **CA** ディレクトリを設定するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー ストア用の **DSA** を作成します。
2. ポリシー ストア スキーマを作成します。
3. **DSA** を開きます。
4. ポリシー ストア データ用のベース ツリー構造を作成します。

5. DSA 用のスーパーユーザ管理者を作成します。
6. ポリシー ストアにポリシー サーバを示します。
7. SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定します。
8. CA ディレクトリ キャッシュ設定を確認します。
9. デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートします。
10. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
11. 管理 UI の登録準備をします。

ポリシー ストア用の DSA の作成

以下のコマンドを実行して DSA を作成します。

```
dxnewdsa DSA_Name port "o=DSA_Name,c=country_code"
```

DSA_Name

DSA の名前を指定します。

port

DSA がリスンするポートを指定します。

```
o=DSA_Name,c=country_code
```

DSA プレフィックスを指定します。

例: "o=psdsa,c=US"

dxnewdsa ユーティリティが新しい DSA を起動します。

注: DSA が自動的に起動しない場合は、以下を実行します。

```
dxserver start DSA_Name
```

ポリシー ストア スキーマの作成

ポリシー ストアおよびストア **SiteMinder** オブジェクトとしてディレクトリ サーバが機能できるように、ポリシー ストア スキーマを作成します。

重要: デフォルトでは、**CA Directory** 設定ファイルは読み取り専用です。変更が必要なすべての **CA Directory** ファイルは書き込み権限で更新される必要があります。ファイルが一度更新されたら、読み取り専用の権限に戻すことができます。

ポリシー ストア スキーマを作成する方法

1. CA Directory *DXHOME*\config\schema ディレクトリに以下のファイルをコピーします。

- netegrity.dxc
- etrust.dxc

DXHOME

ディレクトリ サーバのインストール パスを示します。

注: netegrity.dxc ファイルは、ポリシー サーバとともに *policy_server_home*\eTrust にインストールされます。注: etrust.dxc ファイルは、ポリシー サーバとともに *siteminder_home*\xps\db にインストールされます。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. default.dxc スキーマ ファイルをコピーしてその名前を変更することにより、新しい SiteMinder スキーマ ファイルを作成します。

注: default.dxc スキーマ ファイルは、*DXHOME*\config\schema\default.dxc にあります。

例: default.dxc スキーマ ファイルをコピーし、そのコピーの名前を *smdsa.dxc* に変更します。

3. 新しい SiteMinder スキーマ ファイルの下部への以下の行を追加します。

```
#CA Schema
source "netegrity.dxc";
source "etrust.dxc";
```


4. スキーマを `default.dwg` から新しい SiteMinder スキーマ ファイルに変更することにより、DSA の DXI ファイル (`DSA_Name.dxi`) を編集します。

`DSA_Name`

`dxnewdsa` ユーティリティを使用して作成した DSA の名前を表します。

注: DSA の DXI ファイルは `DXHOME\config\servers` 内にあります。

5. DSA の DXI ファイルの終わりに、次の行を追加します。

■ `r12`

```
# cache configuration
set max-cache-size = 100;
set cache-attrs = all-attributes;
set cache-load-all = true;
set ignore-name-bindings = true;
```

注: `max-cache-size` エントリは MB 単位の合計キャッシュ サイズです。CA Directory サーバで利用可能な合計メモリとポリシー ストアの合計サイズに基づいてこの値を調整します。

■ `r12 SP1 以降`

```
# cache configuration
set ignore-name-bindings = true;
```

6. DSA のデフォルト DXC ファイル (`default.dxc`) を開きます。

注: デフォルトの DXC ファイルは `DXHOME\dxserver\config\limits` 内にあります。

7. 以下と一致するように設定を編集します。

```
# size limits
set max-users = 1000;
set credits = 5;
set max-local-ops = 1000;
set max-op-size = 4000;
set multi-write-queue = 20000;
```

注: サイズ制限設定を編集すると、キャッシュ サイズ エラーが CA Directory ログ ファイルに表示されなくなります。

重要: `multi-write-queue` 設定は、テキスト ベースの設定のみです。DSA が DXmanager でセットアップされる場合は、この設定を省略します。

8. DXC ファイルを保存します。
9. DSA ユーザとして、以下のコマンドを使用して DSA を停止して再起動します。

```
dxserver stop DSA_Name  
dxserver start DSA_Name
```

DSA_Name

DSA の名前を指定します。

ポリシー ストア スキーマが作成されます。

DSA を開く

ディレクトリ サーバのビューを作成し、オブジェクトを管理します。

CA Directory Server のビューを作成する方法

1. JXplorer GUI を起動します。
2. 接続アイコンをクリックします。
接続設定が表示されます。
3. [ホスト名]フィールドに *host_name_or_IP_address* を入力します。
host_name_or_IP_address
CA Directory が実行されているシステムのホスト名または IP アドレスを指定します。
4. [ポート番号]フィールドに *port_number* を入力します。
port_number
DSA がリスニングするポートを指定します。
5. [ベース DN]フィールドに「*o=DSA_Name,c=country_code*」と入力します。
例: *o=psdsa,c=US*
6. レベルリストから[匿名]を選択して、[接続]をクリックします。
DSA のビューが表示されます。

ポリシー ストア データ用のベース ツリー構造の作成

ポリシー ストア データを保持するためのベース ツリー構造を作成します。
JXplorer GUI を使用し、組織単位を作成します。

ポリシー ストア データ用のベース ツリー構造を作成する方法

1. DSA のルート要素を選択します。
 2. ルート要素の下に、以下の名前を持つ組織単位を作成します。
Netegrity
 3. Netegrity の下に、以下の名前を持つ組織単位 (ルート要素) を作成します。
SiteMinder
 4. SiteMinder の下に、以下の名前の組織単位 (ルート要素) を作成します。
PolicySvr4
 5. PolicySvr4 の下に、以下の名前の組織単位 (ルート要素) を作成します。
XPS
- ベース ツリー構造が作成されます。

DSA のスーパーユーザ管理者の作成

スーパーユーザ管理者を作成する必要があるのは、DSA を作成、削除、または変更する権限がある管理者名およびパスワードを持っていない場合のみです。ポリシー サーバは、ポリシー ストアに接続するためにこの情報を必要とします。

管理者を作成する方法

1. JXplorer を使用して DSA にアクセスします。
2. DSA のオブジェクトを作成、削除、および変更する権限を持つ管理者を作成します。
注: 管理者のオブジェクトタイプが `inetOrgPerson` であることを確認します。
3. 管理者ユーザ名およびパスワードを書き留めておきます。この情報は、ポリシー サーバがこのポリシー ストアを参照するために使用されます。

例: `dn: cn=admin,o=yourcompany,c=in`

ポリシー サーバからポリシー ストアへの参照の設定

ポリシー サーバからポリシー ストアへの参照を設定し、ポリシー サーバがポリシー ストアにアクセスできるようにします。

ポリシー サーバからポリシー ストアへの参照を設定する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。

重要: Windows Server 2008 上でこのグラフィカル ユーザ インターフェースにアクセスする場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でショートカットを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

2. [データ]タブをクリックします。

データベース設定が表示されます。

3. [データベース]リストから[ポリシー ストア]を選択します。

4. [ストレージ]リストから[LDAP]を選択します。

5. [LDAP ポリシー ストア]グループ ボックスで、以下を設定します。

- LDAP IP アドレス
- 管理者ユーザ名
- パスワード
- パスワードの確認
- DN

注: フィールド、コントロール、およびそれぞれの要件については、[ヘルプ]をクリックしてください。

6. [適用]をクリックします。

ポリシー ストアの設定が保存されます。

7. [LDAP 接続のテスト]をクリックします。

SiteMinder は、ポリシー サーバがポリシー ストアにアクセスできることを示す確認を返します。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は `siteminder` です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: `smreg` ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. `smreg` ユーティリティを `policy_server_home\bin` にコピーします。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smreg -su password
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンド ライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. `policy_server_home\bin` から `smreg` ユーティリティを削除します。`smreg` を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

CA ディレクトリ キャッシュ設定の確認

DXconsole を使用して、DXcache の設定が有効であることを確認することができます。

注: デフォルトでは、DxConsole はローカル ホストからのみアクセス可能です。DxConsole にリモートシステムからの接続を承諾させる `set dsa` コマンドの使用の詳細については、「eTrust Directory Reference Guide」を参照してください。

キャッシュが有効であることを確認する方法

1. DSA DXConsole ポートに `telnet` を実行するために、コマンド プロンプトから以下を入力します。

```
telnet DSA_Host DXconsole_Port
```

DSA_Host

DSA をホストしているシステムのホスト名または IP アドレスを指定します。

注: ローカル ホスト上にいる場合は、「**localhost**」を入力します。ホスト名または IP アドレスを入力すると接続できません。

DXConsole_Port

DXconsole がリスニングするポートを指定します。

デフォルト: DXconsole ポートは `DSA port + 1` の値に設定されます。

例: DSA がポート 19389 で実行されている場合、DXconsole ポートは 19390 です。

DSA 管理コンソールが表示されます。

2. 以下のコマンドを入力します。

```
get cache;
```

DSA 管理コンソールは現在の DSA DXcache の設定を表示し、ディレクトリ キャッシングが有効かどうかを指定します。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず **-cf** 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c  
policy_server_home
```

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

`smobjimport` によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: `ampolicy.smdif` をインポートすると、**Federation** セキュリティ サービス、**Web** サービス変数、および **eTelligent** ルール機能が使用可能になります。**eTelligent** ルール機能は、**SiteMinder** から別個にライセンスが提供されます。この **eTelligent** ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で **SiteMinder** ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- **Windows** - `policy_server_home\%xps%\dd`

- **UNIX** - `policy_server_home/xps/dd`

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: `XPSDDInstall` ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSDDInstall SmObjects.xdd
```

`XPSDDInstall` は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMAObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssSmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c  
comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder) のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r retries

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log path

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: *siteminder_home*¥log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e error_path

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(任意) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。
ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

ポリシー ストアとしての Oracle Directory Server Enterprise Edition

Windows または UNIX システムのいずれかにインストールされたポリシー サーバは、Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして使用できます。以下のセクションでは、ポリシー ストアとして手動でディレクトリ サーバを設定する方法について詳しく説明します。

注: ポリシー サーバ環境設定ウィザードを使用して、このタイプの LDAP ディレクトリ サーバをポリシー ストアとして自動的に設定できます。

ディレクトリ サーバ情報の収集

LDAP ディレクトリ サーバをポリシー ストアとして設定するか、または既存のポリシー ストアをアップグレードするには、特定のディレクトリ サーバ情報が必要です。作業を始める前に、以下の情報を収集してください。値を記録するためにポリシー ストアのワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

ホスト情報

ディレクトリ サーバの完全修飾ホスト名または IP アドレスを指定します。

ポート情報

(任意) 標準以外のポートを指定します。

デフォルト値: 636 (SSL) および 389 (SSL 以外)

管理 DN

LDAP ツリー内のポリシー ストア ルート オブジェクトの下でオブジェクトの作成、読み取り、変更、および削除を行う権限を持つユーザの LDAP ユーザ名を指定します。

管理パスワード

管理 DN のパスワードを指定します。

ポリシー サーバのルート DN

ポリシー ストア オブジェクトを定義する、LDAP ツリー内のノードの識別名を指定します。

SSL クライアント証明書

SSL クライアント証明書データベース ファイルがあるディレクトリのパス名を指定します。

制限: SSL のみ

詳細情報:

[ポリシーおよびデータ ストアのワークシート \(P. 424\)](#)

ポリシー ストアを設定する方法

Oracle Directory Server Enterprise Edition (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) をポリシー ストアとして設定するには、以下の手順を完了します。

1. (オプション) 必要に応じて、LDAP ベンダー ソフトウェアを使用して LDAP ディレクトリ サーバ インスタンスを作成します。
2. (オプション) 必要に応じて、LDAP ベンダー ソフトウェアを使用して管理者ユーザを作成し、ポリシー ストア ルート オブジェクト下の LDAP ツリー内でオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限を付与します。
3. Oracle Directory Server の考慮事項を確認します。
4. ディレクトリ サーバにポリシー サーバを示します。
5. ポリシー ストア スキーマを作成します。
6. SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定します。
7. デフォルトの SiteMinder オブジェクトをインポートします。
8. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
9. ポリシー サーバを再起動します。
10. 管理 UI の登録を準備します。

Oracle Directory Server Enterprise Edition の考慮事項

Oracle Directory Server Enterprise Edition をポリシー ストアとして使用している場合、以下の点を考慮します。

smldapsetup および Oracle Directory Enterprise Edition

smldapsetup ユーティリティは `ou=Netegrity, root` サブ サフィックス、PolicySvr4 データベースを作成します。

root

ポリシー サーバ管理コンソールの[データ]タブ上の[ルート DN]フィールドに指定したディレクトリ ルート。この変数は、既存のルート サフィックスまたはサブ サフィックスのいずれかである必要があります。

例: ルート サフィックスが `dc=netegrity,dc=com` である場合、smldapsetup を実行すると、ディレクトリ サーバに以下が生成されます。

- ルート サフィックス、`dc=netegrity,dc=com`、対応する userRoot データベース。
- サブ サフィックス、`ou=Netegrity,dc=netegrity,dc=com`、対応する PolicySvr4 データベース。

例: ポリシー ストアを `ou=apps,dc=netegrity,dc=com` の下に置く場合、`ou=apps,dc=netegrity,dc=com` は、ルート サフィックス `dc=netegrity,dc=com` のルートまたはサブ サフィックスのいずれかである必要があります。

それがサブ サフィックスである場合、smldapsetup を実行すると以下が作成されます。

- ルート サフィックス、`dc=netegrity,dc=com`、対応する userRoot データベース。
- サブ サフィックス、`ou=apps,dc=netegrity,dc=com`、対応する Apps データベース。
- サブ サフィックス、`ou=Netegrity,ou=apps,dc=netegrity,dc=com`、対応する PolicySvr4 データベース。

注: ルートおよびサブ サフィックスの詳細については、Oracle の[ドキュメント](#)を参照してください。

Oracle Directory Server Enterprise Edition ポリシー ストアのレプリケート

SiteMinder r12.0 SP3 では、UserRoot および PolicySvr4 データベースを作成します。PolicySvr4 データベースにはそれを指すサフィックス マッピングがあります。このポリシー ストアをレプリケートするには、PolicySvr4 データベース ディレクトリ用のレプリケーション アグリーメントをセットアップする必要があります。

注: レプリケーション アグリーメントに関する詳細については、Oracle の[ドキュメント](#)を参照してください。

レプリケーション アグリーメントを作成した後、SiteMinder インデックスをレプリケートします。

SiteMinder インデックスをレプリケートする方法

1. 以下のように SiteMinder インデックスを生成します。

```
smldapsetup ldgen -x -findexes.ldif
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

2. レプリカ サーバ上で以下のようにインデックスをセットアップします。

```
smldapsetup ldmod -x -findexes.ldif -hhost -prelicaport  
-dAdminDN -wAdminPW
```

host

レプリカ ホストを指定します。

replicaport

レプリカ ポート番号を指定します。

AdminDN

レプリカ管理者 DN を指定します。

例: cn=directory manager

AdminPW

レプリカ管理者パスワードを指定します。

SiteMinder インデックスがレプリケートされます。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照の設定

ポリシー サーバが、ポリシー ストアに対して情報の読み取りおよび書き込みを行うために必要なシステム情報と管理権限を持つことができるように、ポリシー サーバから LDAP ディレクトリ サーバへの参照を設定します。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照を設定する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムから以下コマンドを実行します。

```
smldapsetup status -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1|0 -ccert
```

-hhost

LDAP サーバのホスト システムの IP アドレスを指定します。

-pport

LDAP サーバが受信待機するポートを指定します。

-dAdminDN

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザの名前を指定します。

ADAM または AD LDS: guid 値を含め、ディレクトリ サーバ管理者の完全なドメイン名を指定します。

例: CN=user1,CN=People,CN=Configuration,CN,{guid}

-wAdminPW

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザのパスワードを指定します。

-rroot

LDAP ディレクトリ内の SiteMinder データの DN ロケーションを指定します。

ADAM または AD LDS: ポリシー ストア スキーマ データを置く、ADAM または AD LDS サーバ内のアプリケーション パーティションの既存のルート DN ロケーションを指定します。

-ssl1|0

SSL 接続を指定します。

制限: 0=no | 1=yes

デフォルト: 0

-ccert

(ssl 値が 1 の場合にのみ必須) SSL クライアント証明書データベースファイル(cert7.db)があるディレクトリのパスを指定します。

LDAP ポリシー ストア接続パラメータの設定が適正かどうかを検証されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup reg -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1/0 -ccert
```

LDAP ディレクトリ サーバの接続がテストされ、サーバが **SiteMinder** ポリシー ストアとして設定されます。

ポリシー ストアスキーマの作成

ポリシー ストアおよびストア **SiteMinder** オブジェクトとしてディレクトリ サーバが機能できるように、ポリシー ストア スキーマを作成します。

ポリシー ストア スキーマを作成する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムから以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldgen -ffile_name  
file_name
```

作成する LDIF ファイルの名前を指定します。

SiteMinder スキーマと共に LDIF ファイルが作成されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -ffile_name  
file_name
```

作成した LDIF の名前を指定します。

smldapsetup はポリシー ストア スキーマをインポートします。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -fpolicy_server_home/xps/db/SunOne.ldif  
policy_server_home
```

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

ポリシー ストア スキーマが拡張されます。ポリシー ストア スキーマを作成しました。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は `siteminder` です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: `smreg` ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. `smreg` ユーティリティを `policy_server_home\bin` にコピーします。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

`smreg -su password`

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンド ライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. `policy_server_home\bin` から `smreg` ユーティリティを削除します。`smreg` を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず `-cf` 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: ampolicy.smdif をインポートすると、Federation セキュリティ サービス、Web サービス変数、および eTelligent ルール機能が使用可能になります。eTelligent ルール機能は、SiteMinder から別個にライセンスが提供されます。この eTelligent ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- Windows - *policy_server_home*\xps\dd

- UNIX - *policy_server_home*/xps/dd

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: XPSDDInstall ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSDDInstall SmObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssSmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c  
comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r retries

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log path

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: `siteminder_home¥log`

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e error_path

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: `stderr`

-vT

(任意) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

ポリシー ストアとしての Active Directory

Microsoft Active Directory は Windows 用のネイティブ LDAP 互換のディレクトリです。Windows または UNIX システムのいずれかにインストールされたポリシー サーバは、ポリシー ストアとして **Active Directory** を使用できます。さらに、ポリシー サーバとポリシー ストアは別のマシンにインストールできます。たとえば、UNIX マシンにインストールされたポリシー サーバが、Windows システム上の **Active Directory** ポリシー ストアを使用することができます。

注: Active Directory が SSL を使用してポリシー サーバと通信する予定である場合は、SSL クライアント証明書に **SubjectDN** の **CN** が含まれていることを確認します。SSL クライアント証明書にこの情報が含まれていない場合、ポリシー サーバはクラッシュします。

以下のセクションでは、ポリシー ストアとしてディレクトリ サーバを設定する方法について詳しく説明します。

ディレクトリ サーバ情報の収集

LDAP ディレクトリ サーバをポリシー ストアとして設定するか、または既存のポリシー ストアをアップグレードするには、特定のディレクトリ サーバ情報が必要です。作業を始める前に、以下の情報を収集してください。値を記録するためにポリシー ストアのワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

ホスト情報

ディレクトリ サーバの完全修飾ホスト名または IP アドレスを指定します。

ポート情報

(任意) 標準以外のポートを指定します。

デフォルト値: 636 (SSL) および 389 (SSL 以外)

管理 DN

LDAP ツリー内のポリシー ストア ルート オブジェクトの下でオブジェクトの作成、読み取り、変更、および削除を行う権限を持つユーザの LDAP ユーザ名を指定します。

管理パスワード

管理 DN のパスワードを指定します。

ポリシー サーバのルート DN

ポリシー ストア オブジェクトを定義する、LDAP ツリー内のノードの識別名を指定します。

SSL クライアント証明書

SSL クライアント証明書データベース ファイルがあるディレクトリのパス名を指定します。

制限: SSL のみ

詳細情報:

[ポリシーおよびデータ ストアのワークシート](#) (P. 424)

ポリシー ストアを設定する方法

ポリシー ストアとして **Active Directory** ディレクトリ サーバを設定するには、以下の手順に従います。

1. (オプション) 該当する場合、**LDAP** ディレクトリ サーバ インスタンスを作成するために **LDAP** ベンダー ソフトウェアを使用します。
2. (オプション) 該当する場合、ポリシー ストア ルートオブジェクトの下の **LDAP** ツリー内で、オブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限を持つユーザを作成するために、**LDAP** ベンダー ソフトウェアを使用します。

注: ポリシー ストア ルートオブジェクトの下の **LDAP** ツリー内で、オブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限を持つユーザの **LDAP** ユーザ名を収集した場合は、この手順を完了させる必要はありません。

3. ディレクトリ サーバにポリシー サーバを示します。
4. ポリシー ストア スキーマを作成します。
5. **SiteMinder** スーパーユーザ パスワードを設定します。
6. デフォルトの **SiteMinder** オブジェクトをインポートします。
7. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
8. ポリシー サーバを再起動します。
9. 管理 UI の登録準備をします。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照の設定

ポリシー サーバが、ポリシー ストアに対して情報の読み取りおよび書き込みを行うために必要なシステム情報と管理権限を持つことができるように、ポリシー サーバから **LDAP** ディレクトリ サーバへの参照を設定します。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照を設定する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムから以下コマンドを実行します。

```
smldapsetup status -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1/0 -ccert
```

-hhost

LDAP サーバのホストシステムの IP アドレスを指定します。

-pport

LDAP サーバが受信待機するポートを指定します。

-dAdminDN

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザの名前を指定します。

ADAM または AD LDS: guid 値を含め、ディレクトリ サーバ管理者の完全なドメイン名を指定します。

例: CN=user1,CN=People,CN=Configuration,CN,{guid}

-wAdminPW

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザのパスワードを指定します。

-rroot

LDAP ディレクトリ内の SiteMinder データの DN ロケーションを指定します。

ADAM または AD LDS: ポリシー ストア スキーマ データを置く、ADAM または AD LDS サーバ内のアプリケーション パーティションの既存のルート DN ロケーションを指定します。

-ssl1|0

SSL 接続を指定します。

制限: 0=no | 1=yes

デフォルト: 0

-ccert

(ssl 値が 1 の場合にのみ必須) SSL クライアント証明書データベース ファイル(cert7.db)があるディレクトリのパスを指定します。

LDAP ポリシー ストア接続パラメータの設定が適正かどうかを検証されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup reg -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1/0 -ccert
```

LDAP ディレクトリ サーバの接続がテストされ、サーバが SiteMinder ポリシー ストアとして設定されます。

ポリシー ストア スキーマの作成

ポリシー ストアおよびストア **SiteMinder** オブジェクトとしてディレクトリ サーバが機能できるように、ポリシー ストア スキーマを作成します。

ポリシー ストア スキーマを作成する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムから以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldgen -ffile_name  
file_name
```

作成する LDIF ファイルの名前を指定します。

SiteMinder スキーマと共に LDIF ファイルが作成されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -ffile_name  
file_name
```

作成した LDIF の名前を指定します。

smldapsetup はポリシー ストア スキーマをインポートします。

3. `policy_server_home\xps\db` に移動し、以下のファイルを開きます。

ActiveDirectory.ldif

4. 手動で <RootDN> の各インスタンスをルート DN の実際の値に置換します。

例: dc=domain,dc=com

5. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -fpolicy_server_home\xps\db\ActiveDirectory.ldif  
policy_server_home
```

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

ポリシー ストア スキーマが拡張されます。ポリシー ストア スキーマを作成しました。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は `siteminder` です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: `smreg` ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. `smreg` ユーティリティを `policy_server_home\bin` にコピーします。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smreg -su password
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンド ライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド (&) またはアスタリスク (*) を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. `policy_server_home\bin` から `smreg` ユーティリティを削除します。`smreg` を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず `-cf` 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: ampolicy.smdif をインポートすると、Federation セキュリティ サービス、Web サービス変数、および eTelligent ルール機能が使用可能になります。eTelligent ルール機能は、SiteMinder から別個にライセンスが提供されます。この eTelligent ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- Windows - *policy_server_home*\xps\dd

- UNIX - *policy_server_home*/xps/dd

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: XPSDDInstall ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSDDInstall SmObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssSmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c  
comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r retries

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log path

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: `siteminder_home¥log`

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e error_path

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: `stderr`

-vT

(任意) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。
ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

Active Directory ObjectCategory インデックス属性のサポート

他の LDAP 互換のディレクトリとは異なり、Active Directory は、デフォルトでは、ポリシー ストア オブジェクトのインデックス付けに **objectClass** 属性を使用しません。代わりに、オブジェクトには **objectCategory** 属性によってインデックスが付けられます。検索機能を強化するために、インデックスを付けることができる属性 (Active Directory ドキュメントを参照) として **objectClass** を設定するか、またはポリシー サーバ内の **objectCategory** サポートを有効にすることができます。

ObjectCategory 属性サポートの有効化または無効化

Windows システムの場合

ObjectCategory 属性サポートを有効化/無効化する方法

1. Windows レジストリ エディタを起動します。
2. キー
HKLM\Software\Netegrity\SiteMinder\CurrentVersion\DS\LDAPProvider を
見つけます。
 - a. サポートを有効にするには、EnableObjectCategory 値を 1 に設定しま
す。
 - b. サポートを無効にするには、EnableObjectCategory 値を 0 に設定しま
す。

注: デフォルト値は 0 です。

UNIX システムの場合

ObjectCategory 属性サポートを有効化/無効化する方法

1. テキスト エディタで、<sitefinder_installation>/registry にある SiteMinder
sm.registry ファイルを開きます。
2. 以下のキーを見つけてます。
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Netegrity\SiteMinder\CurrentVersion\
Ds\LDAPProvider.
 - a. サポートを有効にするには、EnableObjectCategory 値を 1 に設定しま
す。
 - b. サポートを無効にするには、EnableObjectCategory 値を 0 に設定しま
す。

注: デフォルト値は 0 です。

ポリシー ストアとしての Microsoft ADAM/AD LDS

Windows または UNIX システムのいずれかにインストールされたポリシー サーバは、ポリシー ストアとして Microsoft ADAM または AD LDS を使用することができます。以下のセクションは、ポリシー ストアを手動で設定する方法を詳述します。

注: ポリシー サーバ環境設定ウィザードを使用して、このタイプの LDAP ディレクトリ サーバをポリシー ストアとして自動的に設定できます。

ADAM/AD LDS 要件

ポリシー ストアを設定する前に、以下の要件を満たすことを確認してください。

1. 必ずポリシー ストア パーティションを作成してください。
2. (ADAM)パッチ ADAM
3. 設定パーティション内にユーザを作成できることを確認してください。設定パーティション内の管理ユーザのみが、ポリシー ストア スキーマをインポートできます。

ADAM サーバのパッチ

ADAM サーバに Microsoft のパッチ Q840991 を適用します。このパッチにより、設定パーティション内にユーザを作成することができます。ポリシー ストア スキーマをインポートできるのは、このパーティション内の管理権限を持つユーザのみです。このパッチは、www.microsoft.com からダウンロードできます。または Microsoft の製品サポートにお問い合わせいただくことでダウンロードできます。

設定パーティション内でのユーザ作成を許可します。

設定パーティション内の管理ユーザのみが、ポリシー ストア スキーマをインポートできます。このユーザは、ポリシー ストア パーティションを含む設定パーティションおよびすべてのアプリケーション パーティションにおける管理者権限を持っている必要があります。

注: 以下の手順は、設定、アプリケーションおよびスキーマ パーティションに精通していることを前提とします。

設定パーティション内にユーザを作成できるようにする方法

1. ADSI 編集コンソールを開きます。

2. 設定パーティション内の以下の場所に移動します。
`cn=directory service, cn=windows nt,`
`cn=services, cn=configuration, cn={guid}`
3. msDS-Other-Settings 属性を検索します。
4. msDS-Other-Settings 属性に以下の新しい値を追加します。
`ADAMAllowADAMSecurityPrincipalsInConfigPartition=1`
5. 設定およびポリシー ストア アプリケーション パーティション内では、以下を実行します。
 - a. CN=Administrators, CN=Role に移動します。
 - b. CN=Administrators のプロパティを開きます。
 - c. メンバ属性を編集します。
 - d. 以下のいずれかの操作を行います。
 - (ADAM 2000 および 2003) [ADAM アカウントを追加する]をクリックして、設定パーティションで作成したユーザのフル DN をペーストします。
 - (AD LDS) [DN を追加する]をクリックして、設定パーティションで作成したユーザのフル DN をペーストします。
 - e. 作成したユーザのプロパティに移動し、以下のオブジェクトの値を確認します。
`msDS-UserAccountDisabled`
値は必ず **false** に設定してください。

管理ユーザには、ポリシー ストア パーティションを含む設定パーティションおよびすべてのアプリケーション パーティションにおける権限があります。

ディレクトリ サーバ情報の収集

ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するためには、特定のディレクトリ サーバ情報が必要です。ポリシー ストアを設定する前に、以下の情報を収集します。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

- **ホスト情報** - ディレクトリ サーバ ホスト システムの完全修飾名または IP アドレスを決定します。
- **ポート情報** - ディレクトリ サーバが標準でないポートでリスンするかどうかを決定します。ポート情報を提供しない場合には、ポリシー ストアの設定に使用される SiteMinder ユーティリティが、ポート 389 (非 SSL) および 636 (SSL) をデフォルトに設定します。
- **管理者 DN** - guid 値を含む、ディレクトリ サーバ管理者のフルドメイン名を決定します。
例: CN=user1,CN=People,CN=Configuration,CN,{guid}
- **管理者パスワード** - ディレクトリ サーバ管理者用のパスワードを決定します。
- **アプリケーション パーティションのルート DN** - ポリシー ストア スキーマ データがインストールされるべきディレクトリ サーバ内の、アプリケーション パーティションのルート DN の場所を識別します。
- (オプション) **SSL クライアント証明書** - ディレクトリ接続が SSL で行われる場合には、SSL クライアント証明書データベースを含んでいるディレクトリのパスを決定します。

ポリシー ストアを設定する方法

ポリシー ストアとして ADAM または AD LDS を設定するには、以下の手順に従います。

1. ADAM/AD LDS 要件に適合していることを確認してください。
2. 必要な情報を収集したことを確認してください。
3. ディレクトリ サーバにポリシー サーバを示します。
4. ポリシー ストア スキーマを作成します。
5. SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定します。
6. デフォルトの SiteMinder オブジェクトをインポートします。
7. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
8. ポリシー サーバを再起動します。
9. 管理 UI の登録準備をします。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照の設定

ポリシー サーバが、ポリシー ストアに対して情報の読み取りおよび書き込みを行うために必要なシステム情報と管理権限を持つことができるように、ポリシー サーバから LDAP ディレクトリ サーバへの参照を設定します。

ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照を設定する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムから以下コマンドを実行します。

```
smldapsetup status -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1|0 -ccert
```

-hhost

LDAP サーバのホスト システムの IP アドレスを指定します。

-pport

LDAP サーバが受信待機するポートを指定します。

-dAdminDN

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザの名前を指定します。

ADAM または AD LDS: guid 値を含め、ディレクトリ サーバ管理者の完全なドメイン名を指定します。

例: CN=user1,CN=People,CN=Configuration,CN,{guid}

-wAdminPW

LDAP ディレクトリ サーバに LDAP スキーマを作成する権限を持つ LDAP ユーザのパスワードを指定します。

-rroot

LDAP ディレクトリ内の SiteMinder データの DN ロケーションを指定します。

ADAM または AD LDS: ポリシー ストア スキーマ データを置く、ADAM または AD LDS サーバ内のアプリケーション パーティションの既存のルート DN ロケーションを指定します。

-ssl1|0

SSL 接続を指定します。

制限: 0=no | 1=yes

デフォルト: 0

-ccert

(ssl 値が 1 の場合にのみ必須) SSL クライアント証明書データベースファイル(cert7.db)があるディレクトリのパスを指定します。

LDAP ポリシー ストア接続パラメータの設定が適正かどうかを検証されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup reg -hhost -pport -dAdminDN  
-wAdminPW -rroot -ssl1/0 -ccert
```

LDAP ディレクトリ サーバの接続がテストされ、サーバが **SiteMinder** ポリシー ストアとして設定されます。

ポリシー ストアスキーマの作成

ポリシー ストアおよびストア **SiteMinder** オブジェクトとしてディレクトリ サーバが機能できるように、ポリシー ストア スキーマを作成します。

ポリシー ストア スキーマを作成する方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldgen -ffile_name  
file_name
```

作成する LDIF ファイルの名前を指定します。

SiteMinder スキーマと共に LDIF ファイルが作成されます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -ffile_name  
file_name
```

作成した LDIF の名前を指定します。

smldapsetup はポリシー ストア スキーマをインポートします。

3. *siteminder_home*\xps\db に移動し、以下のいずれかを開きます。

- ADAM.ldif
- ADLDS.ldif

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

4. {guid} の各インスタンスを、中かっこ内の実際の **guid** の値に置換し、ファイルを保存します。

例: {CF151EA3-53A0-44A4-B4AC-DA0EBB1FF200}

5. 以下のコマンドを実行します。

```
smldapsetup ldmod -fsiteminder_home\xps\db\file_name.ldif
```

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

file_name

以下のいずれかを指定します。

- ADAM

- ADLDS

ポリシー ストア スキーマが拡張されます。ポリシー ストア スキーマを作成しました。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は **siteminder** です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: smreg ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. smreg ユーティリティを *policy_server_home*\bin にコピーします。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smreg -su password
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. *policy_server_home\bin* から *smreg* ユーティリティを削除します。*smreg* を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず **-cf** 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c  
policy_server_home
```

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: ampolicy.smdif をインポートすると、Federation セキュリティ サービス、Web サービス変数、および eTelligent ルール機能が使用可能になります。eTelligent ルール機能は、SiteMinder から別個にライセンスが提供されます。この eTelligent ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- Windows - `policy_server_home\%xps%\dd`

- UNIX - `policy_server_home/xps/dd`

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: XPSDDInstall ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSDDInstall SmObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssSmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの **SiteMinder** スーパーユーザ アカウント (**siteminder**) を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c  
comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r *retries*

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c *comment*

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l *log path*

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: *siteminder_home*¥log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e *error_path*

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(任意) 詳細レベルを TRACE に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを INFO に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを WARNING に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを ERROR に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを FATAL に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

SiteMinder キー ストアの概要

Web エージェントは、エージェントキーを使用して、SiteMinder の cookie の暗号化と復号化を行い、cookie に格納されているデータを読み取れるようにします。Web エージェントはそのキーを使用して cookie を暗号化した後、その暗号化済み cookie をユーザのブラウザへ送信します。また、そのキーを使用して、他の Web エージェントから受信した cookie を復号化します。Web エージェントが起動し、管理呼び出し(リクエスト)を行った時点で、ポリシー サーバは現在のキーセットを提供します。Web エージェントはポリシー サーバをポーリングするたびに、管理呼び出しを行います。Web エージェントは、更新済みのキーを受け取ります。これらのキーは、ポリシー ストアまたは個別のストア内に格納されます。

既存ポリシー ストアでのキー ストアの設定

既存のポリシー ストアでキー ストアを設定する方法

1. ポリシーサーバー管理コンソールを起動します。

重要: Windows Server 2008 上でこのグラフィカル ユーザ インターフェースにアクセスする場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でショートカットを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

2. [データ]タブを選択して前面に表示します。
3. [データベース]ドロップダウンリストで、[キー ストア]を選択します。
4. [ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオンにします。
5. [適用]をクリックして設定を保存します。
6. [データ]タブで、[LDAP 接続のテスト]をクリックし、LDAP ディレクトリ内のポリシー ストアへの接続性を確認します。

個別キー ストアの設定

個別のキー ストアを設定する方法

1. ポリシーサーバー管理コンソールを起動します。

重要: Windows Server 2008 上でこのグラフィカル ユーザ インターフェースにアクセスする場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でショートカットを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

2. [データ]タブを選択して前面に表示します。
3. [データベース]ドロップダウンリストで、[キー ストア]を選択します。
4. [ストレージ]ドロップダウンリストで、[LDAP]を選択します。
5. (オプション)該当する場合、[ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオフにします。

6. [LDAP キー ストア]グループ ボックスに、以下を入力します。
 - a. [LDAP IP アドレス]フィールドに、LDAP ディレクトリの IP アドレス(またはホスト名)およびポート番号をコロン(:)で区切って入力します。

たとえば、「123.123.12.12:321」と入力します。ポートを指定しない場合、SiteMinder はデフォルトとしてポート 389 を使用します。
 - b. [ルート DN]フィールドに、SiteMinder ポリシー ストアが下に配置される LDAP ブランチを入力します。

例: o=airius.com
 - c. [管理者ユーザ名]フィールドに、設定しているポリシー サーバの LDAP ディレクトリ管理者の DN を入力します。
 - d. 例: cn=Directory Manager
 - e. [パスワード]フィールドに、LDAP ディレクトリ管理者パスワードを入力します。
 - f. [パスワードの確認入力]フィールドに、LDAP ディレクトリ管理者パスワードをもう一度入力します。
 - g. (オプション)システムが SSL を使用して LDAP ディレクトリと通信している場合、[SSL を使用]チェック ボックスをオンにします。
 - h. [適用]をクリックします。
7. (オプション)SSL を使用している場合、[設定]タブの[Netscape 証明書データベース ファイル]フィールドに証明書データベースの名前を入力します。
8. [適用]をクリックして設定を保存します。
9. [データ]タブで、[LDAP 接続のテスト]をクリックし、LDAP ディレクトリ サーバへの接続性を確認します。
10. [OK]をクリックすると、設定が保存され、コンソールが閉じます。

第 8 章: リレーショナル データベースでの SiteMinder データ ストアの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[ポリシーまたはキーのストアとしてのリレーショナル データベース \(P. 177\)](#)

[インストール ロード マップ \(P. 178\)](#)

[重要な考慮事項 \(P. 180\)](#)

[リレーショナル データベース用のスキーマ ファイル \(P. 180\)](#)

[SQL Server ポリシー ストアの設定 \(P. 183\)](#)

[Oracle ポリシー ストアの設定 \(P. 200\)](#)

[SQL Server データ ストアの設定 \(P. 224\)](#)

[Oracle データ ストアの設定 \(P. 247\)](#)

[サンプル ユーザ ディレクトリ \(P. 288\)](#)

ポリシーまたはキーのストアとしてのリレーショナル データベース

SiteMinder ポリシー ストアとは、すべてのポリシー関連情報のためのリポジトリです。SiteMinder インストールでのすべてのポリシー サーバは、直接またはレプリケーションを通じて、同じポリシー ストア データを共有する必要があります。SiteMinder は、管理者がポリシー ストア データをある格納場所から別の格納場所に移動できるツールを使用してインストールされます。

デフォルトでは、キー ストアはポリシー ストアと連結されます。個別のキー ストアを設定することができます。

注: シングル サイン オン機能を実装するために、個別のデータベース内にキーを格納することが必要となる場合があります。

ポリシー サーバをインストールするとき、自動的にポリシー ストアとして以下のリレーショナル データベースのうちの 1 つを設定できます。

- Microsoft SQL Server
- Oracle RDBMS

ポリシー ストアを自動的に設定するためにポリシー サーバ インストーラを使用しない場合は、ポリシー サーバのインストール後に手動でポリシー ストアを設定することができます。さらに、ポリシー サーバのインストール後、ポリシー サーバ 管理コンソールを使用してポリシー サーバを既存のポリシー ストアに示すことができます。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3** プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

ポリシー ストアのサポートに加え、リレーショナル データベースを使用して SiteMinder キー、監査ログ、セッション データを格納することができます。

詳細情報:

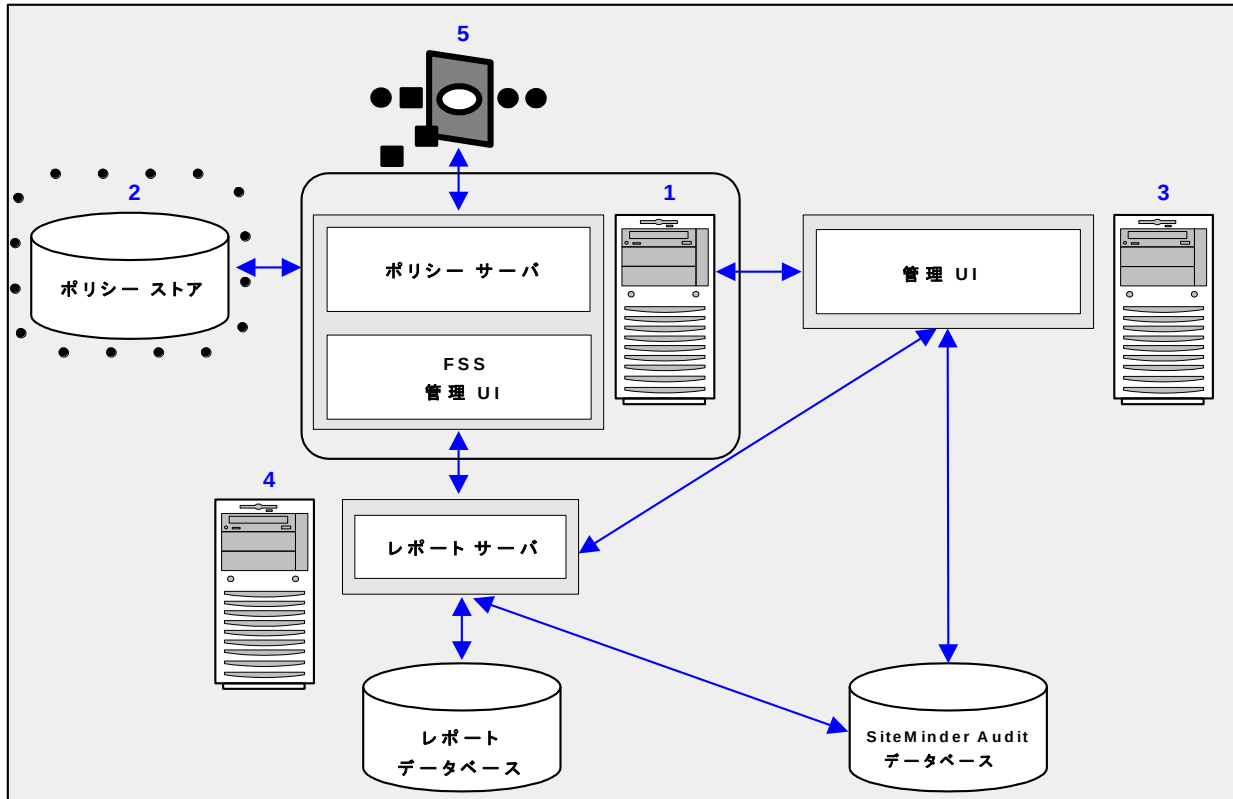
[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

インストール ロード マップ

以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。

- 実線で囲まれているのは、ポリシー ストアの設定前に必要なコンポーネントです。コンポーネントには、以下のものが含まれます。
 - ポリシー サーバ
 - 未登録の FSS 管理 UIポリシー サーバが環境に含まれていない場合は、決してインストール処理を続行しないでください。
- 緑色の点線で囲まれたコンポーネントは、今から設定するポリシー ストアです。

以下の図は、単一のポリシー/キー ストア インスタンスを示します。図示されていませんが、環境は個別のポリシーおよびキー ストア用の個別のインスタンスを使用できます。



注: SiteMinder プラットフォームのサポート マトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

重要な考慮事項

ポリシー ストアを設定する前に、以下を考慮します。

- 起こり得るポリシー ストアの破損の回避 - 以下のように、ポリシー ストアをホストするデータベース サーバが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認してください。
 - (Oracle) データベースが **UTF-8** 形式でオブジェクトを格納するように設定されていることを確認してください。Oracle は、多くのユニコードの文字セットをサポートします。UTF-8 形式でオブジェクトを格納するためのデータベースの設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
 - (SQL Server) データベースがデフォルトの照合 (SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS) を使用して設定されていることを確認してください。大文字/小文字を区別した照合を使用すると、予期しない動作をする場合があります。デフォルトの照合を使用した、オブジェクトを格納するためのデータベースの設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- 接続が失敗するので、IPv6 ODBC データソースを使用するときに決して IP アドレスを角かっこで囲まないでください。

例: [fec0::9255:20c:29ff:fe47:8089] ではなく fec0::9255: 20c 29ff fe47 8089 を使用

注: IPv6 がサポートするデータベースの詳細については、テクニカル サポート サイトの「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

リレーショナル データベース用のスキーマ ファイル

SiteMinder では、以下の SiteMinder データストアを設定するためのスキーマ ファイルを提供します。

- ポリシー ストア
- キー ストア
- ログ データベース

- セッション ストア
- サンプル ユーザ データベース

注: SiteMinder スキーマ ファイルはポリシー サーバと共にインストールされます。ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされている場合は、*siteminder_home/db/SQL* ディレクトリにあるスキーマ ファイルを、データベース がインストールされる Windows システム上の一時ディレクトリ(*C:\temp*)にコピー します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

SQL Server のスキーマ ファイル

以下の SQL Server スキーマ ファイルが *siteminder_home\db\SQL* ディレクトリ内 に提供されています。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

sm_mssql_ps.sql

ポリシー ストアおよびキー ストア用のスキーマを作成します。

注: 別のデータベース内にキーを格納する場合、このスキーマ ファイルに よってそのキー ストア データ用のスキーマが作成されます。

sm_mssql_logs.sql

SQL Server データベース内に SiteMinder 監査ログ用のスキーマを作成しま す。

sm_mssql_ss.sql

SQL Server データベース内に、セッション サーバ用のスキーマを作成しま す。

注: セッション サーバ内に Unicode 文字を格納する予定がない場合は、こ のファイルを使用します。

sm_mssql_ss.sql.unicode

SQL Server データベース内に、セッション サーバ用のスキーマを作成します。

注: セッション サーバ内に Unicode 文字を格納する予定がある場合は、このファイルを使用します。

smsampleusers_sqlserver.sql

SQL Server データベース内に SiteMinder サンプル ユーザ用のスキーマを作成し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。たとえば、このスクリプトで検索すると、siteminder のパスワードを持つ GeorgeC という名前のサンプル ユーザを表示できます。

以下の SQL Server スキーマ ファイルが *siteminder_home*\xps\db 内に提供されています。

SQLServer.sql

SQL Server ポリシー ストア用の XPS スキーマを作成します。

Oracle スキーマ ファイル

以下の Oracle スキーマ ファイルが *siteminder_home*\db\SQL ディレクトリ内に提供されています。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

sm_oracle_ps.sql

Oracle のデータベース内に SiteMinder ポリシー ストア、またはキー ストア (別のデータベース内にキーを格納している場合)を作成します。

sm_oracle_logs.sql

Oracle データベース内に SiteMinder 監査ログ用のスキーマを作成します。

sm_oracle_ss.sql

Oracle データベース内に、セッション サーバ用のスキーマを作成します。

smsampleusers_oracle.sql

Oracle データベース内に SiteMinder サンプル ユーザ用のスキーマを作成し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。たとえば、このスクリプトで検索すると、siteminder のパスワードを持つ GeorgeC という名前のサンプル ユーザを表示できます。

以下の Oracle スキーマ ファイルが *siteminder_home\mps\db* ディレクトリ内に提供されています。

Oracle.sql

Oracle ポリシー ストア用の XPS スキーマを作成します。

SQL Server ポリシー ストアの設定

1 つの SQL Server データベースは以下として機能させることができます。

- ポリシー ストア
- キー ストア
- ログ データベース

単一のデータベースを使用すると管理タスクが簡略化されます。後続のセクションでは、SiteMinder データを格納するように 1 つのデータベース サーバを設定する方法について説明します。

以下の点について考慮してください。

- SQL Server ポリシー ストアを手動で設定するか、またはポリシー サーバインストーラを使用してポリシー ストアを自動的に設定することができます。
- データベースは Windows システムにインストールされている必要があります。また、SiteMinder スキーマ ファイルはポリシー サーバと共にインストールされます。ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされている場合、*policy_server_home/db/SQL* ディレクトリにあるスキーマ ファイルを、データベースがインストールされる Windows システム上の一時ディレクトリ (C:\temp) にコピーします。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データ ストアとして機能するように単一の SQL Server データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

注: (W) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが **Windows** システムにインストールされる場合にのみ必要です。(U) が付いた情報は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ必要です。**SQL Server** データソースを設定する場合には、別の情報が必要です。

ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データ ストアを設定する前に以下の情報を収集します。値を記録するために **SQL Server** 情報のワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、**SiteMinder** データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

- **データベース インスタンス名** - ポリシー ストアまたはデータ ストアとして機能するデータベース インスタンスの名前を決定します。
- **管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。
- **管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。
- **(W) データソース名** - データベースの識別に使用する名前を決定します。
例: SM SQL Server Wire DS.
- **(W) SQL Server 名** - ポリシー ストアとして機能するインスタンスを含む **SQL Server** データベースの名前を決定します。
- **(U) ポリシー サーバルート** - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを決定します。
- **(U) IP アドレス** - **SQL Server** データベースの IP アドレスを決定します。

ポリシー ストアを設定する方法

ポリシー ストアとして **SQL Server** データベースを設定するには、以下の手順に従います。

注: 開始する前に、必要なデータベース情報を収集したことを確認してください。以下の手順のうちのいくつかは、この情報を必要とします。

1. SiteMinder データを含んでいる SQL Server データベース インスタンスが、ポリシー サーバシステムからアクセス可能であることを確認してください。
2. SQL Server エンタープライズ マネージャを使用して、SiteMinder データストア用のデータベース インスタンスを作成します。

例: smdatastore

3. SiteMinder スキーマを作成します。
4. SiteMinder 用の SQL Server データソースを設定します。
 - (Windows) SQL Server データソースを作成します。
 - (UNIX) UNIX システム上に SQL Server データソースを作成します。
 - (UNIX) SQL Server ワイヤ プロトコルドライバを設定します。
5. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
6. SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定します。
7. デフォルトの SiteMinder オブジェクトをインポートします。
8. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
9. ポリシー サーバを再起動します。
10. 管理 UI の登録準備をします。

SiteMinder スキーマの作成

SQL Server データベースにポリシー、キー、および監査ログ情報を格納できるように、SiteMinder スキーマを作成します。

ポリシー ストア スキーマ ファイルおよび監査ログ スキーマ ファイルを実行すると、以下の内容の警告が表示されます。ポリシー ストアの設定には影響がありません。

- 警告: テーブル 'smvariable5' が作成されましたが、その最大行サイズ (8746) が 1 行あたりの最大バイト数 (8060) を超えています。このテーブルで INSERT または UPDATE を実行しても、行が 8060 バイトを超える場合は失敗します。
- 警告: テーブル 'smodbcquery4' が作成されましたが、その最大行サイズ (64635) が 1 行あたりの最大バイト数 (8060) を超えています。このテーブルで INSERT または UPDATE を実行しても、行が 8060 バイトを超える場合は失敗します。
- 警告: テーブル 'smaccesslog4' が作成されましたが、その最大行サイズ (9668) が 1 行あたりの最大バイト数 (8060) を超えています。このテーブルで INSERT または UPDATE を実行しても、行が 8060 バイトを超える場合は失敗します。

SiteMinder スキーマを作成する方法

1. クエリアナライザを起動し、ポリシー サーバ データベースの管理者としてログインします。
2. [データベース] リストからデータベース インスタンスを選択します。
3. テキスト エディタで `sm_mssql_ps.sql` を開き、ファイル全体の内容をコピーします。
4. `sm_mssql_ps.sql` からスキーマをクエリに貼り付け、クエリを実行します。
ポリシーおよびキー ストア スキーマがデータベースに追加されます。
5. テキスト エディタで `SQLServer.sql` を開き、ファイル全体の内容をコピーします。
6. `SQLServer.sql` からクエリにスキーマを貼り付け、クエリを実行します。
ポリシー ストア スキーマが拡張されます。
7. ポリシー ストアを監査ログ データベースとして使用するため手順 3 と 4 を繰り返します。以下のスキーマ ファイルを使用します。

`sm_mssql_logs.sql`

注: ほかの SiteMinder データを格納するためにポリシー ストアを設定する必要はありません。別の監査ログ データベース、キー ストア、セッション ストアとして機能するよう個別のデータベースを設定することができます。

データベースに SiteMinder データを格納できます。

SiteMinder 用の SQL Server データ ソースの設定

ODBC を使用している場合、SiteMinder が SiteMinder データ ストアと通信できるようデータ ソースを設定する必要があります。

詳細情報:

[SQL Server 認証モードの考慮事項 \(P. 187\)](#)

SQL Server 認証モードの考慮事項

SiteMinder データ ソースは Windows 認証をサポートしません。データベースに格納されるユーザのクレデンシャルで SiteMinder データ ソースを設定します。

注: SQL 認証モードの詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。

Windows システムでの SQL Server データ ソースの作成

ODBC で、SQL Server ワイヤ プロトコル用のデータ ソースを設定する必要があります。

注: この手順は、ポリシー サーバを Windows システムにインストールする場合のみを対象としています。

Windows 上でデータ ソースを作成する方法

1. [スタート]をクリックし、[プログラム]-[管理ツール]-[ODBC データ ソース]を選択します。
[ODBC データ ソース アドミニストレータ]が表示されます。
2. [システム DSN]タブをクリックします。
システム データ ソース設定が表示されます。
3. [追加]をクリックします。
[データ ソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

4. SiteMinder SQL Server Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC SQL Server Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。

5. [データソース名]フィールドにデータソース名を入力します。

例: SiteMinder Data Source

注: 指定したデータソース名を書き留めます。この情報は、ポリシー ストアとしてデータベースを設定するときに必要です。

6. [サーバ]フィールドに MS SQL Server ホスト システムの名前を入力します。
7. [データベース名]フィールドにデータベース名を入力します。
8. [テスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

SQL Server データソースが設定され、[システム データソース]リストに表示されます。

UNIX システムでの SQL Server データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、`system_odbc.ini` ファイルを使用して設定します。このファイルは、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更することによって作成します。この `system_odbc.ini` ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要になります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが **SiteMinder** によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

MS SQL Server データソースを追加する場合は、ファイルの **[ODBC Data Sources]** セクションに新しいデータソース名を追加し、データソースと同じ名前を使用してデータソースを記述するセクションを追加する必要があります。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。**[SiteMinder Data Source]** の下に **Oracle** または **SQL** ドライバのエントリがあります。

MS SQL Server データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

SQL Server ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために **SiteMinder** が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、**SiteMinder** データストアとして設定しているデータベースベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データ ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. [ODBC Data Sources] の下に、以下を入力します。
SiteMinder Data Source=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
3. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して 1 つ以上のデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSmsss24.so
Description=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
Database=SiteMinder Data
Address=myhost, 1433
QuotedId=No
AnsiNPW=No
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

`nete_ps_root`

環境変数で指定するのではなく、明示的なパスを指定します。

例: `export/smuser/siteminder`

SiteMinder Data

SQL Server データベースのインスタンス名を指定します。

`myhost`

SQL Server データベースの IP アドレスを指定します。

`1433`

SQL Server 用のデフォルトのリスン ポートを表します。

4. ファイルを保存します。
ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバがポリシー ストア内の SiteMinder データにアクセスできるように、ポリシー サーバがデータベースを参照するようにします。

ポリシー サーバがデータストアを参照するようにする方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[ポリシー ストア]を選択します。
4. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows)このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX)このエントリは、`system_odbc.ini` ファイルのデータソース エントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。
5. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。

6. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。

注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの 25 の接続を保持することをお勧めします。

7. [適用]をクリックします。

設定が保存されます。

8. [データベース]リストから[キー ストア]を選択します。

データソース情報が表示されます。

9. [ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオンにして、[適用]をクリックします。

10. [データベース]リストから[監査ログ]を選択します。

データソース設定が表示されます。

11. [ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオンにして、[適用]をクリックします。

12. [接続のテスト]をクリックします。

SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。

13. [OK]をクリックします。

ポリシー サーバは、ポリシー ストア、キー ストア、およびログ データベースとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は **siteminder** です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: smreg ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. smreg ユーティリティを `policy_server_home\bin` にコピーします。

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smreg -su password
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. *policy_server_home\bin* から *smreg* ユーティリティを削除します。*smreg* を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず **-cf** 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

`smobjimport` によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: `ampolicy.smdif` をインポートすると、**Federation** セキュリティ サービス、**Web** サービス変数、および **eTelligent** ルール機能が使用可能になります。**eTelligent** ルール機能は、**SiteMinder** から別個にライセンスが提供されます。この **eTelligent** ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で **SiteMinder** ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- **Windows** - `policy_server_home\mps\dd`

- **UNIX** - `policy_server_home/mps/dd`

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: `XPSSDInstall` ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSSDInstall SmObjects.xdd
```

`XPSSDInstall` は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント (siteminder) を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意)管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r *retries*

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c *comment*

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l *log path*

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: *siteminder_home*¥log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e *error_path*

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(任意) 詳細レベルを TRACE に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

Oracle ポリシー ストアの設定

1 つの Oracle のデータベースは以下として機能させることができます。

- ポリシー ストア
- キー ストア
- ログ データベース

単一のデータベースを使用すると管理タスクが簡略化されます。後続のセクションでは、SiteMinder データを格納するように 1 つのデータベース サーバを設定する方法について説明します。

Oracle ポリシー ストアを手動で設定するか、またはポリシー サーバ インストーラを使用してポリシー ストアを自動的に設定することができます。

Oracle 10 g データベースに対する前提条件

Oracle 10g データベースをインストールした後、以下の前提条件を完了します。

- ポリシー ストア用の表領域の作成
- データベース内のこの表領域を管理するための適切な権限を持ったユーザの作成

ポリシー ストア用の Oracle 10 g 表領域の作成

ポリシー ストア用の表領域の作成は、Oracle 10 g データベースのみの前提条件です。

ポリシー ストア用の Oracle 10 g 表領域を作成する方法

1. Oracle Enterprise Manager 10g Database Control で、Oracle データベースを管理するための適切な権限を持つ SYSDBA ユーザとしてログインします。
2. Oracle のグローバル データベースの設定画面で、[Administration]-[Tablespaces]を選択します。
3. [Tablespaces]画面で、[Create]をクリックします。
4. [Create Tablespaces]画面で、表領域名を入力し、[ADD]をクリックします。

例: /NETE_TB

5. [Create Tablespaces: Add Datafile]画面で、次の操作を実行します。

- a. ファイル名を入力します。

例: /NETE_TB

- b. ファイル サイズを指定します。

例: 100 MB

- c. [Continue]をクリックします。

表領域が作成され、[Tablespaces]画面に表示されます。

ポリシー ストア用の表領域を管理するユーザを作成することにより、前提条件を完了します。

ポリシー ストアの表領域を管理する Oracle 10 g ユーザの作成

ポリシー ストア用の表領域を管理するユーザを作成することは、Oracle 10 g データベースのみの前提条件です。

ポリシー ストア用の表領域を管理するユーザを作成する方法

1. Oracle のグローバル データベースの設定画面で、[Administration]-[Users]を選択します。
2. [Create Tablespaces]画面で、[Create]をクリックします。

3. [Create User]画面で、以下を入力します。
 - ユーザの名前。
例: NETE
 - ユーザのパスワード。
 - 作成したデフォルトの表領域
 - 一時表領域。
例: TEMP
 4. [Roles]をクリックします。
 5. [Modify]を選択します。
 6. [Modify Roles]画面で、以下の操作を実行します。
 - a. CONNECT と RESOURCE をこのユーザのロールとして選択します。
 - b. [適用]をクリックします。
 7. 以下を入力することで、コマンド ウィンドウで **sqlplus** を起動します。
 - a. sqlplus
 - b. [Create User]画面上で作成されたポリシー ストア ユーザのクレデンシャル。
- Oracle 10 g データベース用の前提条件を完了しました。データベース用の SiteMinder データ ストアを設定できるようになりました。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データ ストアとして機能するように単一の Oracle データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

(U)が前に付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、UNIX に対して Oracle データソースを設定する場合に必要です。

注: ポリシー ストアおよびデータ ストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データ ストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

必要な情報

サポートされている Oracle または Oracle RAC データベースをポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして設定する前に、以下の特定の必須情報を収集します。

- **(U)ポリシー サーバのインストールパス** - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを指定します。
- **データソース** - Oracle データソースの識別に使用する名前を決定します。

例: SM Oracle Server Wire DS

- **データベース管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。

注: 管理アカウントに DB ロールがないことを確認します。管理アカウントに DB ロールがある場合、監査を基にしたレポートで正しい結果が返されません。

- **データベース管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。

Oracle データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとしてサポートされている Oracle データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle マシン名** - Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を決定します。
- **Oracle インスタンスサービス名** - 接続するデータベース インスタンスのサービス名を決定します。tnsnames.ora ファイルはサービス名を指定します。
- **Oracle ポート番号** - Oracle データベースがリスニングするポート番号を決定します。

Oracle RAC データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他の SiteMinder データ ストアとしてサポートされている Oracle RAC データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle RAC システム サービス名** - システム全体のサービス名を決定します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB がシステム全体用のサービス名です。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT=1521
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT=1521)
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT=1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA=
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVER_NAME = SMDB))
  )
```

- **Oracle RAC ノード サービス名** - システム内の各ノードのサービス名を決定します。
- **Oracle RAC ノード IP アドレス** - Oracle RAC システム内の各ノードの IP アドレスを決定します。

注: Oracle RAC 10g を使用している場合は、システム内の各ノードの仮想 IP アドレスを決定します。

- **Oracle RAC ノード ポート番号** - Oracle RAC システム内の各ノードのポート番号を決定します。

ポリシー ストアを設定する方法

単一の Oracle データベースを、ポリシー ストア、キー ストア、ログ データベースとして設定するには、以下の手順に従います。

注: 開始する前に、必要なデータベース情報が収集されていることを確認してください。以下の手順のうちの一部でこの情報が必要となります。

1. SiteMinder データを含んでいる Oracle データベース インスタンスが、ポリシー サーバ システムからアクセス可能であることを確認してください。tnsping または sqlplus を使用して、通信をテストします。
2. SiteMinder スキーマを作成します。

3. 以下のように、SiteMinder 用の Oracle データソースを設定します。
 - (Windows) Windows システムでの Oracle データソースの作成
 - (Windows) Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成
 - (UNIX) UNIX での Oracle データソースの作成
 - (UNIX) ワイヤ プロトコルドライバの設定
 - (UNIX) Oracle ワイヤ プロトコルドライバの設定
 - (UNIX) Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定します。
6. デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートします。
7. ポリシー ストア データ定義をインポートします。
8. ポリシー サーバを再起動します。
9. 管理 UI の登録を準備します。

SiteMinder スキーマの作成

SiteMinder スキーマを作成して、1 つの Oracle データベースにポリシー、キー、監査ログ情報を格納できるようにします。

SiteMinder スキーマを作成する方法

1. sqlplus または他の Oracle ユーティリティを使用して、ポリシー サーバ データベース情報を管理するユーザとして Oracle にログインします。

注: SYS または SYSTEM のユーザで SiteMinder スキーマを作成しないことをお勧めします。必要な場合は、SMOWNER などの Oracle ユーザを作成し、そのユーザでスキーマを作成します。

2. 以下のスクリプトをインポートします。

```
$NETE_PS_ROOT/db/sql/sm_oracle_ps.sql
```

注: 環境変数は Oracle の SQL ユーティリティ内では機能しない場合があります。ユーティリティを使用して、スクリプトをインポートしようとする問題が発生する場合は、明示的なパスを指定します。

ポリシー ストアとキーのストア スキーマがデータベースに追加されます。

3. 以下のスクリプトを実行します。

```
$NETE_PS_ROOT/xps/Oracle.sql
```

ポリシー ストア スキーマが拡張されます。

4. ポリシー ストアを監査ログ データベースとして使用するため、以下のスクリプトをインポートします。

```
sm_oracle_logs.sql.
```

注: ほかの SiteMinder データを格納するためにポリシー ストアを設定する必要はありません。別の監査ログ データベース、キー ストア、セッション ストアとして機能するよう個別のデータベースを設定することができます。

データベースは SiteMinder データを格納できます。

SiteMinder 用の Oracle データソースの設定

ODBC を使用している場合、Oracle ワイヤ プロトコルドライバ用のデータソースを設定する必要があります。

Windows での Oracle データソースの作成

Windows 上で Oracle データソースを作成する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシー サーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト名]フィールドに、Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を入力します。

6. [ポート番号]フィールドに、マシン上で Oracle データベースがリスニングするポートの番号を入力します。

7. [SID]フィールドに、接続する Oracle インスタンスの名前を入力します。

注: サービス名は `tnsnames.ora` ファイル内で指定されます。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。`tnsnames.ora` ファイルは、Oracle インスタンスを識別し、接続するために Oracle が使用するサービス名と詳細が含まれています。

例: `tnsnames.ora` ファイルが Oracle インスタンスの以下のエントリを含んでいる場合、[SID]フィールドに `instance1` を入力します。

```
instance1=
  (Description=
    (Address = (PROTOCOL = TCP)(Host = myhost)(Port=1521))
    (Connect_DATA_ = (SID = SIDofinstance1))
  )
```

8. [接続のテスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

Oracle のデータソースがワイヤ プロトコルドライバに対して設定されます。

Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成

ポリシー サーバで、1 つの Oracle RAC インスタンスを、1 つの Oracle データベース インスタンスに類似したデータソース名で設定できます。ただし、Oracle RAC のデータソース名は標準 ODBC データソースと異なります。

Oracle RAC システムでは、各 Oracle インスタンスの SID または ServiceName に加えて、Oracle RAC システム全体用の ServiceName があります。データソースを設定する場合、Oracle RAC に接続するときにこの ServiceName を使用するようにデータソース名を設定します。

Oracle RAC データソースを設定する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト]フィールドに Oracle RAC システム内の最初のノードの IP アドレスを入力します。

Oracle RAC 10g: 仮想 IP アドレスを入力します。

6. [サービス名]フィールドに Oracle RAC システム全体用のサービス名を入力します。

例: 以下の `tnsnames.ora` ファイルでは、`SMDB` 値が Oracle RAC システム全体用のサービス名であり、Oracle RAC システムには 3 つのノードが含まれています。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT = 1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA =
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVICE_NAME = SMDB)
  )
)
```

7. [フェイルオーバー]タブをクリックします。

フェイルオーバー設定が表示されます。

8. その環境の残りの Oracle RAC ノードに対するホスト名または仮想 IP アドレス、ポート番号、およびサービス名を代替サーバフィールドに指定します。

注: `ServiceName` は Oracle RAC システム全体用のサービス名です。

9. プライマリサーバが接続を受け付けられない場合に、他の Oracle ノードに接続フェイルオーバーを提供する代替サーバを指定します。エントリは次のような形式で指定する必要があります。

```
(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servi
cename[,...])
```

10. `LoadBalancing` を選択します。

11. [OK]ボタンをクリックします。

Oracle RAC データソースが、Wire Protocol ドライバに対して設定されます。

UNIX システムでの Oracle データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、`system_odbc.ini` ファイルを使用して設定します。このファイルは、`policy_server_installation/db` にある `oraclewire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更することによって作成します。この `system_odbc.ini` ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようにカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソースエントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシーストアとして設定するときに必要なになります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

Oracle データソースの追加には、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加することと、データソースと同じ名前を使用して、そのデータソースを記述するセクションを追加することが含まれます。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に SQL Server または Oracle ドライバのエントリがあります。

繰り返しますが、Oracle データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `oraclewire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

Oracle ワイヤ プロトコル ドライバ の 設定

ワイヤ プロトコル ドライバ を設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「system_odbc.ini」に変更します(まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データ ストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- sqlserverwire.ini
- oraclewire.ini
- mysqlwire.ini

これらのファイルは *siteminder_home/db* にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータ ソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データ ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
LoginID=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername
PortNumber=1521
SID=nete_serverid
CatalogOptions=0
ProcedureResults=0
EnableDisableParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされる場所への明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servername

Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を指定します。

nete_serverid

Oracle インスタンス サービス名 (SID) を指定します。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。

例: 以下のサンプル `tnsnames.ora` ファイルでは、`instance1` の値は SID です。

```
instance1=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(Host = myhost)(Port = 1521)
    (CONNECT_DATA = (SID = instance1))
  )
)
```

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために **SiteMinder** が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、**SiteMinder** データ ストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データ ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。
 - ServiceName=nete_servicename を追加
 - AlternateServers= を追加
 - Loadbalancing=1 を追加
 - SID=nete_serverid を削除またはコメント化

変更したデータソースは、以下のように表記されている必要があります。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
Logon=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername1
PortNumber=1521
ServiceName=nete_servicename
CatalogOptions=0
ProcedureRetResults=0
EnableDescribeParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
AlternateServers=
LoadBalancing=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされているディレクトリへの明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servicename1

最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

(Oracle 10g) 最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

nete_servicename

Oracle RAC システム全体のサービス名を指定します。

AlternateServers

プライマリ サーバが接続を許可しない場合は、他の Oracle ノードへの接続フェイルオーバーを指定します。

例:

```
(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[...])
```

LoadBalancing=1

クライアントロード バランシングを有効にして、RAC ノードが接続リクエストで圧倒されないように新しい接続を分散させます。有効な場合は、プライマリおよび代替データベース サーバにアクセスする順番はランダムです。

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバがポリシー ストア内の SiteMinder データにアクセスできるように、ポリシー サーバがデータベースを参照するようにします。

ポリシー サーバがデータ ストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[ポリシー ストア]を選択します。
4. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows)このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX)このエントリは、system_odbc.ini ファイルのデータソース エントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。
5. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。

6. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。

注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの 25 の接続を保持することをお勧めします。

7. [適用]をクリックします。

設定が保存されます。

8. [データベース]リストから[キー ストア]を選択します。

データソース情報が表示されます。

9. [ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオンにして、[適用]をクリックします。

10. [データベース]リストから[監査ログ]を選択します。

データソース設定が表示されます。

11. [ポリシー ストアを使用]チェック ボックスをオンにして、[適用]をクリックします。

12. [接続のテスト]をクリックします。

SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。

13. [OK]をクリックします。

ポリシー サーバは、ポリシー ストア、キー ストア、およびログ データベースとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントの名前は **siteminder** です。このアカウントは最大の権限を持っています。その他の SiteMinder 管理者を作成できるまで SiteMinder のユーザ インターフェースとユーティリティの管理に使用できるように、このアカウントのパスワードを設定します。

注: smreg ユーティリティは、ポリシー サーバ インストール キットの最上位レベルにあります。

スーパーユーザのパスワードを設定する方法

1. smreg ユーティリティを `policy_server_home\bin` にコピーします。

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smreg -su password
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

password

デフォルトの SiteMinder 管理者のパスワードを指定します。

制限:

- パスワードは 6 文字以上、24 文字以下である必要があります。
- パスワードには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含むことはできません。
- パスワードにスペースが含まれている場合は、引用符でパズフレーズを囲みます。

注: パスワードは、Oracle ポリシー ストアに保管する場合を除き、大文字小文字が区別されません。

3. *policy_server_home\bin* から *smreg* ユーティリティを削除します。*smreg* を削除すると、既存のパスワードを把握していない限り、パスワードを変更することはできなくなります。

デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントのパスワードが設定されます。

注: 日常的な作業にはデフォルトのスーパーユーザを使用しないことをお勧めします。デフォルトのスーパーユーザは、以下の場合に使用してください。

- デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする場合。
- FSS 管理 UI および 管理 UI に初めてアクセスする場合。スーパーユーザ権限を持つ別の管理者を作成することをお勧めします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートすると、管理 UI で使用するポリシー ストアがセットアップされます。ポリシー ストアにポリシー情報を格納するには、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトが必要です。

注: FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合は、デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートするときに必ず **-cf** 引数を使用してください。

デフォルトのポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\smpolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -v
```

引数にスペースが含まれる場合、引数全体の前後に二重引用符を使用します。

Windows の例: smobjimport

```
-i"C:\Program Files\CA\siteminder\db\smdif\smpolicy.smdif" -d"SM Admin"  
-wPassword -v
```

UNIX の例: smobjimport

```
-i$NETE_PS_ROOT/db/smdif/smpolicy.smdif -d"SM Admin" -wPassword -v
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-cf

(任意) FIPS 対応の暗号化を使用して機密データをインポートします。

注: この引数は、ポリシー サーバが FIPS 専用モードで動作している場合にのみ必要です。

smobjimport によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。オブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
smobjimport -ipolicy_server_home\db\smdif\ampolicy.smdif  
-dsiteminder_super_user_name -wsiteminder_super_user_password -f -v -l -c
```

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-dsiteminder_super_user_name

SiteMinder スーパーユーザ アカウントの名前を指定します。

デフォルト: siteminder

-wsiteminder_super_user_password

SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードを指定します。

-f

重複するオブジェクトを上書きします。

-v

追跡を有効にし、エラー、警告、およびコメントメッセージを詳細形式で出力して、インポートのステータスを監視できるようにします。

デフォルト値: stdout

-l

ログ ファイルを作成します。

-c

smdif 入力ファイルに暗号化されていないデータが含まれていることを示します。

`smobjimport` によって、ポリシー ストア オブジェクトがインポートされます。これらのオブジェクトは、適切な場所に自動的にインポートされます。

注: `ampolicy.smdif` をインポートすると、**Federation** セキュリティ サービス、**Web** サービス変数、および **eTelligent** ルール機能が使用可能になります。**eTelligent** ルール機能は、**SiteMinder** から別個にライセンスが提供されます。この **eTelligent** ルール機能を使用する予定がある場合は、ライセンスの詳細について、CA アカウント担当者に問い合わせてください。

これで、ポリシー ストア データ定義をインポートできるようになりました。

ポリシー ストア データ定義のインポート

ポリシー ストア データ定義のインポートは、管理 UI でポリシー ストアを使用するために必要です。ベース定義は、ポリシー ストア データを記述します。

重要: Windows Server 2008 上で **SiteMinder** ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ベース ポリシー ストア オブジェクトをインポートする方法

1. コマンド ウィンドウを開いて、以下のいずれかの場所に移動します。

- **Windows** - `policy_server_home\mps\dd`
- **UNIX** - `policy_server_home/mps/dd`

`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

重要: `XPSSDInstall` ツールは、データ定義ファイルを使用して以下の順序で実行します。それ以外の順序で実行すると、インポートは失敗します。

```
XPSSDInstall SmObjects.xdd
```

`XPSSDInstall` は必要なデータ定義をインポートします。

注: 初めてこのファイルをインポートする場合は、ポリシー データが見つからないという警告メッセージが表示されます。これは予期された動作で、インポートに影響しません。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall EPMObjects.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall SecCat.xdd
```

XPSDDInstall は必要なデータ定義をインポートします。

5. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSDDInstall FssSmObjects.xdd
```

必要なポリシー ストア データ定義がすべてインポートされました。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

管理 UI 登録の準備

管理 UI に初めてログインする場合は、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント (siteminder) を使用します。初めてログインするときは、ポリシー サーバに 管理 UI を登録する必要があります。これで、両方のコンポーネントの間に信頼関係が作成されます。

XPSRegClient ユーティリティを使用してスーパーユーザ アカウントの名前とパスワードを指定して、登録の準備をします。ポリシー サーバは、これらの認証情報を使用して、登録要求が有効であること、および信頼関係を確立できることを検証します。

以下の点について考慮してください。

- 認証情報を指定してから最初の 管理 UI ログインまでの時間は、24 時間に制限されています。24 時間以内に 管理 UI をインストールする予定がない場合は、管理 UI をインストールする前に以下を実行します。
- (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

管理 UI 登録を準備する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r retries -c  
comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

passphrase

デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder)のパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しないと、XPSRegClient により、パスフレーズの入力とその確認を求めるプロンプトが表示されます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(任意)管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r *retries*

(任意) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行に失敗する原因としては、初めて 管理 UI にログインするときに間違った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットしたことが考えられます。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c *comment*

(任意) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(任意) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l *log path*

(任意) 登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: *siteminder_home*¥log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e *error_path*

(任意) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(任意) 詳細レベルを TRACE に設定します。

-vI

(任意) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(任意) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(任意) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(任意) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

SQL Server データストアの設定

SiteMinder キーと SiteMinder 監査情報はそれぞれ別のデータベースに格納できます。

以下の点について考慮してください。

- シングル サイン オン機能を実装するために、個別のデータベース内にキーを格納することが必要となる場合があります。キー管理の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。
- SiteMinder セッション情報は別のデータベースに格納される必要があります。ポリシー ストアを使用してセッション情報を格納することはできません。

以下のセクションでは、個別のデータ ストアを設定する方法について詳しく説明します。

SQL Server 内にキー情報を格納する方法

スタンドアロン キー ストアとして **SQL Server** データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. キー ストア スキーマを作成します。

3. SiteMinder 用の SQL Server データソースを設定します。
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポート マトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように単一の SQL Server データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

注: (W) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが Windows システムにインストールされる場合にのみ必要です。(U) が付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要です。SQL Server データソースを設定する場合には、別の情報が必要です。

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアを設定する前に以下の情報を収集します。値を記録するために SQL Server 情報のワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

- **データベース インスタンス名** - ポリシー ストアまたはデータストアとして機能するデータベース インスタンスの名前を決定します。
- **管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。
- **管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。
- **(W) データソース名** - データベースの識別に使用する名前を決定します。
例: SM SQL Server Wire DS.
- **(W) SQL Server 名** - ポリシー ストアとして機能するインスタンスを含む SQL Server データベースの名前を決定します。

- (U) **ポリシー サーバルート** - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを決定します。
- (U) **IP アドレス** - SQL Server データベースの IP アドレスを決定します。

キー ストア スキーマの作成

SQL Server データベースがキー情報を格納できるように、キー ストア スキーマを作成します。

キー ストア スキーマを作成する方法

1. テキスト エディタで `sm_mssql_ps.sql` を開き、ファイル全体の内容をコピーします。
2. クエリアナライザを起動し、ポリシー サーバ データベースの管理者としてログインします。
3. [データベース] リストからデータベース インスタンスを選択します。
4. `sm_mssql_ps.sql` からクエリにスキーマを貼り付けます。
5. クエリを実行します。

SiteMinder キー ストア スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の SQL Server データソースの設定

ODBC を使用している場合、SiteMinder が SiteMinder データ ストアと通信できるようデータ ソースを設定する必要があります。

詳細情報:

[SQL Server 認証モードの考慮事項 \(P. 187\)](#)

Windows システムでの SQL Server データソースの作成

ODBC で、SQL Server ワイヤ プロトコル用のデータ ソースを設定する必要があります。

注: この手順は、ポリシー サーバを Windows システムにインストールする場合のみを対象としています。

Windows 上でデータソースを作成する方法

1. [スタート]をクリックし、[プログラム]-[管理ツール]-[ODBC データソース]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. [システム DSN]タブをクリックします。

システム データソース設定が表示されます。

3. [追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

4. SiteMinder SQL Server Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC SQL Server Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。

5. [データソース名]フィールドにデータソース名を入力します。

例: SiteMinder Data Source

注: 指定したデータソース名を書き留めます。この情報は、ポリシー ストアとしてデータベースを設定するときが必要です。

6. [サーバ]フィールドに MS SQL Server ホストシステムの名前を入力します。

7. [データベース名]フィールドにデータベース名を入力します。

8. [テスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

SQL Server データソースが設定され、[システム データソース]リストに表示されます。

UNIX システムでの SQL Server データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、system_odbc.ini ファイルを使用して設定します。このファイルは、*policy_server_installation/db*にある sqlserverwire.ini の名前を system_odbc.ini に変更することによって作成します。この system_odbc.ini ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要なになります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

MS SQL Server データソースを追加する場合は、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加し、データソースと同じ名前を使用してデータソースを記述するセクションを追加する必要があります。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に Oracle または SQL ドライバのエントリがあります。

MS SQL Server データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

SQL Server ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. [ODBC Data Sources] の下に、以下を入力します。
SiteMinder Data Source=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
3. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して 1 つ以上のデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSmsss24.so
Description=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
Database=SiteMinder Data
Address=myhost, 1433
QuotedId=No
AnsiNPW=No
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

`nete_ps_root`

環境変数で指定するのではなく、明示的なパスを指定します。

例: `export/smuser/siteminder`

SiteMinder Data

SQL Server データベースのインスタンス名を指定します。

`myhost`

SQL Server データベースの IP アドレスを指定します。

`1433`

SQL Server 用のデフォルトのリスン ポートを表します。

4. ファイルを保存します。

ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、キー情報を読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[キー ストア]を選択し、[ポリシーストアを使用]チェック ボックスをオフにします。
データソース設定がアクティブになります。
4. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows)このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX)このエントリは、`system_odbc.ini` ファイルのデータソースエントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。

5. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。
6. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。
注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。
7. [適用]をクリックします。
設定が保存されます。
8. [接続のテスト]をクリックします。
SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。
9. [OK]をクリックします。
ポリシー サーバはキー ストアとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、`stop-all` コマンドの後に `start-all` コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。
赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。
3. [開始]をクリックします。
緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

SQL Server 内に監査ログを格納する方法

スタンドアロン監査ログ データベースとして SQL Server データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. 監査ログスキーマを作成します。
3. SiteMinder 用の SQL Server データソースを設定します。
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポートマトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように単一の SQL Server データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

注: (W) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが Windows システムにインストールされる場合にのみ必要です。(U) が付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要です。SQL Server データソースを設定する場合には、別の情報が必要です。

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアを設定する前に以下の情報を収集します。値を記録するために SQL Server 情報のワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

- **データベース インスタンス名** - ポリシー ストアまたはデータストアとして機能するデータベース インスタンスの名前を決定します。
- **管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。
- **管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。

- (W)データソース名 - データベースの識別に使用する名前を決定します。
例: SM SQL Server Wire DS.
- (W)SQL Server 名 - ポリシー ストアとして機能するインスタンスを含む SQL Server データベースの名前を決定します。
- (U)ポリシー サーバルート - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを決定します。
- (U)IP アドレス - SQL Server データベースの IP アドレスを決定します。

監査ログスキーマの作成

SQL Server データベースが監査ログを格納できるように、ログ スキーマを作成します。

監査ログ スキーマを作成する方法

1. テキスト エディタで `sm_mssql_logs.sql` を開き、ファイル全体の内容をコピーします。
2. クエリアナライザを起動し、ポリシー サーバ データベースを管理するユーザとしてログインします。
3. [データベース]リストからデータベース インスタンスを選択します。
4. `sm_mssql_logs.sql` からクエリにスキーマを貼り付けます。
5. クエリを実行します。

SiteMinder 監査ログ ストア スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の SQL Server データソースの設定

ODBC を使用している場合、SiteMinder が SiteMinder データ ストアと通信できるようデータソースを設定する必要があります。

詳細情報:

[SQL Server 認証モードの考慮事項 \(P. 187\)](#)

Windows システムでの SQL Server データソースの作成

ODBC で、SQL Server ワイヤ プロトコル用のデータソースを設定する必要があります。

注: この手順は、ポリシー サーバを Windows システムにインストールする場合のみを対象としています。

Windows 上でデータソースを作成する方法

1. [スタート]をクリックし、[プログラム]-[管理ツール]-[ODBC データソース]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. [システム DSN]タブをクリックします。

システム データソース設定が表示されます。

3. [追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

4. SiteMinder SQL Server Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC SQL Server Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。

5. [データソース名]フィールドにデータソース名を入力します。

例: SiteMinder Data Source

注: 指定したデータソース名を書き留めます。この情報は、ポリシー ストアとしてデータベースを設定するときに必要です。

6. [サーバ]フィールドに MS SQL Server ホストシステムの名前を入力します。

7. [データベース名]フィールドにデータベース名を入力します。

8. [テスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

SQL Server データソースが設定され、[システム データソース]リストに表示されます。

UNIX システムでの SQL Server データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、`system_odbc.ini` ファイルを使用して設定します。このファイルは、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更することによって作成します。この `system_odbc.ini` ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソースエントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシーストアとして設定するときに必要なになります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

MS SQL Server データソースを追加する場合は、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加し、データソースと同じ名前を使用してデータソースを記述するセクションを追加する必要があります。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に Oracle または SQL ドライバのエントリがあります。

MS SQL Server データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

SQL Server ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「system_odbc.ini」に変更します(まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- sqlserverwire.ini
- oraclewire.ini
- mysqlwire.ini

これらのファイルは *siteminder_home/db* にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤプロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. [ODBC Data Sources] の下に、以下を入力します。

SiteMinder Data Source=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
3. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して 1 つ以上のデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSmss24.so
Description=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
Database=SiteMinder Data
Address=myhost, 1433
QuotedId=No
AnsiNPW=No
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

環境変数で指定するのではなく、明示的なパスを指定します。

例: export/smuser/siteminder

SiteMinder Data

SQL Server データベースのインスタンス名を指定します。

myhost

SQL Server データベースの IP アドレスを指定します。

1433

SQL Server 用のデフォルトのリスン ポートを表します。

4. ファイルを保存します。

ワイヤプロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、監査ログを読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[監査ログ]を選択します。
4. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
データソース設定がアクティブになります。
5. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows) このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX) このエントリは、system_odbc.ini ファイルのデータソース エントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。
6. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。
7. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。
注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。
8. [適用]をクリックします。
設定が保存されます。
9. [接続のテスト]をクリックします。
SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータストアにアクセスできるという確認が返されます。
10. [OK]をクリックします。
ポリシー サーバは監査ログ データベースとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

SQL Server 内にセッション情報を格納する方法

セッション ストアとして SQL Server データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. セッション ストア スキーマを作成します。
3. SiteMinder 用の SQL Server データ ソースを設定します。
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポート マトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データ ストアとして機能するように単一の SQL Server データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

注: (W) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが **Windows** システムにインストールされる場合にのみ必要です。(U) が付いた情報は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ必要です。**SQL Server** データソースを設定する場合には、別の情報が必要です。

ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアを設定する前に以下の情報を収集します。値を記録するために **SQL Server** 情報のワークシートを使用できます。

注: ポリシー ストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、**SiteMinder** データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

- **データベース インスタンス名** - ポリシー ストアまたはデータストアとして機能するデータベース インスタンスの名前を決定します。
- **管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。
- **管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。
- **(W) データソース名** - データベースの識別に使用する名前を決定します。
例: SM SQL Server Wire DS.
- **(W) SQL Server 名** - ポリシー ストアとして機能するインスタンスを含む **SQL Server** データベースの名前を決定します。
- **(U) ポリシー サーバルート** - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを決定します。
- **(U) IP アドレス** - **SQL Server** データベースの IP アドレスを決定します。

セッション ストア スキーマの作成

SQL Server データベースがセッション情報を格納および読み取ることができるように、セッション ストア スキーマを作成します。

セッション ストア スキーマを作成する方法

1. 以下のいずれかの操作を行います。
 - セッション ストアに **Unicode** 文字を格納する予定がある場合、`sm_mssql_ss.sql.unicode` をテキスト エディタで開き、ファイル全体のコンテンツをコピーします。
 - セッション ストアに **Unicode** 文字を格納する予定がない場合、`sm_mssql_ss.sql` をテキスト エディタで開き、ファイル全体のコンテンツをコピーします。
2. クエリ アナライザを起動し、ポリシー サーバ データベースの管理者としてログインします。
3. [データベース] リストからデータベース インスタンスを選択します。
4. スキーマをクエリに貼り付けます。
5. クエリを実行します。
セッション ストア スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の SQL Server データソースの設定

ODBC を使用している場合、SiteMinder が SiteMinder データストアと通信できるようデータソースを設定する必要があります。

詳細情報:

[SQL Server 認証モードの考慮事項 \(P. 187\)](#)

Windows システムでの SQL Server データソースの作成

ODBC で、SQL Server ワイヤ プロトコル用のデータソースを設定する必要があります。

注: この手順は、ポリシー サーバを Windows システムにインストールする場合のみを対象としています。

Windows 上でデータソースを作成する方法

1. [スタート]をクリックし、[プログラム]-[管理ツール]-[ODBC データソース]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. [システム DSN]タブをクリックします。

システム データソース設定が表示されます。

3. [追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

4. SiteMinder SQL Server Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC SQL Server Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。

5. [データソース名]フィールドにデータソース名を入力します。

例: SiteMinder Data Source

注: 指定したデータソース名を書き留めます。この情報は、ポリシー ストアとしてデータベースを設定するときが必要です。

6. [サーバ]フィールドに MS SQL Server ホストシステムの名前を入力します。

7. [データベース名]フィールドにデータベース名を入力します。

8. [テスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

SQL Server データソースが設定され、[システム データソース]リストに表示されます。

UNIX システムでの SQL Server データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、`system_odbc.ini` ファイルを使用して設定します。このファイルは、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更することによって作成します。この `system_odbc.ini` ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要なになります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

MS SQL Server データソースを追加する場合は、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加し、データソースと同じ名前を使用してデータソースを記述するセクションを追加する必要があります。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に Oracle または SQL ドライバのエントリがあります。

MS SQL Server データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `sqlserverwire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

SQL Server ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データ ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. [ODBC Data Sources] の下に、以下を入力します。
SiteMinder Data Source=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol
3. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して 1 つ以上のデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSmsss24.so  
Description=DataDirect 6 SQL Server Wire Protocol  
Database=SiteMinder Data  
Address=myhost, 1433  
QuotedId=No  
AnsiNPW=No
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

`nete_ps_root`

環境変数で指定するのではなく、明示的なパスを指定します。

例: `export/smuser/siteminder`

SiteMinder Data

SQL Server データベースのインスタンス名を指定します。

`myhost`

SQL Server データベースの IP アドレスを指定します。

`1433`

SQL Server 用のデフォルトのリスン ポートを表します。

4. ファイルを保存します。
ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、セッション情報を読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [データベース]リストからセッション サーバを選択します。
データソース設定がアクティブになります。
3. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows) このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX) このエントリは、`system_odbc.ini` ファイルのデータソースエントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。
4. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。

5. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。

注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。

6. [適用]をクリックします。

設定が保存されます。

7. [接続のテスト]をクリックします。

SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータストアにアクセスできるという確認が返されます。

8. [OK]をクリックします。

ポリシー サーバはセッションストアとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

Oracle データストアの設定

SiteMinder キーと SiteMinder 監査情報はそれぞれ別のデータベースに格納できます。

以下の点について考慮してください。

- シングル サイン オン機能を実装するために、個別のデータベース内にキーを格納することが必要となる場合があります。キー管理の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。
- SiteMinder セッション情報は別のデータベースに格納される必要があります。ポリシー ストアを使用してセッション情報を格納することはできません。

以下のセクションでは、個別のデータストアを設定する方法について詳しく説明します。

Oracle でキー情報を格納する方法

キー ストアとして Oracle データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. キー ストア スキーマを作成します。
3. SiteMinder のための Oracle データソースの設定
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポート マトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアとして機能するように単一の **Oracle** データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

(U) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、**UNIX** に対して **Oracle** データソースを設定する場合に必要です。

注: ポリシー ストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、**SiteMinder** データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

必要な情報

サポートされている **Oracle** または **Oracle RAC** データベースをポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアとして設定する前に、以下の特定の必須情報を収集します。

- (U) **ポリシー サーバのインストール パス** - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを指定します。
- **データソース - Oracle** データソースの識別に使用する名前を決定します。

例: SM Oracle Server Wire DS

- **データベース管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。

注: 管理アカウントに **DB** ロールがないことを確認します。管理アカウントに **DB** ロールがある場合、監査を基にしたレポートで正しい結果が返されません。

- **データベース管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。

Oracle データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアとしてサポートされている **Oracle** データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle マシン名** - Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を決定します。
- **Oracle インスタンスサービス名** - 接続するデータベース インスタンスのサービス名を決定します。tnsnames.ora ファイルはサービス名を指定します。
- **Oracle ポート番号** - Oracle データベースがリスニングするポート番号を決定します。

Oracle RAC データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他の **SiteMinder** データストアとしてサポートされている **Oracle RAC** データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle RAC システム サービス名** - システム全体のサービス名を決定します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、**SMDB** がシステム全体用のサービス名です。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP) (HOST = nete_servername1) (PORT=1521)
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP) (HOST = nete_servername2) (PORT=1521)
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP) (HOST = nete_servername3) (PORT=1521))
(LOAD_BALANCE = yes)
(CONNECT_DATA=
  (SERVER = DEDICATED)
  (SERVER_NAME = SMDB))
)
```

- **Oracle RAC ノード サービス名** - システム内の各ノードのサービス名を決定します。
- **Oracle RAC ノード IP アドレス** - Oracle RAC システム内の各ノードの IP アドレスを決定します。

注: Oracle RAC 10g を使用している場合は、システム内の各ノードの仮想 IP アドレスを決定します。

- **Oracle RAC ノード ポート番号** - Oracle RAC システム内の各ノードのポート番号を決定します。

キー ストア スキーマの作成

Oracle データベースがキー情報を格納できるように、キー ストア スキーマを作成します。

SiteMinder スキーマを作成する方法

1. sqlplus または他の Oracle ユーティリティを使用して、ポリシー サーバ データベース情報を管理するユーザとして Oracle にログインします。

注: SYS または SYSTEM のユーザで SiteMinder スキーマを作成しないことをお勧めします。必要な場合は、SMOWNER などの Oracle ユーザを作成し、そのユーザにスキーマを作成します。

2. 以下のスクリプトをインポートします。

```
$NETE_PS_ROOT/db/sql/sm_oracle_ps.sql
```

注: 環境変数は Oracle の SQL ユーティリティ内では機能しない場合があります。ユーティリティを使用して、スクリプトをインポートしようとする問題が発生する場合は、明示的なパスを指定します。

キー ストア スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の Oracle データソースの設定

ODBC を使用している場合、Oracle ワイヤ プロトコルドライバ用のデータソースを設定する必要があります。

Windows での Oracle データソースの作成

Windows 上で Oracle データソースを作成する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト名]フィールドに、Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を入力します。
6. [ポート番号]フィールドに、マシン上で Oracle データベースがリスニングするポートの番号を入力します。
7. [SID]フィールドに、接続する Oracle インスタンスの名前を入力します。

注: サービス名は `tnsnames.ora` ファイル内で指定されます。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。`tnsnames.ora` ファイルは、Oracle インスタンスを識別し、接続するために Oracle が使用するサービス名と詳細が含まれています。

例: `tnsnames.ora` ファイルが Oracle インスタンスの以下のエントリを含んでいる場合、[SID]フィールドに `instance1` を入力します。

```
instance1=
  (Description=
    (Address = (PROTOCOL = TCP)(Host = myhost)(Port=1521))
    (Connect_DATA_ = (SID = SIDofinstance1))
  )
```

8. [接続のテスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

Oracle のデータソースがワイヤ プロトコルドライバに対して設定されます。

Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成

ポリシーサーバで、1 つの Oracle RAC インスタンスを、1 つの Oracle データベース インスタンスに類似したデータソース名で設定できます。ただし、Oracle RAC のデータソース名は標準 ODBC データソースと異なります。

Oracle RAC システムでは、各 Oracle インスタンスの SID または ServiceName に加えて、Oracle RAC システム全体用の ServiceName があります。データソースを設定する場合、Oracle RAC に接続するときにこの ServiceName を使用するようデータソース名を設定します。

Oracle RAC データソースを設定する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト]フィールドに Oracle RAC システム内の最初のノードの IP アドレスを入力します。

Oracle RAC 10g: 仮想 IP アドレスを入力します。

6. [サービス名]フィールドに Oracle RAC システム全体用のサービス名を入力します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB 値が Oracle RAC システム全体用のサービス名であり、Oracle RAC システムには 3 つのノードが含まれています。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT = 1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA =
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVICE_NAME = SMDB)
  )
)
```

7. [フェイルオーバー]タブをクリックします。

フェイルオーバー設定が表示されます。

8. その環境の残りの Oracle RAC ノードに対するホスト名または仮想 IP アドレス、ポート番号、およびサービス名を代替サーバフィールドに指定します。

注: ServiceName は Oracle RAC システム全体用のサービス名です。

9. プライマリ サーバが接続を受け付けない場合に、他の Oracle ノードに接続フェイルオーバーを提供する代替サーバを指定します。エントリは次のような形式で指定する必要があります。

(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])

10. LoadBalancing を選択します。

11. [OK] ボタンをクリックします。

Oracle RAC データソースが、Wire Protocol ドライバに対して設定されます。

UNIX システムでの Oracle データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、system_odbc.ini ファイルを使用して設定します。このファイルは、*policy_server_installation/db* にある *oraclewire.ini* の名前を *system_odbc.ini* に変更することによって作成します。この *system_odbc.ini* ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

system_odbc.ini ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要なになります。

system_odbc.ini ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

Oracle データソースの追加には、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加することと、データソースと同じ名前を使用して、そのデータソースを記述するセクションを追加することが含まれます。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、system_odbc.ini ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に SQL Server または Oracle ドライバのエントリがあります。

繰り返しますが、Oracle データソースを設定するには、最初に *policy_server_installation/db* ディレクトリに *system_odbc.ini* ファイルを作成する必要があります。このためには、*policy_server_installation/db* にある *oraclewire.ini* の名前を *system_odbc.ini* に変更する必要があります。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合のみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「*system_odbc.ini*」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- *sqlserverwire.ini*
- *oraclewire.ini*
- *mysqlwire.ini*

これらのファイルは *siteminder_home/db* にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッションストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
LoginID=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername
PortNumber=1521
SID=nete_serverid
CatalogOptions=0
ProcedureResults=0
EnableDisableParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされる場所への明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servername

Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を指定します。

nete_serverid

Oracle インスタンス サービス名 (SID) を指定します。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。

例: 以下のサンプル `tnsnames.ora` ファイルでは、`instance1` の値は SID です。

```
instance1=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(Host = myhost)(Port = 1521)
    (CONNECT_DATA = (SID = instance1))
  )
)
```

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために **SiteMinder** が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、**SiteMinder** データ ストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。
 - ServiceName=nete_servicename を追加
 - AlternateServers= を追加
 - Loadbalancing=1 を追加
 - SID=nete_serverid を削除またはコメント化

変更したデータソースは、以下のように表記されている必要があります。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
Logon=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername1
PortNumber=1521
ServiceName=nete_servicename
CatalogOptions=0
ProcedureRetResults=0
EnableDescribeParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
AlternateServers=
LoadBalancing=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされているディレクトリへの明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servicename1

最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

(Oracle 10g) 最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

nete_servicename

Oracle RAC システム全体のサービス名を指定します。

AlternateServers

プライマリ サーバが接続を許可しない場合は、他の Oracle ノードへの接続フェイルオーバーを指定します。

例:

```
(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])
```

LoadBalancing=1

クライアントロード バランシングを有効にして、RAC ノードが接続リクエストで圧倒されないように新しい接続を分散させます。有効な場合は、プライマリおよび代替データベース サーバにアクセスする順番はランダムです。

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、キー情報を読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[キー ストア]を選択し、[ポリシーストアを使用]チェックボックスをオフにします。
データソース設定がアクティブになります。
4. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows) このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX) このエントリは、system_odbc.ini ファイルのデータソースエントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。

5. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。
6. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。
注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。
7. [適用]をクリックします。
設定が保存されます。
8. [接続のテスト]をクリックします。
SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。
9. [OK]をクリックします。
ポリシー サーバはキー ストアとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。
赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。
3. [開始]をクリックします。
緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

Oracle で監査ログを格納する方法

監査ログを格納するよう Oracle データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. 監査ログスキーマを作成します。
3. SiteMinder 用の Oracle データソースを設定します。
4. ポリシー サーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポートマトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように単一の Oracle データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

(U) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、UNIX に対して Oracle データソースを設定する場合に必要です。

注: ポリシー ストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

必要な情報

サポートされている Oracle または Oracle RAC データベースをポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして設定する前に、以下の特定の必須情報を収集します。

- (U) ポリシー サーバのインストールパス - ポリシー サーバがインストールされている場所への明示的なパスを指定します。
- データソース - Oracle データソースの識別に使用する名前を決定します。

例: SM Oracle Server Wire DS

- **データベース管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。

注: 管理アカウントに DB ロールがないことを確認します。管理アカウントに DB ロールがある場合、監査を基にしたレポートで正しい結果が返されません。

- **データベース管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。

Oracle データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアとしてサポートされている **Oracle** データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle マシン名** - Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を決定します。
- **Oracle インスタンスサービス名** - 接続するデータベース インスタンスのサービス名を決定します。tnsnames.ora ファイルはサービス名を指定します。
- **Oracle ポート番号** - Oracle データベースがリスニングするポート番号を決定します。

Oracle RAC データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他の SiteMinder データストアとしてサポートされている Oracle RAC データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle RAC システム サービス名** - システム全体のサービス名を決定します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB がシステム全体用のサービス名です。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT=1521
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT=1521)
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT=1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA=
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVER_NAME = SMDB))
  )
```

- **Oracle RAC ノード サービス名** - システム内の各ノードのサービス名を決定します。
- **Oracle RAC ノード IP アドレス** - Oracle RAC システム内の各ノードの IP アドレスを決定します。

注: Oracle RAC 10g を使用している場合は、システム内の各ノードの仮想 IP アドレスを決定します。

- **Oracle RAC ノード ポート番号** - Oracle RAC システム内の各ノードのポート番号を決定します。

監査ログスキーマの作成

Oracle データベースが監査ログを格納できるように、監査ログ スキーマを作成します。

SiteMinder スキーマを作成する方法

1. sqlplus または他の Oracle ユーティリティを使用して、ポリシー サーバ データベース情報を管理するユーザとして Oracle にログインします。

注: SYS または SYSTEM のユーザで SiteMinder スキーマを作成しないことをお勧めします。必要な場合は、SMOWNER などの Oracle ユーザを作成し、そのユーザにスキーマを作成します。

2. 以下のスクリプトをインポートします。

```
$NETE_PS_ROOT/db/sql/sm_oracle_logs.sql
```

注: 環境変数は Oracle の SQL ユーティリティ内では機能しない場合があります。ユーティリティを使用して、スクリプトをインポートしようとする問題が発生する場合は、明示的なパスを指定します。

監査ログ スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の Oracle データソースの設定

ODBC を使用している場合、Oracle ワイヤ プロトコルドライバ用のデータソースを設定する必要があります。

Windows での Oracle データソースの作成

Windows 上で Oracle データソースを作成する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト名]フィールドに、Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を入力します。
6. [ポート番号]フィールドに、マシン上で Oracle データベースがリスニングするポートの番号を入力します。
7. [SID]フィールドに、接続する Oracle インスタンスの名前を入力します。

注: サービス名は `tnsnames.ora` ファイル内で指定されます。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。`tnsnames.ora` ファイルは、Oracle インスタンスを識別し、接続するために Oracle が使用するサービス名と詳細が含まれています。

例: `tnsnames.ora` ファイルが Oracle インスタンスの以下のエントリを含んでいる場合、[SID]フィールドに `instance1` を入力します。

```
instance1=
  (Description=
    (Address = (PROTOCOL = TCP)(Host = myhost)(Port=1521))
    (Connect_DATA_ = (SID = SIDofinstance1))
  )
```

8. [接続のテスト]をクリックします。

接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。

9. [OK]をクリックします。

Oracle のデータソースがワイヤ プロトコルドライバに対して設定されます。

Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成

ポリシーサーバで、1 つの Oracle RAC インスタンスを、1 つの Oracle データベース インスタンスに類似したデータソース名で設定できます。ただし、Oracle RAC のデータソース名は標準 ODBC データソースと異なります。

Oracle RAC システムでは、各 Oracle インスタンスの SID または ServiceName に加えて、Oracle RAC システム全体用の ServiceName があります。データソースを設定する場合、Oracle RAC に接続するときにこの ServiceName を使用するようデータソース名を設定します。

Oracle RAC データソースを設定する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト]フィールドに Oracle RAC システム内の最初のノードの IP アドレスを入力します。

Oracle RAC 10g: 仮想 IP アドレスを入力します。

6. [サービス名]フィールドに Oracle RAC システム全体用のサービス名を入力します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB 値が Oracle RAC システム全体用のサービス名であり、Oracle RAC システムには 3 つのノードが含まれています。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT = 1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA =
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVICE_NAME = SMDB)
  )
)
```

7. [フェイルオーバー]タブをクリックします。

フェイルオーバー設定が表示されます。

8. その環境の残りの Oracle RAC ノードに対するホスト名または仮想 IP アドレス、ポート番号、およびサービス名を代替サーバフィールドに指定します。

注: ServiceName は Oracle RAC システム全体用のサービス名です。

9. プライマリ サーバが接続を受け付けない場合に、他の Oracle ノードに接続フェイルオーバーを提供する代替サーバを指定します。エントリは次のような形式で指定する必要があります。

(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])

10. LoadBalancing を選択します。

11. [OK] ボタンをクリックします。

Oracle RAC データソースが、Wire Protocol ドライバに対して設定されます。

UNIX システムでの Oracle データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、system_odbc.ini ファイルを使用して設定します。このファイルは、*policy_server_installation/db* にある *oraclewire.ini* の名前を *system_odbc.ini* に変更することによって作成します。この *system_odbc.ini* ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

system_odbc.ini ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要なになります。

system_odbc.ini ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

Oracle データソースの追加には、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加することと、データソースと同じ名前を使用して、そのデータソースを記述するセクションを追加することが含まれます。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、system_odbc.ini ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に SQL Server または Oracle ドライバのエントリがあります。

繰り返しますが、Oracle データソースを設定するには、最初に *policy_server_installation/db* ディレクトリに *system_odbc.ini* ファイルを作成する必要があります。このためには、*policy_server_installation/db* にある *oraclewire.ini* の名前を *system_odbc.ini* に変更する必要があります。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合のみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「*system_odbc.ini*」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- *sqlserverwire.ini*
- *oraclewire.ini*
- *mysqlwire.ini*

これらのファイルは *siteminder_home/db* にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッションストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
LoginID=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername
PortNumber=1521
SID=nete_serverid
CatalogOptions=0
ProcedureResults=0
EnableDisableParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされる場所への明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servername

Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を指定します。

nete_serverid

Oracle インスタンス サービス名 (SID) を指定します。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。

例: 以下のサンプル `tnsnames.ora` ファイルでは、`instance1` の値は SID です。

```
instance1=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(Host = myhost)(Port = 1521)
    (CONNECT_DATA = (SID = instance1))
  )
```

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために **SiteMinder** が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、**SiteMinder** データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。
 - ServiceName=nete_servicename を追加
 - AlternateServers= を追加
 - Loadbalancing=1 を追加
 - SID=nete_serverid を削除またはコメント化

変更したデータソースは、以下のように表記されている必要があります。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
Logon=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername1
PortNumber=1521
ServiceName=nete_servicename
CatalogOptions=0
ProcedureRetResults=0
EnableDescribeParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
AlternateServers=
LoadBalancing=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされているディレクトリへの明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servicename1

最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

(Oracle 10g) 最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

nete_servicename

Oracle RAC システム全体のサービス名を指定します。

AlternateServers

プライマリ サーバが接続を許可しない場合は、他の Oracle ノードへの接続フェイルオーバーを指定します。

例:

```
(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])
```

LoadBalancing=1

クライアントロード バランシングを有効にして、RAC ノードが接続リクエストで圧倒されないように新しい接続を分散させます。有効な場合は、プライマリおよび代替データベース サーバにアクセスする順番はランダムです。

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、監査ログを読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
ODBC 設定が表示されます。
3. [データベース]リストから[監査ログ]を選択します。
4. [ストレージ]リストから[ODBC]を選択します。
データソース設定がアクティブになります。
5. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows) このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX) このエントリは、system_odbc.ini ファイルのデータソースエントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。

6. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。
7. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。
注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。
8. [適用]をクリックします。
設定が保存されます。
9. [接続のテスト]をクリックします。
SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。
10. [OK]をクリックします。
ポリシー サーバは監査ログ データベースとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。
赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。
3. [開始]をクリックします。
緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

Oracle でセッション情報を格納する方法

セッションストアとして Oracle データベースを設定するには、以下の手順に従います。

1. データベース情報を収集します。
2. セッションストアスキーマを作成します。
3. SiteMinder 用の Oracle データソースを設定します。
4. ポリシーサーバがそのデータベースを参照するようにします。
5. ポリシーサーバを再起動します。

注: SiteMinder プラットフォームのサポートマトリックスに記載された SiteMinder ストアを設定またはアップグレードしようとして、このガイドの手順が見つからない場合は、「*Directory Configuration Guide*」を参照してください。

データベース情報の収集

ポリシーストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように単一の Oracle データベースを設定するには、特定のデータベース情報が必要です。

(U) が前に付いた情報は、ポリシーサーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、UNIX に対して Oracle データソースを設定する場合に必要です。

注: ポリシーストアおよびデータストアの各ワークシートが用意されているので、SiteMinder データストアを設定またはアップグレードする前の情報の収集および記録に使用することができます。作業を始める前に、該当するワークシートを印刷し、そのワークシートに必要な情報を記録しておくことができます。

必要な情報

サポートされている Oracle または Oracle RAC データベースをポリシーストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして設定する前に、以下の特定の必須情報を収集します。

- (U) ポリシーサーバのインストールパス - ポリシーサーバがインストールされている場所への明示的なパスを指定します。
- データソース - Oracle データソースの識別に使用する名前を決定します。

例: SM Oracle Server Wire DS

- **データベース管理アカウント** - データベース内のオブジェクトを作成、読み取り、変更、および削除する権限があるアカウントのユーザ名を決定します。

注: 管理アカウントに DB ロールがないことを確認します。管理アカウントに DB ロールがある場合、監査を基にしたレポートで正しい結果が返されません。

- **データベース管理パスワード** - 管理アカウントのパスワードを決定します。

Oracle データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他のタイプの **SiteMinder** データストアとしてサポートされている **Oracle** データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle マシン名** - Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を決定します。
- **Oracle インスタンスサービス名** - 接続するデータベース インスタンスのサービス名を決定します。tnsnames.ora ファイルはサービス名を指定します。
- **Oracle ポート番号** - Oracle データベースがリスニングするポート番号を決定します。

Oracle RAC データベースの情報

以下の情報は、ポリシー ストアまたは他の SiteMinder データストアとしてサポートされている Oracle RAC データベースを設定する場合にのみ、収集します。

- **Oracle RAC システム サービス名** - システム全体のサービス名を決定します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB がシステム全体用のサービス名です。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT=1521
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT=1521)
  (ADDRESS = PROTOCOL = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT=1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA=
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVER_NAME = SMDB))
  )
```

- **Oracle RAC ノード サービス名** - システム内の各ノードのサービス名を決定します。
- **Oracle RAC ノード IP アドレス** - Oracle RAC システム内の各ノードの IP アドレスを決定します。

注: Oracle RAC 10g を使用している場合は、システム内の各ノードの仮想 IP アドレスを決定します。

- **Oracle RAC ノード ポート番号** - Oracle RAC システム内の各ノードのポート番号を決定します。

セッション ストア スキーマの作成

Oracle データベースがセッション情報を格納できるように、セッション ストア スキーマを作成します。

SiteMinder スキーマを作成する方法

1. sqlplus または他の Oracle ユーティリティを使用して、ポリシー サーバ データベース情報を管理するユーザとして Oracle にログインします。

注: SYS または SYSTEM のユーザで SiteMinder スキーマを作成しないことをお勧めします。必要な場合は、SMOWNER などの Oracle ユーザを作成し、そのユーザにスキーマを作成します。

2. 以下のスクリプトをインポートします。

```
$NETE_PS_ROOT/db/sql/sm_oracle_ss.sql
```

注: 環境変数は Oracle の SQL ユーティリティ内では機能しない場合があります。ユーティリティを使用して、スクリプトをインポートしようとする問題が発生する場合は、明示的なパスを指定します。

セッション ストア スキーマがデータベース内に作成されます。

SiteMinder 用の Oracle データソースの設定

ODBC を使用している場合、Oracle ワイヤ プロトコルドライバ用のデータソースを設定する必要があります。

Windows での Oracle データソースの作成

Windows 上で Oracle データソースを作成する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。

[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。

2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

[データソースの新規作成]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシー サーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト名]フィールドに、Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を入力します。

6. [ポート番号]フィールドに、マシン上で Oracle データベースがリスニングするポートの番号を入力します。
7. [SID]フィールドに、接続する Oracle インスタンスの名前を入力します。

注: サービス名は `tnsnames.ora` ファイル内で指定されます。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。`tnsnames.ora` ファイルは、Oracle インスタンスを識別し、接続するために Oracle が使用するサービス名と詳細が含まれています。

例: `tnsnames.ora` ファイルが Oracle インスタンスの以下のエントリを含んでいる場合、[SID]フィールドに `instance1` を入力します。

```
instance1=
  (Description=
    (Address = (PROTOCOL = TCP)(Host = myhost)(Port=1521))
    (Connect_DATA_ = (SID = SIDofinstance1))
  )
```

8. [接続のテスト]をクリックします。
接続設定がテストされ、接続に成功したことを示すメッセージが表示されます。
9. [OK]をクリックします。
Oracle のデータソースがワイヤ プロトコルドライバに対して設定されます。

Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成

ポリシー サーバで、1 つの Oracle RAC インスタンスを、1 つの Oracle データベース インスタンスに類似したデータソース名で設定できます。ただし、Oracle RAC のデータソース名は標準 ODBC データソースと異なります。

Oracle RAC システムでは、各 Oracle インスタンスの SID または ServiceName に加えて、Oracle RAC システム全体用の ServiceName があります。データソースを設定する場合、Oracle RAC に接続するときにこの ServiceName を使用するようにデータソース名を設定します。

Oracle RAC データソースを設定する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を選択します。
[ODBC データソース アドミニストレータ]が表示されます。
2. システム[システム DSN]タブをクリックし、次に[追加]をクリックします。

3. SiteMinder Oracle Wire Protocol を選択し、[完了]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Protocol ドライバのセットアップ ダイアログ ボックスが表示されます。[一般]タブが前面に移動します。

4. [データソース名]フィールドにデータソースを識別する名前を入力します。

注: この名前を記録しておいてください。このデータソース名は、ポリシーサーバに参照データベースを指定するときに必要です。

5. [ホスト]フィールドに Oracle RAC システム内の最初のノードの IP アドレスを入力します。

Oracle RAC 10g: 仮想 IP アドレスを入力します。

6. [サービス名]フィールドに Oracle RAC システム全体用のサービス名を入力します。

例: 以下の tnsnames.ora ファイルでは、SMDB 値が Oracle RAC システム全体用のサービス名であり、Oracle RAC システムには 3 つのノードが含まれています。

```
SMDB=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername1)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername2)(PORT = 1521))
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(HOST = nete_servername3)(PORT = 1521))
  (LOAD_BALANCE = yes)
  (CONNECT_DATA =
    (SERVER = DEDICATED)
    (SERVICE_NAME = SMDB)
  )
)
```

7. [フェイルオーバー]タブをクリックします。

フェイルオーバー設定が表示されます。

8. その環境の残りの Oracle RAC ノードに対するホスト名または仮想 IP アドレス、ポート番号、およびサービス名を代替サーバフィールドに指定します。

注: ServiceName は Oracle RAC システム全体用のサービス名です。

9. プライマリサーバが接続を受け付けない場合に、他の Oracle ノードに接続フェイルオーバーを提供する代替サーバを指定します。エントリは次のような形式で指定する必要があります。

(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])

10. LoadBalancing を選択します。

11. [OK] ボタンをクリックします。

Oracle RAC データソースが、Wire Protocol ドライバに対して設定されます。

UNIX システムでの Oracle データソースの作成

SiteMinder ODBC データソースは、`system_odbc.ini` ファイルを使用して設定します。このファイルは、`policy_server_installation/db` にある `oraclewire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更することによって作成します。この `system_odbc.ini` ファイルには、使用可能な ODBC データソースの名前すべてと、それらのデータソースと関連付けられた属性が含まれています。このファイルは、サイトごとに機能するようにカスタマイズする必要があります。また、このファイルにはデータソースを追加できます。たとえば、SiteMinder 用の追加の ODBC ユーザ ディレクトリを定義できます。

`system_odbc.ini` ファイルの最初のセクション [ODBC Data Sources] には、現在使用可能なデータソースすべてのリストが含まれています。「=」の前の名前は、個別のデータソースそれぞれを説明する、ファイルの後続のセクションを示しています。「=」の後には、コメントフィールドがあります。

注: データソース エントリの最初の行である [SiteMinder Data Source] を変更する場合、変更内容を書き留めておきます。この値は、ODBC データベースをポリシー ストアとして設定するときに必要なになります。

`system_odbc.ini` ファイル内には、各データソースの属性を記述するセクションがあります。最初の属性は、このデータソースが SiteMinder によって使用されるときにロードされる ODBC ドライバです。残りの属性は、そのドライバに固有です。

Oracle データソースの追加には、ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに新しいデータソース名を追加することと、データソースと同じ名前を使用して、そのデータソースを記述するセクションを追加することが含まれます。新しいサービス名を作成したり、別のドライバを使用する場合は、`system_odbc.ini` ファイルを変更する必要があります。[SiteMinder Data Source] の下に SQL Server または Oracle ドライバのエントリがあります。

繰り返しますが、Oracle データソースを設定するには、最初に `policy_server_installation/db` ディレクトリに `system_odbc.ini` ファイルを作成する必要があります。このためには、`policy_server_installation/db` にある `oraclewire.ini` の名前を `system_odbc.ini` に変更する必要があります。

Oracle ワイヤ プロトコル ドライバの設定

ワイヤ プロトコル ドライバを設定し、データベースに接続するために SiteMinder が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「system_odbc.ini」に変更します(まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、SiteMinder データ ストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- sqlserverwire.ini
- oraclewire.ini
- mysqlwire.ini

これらのファイルは *siteminder_home/db* にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータ ソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データ ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
LoginID=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername
PortNumber=1521
SID=nete_serverid
CatalogOptions=0
ProcedureResults=0
EnableDisableParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされる場所への明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servername

Oracle データベースがインストールされているマシンの名前を指定します。

nete_serverid

Oracle インスタンス サービス名 (SID) を指定します。SID はデータベース インスタンス用のシステム識別子です。

例: 以下のサンプル `tnsnames.ora` ファイルでは、`instance1` の値は SID です。

```
instance1=
(Description =
  (ADDRESS = (Protocol = TCP)(Host = myhost)(Port = 1521)
    (CONNECT_DATA = (SID = instance1))
  )
```

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定

ワイヤ プロトコルドライバを設定し、データベースに接続するために **SiteMinder** が使用する設定を指定します。

注: この手順は、ポリシー サーバが **UNIX** システムにインストールされる場合にのみ、適用されます。以下のいずれかのファイルをコピーし、名前を「`system_odbc.ini`」に変更します (まだ行っていない場合)。名前を変更するファイルは、**SiteMinder** データストアとして設定しているデータベース ベンダーによって異なります。

- `sqlserverwire.ini`
- `oraclewire.ini`
- `mysqlwire.ini`

これらのファイルは `siteminder_home/db` にあります。

system_odbc.ini ファイルは、以下のセクションで構成されています。設定しているデータソースにより、編集するセクションが決定されます。

[SiteMinder Data Source]

ポリシー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Logs Data Source]

監査ログ データベースとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Keys Data Source]

キー ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SiteMinder Session Data Source]

セッション ストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

[SmSampleUsers Data Source]

サンプル ユーザ データストアとして機能するデータベースに接続するために、SiteMinder が使用する設定を指定します。

ワイヤ プロトコルドライバを設定する方法

1. system_odbc.ini ファイルを開きます。
2. 設定するデータソースに応じて、以下の情報を使用して適用可能なデータソース セクションを編集します。
 - ServiceName=nete_servicename を追加
 - AlternateServers= を追加
 - Loadbalancing=1 を追加
 - SID=nete_serverid を削除またはコメント化

変更したデータソースは、以下のように表記されている必要があります。

```
Driver=nete_ps_root/odbc/lib/NSora24.so
Description=DataDirect 6 Oracle Wire Protocol
Logon=uid
Password=pwd
HostName=nete_servername1
PortNumber=1521
ServiceName=nete_servicename
CatalogOptions=0
ProcedureRetResults=0
EnableDescribeParam=0
EnableStaticCursorsForLongData=0
ApplicationUsingThreads=1
AlternateServers=
LoadBalancing=1
```

注: データソース情報を編集する場合は、番号記号(#)を使用しないでください。番号記号(#)を入力すると、その情報はコメント化され、値が切り捨てられます。省略された値は ODBC 接続を失敗させる場合があります。

nete_ps_root

ポリシー サーバがインストールされているディレクトリへの明確なパスを指定します。

uid

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウントのユーザ名を指定します。

pwd

データベースへのフル アクセス権限があるデータベース アカウント用のパスワードを指定します。

nete_servicename1

最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

(Oracle 10g) 最初の Oracle RAC ノードの IP アドレスを指定します。

nete_servicename

Oracle RAC システム全体のサービス名を指定します。

AlternateServers

プライマリ サーバが接続を許可しない場合は、他の Oracle ノードへの接続フェイルオーバーを指定します。

例:

```
(HostName=nete_servername2:PortNumber=1521:ServiceName=nete_servicename[,...])
```

LoadBalancing=1

クライアントロード バランシングを有効にして、RAC ノードが接続リクエストで圧倒されないように新しい接続を分散させます。有効な場合は、プライマリおよび代替データベース サーバにアクセスする順番はランダムです。

3. ファイルを保存します。

Oracle ワイヤ プロトコルドライバが設定されます。

ポリシー サーバに対する参照データベースの指定

ポリシー サーバが、セッション情報を読み取りおよび保存できるように、ポリシー サーバに、参照するデータベースを指定します。

ポリシー サーバがデータ ストアを参照する方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開き、[データ]タブをクリックします。
データベース設定が表示されます。
2. [データベース]リストからセッション サーバを選択します。
データソース設定がアクティブになります。
3. [データソース情報]フィールドにデータソースの名前を入力します。
 - (Windows)このエントリは、データソースを作成したときに[データソース名]フィールドに入力した名前と一致する必要があります。
 - (UNIX)このエントリは、system_odbc.ini ファイルのデータソースエントリの最初の行と一致している必要があります。デフォルトでは、このファイルの最初の行は [SiteMinder Data Sources] です。最初のエントリを変更した場合は、正しい値を入力していることを確認します。
4. それぞれのフィールド内にデータベース インスタンスへのフル アクセス権限を持つデータベース アカウントのユーザ名およびパスワードを入力し確認します。

5. SiteMinder に割り当てるデータベース接続の最大数を指定します。

注: 最適なパフォーマンスを得るためにデフォルトの設定を保持することを推奨します。

6. [適用]をクリックします。

設定が保存されます。

7. [接続のテスト]をクリックします。

SiteMinder によって、ポリシー サーバがデータ ストアにアクセスできるという確認が返されます。

8. [OK]をクリックします。

ポリシー サーバはセッション ストアとしてそのデータベースを使用するように設定されます。

ポリシー サーバの再起動

ポリシー ストアやその他のデータ ストアの設定を有効にするために、ポリシー サーバを再起動します。

注: UNIX システムでは、**stop-all** コマンドの後に **start-all** コマンドを使用することで、ポリシー サーバを再起動できます。

ポリシー サーバを再起動するには、以下の手順に従います。

1. ポリシー サーバ管理コンソールを開きます。
2. [ステータス]タブをクリックし、[ポリシー サーバ]グループ ボックスで[停止]をクリックします。

赤色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが停止します。

3. [開始]をクリックします。

緑色の信号アイコンが表示されて、ポリシー サーバが起動します。

サンプル ユーザ ディレクトリ

SiteMinder は、サンプル ユーザをユーザ ディレクトリに読み込むスキーマ ファイルを提供します。

以下のスキーマ ファイルが *siteminder_home*\db\SQL ディレクトリ内に提供されています。

smsampleusers_sqlserver.sql

SQL Server データベース内に SiteMinder サンプル ユーザ用のスキーマを作成し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。たとえば、このスクリプトで検索すると、*siteminder* のパスワードを持つ *GeorgeC* という名前のサンプル ユーザを表示できます。

smsampleusers_oracle.sql

Oracle データベース内に SiteMinder サンプル ユーザ用のスキーマを作成し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。たとえば、このスクリプトで検索すると、*siteminder* のパスワードを持つ *GeorgeC* という名前のサンプル ユーザを表示できます。

注: サンプル ユーザ ディレクトリの作成はオプションです。ポリシー サーバへのユーザ ディレクトリ接続の設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

Oracle サンプル ユーザ ディレクトリの設定

サンプル ユーザ ディレクトリを設定し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。

サンプル ユーザ ディレクトリを設定する方法

1. *sqlplus* または他の Oracle ユーティリティを使用して、ポリシー サーバ データベース情報を管理するユーザとして Oracle にログインします。

注: SYS または SYSTEM のユーザで SiteMinder スキーマを作成しないことをお勧めします。必要な場合は、SMOWNER などの Oracle ユーザを作成し、そのユーザにスキーマを作成します。

2. 以下のスクリプトをインポートします。

`$NETE_PS_ROOT/db/sql/smsampleusers_oracle.sql`

注: 環境変数は Oracle の SQL ユーティリティ内では機能しない場合があります。ユーティリティを使用して、スクリプトをインポートしようとする問題が発生する場合は、明示的なパスを指定します。

ユーザ ディレクトリに、サンプル ユーザが読み込まれます。

3. ポリシー サーバへのユーザ ディレクトリ接続を設定します。

注: ユーザ ディレクトリ接続の設定の詳細については、「ポリシー サーバ構成ガイド」を参照してください。

SQL Server サンプル ユーザ ディレクトリの設定

サンプル ユーザ ディレクトリを設定し、サンプル ユーザをデータベースに読み込みます。

サンプル ユーザ ディレクトリを設定する方法

1. テキスト エディタで `smsampleusers_sqlserver.sql` を開き、ファイル全体の内容をコピーします。
2. クエリ アナライザを起動し、ポリシー サーバ データベースを管理するユーザとしてログインします。
3. [データベース]リストからデータベース インスタンスを選択します。
4. `smsampleusers_sqlserver.sql` からクエリにスキーマを貼り付けます。
5. クエリを実行します。

ユーザ ディレクトリに、サンプル ユーザが読み込まれます。

6. ポリシー サーバへのユーザ ディレクトリ接続を設定します。

注: ユーザ ディレクトリ接続の設定の詳細については、「ポリシー サーバ構成ガイド」を参照してください。

第 9 章：管理 UI のインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

- [インストール ロード マップ](#) (P. 291)
- [管理 UI インストール オプション](#) (P. 292)
- [ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ](#) (P. 293)
- [管理 UI インストール チェックリスト](#) (P. 294)
- [管理 UI をインストールする方法](#) (P. 294)
- [管理 UI を登録する方法](#) (P. 304)
- [アプリケーション サーバを停止します。](#) (P. 306)
- [管理者クレデンシャル](#) (P. 307)
- [管理 UI の高可用性](#) (P. 307)
- [追加ポリシー サーバの接続を設定する方法](#) (P. 308)
- [デフォルトポリシー サーバ接続の変更](#) (P. 313)
- [ポリシー サーバ接続の削除](#) (P. 313)
- [無人 管理 UI インストール](#) (P. 314)
- [Windows 上の 管理 UI のアンインストール](#) (P. 314)
- [UNIX 上の 管理 UI のアンインストール](#) (P. 316)
- [Web エージェントのインストールの準備](#) (P. 317)

インストール ロード マップ

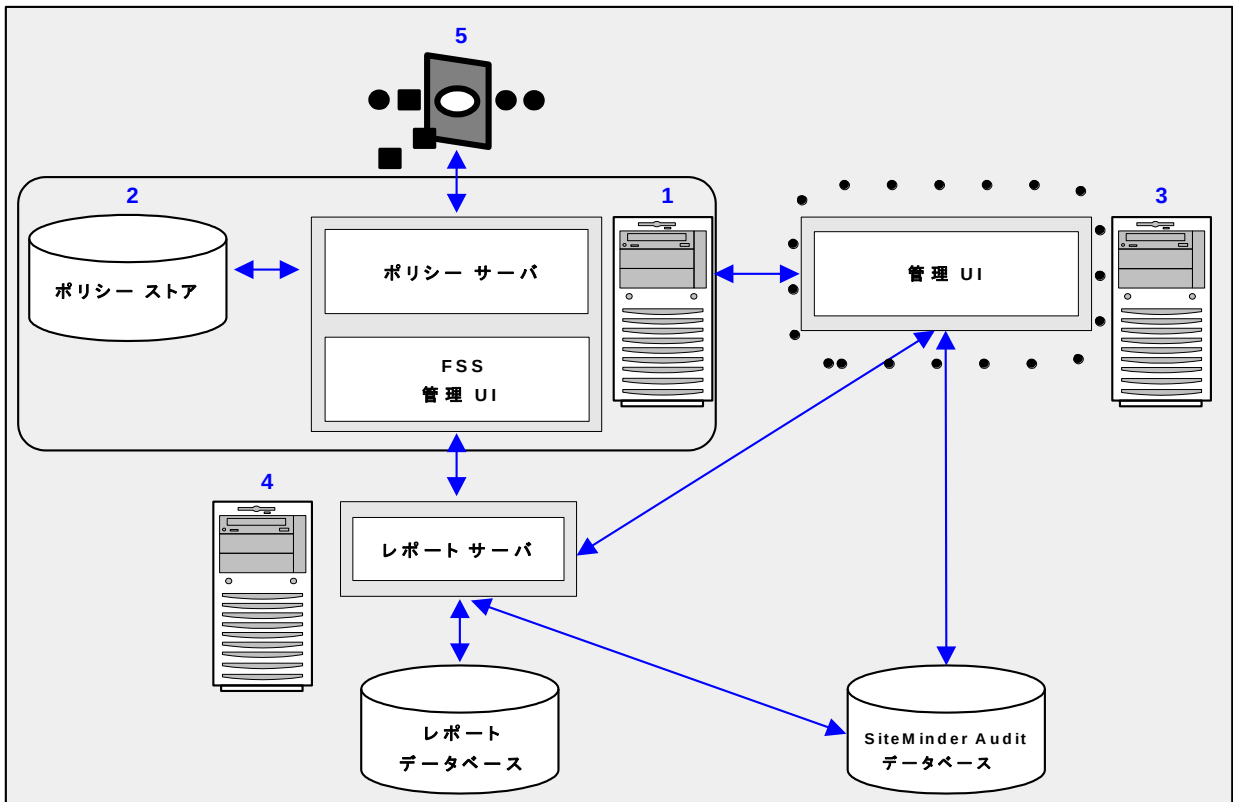
以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。

- 実線で囲まれているのは、管理 UI のインストールおよび登録前に必要なコンポーネントです。設定する必要があるポリシーは次のとおりです。
 - ポリシー サーバ
 - ポリシー ストア

ポリシー サーバおよびポリシー ストアが環境に含まれていない場合は、インストール処理を続行しないでください。

- 点線によって囲まれたコンポーネントは、これからインストールされる 管理 UI です。

注: 一度 管理 UI をインストールおよび登録すると、手順 5 で示されるように、Web エージェントのインストールの準備をすることができます。



管理 UI インストール オプション

管理 UI は、アプリケーション サーバの実行を必要とします。そのため、2 つのインストール オプションが利用可能です。

- **スタンドアロン インストール** - このオプションは、必須インストーラで必要なアプリケーション サーバ インフラストラクチャを作成します。必須インストーラは、埋め込みアプリケーション サーバ (JBoss) および必要な JDK をインストールします。インストールを開始する前に、管理 UI ホストシステムが最小のシステム要件を満たすことを確認します。

必須インストーラは、インストール成功後に 管理 UI インストーラを起動します。管理 UI インストーラは、埋め込みアプリケーション サーバ インフラストラクチャを使用してインストールを完了します。

注: UNIX にインストールして要件となるインストール メディアをコンソール モードで実行する場合、手動で 管理 UI インストーラを開始してインストールを完了します。

- **既存アプリケーション サーバのインストール** - このオプションでは、既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールすることができます。管理 UI インストーラにより、アプリケーション サーバ固有の情報および必要な JDK の場所を要求されます。インストールを開始する前に、管理 UI ホスト システムがシステムおよびサードパーティーのコンポーネント要件すべてを満たすこと確認します。

以下のセクションは、スタンドアロン インストールについて詳述します。既存アプリケーション サーバ インフラストラクチャへのインストールの詳細は、「既存アプリケーション サーバへの 管理 UI インストール」を参照してください。

ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ

環境管理を始めるためには、管理 UI とポリシー サーバとの間に信頼できるリレーションシップが必要です。このリレーションシップは、デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder) およびパスワードを使用してログインするときに初めて確立されます。これらの認証情報は、ポリシーストアに格納されます。

ポリシー ストアを設定するときは、ポリシー サーバにスーパーユーザ認証情報をサブミットするために XPSRegClient ユーティリティを使用します。ポリシー サーバは、登録リクエストが有効でありリレーションシップが構築できることを確認するために、これらの認証情報を使用します。

注: ポリシー ストアを自動的に設定するためにポリシー サーバ インストーラを使用した場合、インストーラは認証情報をサブミットするために XPSRegClient ユーティリティを使用します。

認証情報が提供されてから最初の 管理 UI ログインが発生し得るまでの時間は、24 時間までに制限されています。そのため、いつポリシー ストアが設定されて 管理 UI がインストールされるのかによって、管理 UI のインストールのプロセスが決まります。

管理 UI インストール チェックリスト

管理 UI のインストールを開始する前に、以下を完了してください。

- サポートされているオペレーティング システムを使用していることを確認してください。
- 管理 UI ホスト システムが最小のシステム要件を満たすことを確認してください。
- (Linux) 必要な Linux ライブラリが 管理 UI ホスト システムにインストールされていることを確認します。
- ポリシー ストアがいつ設定されたか決定します。

ポリシー ストアが 24 時間以上前に設定された場合は、管理 UI をインストールする前に XPSRegClient ユーティリティを使用して、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント認証情報をポリシー サーバにサブミットします。ポリシー サーバは、管理 UI との信頼できるリレーションシップを構築するためにこれらの認証情報を必要とします。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

詳細情報:

[システム要件 \(P. 27\)](#)

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス \(P. 551\)](#)

[必要とされる Linux ライブラリ \(P. 73\)](#)

管理 UI をインストールする方法

管理 UI をインストールするには、以下の手順に従います。

1. 管理 UI インストール チェックリストを必ず確認してください。
2. (Linux) 必要な Linux ライブラリ要件を確認します。
3. インストーラ用の情報を収集します。
4. (オプション) 登録ウィンドウをリセットします。
5. 管理 UI をインストールします。
6. 管理 UI を登録します。

以下の点について考慮してください。

- **Windows** インストールが完了したら、ポリシー サーバに 管理 UI を登録するため、**SiteMinder** 管理 UI ログイン画面が表示され、アプリケーション サーバが自動的に開始されます。
- **UNIX** インストールが完了したら、アプリケーション サーバを手動で開始させ、登録を完了するために 管理 UI にログインします。詳細については、「管理 UI の登録方法」を参照してください。

必要とされる Linux ライブラリ

このコンポーネントの **Linux** バージョンをインストールまたはアップグレードしている場合、ホストシステム上で以下が必要になります。

```
compat-libstdc++-33.3.2.3-patch_version.i386.rpm
```

この rpm をインストールして、お使いのオペレーティング システム用の適切な 32 ビット C ランタイム ライブラリが使用できることを確認してください。

インストーラのための情報の収集

管理 UI をインストールおよび登録する前に、以下の情報を収集します。

- **インストール場所** - 管理 UI のインストール パスを決定します。
- **管理 UI システム名** - 管理 UI ホストシステムの完全修飾名を識別します。
- **サーバ ポート** - JBoss が HTTP リクエストをリスンすべきポートを識別します。
- **SiteMinder スーパーユーザ アカウントパスワード** - デフォルト SiteMinder ユーザ アカウント(siteminder)用のパスワードを識別します。

- **ポリシー サーバシステム名** - 以下を識別します。
 - 管理 UI が登録されるポリシー サーバ
 - ポリシー サーバ ホスト システムの完全修飾名
- **ポリシー サーバ認証ポート** - ポリシー サーバのインストール後にデフォルトの設定を変更した場合は、ポリシー サーバ認証ポートを識別します。ポリシー サーバ管理コンソール内の設定タブは、アクセス制御ポートをリスト表示します。

注: ポリシー サーバ管理コンソールの開始についての詳細は、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

注: ワークシートは、管理 UI のインストール前に必要な情報を収集および記録するために提供されます。

管理 UI 登録ウィンドウのリセット

SiteMinder スーパーユーザ クレデンシャルをポリシー サーバにサブミットするために、24 時間以上前に XPSRegClient ユーティリティを使用した場合は、この手順が必要です。クレデンシャルをサブミットしてから、ポリシー サーバと信頼できるリレーションシップの構築を試行するまでの時間は、24 時間以内である必要があります。

注: (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

登録ウィンドウをリセットする方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder_administrator[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r  
retries -c comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```


siteminder_administrator

SiteMinder の管理者を指定します。以下の一部として 管理 UI をインストールする場合

- 新しい r12.0 SP3 環境の一部としてインストールする場合は、デフォルトの SiteMinder 管理者アカウント(siteminder)を指定します。
- アップグレードの一部としてインストールする場合は、ポリシー ストア内でのスーパーユーザ権限のある SiteMinder 管理者アカウントを指定します。

注: r12.0 SP1 からアップグレードして、ポリシー ストア内でのスーパーユーザ アカウントを持たない場合は、デフォルトの SiteMinder アカウントを作成するために smreg ユーティリティを使用します。

passphrase

SiteMinder 管理者アカウントのパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しない場合、XPSRegClient でパスフレーズの入力と確認が求められます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(オプション) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 1440 (24 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r retries

(オプション) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行の失敗は、管理 UI への最初のログイン時に、誤った SiteMinder 管理者クレデンシャルをサブミットすることに起因する場合があります。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c *comment*

(オプション) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(オプション) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l *log path*

(オプション) 登録ログ ファイルをエクスポートする必要がある場所を指定します。

デフォルト: *siteminder_home*¥log

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e *error path*

(オプション) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(オプション) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(オプション) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(オプション) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(オプション) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(オプション) 詳細レベルを FATAL に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

管理 UI のインストール

以下のセクションでは、スタンドアロン インストール オプションの一部として、必須インストーラを使用して 管理 UI をインストールする方法について説明します。

インストールする前に

管理 UI のインストールを開始する前に、以下を考慮してください。

- テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用して 管理 UI をインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- インストールすべきスタンドアロン オプションを使用している場合には、以下の手順が適用されます。既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールする場合は、「既存アプリケーション サーバへの管理 UI のインストール」を参照してください。
- **重要:** インストール zip は、必須インストーラおよび 管理 UI インストーラを含みます。
 - Windows にインストールする場合、または UNIX にインストールして必須インストーラを GUI モードで実行する場合は、両方の実行ファイルが同じ場所にあることを確認してください。必須インストーラは、インストールを完了させるために、自動的に 管理 UI インストーラを開始させます。
 - UNIX にインストールしてインストール メディアをコンソール モードで実行する場合は、両方の実行ファイルが同じ場所にあることを確認してください。ただし、インストールを完了させるために手動で 管理 UI インストーラを開始させます。必須インストーラは、自動的に 管理 UI インストーラを開始させません。

- **重要:** インストール zip には、インストール メディアと同じレベルに `layout.properties` ファイルおよび `Framework` フォルダが含まれています。インストール zip を展開した後にインストール メディアを移動した場合、以下のものを同じ場所に移動しないと、インストールに失敗します。
 - `layout.properties` ファイル
 - `Framework` フォルダ
- **重要:** (UNIX) アクセス権によっては、以下のコマンドを実行することでインストール メディアが存在するディレクトリへの実行アクセス権を追加する必要があります。

```
chmod -R+x directory
```

directory

インストール メディアが存在するディレクトリを指定します。
- (UNIX) 別のサブネットにまたがって 管理 UI インストーラを実行した場合、クラッシュすることがあります。ホスト システムに 管理 UI を直接インストールします。
- レポート サーバと同じシステムに 管理 UI をインストールする場合、ポートのコンフリクトが発生する場合があります。デフォルトでは、両方のコンポーネントがポート 8080 を使用します。

Windows

Windows に 管理 UI をインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. インストール メディアに移動します。
3. `prerequisite_installation_media` をダブルクリックします。

`prerequisite_installation_media`

管理 UI 必須インストーラの実行ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. 完了したインストール ワークシートを使用して、必要な値を入力します。
 5. [インストール] をクリックします。
- 必要なコンポーネントがインストールされます。

6. [終了]をクリックします。
管理 UI インストーラが起動します。
7. プロンプトに従って[インストール]をクリックします。
これで、管理 UI がインストールされました。SiteMinder 管理 UI のログイン画面が表示されます。
8. [ユーザ名]フィールドに、「siteminder」を入力します。
9. [パスワード]フィールドに、siteminder のアカウント パスワードを入力します。
10. [サーバ]フィールドに、ポリシー サーバ ホストの完全修飾名を入力します。
以下の点について考慮してください。
 - 有効な IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスに入ることができます。
 - ポートを指定しない場合、デフォルトのポリシー サーバ認証ポートである 44442 がデフォルトで登録されます。管理 UI が開き、ポリシー サーバに登録されます。

UNIX GUI

UNIX GUI を使用して 管理 UI をインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
./prerequisite_installation_media gui  
prerequisite_installation_media
```

管理 UI 必須インストーラの実行ファイルを指定します。
インストーラが起動します。
注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。
4. 完了したインストール ワークシートを使用して、必要な値を入力します。
5. [インストール]をクリックします。
必要なコンポーネントがインストールされます。

6. [終了]をクリックします。

管理 UI インストーラが起動します。

7. プロンプトに従って[インストール]をクリックします。

これで、管理 UI がインストールされました。

注: ポリシー サーバに 管理 UI を登録するまでは、環境管理のために 管理 UI を使用することができません。

UNIX コンソール

UNIX コンソールを使用して 管理 UI をインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
./prerequisite_installation_media -i console  
prerequisite_installation_media
```

管理 UI 必須インストーラの実行ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. 完了したインストールワークシートを使用して、必要な値を入力します。
5. Enter キーを押します。

必要なコンポーネントがインストールされます。管理 UI インストーラを実行するよう要求されます。

6. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media -i console  
installation_media
```

管理 UI インストーラの実行ファイルを指定します。

管理 UI インストーラが起動します。

7. プロンプトに従って、Enter キーを押します。

これで、管理 UI がインストールされました。

注: ポリシー サーバに 管理 UI を登録するまでは、環境管理のために 管理 UI を使用することができません。

管理 UI インストールのトラブルシューティング

管理 UI インストールのトラブルシューティングには、以下のファイルを使用します。

■ **Administrative_UI_Prerequisite_Installer_InstallLog.log**

スタンドアロン インストール オプションを使用した場合、このログには、前提条件のインストール中に発生した成功、警告、致命的でないエラー、およびエラーの数が示されます。個別のインストール アクションは、それぞれのステータスと共にリスト表示されます。

Location:

administrative_ui_home\CA\SiteMinder\adminui\install_config_info

administrative_ui_home

管理 UI インストール パスを指定します。

■ **CA_SiteMinder_Administrative_UI_InstallLog.log**

このログには、管理 UI のインストール中に発生した成功、警告、致命的でないエラー、およびエラーの数が示されます。個別のインストール アクションは、それぞれのステータスと共にリスト表示されます。

Location:

administrative_ui_home\CA\SiteMinder\adminui\install_config_info

administrative_ui_home

管理 UI インストール パスを指定します。

管理 UI を登録する方法

SiteMinder オブジェクトの管理に使用できるようにするために、あらかじめ 管理 UI を登録する必要があります。管理 UI を登録すると、管理 UI とポリシー サーバとの間に信頼できる接続が作成されます。以下の点について考慮してください。

- (UNIX) アプリケーション サーバを手動で開始させ、登録を完了させるために 管理 UI にログインするよう要求されます。
- (Windows) Windows に 管理 UI をインストールした後、SiteMinder 管理 UI ログイン画面が表示され、アプリケーション サーバが自動的に開始されます。これらのアクションにより、すぐに 管理 UI を登録することができます。インストール直後に 管理 UI を登録しなかった場合は、以下のプロセスを完了します。

このプロセスは、必須インストーラを使用してインストールされた 管理 UI の登録方法について説明します。既存のアプリケーション サーバ環境に 管理 UI をインストールした場合は、「既存アプリケーション サーバへの管理 UI のインストール」の中のそれぞれのプロセスを参照してください。

管理 UI を登録するには、以下の手順に従います。

1. アプリケーション サーバを起動します。
2. 管理 UI を登録します。

アプリケーション サーバの起動

管理 UI をインストールするためにスタンドアロン オプションを使用した場合には、以下の手順が適用されます。既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールした場合は、「既存アプリケーション サーバへの管理 UI のインストール」を参照してください。

アプリケーション サーバを起動する方法

1. 管理 UI ホスト システムから、以下のいずれかを実行します。

- **Windows** - Microsoft Services コンソールを開きます。

Windows に 管理 UI がインストールされると、アプリケーション サーバが自動的に開始されます。インストール後にアプリケーション サーバを開始させる必要はありません。

- **UNIX** - `install_home/CA/siteminder/adminui/bin` に移動します。

`install_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

2. 以下のいずれかの操作を行います。

- **Windows** - SiteMinder 管理 UI サービスを開始させます。

- **UNIX** - 「run.sh」を入力し、Enter キーを押します。

アプリケーション サーバが開始されます。

管理 UI の登録

環境管理を始めるために、ポリシー サーバに 管理 UI を登録します。

管理 UI を登録する方法

1. 以下のいずれかの操作を行います。

- **Windows** - 管理 UI ショートカットを使用して 管理 UI を開きます。

- **UNIX** - Web ブラウザを開き、`host:port/iam/siteminder/adminui` に移動します。

注: ホスト システムに Web ブラウザがない場合には、ログイン画面にリモート アクセスすることもできます。

`host`

管理 UI ホスト システムの完全修飾名を指定します。

port

JBoss が HTTP リクエストをリスンするポートを指定します。

SiteMinder 管理 UI のログイン画面が表示されます。

2. [ユーザ名]フィールドに、「siteminder」を入力します。
3. [パスワード]フィールドに、siteminder のアカウント パスワードを入力します。
4. [サーバ]フィールドに、ポリシー サーバ ホストの完全修飾名を入力します。

以下の点について考慮してください。

- 有効な IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスに入ることができます。
- ポートを指定しない場合、デフォルトのポリシー サーバ認証ポートである 44442 がデフォルトで登録されます。

管理 UI が開き、ポリシー サーバに登録されます。

アプリケーション サーバを停止します。

管理 UI をインストールするためにスタンドアロン オプションを使用した場合には、以下の手順が適用されます。既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールした場合は、「既存アプリケーション サーバへの管理 UI のインストール」を参照してください。

アプリケーション サーバを停止する方法

1. 管理 UI ホストから、以下のいずれかを実行します。
 - **Windows** - Microsoft Services コンソールを開きます。
 - **UNIX** - `install_home/CA/siteminder/adminui/bin` に移動します。

administrative_ui_install

管理 UI インストール パスを指定します。

2. 以下のいずれかの操作を行います。
 - **Windows** - SiteMinder 管理 UI サービスを停止します。
 - **UNIX** - 「shutdown.sh」を入力し、Enter キーを押します。

アプリケーション サーバが停止します。

管理者クレデンシャル

デフォルトでは、管理 UI は SiteMinder 管理者認証情報用のソースとしてポリシーストアを使用します。たとえばコーポレートディレクトリのような外部ストアを使用するために、管理 UI を設定することができます。

注: 外部管理者ユーザストアの設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

管理 UI の高可用性

予期しない機能停止で SiteMinder オブジェクトの管理が妨げられないように、複数の管理 UI をインストールします。別の管理 UI をインストールする前に、以下を考慮します。

- まだ管理 UI との信頼できる接続を共有していないポリシー サーバに、管理 UI を登録します。別のポリシー サーバに登録することで、1 つのポリシー サーバが機能停止しても両方の GUI が無効になることはありません。
- 管理 UI は、複数のポリシー サーバにフェイルオーバーすることができます。ただし、複数のポリシー サーバを管理するために管理 UI を設定することができます。
- 既存の管理 UI が外部 SiteMinder 管理者認証に対して設定されている場合。
 - 同じ外部ストアで新しい管理 UI を設定します。同じ外部ストアを使用して新しい管理 UI の設定することにより、すべての SiteMinder 管理者がすべての GUI で利用可能になります。
 - 同じネットワーク識別子を使用して同じ外部ストアへの後続の管理 UI 接続を設定してください。同じ外部ストアへの複数の管理 UI 接続で異なるネットワーク識別子を使用することはサポートされていません。

例: 最初の接続を 172.16.0.0 で設定した場合、後続の接続も 172.16.0.0 で作成します。最初の接続を comp001@example.com で設定した場合は、後続の接続も comp001@example.com で作成します。

注: 外部管理者ストアの設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

追加ポリシー サーバの接続を設定する方法

デフォルトでは、管理 UI はインストール処理の一部として単一のポリシー サーバで設定されます。ただし、1 つ以上のポリシー サーバを管理するための、追加の接続を設定することができます。たとえば、開発およびステージングの環境で、ポリシー サーバを管理するための接続を作成することができます。

追加のポリシー サーバ接続を設定するには、以下の手順を完了します。

1. 外部管理者ユーザ ストアへの接続を設定します。

注: 管理 UI が管理者アイデンティティのソースとしてポリシー ストアを使用している場合は、追加のポリシー サーバ接続を設定することができません。外部管理者ユーザ ストア接続を設定する詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

2. 登録ツールを実行します。
3. ポリシー サーバへの接続を設定します。

登録ツールの実行

クライアント名とパスフレーズを作成するには、管理 UI 登録ツールを実行します。クライアント名とパスフレーズの組み合わせは、登録する 管理 UI を識別するためにポリシー サーバが使用する値です。登録処理を完了するには、管理 UI からクライアントとパスフレーズの値をサブミットします。

登録ツールを実行する方法

1. ポリシー サーバ ホストシステムからコマンド プロンプトを開きます。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient client_name[:passphrase] -adminui -t timeout -r retries -c comment  
-cp -l log_path -e error_path  
-vT -vI -vW -vE -vF
```

注: `client_name` と `[:passphrase]` の間にスペースを挿入すると、エラーが発生します。

client_name

登録する 管理 UI を識別します。

制限: この値は一意である必要があります。たとえば、管理 UI の登録にすでに **smui1** を使用している場合は、「**smui2**」と入力します。

注: この値は記録しておいてください。この値は、管理 UI から登録処理を完了するときに使用します。

passphrase

管理 UI の登録の完了に必要なパスワードを指定します。

制限:

- パスフレーズは 6 文字以上にする必要があります。
- パスフレーズには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含めることができません。
- パスフレーズにスペースが含まれる場合、引用符で囲む必要があります。
- 管理 UI をアップグレードの一部として登録する場合、以前のパスフレーズを再利用できます。

注: この手順でパスフレーズを指定しない場合、XPSRegClient でパスフレーズの入力と確認が求められます。

重要: パスフレーズを記録して、後で参照できるようにします。

-adminui

管理 UI の登録を指定します。

-t timeout

(オプション) 管理 UI からの登録処理を完了する必要がある時間を指定します。タイムアウト値に到達すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (1 日)

-r retries

(オプション) 管理 UI からの登録処理を完了するまでに許容される試行の失敗回数を指定します。登録処理時にポリシー サーバに間違ったクライアント名またはパスフレーズをサブミットすると、登録に失敗することがあります。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(オプション) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(オプション) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。登録ツールにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log_path

(オプション)。登録ログ ファイルをエクスポートする場所を指定します。

デフォルト: `siteminder_home¥log`

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e error_path

(オプション) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: `stderr`

-vT

(オプション) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(オプション) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(オプション) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(オプション) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(オプション) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

登録ログ ファイルの名前が一覧表示され、パスフレーズが求められます。

3. **Enter** キーを押します。

登録ツールにより、クライアント名およびパスフレーズの組み合わせが作成されます。

これで、ポリシー サーバに 管理 UI を登録できるようになりました。管理 UI からの登録処理が完了しました。

登録情報の収集

管理 UI では、ポリシー サーバに関する特定の情報と、登録処理の実行時に作成したクライアント名およびパスフレーズが必要です。管理 UI にログインする前に、以下の情報を集めます。

- **クライアント名** - XPSRegClient ツールを使用して指定したクライアント名。
- **パスフレーズ** - XPSRegClient ツールを使用して指定したパスフレーズ。
- **ポリシー サーバ ホスト** - ポリシー サーバ ホストシステムの IP アドレスまたは名前。
- **ポリシー サーバの認証ポート** - ポリシー サーバが認証リクエストをリスニングするポート。

デフォルト: 44442

注: ワークシートは、管理 UI の登録前に情報を収集して記録するために用意されています。

ポリシー サーバへの接続設定

管理 UI を SiteMinder オブジェクトの管理に使用できるようにするために、接続を設定します。

ポリシー サーバ接続を設定する方法

1. スーパーユーザ権限を持つアカウントで 管理 UI にログインします。
2. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
3. [ポリシー サーバ接続]-[ポリシー サーバ接続の登録]をクリックします。

「ポリシー サーバ接続の登録」画面が表示されます。

注:それぞれの要件および制限など、設定とコントロールの説明を参照するには、[ヘルプ]をクリックします。

4. [名前]フィールドに接続名を入力します。
5. [ポリシー サーバ ホスト]フィールドにポリシー サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。
6. [ポリシー サーバ ポート]フィールドに、ポリシー サーバ認証ポートを入力します。

注: この値は、ポリシー サーバ管理コンソールの[設定]タブにある[認証ポート] (TCP) フィールドの値と一致する必要があります。デフォルトの認証ポートは **44442** です。ポート番号を決定するために、ポリシー サーバ管理コンソールの[設定]タブを開きます。

7. それぞれのフィールドに、登録ツールを使用して作成したクライアント名およびパスフレーズを入力します。
8. FIPS モードを選択します。
 - FIPS 互換モードでポリシー サーバをインストールした場合には、互換モードを選択します。
 - FIPS 専用モードでポリシー サーバをインストールした場合には、専用モードを選択します。
9. [サブミット]をクリックします。

管理 UI とポリシー サーバとの間の接続が設定されます。

管理 UI ログイン画面は、管理 UI が登録されるポリシー サーバのリストを含んでいます。デフォルトでは、最初に登録されたポリシー サーバはデフォルト接続です。

デフォルト ポリシー サーバ接続の変更

管理 UI ログイン画面は、管理 UI が登録されるポリシー サーバのリストを含んでいます。デフォルトでは、最初に登録されたポリシー サーバがデフォルト接続として表示されます。リストを変更し、別のポリシー サーバ接続をデフォルトとして表示できます。

デフォルト ポリシー サーバ接続を変更する方法

1. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
2. [ポリシー サーバ接続]-[ポリシー サーバ接続の変更]をクリックします。
[ポリシー サーバ接続の変更]ペインが表示されます。
3. 検索条件を指定し、[検索]をクリックします。
条件と一致する 管理 UI 接続が表示されます。
4. 目的の接続を選択し、[選択]をクリックします。
管理 UI 接続に特有の設定が表示されます。
5. [詳細]グループ ボックス内の矢印アイコンをクリックします。
詳細設定が表示されます。
6. [デフォルト接続]チェック ボックスをオンにし、[サブミット]をクリックします。
ポリシー サーバ接続がデフォルト接続として設定されます。

ポリシー サーバ接続の削除

管理 UI ログイン画面は、管理 UI が登録されるポリシー サーバのリストを含んでいます。接続が必要でなくなった場合には、リストから削除するためにポリシー サーバ接続を削除します。

ポリシー サーバ接続を削除するには、次の手順に従います。

1. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
2. [ポリシー サーバ接続]-[ポリシー サーバ接続の削除]をクリックします。
[ポリシー サーバ接続の削除]ペインが開きます。
3. 検索条件を指定し、[検索]をクリックします。
条件と一致する 管理 UI 接続が表示されます。

4. 目的の接続を選択し、[選択]をクリックします。
接続を削除してもかまわないか確認するように促されます。
5. [はい]をクリックします。
ポリシー サーバへの接続が削除されます。

無人 管理 UI インストール

管理 UI が 1 つのシステムにインストールされた後は、無人インストールを使用して、それを再インストール、または個別のシステムにインストールできます。無人インストールでは、ユーザ インタクションなしで 管理 UI をインストール、またはアンインストールすることができます。

無人インストールを設定するために、インストーラはインストール変数を定義するためのプロパティファイルを提供します。これらのファイル内のデフォルトパラメータ、パスワードおよびパスは、最初の 管理 UI インストール中に入力した情報を反映します。

Windows 上の 管理 UI のアンインストール

システムで不用になった場合は、管理 UI をアンインストールします。

注: 管理 UI をインストールするためにスタンドアロン オプションを使用した場合には、以下の手順が適用されます。既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールした場合は、「既存アプリケーション サーバへの 管理 UI のインストール」を参照してください。

管理 UI をアンインストールする方法

1. アプリケーション サーバを停止します。
2. **Windows** のコントロール パネルを開き、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
インストールされたプログラムのリストが表示されます。

3. CA Technologies SiteMinder 管理 UI を選択し、[変更と削除]をクリックします。

注: 管理 UI を r12.0 SP1 からアップグレードした場合、CA SiteMinder 管理 UI に加え、CA SiteMinder Web アクセス マネージャ 管理 UI がリスト表示されます。アップグレード後に 管理 UI をアンインストールするためには、CA SiteMinder 管理 UI を選択します。

管理 UI を削除するプロセスが開始されます。

4. ウィザードの指示とプロンプトに従います。

注: システムが共有ファイルを削除するよう要求するメッセージを表示する場合は、[すべていいえ]をクリックします。

5. 要求された場合はシステムを再起動します。
6. Windows のコントロール パネルを開き、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。

インストールされたプログラムのリストが表示されます。

7. 必須インストーラを選択し、[変更と削除]をクリックします。

8. 管理 UI の必須コンポーネントを削除するプロセスが開始されます。

注: システムが共有ファイルを削除するよう要求するメッセージを表示する場合は、[すべていいえ]をクリックします。

9. 要求された場合はシステムを再起動します。

管理 UI および必要なサードパーティ コンポーネントがアンインストールされます。

UNIX 上の 管理 UI のアンインストール

システムで不用になった場合は、管理 UI をアンインストールします。

注: 管理 UI をインストールするためにスタンドアロン オプションを使用した場合には、以下の手順が適用されます。既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールした場合は、「既存アプリケーション サーバへの管理 UI のインストール」を参照してください。

UNIX 上の 管理 UI をアンインストールする方法

1. アプリケーション サーバを停止します。
2. シェルを開き、以下に移動します。

```
administrative_ui_home/CA/SiteMinder/adminui/install_config_info
```

```
administrative_ui_home
```

管理 UI インストール パスを指定します。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
./sm-wamui-uninstall.sh
```

管理 UI を削除するプロセスが開始されます。

4. プロンプトに従って、管理 UI をアンインストールします。

管理 UI がアンインストールされる時、インストーラはプロンプトを表示します。

5. コマンド ウィンドウを開き、以下に移動します。

```
administrative_ui_home/CA/SiteMinder/webadmin/install_config_info
```

```
administrative_ui_home
```

管理 UI インストール パスを指定します。

6. 以下のコマンドを実行します。

```
./prerequisite-uninstall.sh
```

7. プロンプトに従って、管理 UI の必須コンポーネントをアンインストールします。

サードパーティ コンポーネントがアンインストールされる時、インストーラはプロンプトを表示します。

管理 UI および必要なサードパーティ コンポーネントがアンインストールされます。

Web エージェントのインストールの準備

Web エージェントをインストールする前に、以下を完了している必要があります。

- ポリシー サーバのインストール
- ポリシー サーバと通信するためのポリシー ストアおよびキー ストアの設定
- 管理 UI のインストールおよび登録
- Web エージェントをインストールするシステムとポリシー サーバが通信できることの確認

ユーザが Web エージェントのサイトでトラステッド ホストを登録するには、その前に、以下のオブジェクトを 管理 UI で設定する必要があります。

注: 以下の各オブジェクトの設定の詳細については、「ポリシー サーバ構成ガイド」を参照してください。

エージェントを集中管理するには、管理 UI を使用して、以下を設定します。

- **トラステッド ホストを登録する権限を持つ SiteMinder 管理者** - トラステッド ホストは 1 つ以上の SiteMinder Web エージェントがインストールされているクライアントコンピュータです。トラステッドホストは、物理システムを指します。トラステッド ホストを登録する権限を持つ管理者がいる必要があります。デフォルト SiteMinder 管理者はこの権限を持っています。
- **エージェント識別情報** - エージェント識別情報により、Web エージェントをホストしている Web サーバ インスタンスの名前と IP アドレスの間にマッピングが確立されます。管理 UI でエージェントオブジェクトからのエージェント識別情報を定義します。エージェント識別情報に名前を割り当て、エージェントタイプを Web エージェントとして指定します。

注: エージェントに割り当てる名前は、エージェント設定オブジェクトの `DefaultAgentName` パラメータで指定するのと同じ名前です。

- **ホスト設定オブジェクト** - トラステッド ホストとポリシー サーバの間の最初の接続が確立された後、ホスト設定オブジェクトによって、トラステッド ホストとポリシー サーバの間の通信が定義されます。

ホスト設定オブジェクトとトラステッド ホスト設定ファイル (`SmHost.conf`) を混同しないでください。`SmHost.conf` は、ホスト登録の成功後にトラステッド ホストでインストールされます。`SmHost.conf` ファイル内の設定によってポリシー サーバにホストが接続されるのは最初の接続のみです。後の接続は、ホスト設定オブジェクトによって管理されます。

- **エージェント設定オブジェクト** - エージェント設定オブジェクトには、Web エージェント設定を定義するパラメータが含まれています。以下に示す基本的な操作のために、いくつかの必須パラメータを設定する必要があります。

注: エージェントパラメータの詳細については、「Web エージェント設定ガイド」を参照してください。

- **すべてのエージェントについて** - エージェント設定オブジェクトには、DefaultAgentName の値が含まれている必要があります。DefaultAgentName は、エージェントオブジェクトで指定したエージェント識別名と一致している必要があります。DefaultAgentName は、Web エージェントがその Web サーバ上でエージェント識別情報が割り当てられていない IP アドレスを検出したときに使用するエージェント識別情報を識別します。
- **Domino Web エージェントについて** - エージェント設定オブジェクトには、以下のパラメータの値が含まれている必要があります。
 - **DominoDefaultUser** - ユーザが Domino ディレクトリに含まれず、SiteMinder によって別のユーザ ディレクトリに対して認証されている場合、Domino Web エージェントはこの名前を使用して、ユーザを Domino サーバに対して識別します。DominoDefaultUser 値は暗号化できます。
 - **DominoSuperUser** - SiteMinder に正常にログインしたすべてのユーザが、DominoSuperUser として Domino にログインされていることを確認します。DominoSuperUser 値は暗号化できます。
- **IIS Web エージェント** - エージェント設定オブジェクトは、DefaultUserName と DefaultPassword のパラメータの値を含んでいる必要があります。DefaultUserName と DefaultPassword は、SiteMinder で保護されている IIS Web サーバ上のリソースにアクセスするための十分な権限を持つ既存の NT ユーザ アカウントを識別します。SiteMinder で保護されている IIS Web サーバのリソースにアクセスする必要があるユーザが、必要なサーバアクセス権限を持っていないことがあります。Web エージェントが、SiteMinder によってアクセスを許可されたユーザのプロキシユーザ アカウントとして機能するためには、管理者によって事前に割り当てられた Windows アカウントを使用する必要があります。

注: NTLM 認証方式を使用する場合、または Windows ユーザ セキュリティ コンテキスト機能を有効にする場合には、これらの IIS Web エージェントパラメータに値を指定しないでください。

第 10 章: Federation セキュリティ サービス の管理 UI の登録

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[FSS 管理 UI の登録 \(P. 319\)](#)

[インストール ロード マップ \(P. 320\)](#)

[登録前のチェックリスト \(P. 321\)](#)

[FSS 管理 UI を登録する前に \(P. 322\)](#)

[FSS 管理 UI を登録する方法 \(P. 323\)](#)

FSS 管理 UI の登録

FSS 管理 UI は、ポリシー サーバと同時にインストールされ、Federation セキュリティ サービス の管理に使用されるアプレットベースのアプリケーションです。

Federation セキュリティ サービス コンポーネントは、アフィリエイト(コンシューマ、サービスプロバイダ、リソースパートナー)と、2 つのパートナー間のフェデレーション通信をサポートするために設定する SAML 認証方式で構成されます。

FSS 管理 UI は、SiteMinder Federation セキュリティ サービスを管理するために用意されています。以前のバージョンの SiteMinder ポリシー サーバのユーザー インターフェースと異なり、すべての SiteMinder オブジェクトが FSS 管理 UI に表示されることがわかります。表示されないオブジェクトは、EPM (Enterprise Policy Management) およびレポートに関連するオブジェクトだけです。FSS 管理 UI を使用すると、SiteMinder オブジェクトを管理できます。FSS 管理 UI を使用しているときに情報が必要となった場合は、FSS 管理 UI オンライン ヘルプ システムを調べます。

ポリシー サーバに FSS 管理 UI を登録して、両方のコンポーネント間の通信が FIPS で暗号化(AES 暗号化)されるようにします。

注: 組織とパートナーとの間にフェデレーションが実現していない場合、ポリシー サーバ マシン上の FSS 管理 UI はポリシー サーバに登録せずに、そのまま安全に残すことができます。

インストール ロード マップ

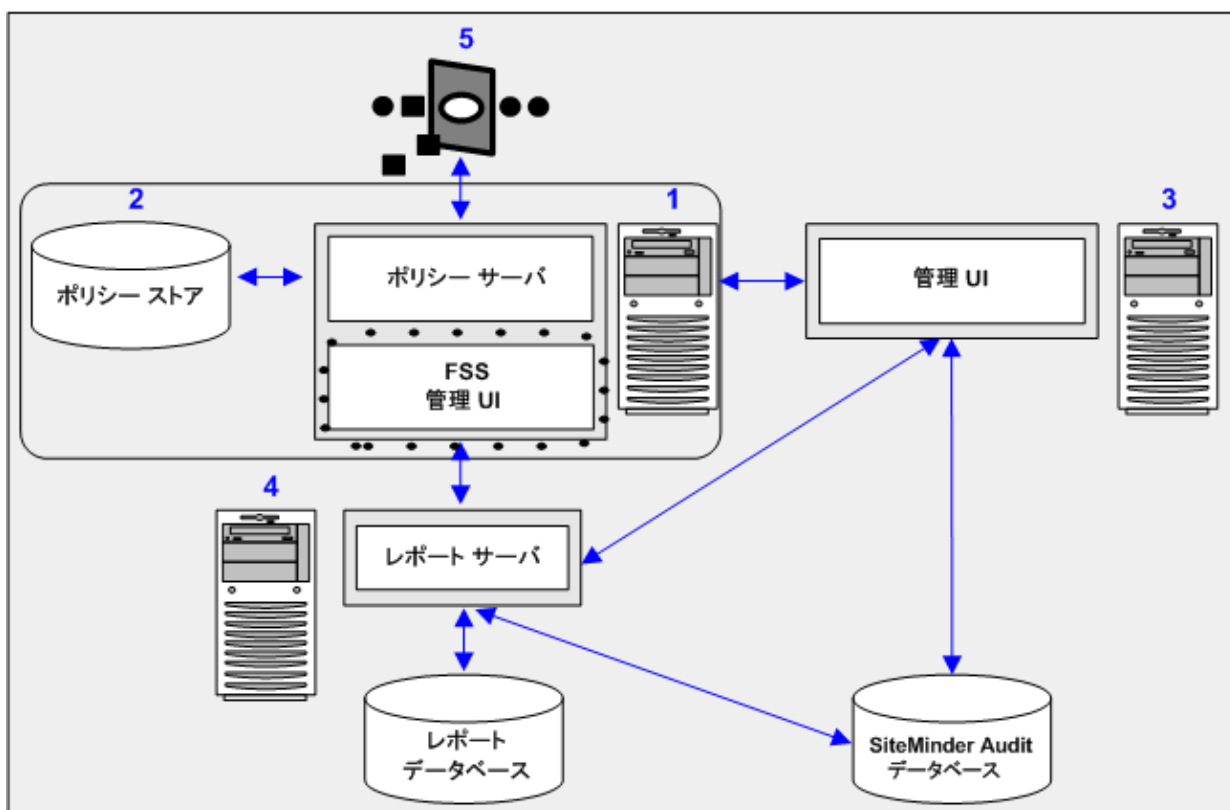
以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。

- 実線で囲まれているのは、管理 UI の登録前に必要なコンポーネントです。設定する必要があるポリシーは次のとおりです。
 - ポリシー サーバ
 - ポリシー ストア
 - インストールおよび登録された 管理 UI
 - 未登録の FSS 管理 UI

注: FSS 管理 UI はポリシーサーバ を使用してインストールされます。

- 点線で囲まれたコンポーネントは、これからポリシー サーバに登録される FSS 管理 UI です。

注: 登録済みの FSS 管理 UI は、Federation セキュリティサービスを管理する場合のみに必要とされます。組織がパートナーとフェデレートしていない場合は、Federation セキュリティ サービス をポリシー サーバに登録せずに、安全にポリシー サーバ システム上に残すことができます。



登録前のチェックリスト

以下のチェックリストを印刷して使用すると、ポリシー サーバに FSS 管理 UI を登録するために必要な SiteMinder コンポーネントと情報が揃っているかどうかを確認できます。

- ☐ 管理 UI が正しくインストールされていて正常に設定されていることを確認します。管理 UI を使用して、FSS 管理 UI を登録します。
- ☐ 管理 UI にアクセスするために使用する管理ユーザ アカウントがエージェントを作成するために必要な権限を持っていることを確認します。FSS 管理 UI 登録処理中に 4.x エージェントを作成します。

- デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワードを持っていることを確認します。FSS 管理 UI にログインし、登録処理を確認します。

注: デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウントは SiteMinder です。デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウントのパスワードは、ポリシーストアが設定されたときに作成されました。パスワードを持っていない場合、smreg ユーティリティを使用して、それを変更できます。smreg ユーティリティの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

- r12.0 SP3 へのアップグレードの一部として FSS 管理 UI を登録している場合は、ポリシー ストアを r12.0 SP3 にアップグレードしたことを確認します。ポリシー ストアが r12.0 SP3 にアップグレードされるまで、Federation セキュリティ サービスを管理するために FSS 管理 UI の使用を開始しないでください。

FSS 管理 UI を登録する前に

FSS 管理 UI を登録する前に、以下を実行します。

- (Internet Explorer) Internet Explorer のサポートされているバージョンを使用している場合は、FSS 管理 UI にアクセスする前に信頼されたサイトとしてドメインを追加します。

信頼されたサイトとしてドメインを追加するときは、以下の点を考慮します。

- ドメインを含むサーバのフル ネームを入力します。

例: `http://servername.domain-name`

例: `http://security.myorg.org`

- 安全な接続(https)を使用して FSS 管理 UI に接続している場合、ドメインを指定するときに https を含める必要があります。

例: `https://security.myorg.org`

- 安全な接続(https)を使用してポリシー サーバにアクセスしていない場合、[このゾーンのサイトにはすべてサーバーの確認(https)を必要とする]を無効にすることができます。

注: 信頼されたサイトとしてのドメインの追加の詳細については、Internet Explorer のドキュメントを参照してください。

- (Netscape Communicator) サポートされているバージョンの Netscape Communicator を使用している場合、Netscape Java クラスが配置されているディレクトリに FSS 管理 UI `sm_admin_noswing.jar` ファイルをコピーすることにより、FSS 管理 UI がロードにかかる時間を短縮できます。
`sm_admin_noswing.jar` ファイルは `policy_server_home\admin` にあります。
`policy_server_home`

ポリシー サーバのインストール場所を示します。

注: Netscape Java クラスの場所の詳細については、Netscape のドキュメントを参照してください。

- (Windows) FSS 管理 UI を起動するとき、URL では、デフォルトポート 80 で Web サーバを実行していると想定されます。Web サーバがデフォルトポート上で実行されていない場合、または Web サーバポートを変更する場合は、FSS 管理 UI にアクセスする前に[スタート]メニュー内の FSS 管理 UI ショートカットを変更します。
- FSS 管理 UI にローカルにアクセスすると、ロードにかかる時間が短縮されます。Internet Explorer から FSS 管理 UI にアクセスする場合、`sm_admin.cab` 内に格納されている FSS 管理 UI ファイルは Internet Explorer のキャッシュに自動的に格納されます。

注: サポートされている CA およびサードパーティコンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポートマトリックスを参照してください。

FSS 管理 UI を登録する方法

ポリシー サーバに FSS 管理 UI を登録するには、以下の手順に従います。

1. 「FSS 管理 UI を登録する前に」の前提条件の注意事項を確認します。
2. FSS 管理 UI 用の登録クレデンシャルを作成します。
3. FSS 管理 UI にログインします。

FSS 管理 UI 用の登録クレデンシャルの作成

FSS 管理 UI ログイン画面では、ポリシー サーバをインストールし、ポリシー ストアを設定したときに確立された **SiteMinder** スーパーユーザ管理者アカウントクレデンシャルに加えて、**4.x** エージェントの名前と共有秘密キーが必要です。これらのクレデンシャルを確立し、FSS 管理 UI とポリシー サーバの間の通信が必ず FIPS 暗号化 (AES 暗号化) されるようにします。

注: FSS 管理 UI にログインするための **4.x** エージェント識別情報の作成には、**SiteMinder Web** エージェントのインストール、ホスト設定オブジェクトおよびエージェント設定オブジェクトの設定、トラステッド ホストの登録は必要ありません。FSS 管理 UI が必要とするのは **4.x** エージェント識別情報のみです。

4x エージェントを作成する方法

1. 管理 UI にログインします。
2. [インフラストラクチャ]-[エージェント]をクリックします。
3. [エージェント]-[エージェントの作成]をクリックします。
[エージェントの作成]画面が表示されます。新規オブジェクトを作成することを示すラジオ ボタンが選択されています。
4. [OK]をクリックします。
エージェント関連のプロパティが表示されます。
5. [エージェント名]フィールドにエージェント名を入力します。

例: FSS UI Agent

注: FSS 管理 UI にログインするときに必要なので、エージェント名を記録しておきます。

6. [エージェント タイプ設定]グループ ボックスで[**4.x** エージェントをサポートします]チェック ボックスをオンにします。
[信頼性の設定]グループ ボックスが表示されます。

7. [IP アドレス]フィールドに、ポリシー サーバをホストしているマシンの IP アドレスを入力します。
8. [共有秘密キー]および[秘密キーの確認入力]フィールドに、エージェント共有秘密キーを入力し、確認します。

注: FSS 管理 UI にログインするときに必要なのでエージェント共有秘密キーを記録しておきます。

必須 4.x エージェントクレデンシャルを作成しました。FSS 管理 UI にログインできます。

FSS 管理 UI へのログイン

FSS 管理 UI にログインし、登録処理を完了します。

FSS 管理 UI にログインする方法

1. ポリシー サーバ管理コンソールの[ステータス]タブで、ポリシー サーバが実行されていることを確認します。

注: ポリシー サーバへのアクセスの詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

2. 以下のいずれかの操作を完了します。
 - サポートされたブラウザで「`http://hostname:port/siteminder`」を入力します。

hostname:port

ポリシー サーバがインストールされているマシンの名前を指定します。
port は、Web サーバのポート番号です。HTTP リクエスト用にデフォルトポート(80)を使用している場合、ポート番号を入力する必要はありません。

例: `http://www.myorg.org:80/siteminder`

- [スタート]メニューから、[スタート]-[プログラム]-[SiteMinder]-[SiteMinder FSS 管理 UI]を選択します。

FSS 管理 UI のログイン画面が表示されます。

注: ログイン画面が表示されない場合は、Federation セキュリティ サービスの管理 UI のトラブルシューティングを参照してください。

3. [ログイン]をクリックします。

注: CA によって提供された、署名されたアプレットを信頼するか権限を付与するよう要求するメッセージが表示される場合は、[はい]をクリックします。

SiteMinderFSS 管理 UI ログイン画面が表示されます。

4. 以下の情報を入力します。

- [ユーザ名]フィールドに「SiteMinder」と入力します。
- [パスワード]フィールドに SiteMinder スーパーユーザ アカウント用のパスワードを入力します。
- [ホスト名]に、作成した 4.x エージェント識別名を入力します。
- [パスフレーズ]フィールドに、作成した 4.x エージェント識別情報の共有秘密キーを入力します。

5. [ログイン]をクリックします。

FSS 管理 UI が開きます。

注: デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウントは日常の運用では使用しないことをお勧めします。代わりに、システム設定権限を持つ管理者を作成します。FSS 管理 UI 管理者の作成の詳細については、*FSS 管理 UI ヘルプシステム*を参照してください。

第 11 章: レポートのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

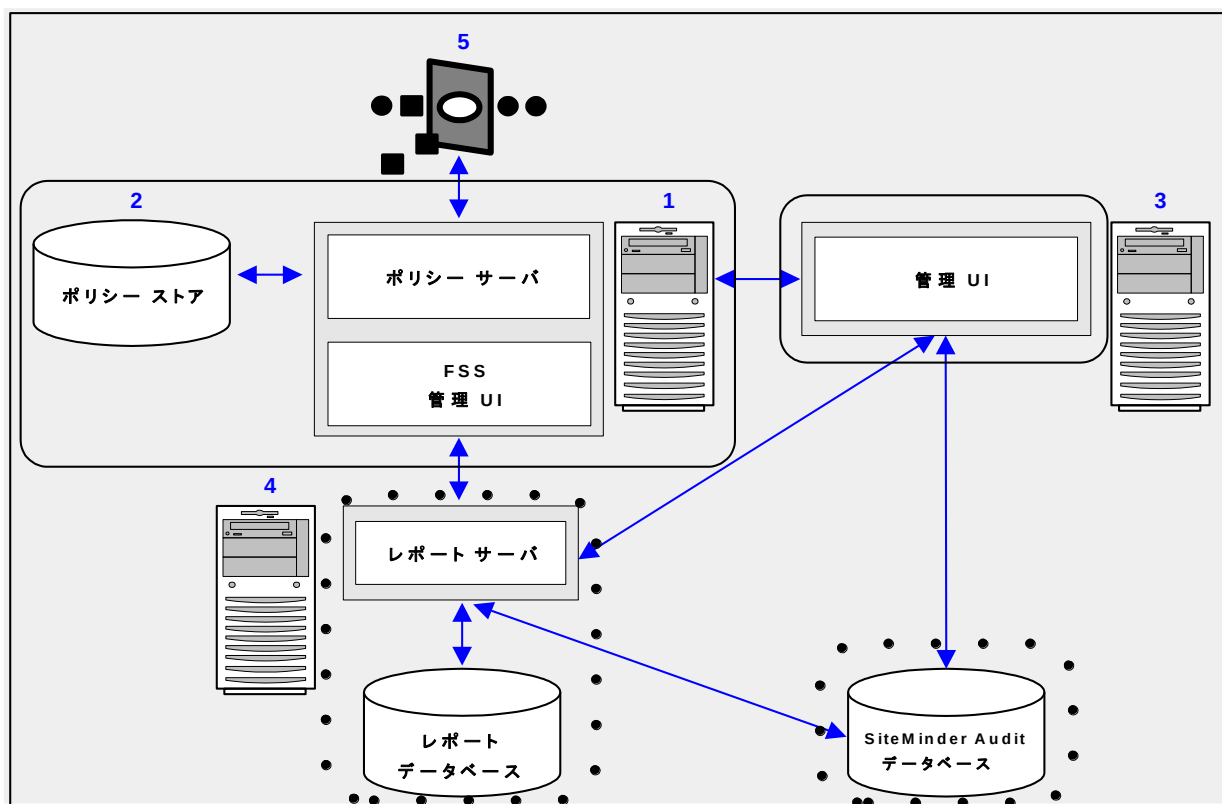
- [インストール ロード マップ](#) (P. 327)
- [レポートサーバ インストール オプション](#) (P. 329)
- [インストール チェックリストのレポート](#) (P. 329)
- [レポートの考慮事項](#) (P. 334)
- [レポートインストールのしくみ](#) (P. 335)
- [レポートサーバをインストールする方法](#) (P. 336)
- [レポートテンプレートをインストールする方法](#) (P. 350)
- [レポートサーバを登録する方法](#) (P. 356)
- [監査データベースを設定する方法](#) (P. 364)
- [レポートスケジューラの開始](#) (P. 367)
- [レポートサーバの停止](#) (P. 369)
- [レポートをアンインストールする方法](#) (P. 370)
- [管理 UI へのレポートサーバ接続の削除](#) (P. 374)
- [レポートサーバの再インストール](#) (P. 375)

インストール ロード マップ

以下の図はサンプル SiteMinder のインストールを示しており、各コンポーネントのインストールおよび設定の指示がリスト表示されています。

- 実線で囲まれているのは、レポートのインストールおよび設定前に必要なコンポーネントです。コンポーネントには、以下のものが含まれます。
 - ポリシー サーバ
 - ポリシー ストア
 - ポリシー サーバに登録された 管理 UI
- 点線で囲まれているのは、今からインストールおよび設定するコンポーネントです。コンポーネントには、以下のものが含まれます。
 - レポート サーバ
 - レポート データベース

- SiteMinder 監査データベース



レポート サーバ インストール オプション

以下の 2 つのインストール オプションが利用可能です。

- **標準** - 標準インストールでは、MySQL および Apache Tomcat の埋め込みバージョンを使用して、それぞれがレポート データベースおよび Web サーバとして機能するようにレポート サーバをインストールすることができます。
- **カスタム** - カスタムインストールでは、SQL Server または Oracle のサポートされているバージョンを、レポート データベースとして機能するように設定することができます。

重要: カスタム インストールで MySQL および追加アプリケーション サーバタイプの既存インスタンスを設定できますが、SiteMinder は MySQL および Apache Tomcat の埋め込みバージョンのみをサポートします。カスタム インストール オプションを使用してインストールする場合は、レポート データベースとして SQL Server または Oracle のみを設定し、Apache Tomcat の埋め込みバージョンのみをインストールすることを確認してください。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

インストール チェックリストのレポート

以下の確認のために、レポート サーバおよびレポート データベース チェックリストを確認します。

- 環境が最小のオペレーティング システムおよびデータベース要件を満たしている
- 要件となる設定を完了している

レポート サーバ

- レポートサーバ ホストシステムが最小のオペレーティング システム要件を満たすことを確認してください。
 - [Windows](#) (P. 29)
 - [UNIX](#) (P. 30)
- (Solaris)レポートサーバ ホストシステムに、必要なオペレーティング システムのパッチをインストールします。

注: 詳細については、「ポリシー サーバリリース ノート」を参照してください。
- レポートサーバ ホストが[接続要件](#) (P. 31)を満たすことを確認してください。
- レポートサーバ ホスト名には以下の文字がいずれも含まれないようにしてください。
 - アンダースコア (_)
 - ピリオド (.)
 - スラッシュ (/) または円記号 (\)
- レポートサーバを再インストールする場合は、現在のインスタンスをアンインストールします。既存のインスタンスに上書きしてインストールしようとすると、インストールは失敗します。
- Windows インストール
 - ローカル管理者グループのメンバであるユーザ アカウントにアクセスできることを確認してください。インストーラを実行するユーザ アカウントは、ローカル管理者グループのメンバである必要があります。

重要: デフォルトの Windows セキュリティ設定がローカル管理者グループ用に変更されたシステムへのインストールは、サポートされていません。
 - インストールされるシステムがドメイン コントローラではないことを確認してください。ドメイン コントローラへのインストールは、サポートされていません。
- UNIX インストール
 - IP 解決の問題を回避するため、レポートサーバ ホスト IP が `/etc/hosts` ファイルに正しく設定されていることを確認してください。

- **root** ユーザ アカウントおよび非 **root** ユーザ アカウントにアクセスできることを確認してください。インストールを開始するためには **root** ユーザ アカウントを必要とし、インストールを完了させるためには非 **root** ユーザ アカウントを必要とします。非 **root** ユーザ アカウントが以下であることを確認してください。
 - 有効なホーム ディレクトリの所有者である
 - ホーム ディレクトリへの書き込み権限がある
- 以下のコマンドおよびユーティリティがオペレーティング システムにインストールされており、**root** ユーザ アカウント用の **PATH** 環境変数で使用可能であることを確認してください。
 - `/bin/sh`
 - `uname`
 - `awk`
 - `tar`
 - `stty`
 - `pwd`
 - `expr`
 - `chown`
 - `id`
 - `ulimt`
 - `read`
 - `hostname`
 - `grep`
 - `dirname`
 - `which`
 - `touch`
 - `sed`
 - `tail`
 - `gzip`

- root ユーザ アカウント用の **PATH** 環境変数に、コア システムのコマンドライン ツールの **GNU** やサードパーティ製のそれに相当するものが含まれていないこと、またはこのツールの個別にダウンロードおよびコンパイルされたバージョンが含まれていないことを確認します。
- 以下の変数の少なくとも 1 つを、有効な **utf8/UTF-8** ロケールに設定します。
 - **LC_ALL**
例: `export LC_ALL=en_US.UTF-8`
 - **LANG**
例: `export LANG=en_US.UTF-8`
 - **LC_CTYPE**
例: `export LC_CTYPE=en_US.UTF-8`

レポート データベースおよび監査データベース

- 埋め込みの **MySQL** バージョンを使用していない場合
 - データベース サーバ ホスト システムに、固定されたホスト名が使用されていることを確認します。
 - サポートされるデータベースを[レポート データベース \(P. 31\)](#)として使用していることを確認します。
 - 新しい空のデータベースが使用可能であることを確認します。
 - データベース クライアントおよびサーバが **UTF8** 文字エンコーディングを使用するよう設定されていることを確認します。**Unicode** 設定に必要な設定の詳細については、ベンダー固有のドキュメントを参照してください。
- (SQL Server) **SQL Server** をレポート データベース、監査データベースまたはその両方として使用する場合は、レポート サーバ ホスト システム上で以下を実行します。
 - **SiteMinder** がサポートする **SQL Server** ドライバを、必ずレポート サーバ ホスト システムにインストールしてください。
 - 各データベースを識別するデータ ソース名 (**DSN**) を作成します。レポート サーバは、各データベースと通信するために **DSN** を使用します。

- (Oracle)レポートデータベース、監査データベース、またはその両方に Oracle を使用している場合:
 - レポートサーバホストシステムで以下を実行します。
 - サポートされた **Oracle Net** クライアントがインストールされていることを確認します。
 - **Oracle Net** サービス名を使用して、`tnsnames.ora` ファイル内に各データベースを特定します。レポートサーバは、このサービス名を使用して各データベースと通信します。
 - `NLS_LANG` 変数を以下の UTF-8 設定のいずれかに設定します。
 - `AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252`
 - `AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8`
 - `ORACLE_HOME` 変数を *Oracle_Net_client* に設定します。

Oracle_Net_client

Oracle Net クライアントのインストールパスを指定します。

Windows の例: `C:\oracle\product\10.2.0\client`

UNIX の例: `export ORACLE_HOME=/opt/oracle/product/10.2.0/client1`
 - (Windows) `ORACLE_HOME` 変数をシステム環境変数に追加します。

例: `%Oracle_Home%\bin`
 - (UNIX) `LD_LIBRARY_PATH` 変数を `$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/lib` に設定します。

例:

`LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH`
 - (UNIX)パス変数を `$ORACLE_HOME/bin:$PATH` に設定します。

例: `export PATH=$ORACLE_HOME/bin:$PATH`
 - データベースサーバホストシステム上で次の手順に従います:

`NLS_LANG` 変数を以下の UTF-8 設定のいずれかに設定します。

 - `AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252`
 - `AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8`

レポートの考慮事項

レポートサーバをインストールする前に、以下を考慮します。

- 他の SiteMinder コンポーネントを備えたホストシステムにレポートサーバをインストールすることはサポートされていません。別のホストシステムにレポートサーバをインストールしてください。
- UNIX インストールには数時間かかる場合があります。インストールの前に、ページサイズを 4GB またはそれ相当の RAM サイズに増やしてください。インストールが 4 時間より長くなる場合は、インストールを停止し、ページサイズを増やします。
- レポートサーバホストシステムに JBoss がインストールされる場合、ポートのコンフリクトが発生する場合があります。レポートサーバのインストール後にポートのコンフリクトが発生した場合、以下のファイル内に JBoss ポート情報を置くことができます。

- jboss-service.xml

デフォルトの場所: `jboss_home\server\server_configuration\conf`

- server.xml

デフォルトの場所:

`jboss_home\server\server_configuration\deploy\jbossweb-tomcat55.sar`

`jboss_home`

JBoss のインストールパスを指定します。

`server_configuration`

サーバ設定の名前を指定します。

デフォルト値: `default`

注: これらのファイルのどちらかを変更する場合は、JBoss を再起動します。詳細については、Red Hat のドキュメントを参照してください。

- service-bindings.xml

スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI がレポートサーバホストシステムにインストールされた場合、このファイルはただ存在しているだけです。

デフォルトの場所: `administrative_ui_install\webadmin\conf`
`administrative_ui_installation`

管理 UI インストール パスを指定します。

注: このファイルを変更する場合は、管理 UI アプリケーション サーバを再起動します。

詳細情報:

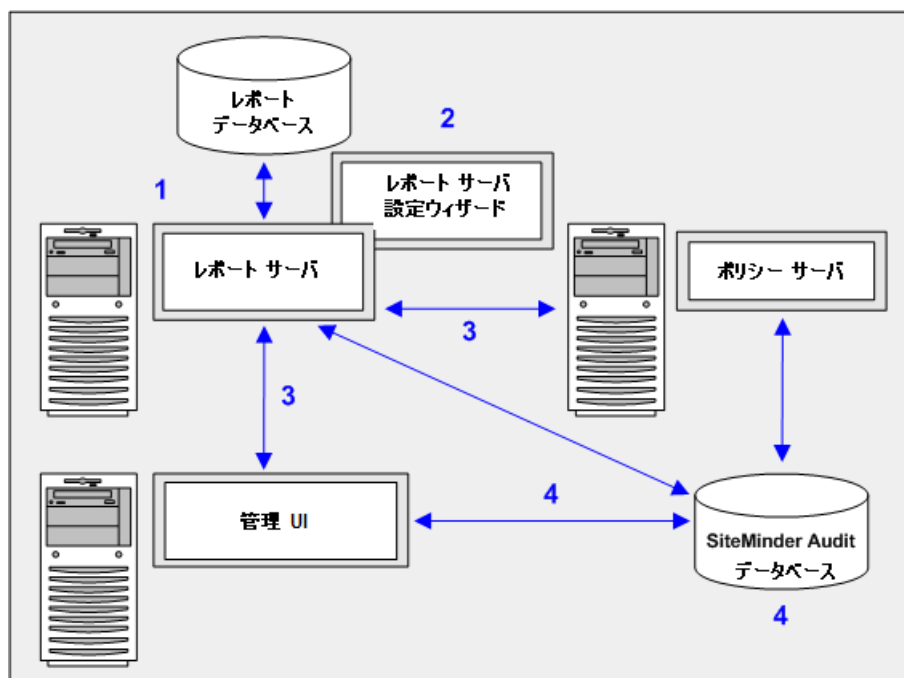
[管理 UI インストール オプション](#) (P. 292)

[アプリケーション サーバの起動](#) (P. 305)

[アプリケーション サーバを停止します。](#) (P. 306)

レポート インストールのしくみ

SiteMinder レポート機能は、SiteMinder ポリシー分析および監査ベースのレポートを管理するために、レポートサーバ、レポートデータベースおよび SiteMinder 監査データベースのインストールおよび設定を必要とします。以下の図はサンプル SiteMinder 環境を詳述しており、各コンポーネントのインストールまたは設定の指示がリスト表示されています。



以下のリストで、示された各ステップについて説明します。

1. **レポート サーバのインストール** - レポート サーバのインストールがプロセスの第 1 段階です。インストール中にレポート データベースを設定します。
2. **SiteMinder レポート テンプレートのインストール** - SiteMinder レポート テンプレートのインストールがプロセスの第 2 段階です。SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードは、1 セットの SiteMinder ポリシー分析および監査レポート テンプレートを使用するために、レポート サーバを設定します。
3. **レポート サーバの登録** - レポート サーバの登録がプロセスの第 3 段階です。登録には、以下の間の接続設定が必要です。
 - レポート サーバおよびポリシー サーバ
 - レポート サーバおよび 管理 UI
4. **SiteMinder 監査データベースの設定** - SiteMinder 監査データベースの設定がプロセスの第 4 段階です。監査ベースのレポートを実行するために、管理 UI に登録された個別の SiteMinder 監査データベースが必要です。

レポート サーバをインストールする方法

レポート サーバをインストールするには、以下の手順に従います。

1. インストール チェックリストを確認します。
2. インストーラ用の情報を収集します。
3. レポート サーバをインストールします。

インストーラのための情報の収集

レポート サーバ インストーラが必要とする情報を識別するために、以下のセクションを確認します。

注: レポート サーバのインストールおよび登録前に必要な情報を収集および記録するために、ワークシートが提供されます。

インストール認証情報

インストールするオペレーティング システムによって、インストーラは以下のような認証情報を必要とします。

■ (Windows および UNIX) BusinessObjects 管理者パスワード

インストーラは、デフォルトの SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウント(administrator)を作成します。このアカウントを使用して、SiteMinder レポート テンプレートをインポートし、BusinessObjects Content Management Console にアクセスします。このアカウントのパスワードを決定します。

パスワードは以下の構成基準を満たす必要があります：

- パスワードは 6 文字以上である必要があります。
- パスワードは、どのような形であっても「administrator」という語を含むことはできません。
- パスワードには、以下の文字タイプのうち少なくとも 2 種類を含む必要があります。
 - 大文字
 - 小文字
 - 数字
 - 句読点
- (UNIX) 非 root ユーザ アカウント - インストールを開始するためには root ユーザ アカウントを必要とし、インストールを完了させるためには非 root ユーザ アカウントを必要とします。以下のように、非 root ユーザ アカウントを識別します。
 - ユーザ名
 - グループ名

詳細情報：

[インストール認証情報ワークシート](#) (P. 431)

MySQL レポート データベース

埋め込みの MySQL バージョンをレポート データベースとして使用する場合、インストーラは以下の情報を必要とします。インストールを開始する前に、レポート データベース インストール ワークシートを使用して以下の情報を収集します。

- **MySQL root パスワード**

MySQL root ユーザ アカウントのパスワード

注: root ユーザ アカウントの名前を変更することはできません。インストーラは、名前をデフォルトで **root** にします。

- **ユーザ**

レポート データベース管理者アカウントの名前。

インストーラ デフォルト: **sa**

- **パスワード**

レポート データベース管理者アカウントによって使用されるパスワード。

詳細情報:

[MySQL レポート データベース ワークシート](#) (P. 431)

Microsoft SQL Server レポート データベース

Microsoft SQL Server をレポート データベースとして使用する場合、インストーラは以下の情報を必要とします。インストールを開始する前に、レポート データベース インストール ワークシートを使用して以下の情報を収集します。

- **データソース名 (DSN)**

レポート サーバがレポート データベースと通信するために使用する DSN。

注: レポート サーバは、32 ビット ネイティブ バイナリとしてコンパイルされ、32 ビット データソースミドルウェア接続を使用するよう設定されます。

Windows 64 ビット オペレーティング システムにインストールしている場合は、必ず **odbcad32.exe** を使用して DSN を作成してください。この実行ファイルは、以下の場所にあります。

`install_home\Windows\SysWOW64`

`install_home`

Windows オペレーティング システムのインストール パスを指定します。

- ログイン ID

レポート データベース管理者アカウントの名前。このアカウントにはデフォルト (DBO) のアカウント権限が必要です。

- パスワード

レポート データベース管理者アカウントのパスワード。

詳細情報:

[SQL Server レポート データベース ワークシート](#) (P. 432)

Oracle レポート データベース

Oracle をレポート データベースとして使用する場合、インストーラは以下の情報を必要とします。インストールを開始する前に、レポート データベース インストール ワークシートを使用して以下の情報を収集します。

- Oracle Net クライアント サービス名

レポート サーバがレポート データベースと通信するために使用するサービス名。

- (Windows) インストーラは Oracle Net クライアント サービス名をサーバとして参照します。
- (UNIX) インストーラは Oracle Net クライアント サービス名を TNSNAME として参照します。

- ユーザ名

レポート データベース管理者アカウントの名前。このアカウントには以下の権限が必要です。

- セッションの作成 (create session)
- 表の作成 (create table)
- プロシージャの作成 (create procedure)

注: 管理者アカウントは、CONNECT と RESOURCE のロールを有効にして使用することもできます。両方のロールに対して Admin Option 設定は必ず無効にしてください。

- パスワード

レポート データベース管理者アカウントのパスワード。

詳細情報:

[Oracle Report データベースのワークシート](#) (P. 432)

Apache Tomcat のインストール

SiteMinder では、レポート サーバ インストールに埋め込まれた **Apache Tomcat** のバージョンのみをサポートします。インストールを開始する前に、**Web アプリケーション インストール ワークシート**を使用して以下の情報を収集します。

- 接続ポート

Apache Tomcat が接続してリクエストを待機するポート。

インストーラ デフォルト: 8080

- リダイレクト ポート

Apache Tomcat がリクエストをリダイレクトするポート。

インストーラ デフォルト: 8443

- シャットダウン ポート

Apache Tomcat SHUTDOWN コマンドが発行されるポート。

インストーラ デフォルト: 8005

詳細情報:

[Apache Tomcat ワークシート](#) (P. 432)

レポート サーバのインストール

以下のセクションは、**Windows** および **UNIX** にレポート サーバをインストールする方法を詳述します。

インストールする前に

レポートサーバをインストールする前に、以下を考慮します。

- 他の SiteMinder コンポーネントを備えたホスト システムにレポートサーバをインストールすることはサポートされていません。別のホスト システムにレポートサーバをインストールしてください。
- テクニカル サポートサイトで、インストール メディアを使用してレポートサーバをインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- レポートサーバは、32 ビット ネイティブ バイナリとしてコンパイルされ、32 ビット データソースミドルウェア接続を使用するよう設定されます。Windows 64 ビット オペレーティング システムにインストールしている場合は、必ず `odbcad32.exe` を使用して DSN を作成してください。この実行ファイルは、以下の場所にあります。

`install_home\Windows\SysWOW64`

`install_home`

Windows オペレーティング システムのインストール パスを指定します。

- UNIX コンソールのインストールはサポートされていません。
- レポートサーバ インストールには、プロセスとして実行する以下のコンポーネントが含まれます。
 - Content Management Server
 - Server Intelligence Agent

これらのコンポーネントでは、通信に TCP/IP ポートが必要です。インストーラでは、レポートサーバ ホスト システム上のポート競合を防ぐためにデフォルト設定を変更することができます。

- **重要:** インストール zip には、複数のフォルダが含まれています。インストーラ実行ファイルには、このフォルダ構造が必要です。zip を展開した後にレポートサーバ インストーラを移動した場合、フォルダ構造全体を同じ場所にコピーします。このフォルダ構造からインストール メディアを実行します。

- **重要:** (UNIX)レポートサーバをインストールするユーザ アカウントは、インストール メディアが含まれるディレクトリに対して実行権限を持っている必要があります。ユーザ アカウントにこれらの権限がない場合は、以下を実行します。

```
chmod -R+x directory
```

directory

インストール メディアが存在するディレクトリを指定します。

- (UNIX)別のサブネットにまたがってレポート サーバ インストーラを実行した場合、クラッシュすることがあります。ホスト システムにレポート サーバを直接インストールします。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

Windows

Windows にレポート サーバをインストールする方法

1. [インストール チェックリスト](#) (P. 329)を必ず確認してください。
2. [インストーラに必要な情報](#) (P. 336)を収集したことを確認してください。
3. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
4. *installation_media* をダブルチェックします。

installation_media

レポートサーバのインストール実行ファイルを指定します。

CA Business Intelligence インストール ウィザードが表示され、ロケールの指定が要求されます。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

5. 英語を選択し、[OK]をクリックします。
インストーラの導入画面が表示されます。
6. [次へ]をクリックします。
CA 使用許諾契約が表示されます。

7. 使用許諾契約に同意し、[次へ]をクリックします。

CA サンプル テンプレートをインストールするかどうかを確認されます。

8. [いいえ]を選択して、[次へ]をクリックします。

注: CA サンプル テンプレートは、SiteMinder レポート テンプレートとは関係がありません。SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードが、必要なレポートテンプレートをインストールします。このウィザードは、レポート サーバをインストールした後実行します。

サイレント インストール用の応答ファイルを保存するかどうかを確認されます。

9. [はい]を選択して[次へ]をクリックします。

インストールのサマリが表示されます。

10. サマリを確認して[インストール]をクリックします。

コンポーネントがインストールされます。CA Business Intelligence セットアップウィザードが表示されます。

11. [Next]をクリックします。

インストーラの導入画面が表示されます。

12. [Next]をクリックします。

SAP BusinessObjects Enterprise 使用許諾契約が表示されます。

13. 使用許諾契約に同意し、[Next]をクリックします。

言語パックの選択が要求されます。英語がデフォルトで選択されています。

14. デフォルトの英語のままにして[Next]をクリックします。

インストール タイプの選択が要求されます。

15. [New]を選択し、以下のいずれかを実行してレポート(CMS)データベースを設定します。

- (推奨) 埋め込みの MySQL バージョンをインストールするには、[Install MySQL Database Server]を選択して[Next]をクリックします。
- 既存の Microsoft SQL Server または Oracle データベースを設定するには、[Use an existing database server]を選択して[Next]をクリックします。

Content Management Server のポートおよび SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウントのパスワードの入力が要求されます。

16. 以下の手順を実行します。

- a. Content Management Server がリスンするポートを指定します。
- b. デフォルトの SAP BusinessObjects Enterprise 管理者のパスワードを指定します。

重要: [Configure the SAP BusinessObjects Enterprise Administrator password at a later time] (後でパスワードを設定) は選択しないでください。

- c. [Next]をクリックします。

Server Intelligence Agent のノード名およびポートの入力が要求されます。

17. ノード名とポートを指定します。[Next]をクリックします。

レポート(CMS) データベースの設定が要求されます。

重要: レポート サーバは、CA 製品が共有できる CA の共通コンポーネントです。そのため、SiteMinder を除く他の製品でサポートされるデータベースのタイプおよびバージョンに及ぶまで、レポート データベースとしてインストーラで設定することができます。サポートされているデータベースのタイプおよびバージョンのリストについては、「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

18. 以下のいずれかを行います。

- (推奨) MySQL を設定している場合は、root ユーザ アカウントのパスワードおよびレポート データベース管理者のクレデンシャルを入力します。
- Microsoft SQL Server を設定している場合:
 - a. SQL Server (ODBC)を選択し、[Browse]をクリックして SQL Server のログオン画面を開きます。
 - b. DSN を選択し、管理者のクレデンシャルを入力します。

注: Windows の 64 ビットバージョンにインストールしている場合、[Consume DSN created under WOW64]を選択します。このオプションによって、32 ビット DSN を使用することが可能になります。
 - c. [OK]をクリックします。

- Oracle を設定している場合は、サービス名および管理者クレデンシャルに対する必要な値を入力します。

注: Auditing Database は設定しません。このコンポーネントは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポートサーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

19. [Next]をクリックします。

Web アプリケーション サーバの選択が要求されます。

20. 以下の手順を実行します。

- a. [Install Tomcat application server and deploy to it]を選択します。

注: SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

- b. [IIS Web Application Server]オプションをオフにします。

- c. [Next]をクリックします。

Apache Tomcat 情報を入力するよう要求されます。

21. Apache Tomcat ポートを入力し、[Next]をクリックします。

インストールを開始するよう要求されます。

22. [Next]をクリックして、インストールを開始します。

インストールが完了したら、インストーラのプロンプトが表示されます。

23. [Launch SAP BusinessObjects Administration Console]オプションをオフにして[Finish]をクリックします。

レポートサーバがインストールされます。

UNIX

UNIX 上にレポートサーバをインストールする方法

1. [インストール チェックリスト](#) (P. 329)を確認します。
2. [インストーラに必要な情報](#) (P. 336)が収集されたことを確認します。
3. root ユーザ アカウントを使用してインストールを開始します。
4. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。

5. Bourne シェルを開き、インストール メディアに移動します。
6. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media -i console  
installation_media
```

レポート サーバのインストール実行ファイルを指定します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

CA Business Intelligence インストーラが開始し、ロケールの指定が要求されます。

7. 英語用の値を入力し、Enter キーを押します。

インストーラの導入画面が表示されます。

8. Enter キーを押します。

CA 使用許諾契約が表示されます。

9. 以下の手順を実行します。

- a. Enter キーを押して使用許諾契約を進めます。
- b. y と入力して、使用許諾契約に同意します。
- c. Enter キーを押します。

非 root ユーザ認証情報を入力するよう要求されます。

10. ユーザ名とグループ名を入力し Enter キーを押します。

CA 共有コンポーネント ディレクトリへのパスの指定が要求されます。

11. デフォルト値のままにして Enter キーを押します。

CA サンプル テンプレートをインストールするかどうかを確認されます。

12. N を入力し、Enter キーを押します。

注: CA サンプル テンプレートは、SiteMinder レポート テンプレートとは関係がありません。SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードが、必要なレポート テンプレートをインストールします。このウィザードは、レポート サーバをインストールした後に実行します。

サイレント インストール用の応答ファイルを保存するかどうかを確認されます。

13. Yを入力し、Enter キーを押します。

インストールのサマリが表示されます。

14. サマリを確認し、Enter キーを押します。

コンポーネントがインストールされます。SAP BusinessObjects Enterprise インストーラによって、インストール言語の選択が要求されます。

15. English を選択して Enter キーを押します。

SAP BusinessObjects Enterprise 使用許諾契約が表示されます。

16. yを入力して使用許諾契約に同意します。

レポートサーバ インストール ディレクトリの入力が要求されます。

17. Tab キーを押してデフォルト設定を自動入力し、Enter キーを押します。

言語パックの選択が要求されます。英語がデフォルトで選択されています。

18. デフォルト値のままにして Enter キーを押します。

インストール タイプの選択が要求されます。

19. [User – Regular SAP BusinessObjects Enterprise installation]を選択して Enter キーを押します。

インストール タイプの選択が要求されます。

20. [New]を選択して Enter キーを押します。

注: [Enable servers upon installation]はオフにしないでください。

Content Management Server のポートおよび SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウントのパスワードの入力が要求されます。

21. 以下の手順を実行します。

a. Content Management Server が接続してリクエストをリスンするポートを指定します。

b. デフォルトの SAP BusinessObjects Enterprise 管理者のパスワードを指定します。

c. Enter キーを押します。

レポート(CMS)データベースとして機能するデータベースのタイプを選択することが要求されます。

22. 以下のいずれかを行います。

- (推奨) 埋め込みの MySQL バージョンをインストールするには、MySQL のインストールを選択して Enter キーを押します。
- 既存の Oracle データベースを設定するには、既存のデータベースサーバの使用を選択して Enter キーを押します。

重要: レポートサーバは、CA 製品が共有できる CA の共通コンポーネントです。そのため、SiteMinder を除く他の製品でサポートされるデータベースのタイプおよびバージョンに及ぶまで、レポートデータベースとしてインストールで設定することができます。サポートされているデータベースのタイプおよびバージョンのリストについては、「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

追加のレポート データベース情報が要求されます。

23. 以下のいずれかを行います。

- (MySQL) root ユーザ アカウントおよびレポート データベース管理者クレデンシヤルに対する必要な値を入力します。
- (Oracle) 以下を実行します。
 - a. Oracle を選択して Enter キーを押します。
データベース情報が要求されます。
 - b. サービス名および管理者クレデンシヤルを入力します。

24. Enter キーを押します。

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、Auditing Database 情報が要求されます。
- Oracle を設定している場合、Auditing Database のインストールが要求されます。

Auditing Database は SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポートサーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

25. 以下のいずれかを行います。

- (MySQL) デフォルトのままにして Enter キーを押します。
- (Oracle) 以下を実行します。
 - a. [Do not install Auditing Database]を選択して Enter キーを押します。
データベースの再初期化が要求されます。
 - b. Yes を選択して Enter キーを押します。

Service Intelligence Agent のノード名およびポートの指定が要求されます。

26. ノード名とポートを入力して Enter キーを押します。

Web アプリケーション サーバの選択が要求されます。

27. [Install Tomcat deploy web applications]を選択します。

注: SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

Apache Tomcat ポートを入力するよう要求されます。

28. 必要な Apache Tomcat ポート情報を入力して Enter キーを押します。

インストーラに、インストール ディレクトリのパスが表示されます。

29. Enter キーを押してインストールを開始します。

インストールの進捗状況が表示され、インストールの完了を確認します。

30. Enter キーを押してインストーラを終了します。

レポート サーバ インストールのトラブルシューティング

レポートサーバ インストールのトラブルシューティングには、以下のファイルを使用します。

- CA_Business_Intelligence_InstallLog.log

報告されたエラーを表示するために、まずこのログを開くことをお勧めします。

- ca-install.log

報告されたエラーを表示するために、このファイルの下部までスクロールすることをお勧めします。「BIEK_GetExitCode」を検索し、「BIEK_GetExitCode」関数の戻り値を確認します。戻り値が 0 でない場合は、インストール エラーがあります。エラーの原因を判定するため、以下のキーワードを検索します。

- エラー
- 警告
- CMS
- InfoStore

ログ ファイルは、インストール中は一時的な保存場所にあります。システム上の TEMP 環境プロパティは、一時的な保存場所を決定します。インストールが失敗した場合、ログ ファイルはこの一時的な保存場所で見つけることができます。インストール成功後、ログ ファイルはレポートサーバ インストール ディレクトリの最上位にあります。

レポート テンプレートをインストールする方法

レポートテンプレートをインストールするには、以下の手順に従います。

1. インストーラ用の情報を収集します。
2. レポートテンプレートをインストールします。
3. レポートサーバを再起動します。
4. Job Server サービスのタイムアウト値を増加させます。

インストーラのための情報の収集

レポートサーバ設定ウィザードは、以下の情報を必要とします。

- **BusinessObjects 管理者パスワード** - デフォルトの BusinessObjects 管理者アカウント用のパスワードを識別します。レポートサーバインストーラは、インストール中にデフォルトの管理アカウントを作成します。インストールを完了させるために、このアカウント用のパスワードが必要です。レポートサーバ設定ウィザードは、レポートテンプレートをインストールするために、デフォルトの管理アカウントを使用するためのパスワードを必要とします。
- **SiteMinder 監査データベースタイプ** - SiteMinder 監査データベースとして機能するデータベースのタイプを識別します。監査ベースのレポートを実行するために、個別の SiteMinder 監査データベースが必要です。レポートサーバ設定ウィザードは、監査データベースタイプに基づいた 1 セットのレポートテンプレートを使用するために、レポートサーバを設定するためのデータベースタイプを必要とします。

注: レポートサーバ設定ウィザードを実行する前に、SiteMinder 監査データベースを設定する必要はありません。

ワークシートは、レポートテンプレートのインストール前に必要な情報を収集および記録するために提供されます。

レポートテンプレートのインストール

レポートサーバ設定ウィザードで、SiteMinder レポートテンプレートをインストールします。以下のセクションは、Windows および UNIX でレポートサーバ設定ウィザードを実行する方法を詳述します。

インストールする前に

レポート テンプレートをインストールする前に、以下を考慮します。

- テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用してレポート サーバ設定ウィザードを実行します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- **重要:** (UNIX) アクセス権によっては、以下のコマンドを実行することでインストール メディアへの実行アクセス権を追加する必要があります。

```
chmod +x installation_media
```

installation_media

レポートサーバ設定ウィザードのインストール実行ファイルの名前を指定します。

- (UNIX) 別のサブ ネットにわたってレポート サーバ設定ウィザードを実行すると、クラッシュする場合があります。レポート サーバ ホスト システムに、レポート テンプレートを直接インストールします。

Windows

Windows にレポート テンプレートをインストールする方法

1. [インストーラに必要な情報](#) (P. 351)を収集したことを確認してください。
2. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
3. *installation_media* をダブルチェックします。

installation_media

レポートサーバ設定ウィザードのインストール実行ファイルの名前を指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. 各プロンプトについては、完了したレポート サーバ設定ワークシートを使用して必要な値を入力します。

5. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。
レポート テンプレートがインストールされます。
6. レポート サーバを再起動します。
レポート サーバは、SiteMinder レポート テンプレートを使用するように設定されます。

UNIX GUI

UNIX GUI を使用して、レポート テンプレートをインストールする方法

1. [インストーラに必要な情報](#) (P. 351)を収集したことを確認してください。
2. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
3. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
4. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media gui  
installation_media
```

レポートサーバ設定ウィザードのインストール実行ファイルの名前を指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

5. 各プロンプトについては、完了したレポートサーバ設定ワークシートを使用して必要な値を入力します。

注: Oracle は Solaris レポートサーバ用にサポートされている唯一の監査データベースです。Solaris にレポートサーバをインストールした場合には、監査データベースタイプの指定を要求されません。レポートサーバ設定ウィザードは、自動的に Oracle 固有のレポートテンプレートをインストールします。

6. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。
レポート テンプレートがインストールされます。
7. レポート サーバを再起動します。
レポート サーバは、SiteMinder レポート テンプレートを使用するように設定されます。

UNIX コンソール

UNIX コンソールを使用して、レポート テンプレートをインストールする方法

1. [インストーラに必要な情報 \(P. 351\)](#)を収集したことを確認してください。
2. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
3. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
4. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media -i console  
installation_media
```

レポート サーバ設定ウィザードのインストール実行ファイルの名前を指定します。

```
-i console
```

UNIX コンソール内で開始するインストールを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

5. 各プロンプトについては、完了したレポート サーバ設定ワークシートを使用して必要な値を入力します。

注: Oracle は Solaris レポート サーバ用にサポートされている唯一の監査データベースです。Solaris にレポート サーバをインストールした場合には、監査データベースタイプの指定を要求されません。レポート サーバ設定ウィザードは、自動的に Oracle 固有のレポート テンプレートをインストールします。

6. インストール設定を確認し、Enter キーを押します。
レポート テンプレートがインストールされます。
7. レポート サーバを再起動します。

レポート サーバは、SiteMinder レポート テンプレートを使用するように設定されます。

ジョブ サーバ サービス タイムアウト値の増加

いくつかのレポート サーバ サービスには、10 分のデフォルトタイムアウトがあります。レポートサーバが大きな分析レポートを生成するためには、10 分以上かかる場合があります。

大きな分析レポートが正常に生成されるように、Crystal Reports Job Server サービスのタイムアウト値を増加させます。

Windows でのタイムアウト値の増加

Crystal Reports Job Server サービスのデフォルト タイムアウト値を増加させる方法

1. [スタート]-[プログラム]-[BusinessObjects XI 3.1]-[BusinessObjects Enterprise]-[Central Configuration Manager]をクリックします。
Central Configuration Manager コンソールが表示されます。
2. [Crystal Reports Job Server]を右クリックし、[停止]を選択します。
Crystal Reports Job Server サービスが停止します。
3. [Crystal Reports Job Server]を右クリックし、[プロパティ]を選択します。
Crystal Reports Job Server プロパティダイアログ ボックスが表示されます。
4. プロパティタブから、コマンド フィールド内の文字列の最後に以下を追加します。

`-requesttimeout 6000000`

注: タイムアウト値はミリ秒で測定されます。6000000 に指定すると、タイムアウト値は 1 時間に増加されます。

5. [OK]をクリックします。
Central Configuration Manager が表示されます。
6. [Crystal Reports Job Server]を右クリックし、[開始]を選択します。
Crystal Reports Job Server サービスが開始されます。
7. Central Configuration Manager を終了します。
Crystal Reports Job Server サービス用のタイムアウト値は 1 時間に設定されます。

UNIX でのタイムアウト値の増加

Crystal Reports Job Server サービスのデフォルト タイムアウト値を増加させる方法

1. `report_server_home/CommonReporting3/bobje` に移動します。
`report_server_home`
レポートサーバのインストール パスを指定します。
2. `ccm.config` ファイルを開き、`reportjobserverLAUNCH` キー用の値の最後に以下を追加します。

```
-requesttimeout 6000000
```

注: タイムアウト値はミリ秒で測定されます。6000000 に指定すると、タイムアウト値は 1 時間に増加されます。

3. `ccm.config` ファイルを保存して閉じます。

Crystal Reports Job Server サービス用のタイムアウト値は 1 時間に設定されます。

レポートサーバを登録する方法

レポートサーバの登録は、ポリシー サーバ ホストシステム、レポートサーバ ホストシステムおよび 管理 UI ホストシステムへのアクセスを必要とします。登録プロセス

- レポートサーバとポリシー サーバの間に、信頼できるリレーションシップを確立します。
- レポートサーバと 管理 UI の間に、信頼できるリレーションシップを確立します。

レポートサーバを登録するには、以下の手順に従います。

1. クライアント名とパスフレーズを作成します。
2. 登録情報を収集します。
3. ポリシー サーバにレポートサーバを登録します。
4. レポートサーバを再起動します。
5. 管理 UI への接続を設定します。

クライアント名とパスフレーズの作成

XPSRegClient ユーティリティを実行すると、クライアント名とパスフレーズを作成できます。クライアント名とパスフレーズは、以下のような値です。

- 登録するレポートサーバを識別するためにポリシー サーバが使用する値
- ポリシー サーバにレポート サーバを登録するために XPSRegClient ツールで使用する値

登録ツールを実行する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムからコマンドライン ウィンドウを開きます。
2. *siteminder_home/bin* に移動します。

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient client_name[:passphrase] -report -t timeout -r retries  
-c comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

client_name

登録するレポートサーバの名前を識別します。

制限: 値は一意である必要があります。たとえば、すでに **reportserver1** を使用している場合は、「**reportserver2**」と入力します。

注: この値は記録しておいてください。この値は、レポートサーバ ホストシステムから登録処理を完了するときに必要です。

passphrase

レポートサーバ登録を完了するのに必要なパスワードを指定します。

制限: パスフレーズは

- 6 文字以上にする必要があります。
- パスフレーズには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含めることができません。
- パスフレーズにスペースが含まれる場合、引用符で囲む必要があります。

この手順でパスフレーズを指定しない場合、XPSRegClient でパスフレーズの入力と確認が求められます。

注: この値は記録しておいてください。この値は、レポートサーバ ホストシステムから登録処理を完了するときに必要です。

-report

レポートサーバの登録を指定します。

-t timeout

(オプション) レポートサーバ ホストシステムからの登録処理を完了する必要がある時間を指定します。タイムアウト値に到達すると、ポリシーサーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 240 (4 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (1 日)

-r retries

(オプション) レポートサーバ ホストシステムからの登録処理を完了するまでに許容される試行の失敗回数を指定します。登録時に間違ったパスフレーズをサブミットすると、登録に失敗することがあります。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(オプション) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(オプション) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。登録ツールにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log path

(オプション) 登録ログ ファイルをエクスポートする必要がある場所を指定します。

デフォルト: siteminder_home¥log。siteminder_home はポリシー サーバがインストールされている場所です。

-e error path

(オプション) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(オプション) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(オプション) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(オプション) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(オプション) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(オプション) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

登録ログ ファイルの名前が一覧表示されます。パスフレーズを指定しなかった場合、入力求められます。

4. Enter キーを押します。

登録ツールにより、クライアント名とパスフレーズが作成されます。

これで、ポリシー サーバにレポートサーバを登録できるようになりました。レポートサーバ ホストシステムからの登録処理が完了しました。

登録情報の収集

レポートサーバとポリシー サーバの間で登録処理を完了するには、特定の情報が必要です。レポートサーバ ホストシステムから **XPSRegClient** ユーティリティを実行する前に、以下の情報を集めます。

- クライアント名 - XPSRegClient ツールを使用して指定したクライアント名。
- パスフレーズ - XPSRegClient ツールを使用して指定したパスフレーズ。
- ポリシー サーバ ホスト - ポリシー サーバ ホストシステムの IP アドレスまたは名前。

ポリシー サーバにレポートサーバを登録します

ポリシー サーバにレポートサーバを登録して、両方のコンポーネント間に信頼関係を作成します。レポートサーバ登録ツールを使用して、レポートサーバホストシステムからの接続を設定します。

ポリシー サーバへの接続を設定する方法

1. レポートサーバホストシステムからコマンドラインウィンドウを開き、*report_server_home/external/scripts* に移動します。

report_server_home

レポートサーバのインストール場所を指定します。

デフォルト: (Windows) C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting

デフォルト: (UNIX) /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting

2. 以下のいずれかのコマンドを実行します。

- (Windows)

```
regreportserver.bat -pshost host_name -client client_name -passphrase  
passphrase -psport portnum -fipsmode 0|1
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリースノートを参照してください。

- (UNIX)

```
regreportserver.sh -pshost host_name -client client_name -passphrase  
passphrase -psport portnum -fipsmode 0|1
```


-pshost *host name*

レポートサーバを登録するポリシー サーバ ホスト システムの IP アドレス または名前を指定します。

-client *client name*

クライアント名を指定します。クライアント名は、登録するレポート サーバのインスタンスを識別します。

注: この値は、ポリシー サーバ ホスト システムでレポート サーバを登録したときに、XPSRegClient ユーティリティを使用して指定したクライアント名と一致する必要があります。

例: XPSRegClient ユーティリティを使用したときに「reportserver1」を指定した場合、「reportserver1」と入力します。

-passphrase *passphrase*

クライアント名とペアになるパスフレーズを指定します。クライアント名は、登録するレポート サーバのインスタンスを識別します。

注: この値は、ポリシー サーバ ホスト システムでレポート サーバを登録したときに、XPSRegClient ユーティリティを使用して指定したパスフレーズと一致する必要があります。

例: XPSRegClient ユーティリティを使用したときに「SiteMinder」を指定した場合、「SiteMinder」と入力します。

-psport *portnum*

(オプション)ポリシー サーバが登録リクエストをリスニングしているポートを指定します。

fipsmode

(オプション)レポート サーバとポリシー サーバとの間の通信を暗号化する方法を指定します。

デフォルト: 0

- 0 は FIPS 互換モードを指定します。
- 1 の場合、FIPS のみのモードを指定します。

3. Enter キーを押します。

登録が成功したことを示すメッセージが表示されます。

レポート サーバを再起動します。

Windows 上のレポート サーバを再起動する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[BusinessObjects XI 3.1]-[BusinessObjects Enterprise]-[Central Configuration Manager]をクリックします。
Central Configuration Manager コンソールが表示されます。
2. Apache Tomcat および Server Intelligence Agent サービスを停止します。
レポートサーバが停止します。
3. Apache Tomcat および Server Intelligence Agent サービスを開始します。
レポートサーバが再起動されます。

UNIX 上のレポート サーバを再起動する方法

1. レポートサーバをインストールした非 root ユーザとしてシステムにログインします。
2. 以下の環境変数の少なくとも 1 つは、必ず有効な utf8/UTF-8 ロケールに設定してください。

- LC_ALL
- LANG
- LC_CTYPE

3. *report_server_home*/CommonReporting3/external/scripts に移動し、以下のコマンドを実行します。

```
../setupenv.sh
```

```
report_server_home
```

レポートサーバのインストール パスを指定します。

4. 以下を確認してください。
 - IAM_RPTSRV_HOME 変数は、*report_server_home*/CommonReporting3 に設定されます。

```
report_server_home
```

レポートサーバのインストール パスを指定します。

- (Oracle レポート データベースのみ) LD_LIBRARY_PATH 変数は、\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib:\$ETPKIHOME/lib:\$LD_LIBRARY_PATH に設定されます。

例: エクスポート

```
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/lib:$ETPKIHOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
```

- ETPKIHOME 変数は、*report_server_home/CommonReporting3* に設定されます。

report_server_home

レポートサーバのインストールパスを指定します。

5. *report_server_home/CommonReporting3/bobje* に移動し、以下のコマンドを実行します。

```
./stopservers
```

report_server_home

レポートサーバのインストールパスを指定します。

6. 以下のコマンドを実行します。

```
./tomcatshutdown.sh
```

レポートサーバが停止します。

7. 以下のコマンドを実行します。

```
./startservers
```

8. 以下のコマンドを実行します。

```
./tomcatstartup.sh
```

レポートサーバが再起動されます。

管理 UI への接続の設定

レポートサーバと管理 UI の接続を設定し、両方のコンポーネント間の信頼関係を設定します。管理 UI からの接続を設定します。

注: 管理 UI にはポリシーサーバとの信頼関係を 1 つ以上設定できます。ただし、各信頼関係で確立できるレポートサーバ接続は 1 つだけです。新しいレポートサーバに接続する必要がある場合、現在のレポートサーバ接続を削除するか、別のポリシーサーバに接続して、接続を設定します。

管理 UI への接続を設定する方法

1. 管理 UI にログインします。
2. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
3. [レポート接続]-[レポート サーバ接続の作成]をクリックします。

[レポート サーバ接続の作成]ペインが表示されます。

注:それぞれの要件および制限など、設定とコントロールの説明を参照するには、[ヘルプ]をクリックします。

4. [接続名]フィールドに接続名を入力します。
5. [サーバホストのレポート]フィールドに、レポート サーバ ホスト システム名または IP アドレスを入力します。
6. [Tomcat ポート]フィールドに **Apache Tomcat 接続ポート**を入力します。

注: この値は、レポート サーバをインストールするときに入力した **Web** サーバポートです。

7. それぞれのフィールドに管理者パスワードを入力します。

注: この値は、レポート サーバをインストールしたときに、デフォルト **BusinessObjects** 管理者アカウント用に入力したパスワードです。

8. [サブミット]をクリックします。

レポートサーバと 管理 UI の間の接続が設定されます。

レポートサーバのインストールおよび登録が完了しました。これで、ポリシー分析レポートを実行できるようになりました。

注: 監査レポートの作成および管理には個別の監査データベースが必要です。

監査データベースを設定する方法

SiteMinder 監査ベースのレポートを実行するために、SiteMinder 監査データベースが必要です。

注: 監査情報をテキストファイルに書き込むことは可能ですが、監査ベースのレポートを作成および管理するために、サポートされている ODBC データベース内に監査情報を格納する必要があります。サポートされているバージョンのリストについては、「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

以下の手順を完了して、監査データベースを設定します。

1. (オプション)まだ実行していない場合は、SiteMinder 監査データベースを設定します。

重要: Oracle 内の監査データベースを設定する場合には、提供するユーザアカウントに DB ロールがないことを確認してください。ユーザアカウントに DB ロールがある場合、監査ベースのレポートは正しい結果を返しません。

2. 管理 UI に監査データベースを登録します。
3. 監査データベースとレポート サーバの間の接続を設定します。

管理 UI での監査データベースの登録

管理 UI に監査データベースを登録し、コンポーネント間のトラステッド接続を作成します。管理 UI に監査データベースを登録すると、SiteMinder 管理者が監査に基づいたレポートを作成および管理できるようになります。

注: 管理 UI にはポリシー サーバとの信頼関係を 1 つ以上設定できます。ただし、監査データベースへの接続は、各信頼関係に 1 つのみです。新しい監査データベースに接続する必要がある場合、現在の接続を削除するか、別のポリシー サーバに接続して、接続を設定します。

管理 UI に監査データベースを登録する方法

1. 管理 UI にログインします。
2. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
3. [レポート接続]-[監査レポート接続の作成]をクリックします。

[監査レポート接続の作成]ペインが表示されます。

注:それぞれの要件および制限など、設定とコントロールの説明を参照するには、[ヘルプ]をクリックします。

4. [データベース ベンダー]ドロップダウンリストからデータベース ベンダーを選択します。

ベンダー固有のフィールドが表示されます。

5. [接続名]フィールドに接続の名前を入力します。
6. [データベース サーバ ホスト]フィールド内に監査データベース ホスト システム名または IP アドレスを入力します。

7. [DSN]フィールドに、以下のように監査データベース データソース情報を
入力します。
 - **Oracle** - 監査データベース DSN を作成するときに指定した Oracle Net
サービス名を入力します。

注: このサービス名は、ポリシー サーバへの監査データベース接続を
設定するときに、ポリシー サーバ管理コンソールの[データ]タブで入力
した DSN と関連付けられている必要があります。
 - **SQL Server** - DSN を入力します。

注: この DSN 名は、ポリシー サーバへの監査データベース接続を設定
するときに、ポリシー サーバ管理コンソールの[データ]タブで指定した
DSN と一致している必要があります。
8. [データベース サーバ ポート]フィールドに監査データベース サーバがリス
ニングするポートを入力します。
9. 以下のいずれかの操作を完了します。
 - **Oracle** - [サービス名]フィールドに Oracle Net サービス名を再入力しま
す。
 - **SQL Server** - [データベース名]フィールドに監査データベース名を入力
します。
10. それぞれのフィールドに監査データベース用の管理者クレデンシャルを入
力します。

注: 管理者クレデンシャルは、ポリシー サーバへの監査データベース接続
を設定するときに、ポリシー サーバ管理コンソールの[データ]タブで指定し
たクレデンシャルと一致する必要があります。
11. [サブミット]をクリックします。

監査データベースが 管理 UI に登録されます。

監査データベースおよびレポート サーバの接続性

レポートサーバは、監査ベースのレポートを作成するために SiteMinder 監査データベースに接続します。監査ベースのレポートが 管理 UI にスケジュールされるとき、管理 UI は以下の接続情報をレポート サーバに渡します。

- (Oracle) 監査データベースを識別する Oracle Net サービス名
- (Microsoft SQL Server) 以下の名前
 - 監査データベース
 - 監査データベースに接続するためのデータ ソース
- 監査データベースへのアクセスに必要なユーザ アカウント認証情報

監査データベースとレポート サーバの間の接続を設定するために、以下のいずれかを実行します。

- (Oracle) 以下を確認してください。
 - Oracle Net クライアントはレポート サーバ ホスト システムにインストールされます。
 - 監査データベースを識別する Oracle Net サービス名は、レポート サーバ ホスト システム上の `tnsnames.ora` ファイル内にあります。
- (Microsoft SQL Server) 監査データベースへの接続に使用されたデータ ソースがレポート サーバ ホスト システム上にあることを確認してください。

注: サポートされているデータベースドライバの詳細については、「r12.0 SP3 SiteMinder プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

レポート スケジューラの開始

Windows の上のレポート サーバを開始する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[BusinessObjects XI Release 2]-[BusinessObjects Enterprise]-[Central Configuration Manager]をクリックします。
Central Configuration Manager コンソールが表示されます。
2. World Wide Web Publishing Services 以外のすべてのサービスを開始します。
レポート サーバが開始されます。

UNIX の上のレポート サーバを開始する方法

1. レポート サーバをインストールした非 root ユーザとしてシステムにログインします。
2. 以下の環境変数の少なくとも 1 つは、必ず有効な utf8/UTF-8 ロケールに設定してください。

- LC_ALL
- LANG
- LC_CTYPE

3. *report_server_home*/CommonReporting/external/scripts に移動し、以下のコマンドを実行します。

```
../setupenv.sh
```

report_server_home

レポートサーバのインストール パスを指定します。

4. 以下を確認してください。

- IAM_RPTSRV_HOME 変数は、*report_server_home*/CommonReporting に設定されます。

report_server_home

レポートサーバのインストール パスを指定します。

- (Oracle レポート データベースのみ) LD_LIBRARY_PATH 変数は、\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib:\$ETPKIHOME/lib:\$LD_LIBRARY_PATH に設定されます。

例: エクスポート

```
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/lib:$ETPKIHOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
```

- ETPKIHOME 変数は、*report_server_home*/CommonReporting に設定されます。

report_server_home

レポートサーバのインストール パスを指定します。

5. *report_server_home*/CommonReporting/bobje に移動します。

report_server_home

レポートサーバのインストール パスを指定します。

6. 以下のコマンドを実行します。

```
./startservers
```

レポート サーバが開始されます。

レポート サーバの停止

Windows 上のレポート サーバを停止する方法

1. [スタート]-[プログラム]-[BusinessObjects XI Release 2]-[BusinessObjects Enterprise]-[Central Configuration Manager]をクリックします。

Central Configuration Manager コンソールが表示されます。

2. World Wide Web Publishing Services 以外のすべてのサービスを停止します。

レポート サーバが停止します。

UNIX 上のレポート サーバを停止する方法

1. レポート サーバをインストールした非 root ユーザとしてシステムにログインします。
2. 以下の環境変数の少なくとも 1 つは、必ず有効な utf8/UTF-8 ロケールに設定してください。

- LC_ALL
- LANG
- LC_CTYPE

3. *report_server_home*/CommonReporting/bobje に移動します。

report_server_home

レポート サーバのインストール パスを指定します。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
./stopservers
```

レポート サーバが停止します。

レポートをアンインストールする方法

SiteMinder レポートをアンインストールするには、以下の手順に従います。

1. SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードをアンインストールします。
2. レポート サーバをアンインストールします。
3. 残りのアイテムを削除します。
4. レポート データベース テーブルを削除します。

Windows からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール

レポート サーバ設定ウィザードをアンインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. `report_server_home\CommonReporting3\Uninstall_CASiteMinder_ConfigurationWizard` に移動します。

`report_server_home`

レポート サーバのインストール パスを指定します。

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、実行ファイルを管理者権限で実行します。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネント用のリリース ノートを参照してください。

3. `uninstall.exe` をダブルクリックします。

ウィザードが開始します。

4. プロンプトに従います。

注: 共有ファイルを削除するよう要求するメッセージが表示された場合は、[No to All]をクリックします。

5. 要求された場合はシステムを再起動します。

レポート サーバ設定ウィザードがアンインストールされます。

UNIX からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール

レポート サーバ設定ウィザードをアンインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. `report_server_home/CommonReporting3/Uninstall_CASiteMinder_ConfigurationWizard` に移動します。

`report_server_home`

レポートサーバのインストール パスを指定します。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
./uninstall
```

プロセスが開始します。

4. プロンプトに従います。

レポート サーバ設定ウィザードがアンインストールされます。

Windows からのレポート サーバのアンインストール

レポート サーバをアンインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. `report_server_home\CommonReporting3\Uninstall CA Business Intelligence 3.2` に移動します。

`report_server_home`

レポートサーバのインストール パスを指定します。

3. `Uninstall CA Business Intelligence 3.2.exe` をダブルクリックします。

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、実行ファイルを管理者権限で実行します。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネント用のリリース ノートを参照してください。

アンインストーラが開始されます。

注: レポート サーバをサイレント インストールした場合、アンインストーラはサイレントで開始されます。ウィザードを使用してアンインストールする場合は、以下のようにします。

- a. コマンドプロンプトを開きます。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリースノートを参照してください。

- b. `report_server_home\CommonReporting3\Uninstall CA Business Intelligence 3.2` に移動します。
- c. 以下のコマンドを入力します。

```
Uninstall CA Business Intelligence 3.2.exe -i swing
```

4. プロンプトに従います。

以下の点について考慮してください。

- 共有ファイルを削除するようメッセージが表示された場合は、[No to All] をクリックします。
- Java Platform SE binary および BOE120MySQL を閉じるようメッセージが表示された場合は、[Do not close applications] を選択して [OK] をクリックします。

5. 要求された場合はシステムを再起動します。

レポートサーバがアンインストールされます。

注: レポートサーバをアンインストールしてもレポートデータベース内のテーブルは削除されません。これらのテーブルは手動で削除する必要があります。

UNIX からのレポートサーバのアンインストール

レポートサーバをアンインストールする方法

1. Bourne シェルを開き、`report_server_home/CommonReporting3/Uninstall` に移動します。

`report_server_home`

レポートサーバのインストールパスを指定します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
./UninstallCABusinessIntelligence 3.2
```

プロセスが開始します。

3. プロンプトに従います。

レポート サーバがアンインストールされます。

注: レポート サーバをアンインストールしてもレポート データベース内のテーブルは削除されません。これらのテーブルは手動で削除する必要があります。

Windows アイテムの削除

システムをできるだけきれいに保つために、残存するアイテムを手動で削除します。同じシステムにレポート サーバを再インストールする場合、残存アイテムを削除することでレポート サーバのインストールの失敗を防ぎます。

レポート サーバのアンインストール後に残存するアイテムを削除する方法

1. `report_server_home` に移動します。

`report_server_home`

レポート サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のディレクトリを削除します。

`CommonReporting3`

残っていたアイテムが削除されました。

UNIX アイテムの削除

システムをできるだけきれいに保つために、残存するアイテムを手動で削除します。同じシステムにレポート サーバを再インストールする場合、残存アイテムを削除することでレポート サーバのインストールの失敗を防ぎます。

重要: 他の CA 製品は `SharedComponents` ディレクトリを共有できます。`profile.CA` ファイルは、この場所の環境変数を設定します。このファイルを削除する前に他の CA 製品が `SharedComponents` ディレクトリを共有していないことを確認します。

レポート サーバのアンインストール後に残存するアイテムを削除する方法

1. `report_server_home` に移動します。

`report_server_home`

レポート サーバのインストール パスを指定します。

2. 以下のフォルダを削除します。

`CommonReporting`

3. `/etc` に移動します。

4. 以下のファイルを削除します。

`profile.CA`

残っていたアイテムが削除されました。

レポート データベース テーブルの削除

レポート サーバをアンインストールしてもレポート データベース内のテーブルは削除されません。レポート データベースとして機能するデータベースにアクセスし、すべてのテーブルを手動で削除する必要があります。

管理 UI へのレポート サーバ接続の削除

接続が必要でなくなった場合、レポート サーバ接続を削除します。

レポート サーバ接続を削除する方法

1. [管理]-[管理 UI]をクリックします。
2. [レポート接続]-[レポート サーバ接続の削除]をクリックします。
「レポート サーバ接続の削除」ペインが表示されます。
3. 検索条件を指定し、[検索]をクリックします。
条件と一致するレポート サーバ接続が表示されます。
4. 接続を選択し、[選択]をクリックします。
接続を削除してもかまわないか確認するように促されます。
5. [はい]をクリックします。
レポート サーバ接続が削除されます。

レポート サーバの再インストール

レポートサーバを再インストールする場合は、再インストール前に既存のインスタンスをアンインストールします。既存のインスタンスに上書きして再インストールすると、インストールは失敗します。

第 12 章: OneView モニタの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[OneView モニタの概要](#) (P. 377)

[OneView モニタのシステム要件](#) (P. 378)

[OneView モニタの設定](#) (P. 378)

[同じマシン上の OneView モニタ GUI/IIS Web エージェントの制限](#) (P. 379)

[Windows/IIS 上で OneView モニタ GUI を設定する方法](#) (P. 379)

[UNIX/Sun Java System 上で OneView モニタ GUI を設定する方法](#) (P. 380)

[OneView モニタ サービスの起動](#) (P. 383)

[OneView モニタ GUI へのアクセス](#) (P. 383)

[ポリシー サーバクラスタの監視](#) (P. 384)

OneView モニタの概要

OneView モニタのインフラストラクチャは、SiteMinder コンポーネントの監視を可能にする多くのモジュールで構成されています。JRE (Java Runtime Environment) のコンテキストの中で実行される監視プロセスが含まれています。このモニタの GUI の HTML ページは、JSP (Java Server Pages) と、ポリシー サーバと同じマシン上で実行される ServletExec サーブレット エンジン上でホストされたサーブレットによって生成されます。

OneView モニタ ユーティリティは以下の SiteMinder コンポーネントを監視します。

- ポリシー サーバ
- Web エージェント

注: OneView モニタの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

OneView モニタのシステム要件

OneView モニタ GUI を設定するシステムは、少なくとも次のシステム要件を満たす必要があります。

- **JDK** - Java SDK の必須バージョンがシステムにインストールされている。
- **Servlet Engine** - Windows 用の ServletExec/ISAPI または UNIX 用の ServletExec/AS が、システムにインストールされている。
- **Web サーバ** - サポートされている Web サーバが、システムにインストールされている。

注: サポートされている CA およびサードパーティコンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポートマトリックスを参照してください。

OneView モニタの設定

ポリシー サーバをインストールするときに OneView モニタ GUI を設定しなかった場合、ポリシー サーバ設定ウィザードを使用して設定できます。

Windows の場合は、*siteminder_home*\siteminder\install_config_info に、UNIX の場合は、*siteminder_home*/siteminder/install_config_info に、以下のポリシーサーバ設定ウィザード実行可能ファイルがあります。

- **ca-ps-config.exe**

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、実行ファイルを管理者権限で実行します。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネント用のリリース ノートを参照してください。

- **ca-ps-config.bin**

siteminder_home

ポリシー サーバがインストールされている場所へのパスを指定します。

同じマシン上の OneView モニタ GUI/IIS Web エージェントの制限

エージェントで登録サービスが有効になっている場合、CA は、同じマシン上に IIS ベースの OneView モニタ GUI と IIS Web エージェントを設定することをサポートしていません。この設定では、ServletExec の同じインスタンスと競合します。

Windows/IIS 上で OneView モニタ GUI を設定する方法

Windows/IIS 上で OneView モニタ GUI を設定するには、以下の手順に従います。

1. Windows に ServletExec をインストールするための前提条件を確認します。
2. Windows/IIS 上で ServletExec/ISAPI をインストールします。
注: モニター GUI の HTML ページは、ポリシー サーバと同じマシン上で実行されている ServletExec サーブレット エンジン上でホストされている、Java Server Pages (JSP) およびサーブレットによって生成されます。
3. `policy_server_home\monitor\setting` フォルダのインターネット ゲスト アカウントに変更権限を割り当てます。
4. IIS ユーザに対して権限を設定します。
5. ポリシー サーバ インストール プログラムで OneView モニタ GUI を自動設定しなかった場合は、ポリシー サーバ 設定ウィザードを実行して設定します。
6. OneView モニタ サービスの起動
7. OneView モニタ GUI へのアクセス

Windows に ServletExec をインストールするための前提条件

CA は、ServletExec をインストールする前に、ServletExec のドキュメントを一読することをお勧めします。ServletExec が適切に実行されていない場合、OneView モニタ GUI は機能しません。OneView モニタは ServletExec のサーブレット エンジンに依存しているためです。

注: ServletExec ドキュメントには [New Atlanta Web サイト](#) でアクセスできます。

Windows IIS 上での ServletExec/ISAPI のインストール

Windows IIS 上に ServletExec/ISAPI をインストールする方法

1. ServletExec の以前のバージョンを実行している場合
 - a. 必要に応じて、ServletExec Data および Servlets サブディレクトリをバックアップします。
 - b. 以前のバージョンを削除します。
2. ServletExec ISAPI インストーラを実行します。

注: ServletExec ISAPI のインストールの詳細については、ServletExec のドキュメントを参照してください。
3. IIS Admin Web サービスおよび IIS Web サーバを停止してから再起動します。

ServletExec インストール後の IIS ユーザ用権限の設定

ServletExec/ISAPI は IIS プロセスの一部として実行されるので、実行されるたびに別のユーザとして扱われます。その結果、ServletExec インストール ディレクトリおよびサブディレクトリ用に以下の権限を設定する必要があります。

ServletExec のインストール後に IIS ユーザ用権限を設定するために、IIS (たとえばネットワーク サービス) を実行するユーザが C:\Program Files\New Atlanta 以下のディレクトリ ツリー全体に読み取りおよび書き込みアクセスができることを確認してください。

UNIX/Sun Java System 上で OneView モニタ GUI を設定する方法

UNIX/Sun Java System 上で OneView モニタ GUI を設定するには、以下の手順に従います。

1. ServletExec のインストールの前提条件を確認します。
2. Sun Java System (Sun One/iPlanet) 6.0 のサーブレットを無効にします。
3. UNIX/Sun Java System に ServletExec/AS をインストールします。
4. ポリシー サーバ インストール プログラムで OneView モニタ GUI を自動設定しなかった場合は、ポリシー サーバ設定ウィザードを実行して設定します。

5. OneView モニタ サービスを起動します。
6. OneView モニタ GUI にアクセスします。

ServletExec をインストールするための前提条件

CA は、ServletExec をインストールする前に、ServletExec のドキュメントを一読することをお勧めします。ServletExec が適切に実行されていない場合、OneView モニタ GUI は機能しません。OneView モニタは ServletExec のサーブレット エンジンに依存しているためです。

[New Atlanta Web サイト](#)で ServletExec ドキュメントを参照できます。

Sun Java System 6.0 でのサーブレットの無効化

ServletExec をインストールする前に、このセクションの手順に従っていることを確認します。

Sun Java System 6.0 内のサーブレットを無効にする方法

1. ブラウザで次の URL を入力することにより、Sun Java System Enterprise 管理サーバのホーム ページを開きます：
`http://<yourserver.com>:<portnumber>`
yourserver.com
Enterprise Administration Server のドメイン名を指定します。
port
ポート番号を指定します。
2. [Select a Server] ドロップダウン メニューで、ターゲット サーバを選択し、[Manage] をクリックします。
3. [Java] タブを選択します。
4. [Enable Java for class defaultclass] および [Enable Java Globally] をオフにし、[OK] をクリックします。
5. Web サーバを停止してから再起動し、設定が有効になるようにします。

UNIX/Sun Java システムでの ServletExec/AS のインストール

このモニターの GUI の HTML ページは、JSP (Java Server Pages) と、ポリシー サーバと同じマシン上で実行される ServletExec サブレット エンジン上でホストされたサブレットによって生成されます。

ServletExec をインストールする方法

1. ポリシー サーバをインストールする UNIX アカウントにログインします。

注: Sun Java System Web Server をインストールしたユーザと同じユーザとしてログインする必要があります。

2. ServletExec AS インストーラを実行します。

注: ServletExec AS インストーラの実行の詳細については、New Atlanta Communication の ServletExec のドキュメントを参照してください。

ServletExec をインストールする前に以下の点を考慮します。

- /tmp に新規ファイルを作成する権限を持っていることを確認します。
New Atlanta は /usr/local/NewAtlanta 内に ServletExec をインストールすることをお勧めします。/usr/local/NewAtlanta 内に ServletExec をインストールすると、obj.conf ファイルおよび Sun Java System 起動スクリプトに対する権限が変更される場合があります。インストールの後、obj.conf および起動スクリプトの所有者が Web サーバを所有するユーザと同じであることを確認します。
- 画面の指示に従って、Web サーバ アダプタおよび ServletExec のインスタンスをインストールします。
- 画面の指示に従って、インストーラによって Web サーバの設定ファイルを変更しないことを確認します。インストーラに Web サーバの obj.conf および magnus.conf 設定ファイルの変更を許可すると、このインスタンス上の OneView モニタ GUI を設定した後、Web サーバ インスタンスの実行に失敗します。

3. インストール プログラムが完了したら、Web サーバを再起動します。

OneView モニタ サービスの起動

OneView モニタ サービスを起動する方法

1. IPC ポート番号が使用可能であることを確認します。

OneView モニタは、ポリシー サーバ プロセスとの通信に以下のポート番号を使用します。

- 監視エージェント: 44449
- モニタ: 44450

どのポート番号が使用不可なのかを調べるには、コマンド ウィンドウを開き、以下のコマンドを入力します。

```
netstat -an
```

注: ポート番号の変更の詳細については、ポリシー サーバ 管理ガイド を参照してください。

2. ポリシー サーバ 管理コンソールの[ステータス]タブを使用して、監視サービスを起動します。

OneView モニタ GUI へのアクセス

OneView モニタ GUI にアクセスする方法

ブラウザで以下の URL を入力します。

`http://server:<portnumber>/sitemindermonitor`

`server`

Web サーバの IP アドレスを指定します

`portnumber`

ポート番号を指定します。

ポリシー サーバ クラスタの監視

OneView モニタは、1 つのポリシー サーバがクラスタ内の他のポリシー サーバを集中監視するポリシー サーバとしてセットアップされている場合、ポリシー サーバ クラスタを監視するように設定できます。

注: **OneView** モニタの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

第 13 章: SNMP サポート

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[SNMP サポートの概要 \(P. 385\)](#)

[Windows と UNIX のシステムの場合の前提条件 \(P. 387\)](#)

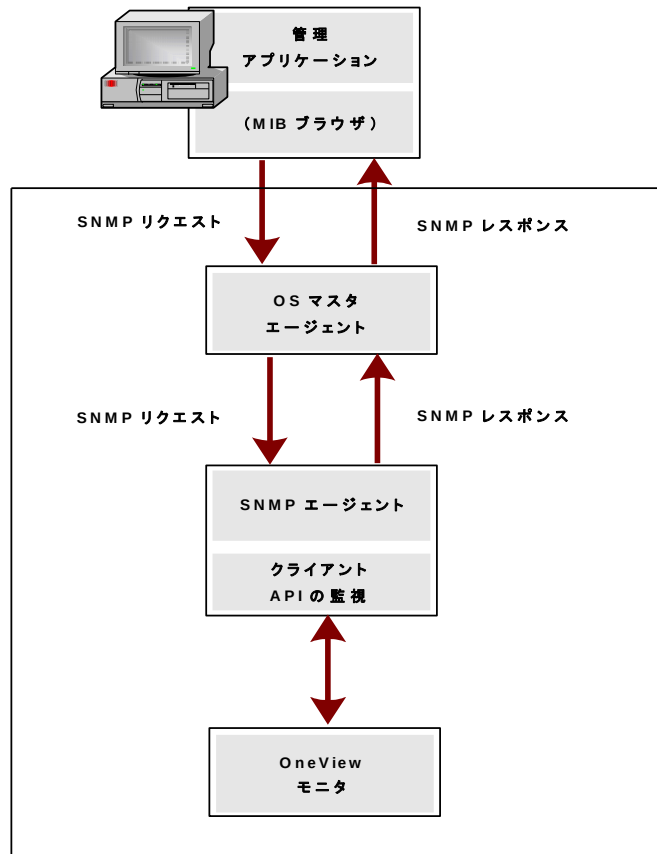
[Windows 上での SNMP エージェントの設定 \(P. 388\)](#)

[UNIX システムでの SNMP エージェントの設定 \(P. 391\)](#)

SNMP サポートの概要

SNMP サポートには、MIB (Management Information Base)、SNMP エージェント、イベント SNMP トラップ ライブラリが含まれています。SNMP エージェントとイベント SNMP トラップ ライブラリは独立して設定できます。一方を有効にして、他方を無効にすることができます。SNMP エージェントによって、監視アプリケーションは OneView モニタから動作データを取得できます。SNMP エージェントは SNMP マネージャヘデータを送信し、SNMP リクエスト処理をサポートします。

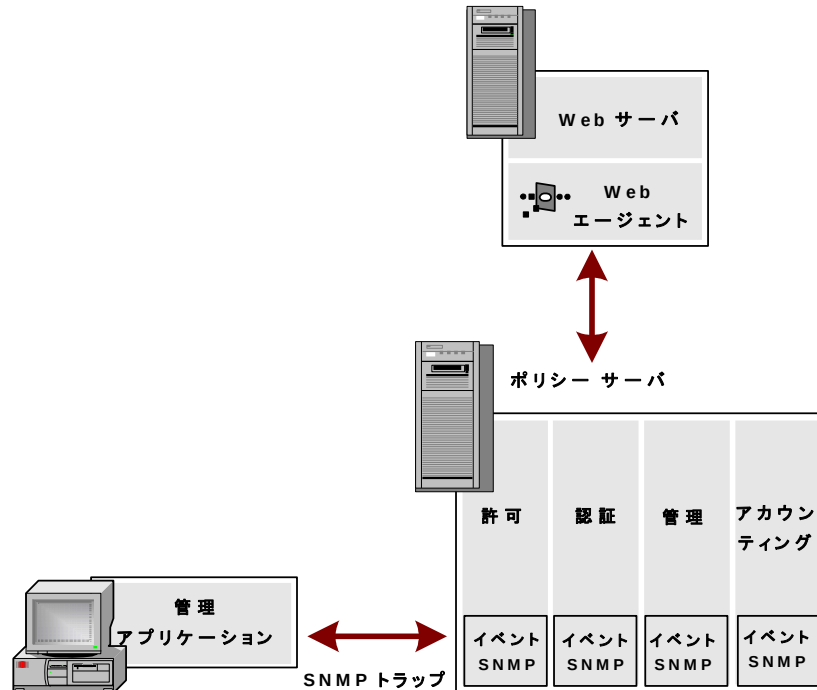
以下の図は、管理アプリケーション、OS マスタ エージェント、SNMP エージェント、および OneView モニタの間のアーキテクチャを示しています。



ネイティブ Solaris SunSolstice マスタ エージェントなどの OS マスタ エージェントは、ユーザがマスタ エージェントを再起動すると SNMP エージェントを呼び出します。OS マスタ エージェントは、管理アプリケーションから SNMP リクエストを受信すると、SNMP エージェントにその SNMP リクエストを転送します。SNMP エージェントは、OneView モニタと通信し、Monitor Client API を使用して必要な情報を取得し、次にマスタ エージェントにレスポンスを送信します。その後、マスタ エージェントは、そのレスポンスを管理アプリケーションに転送します。

ポリシー サーバのインストール中に SNMP エージェントを設定しなくても、後でそのエージェントを使用するときのために SNMP ファイルがすべてインストールされます。ただし、エージェントを実行するには、Windows または UNIX のシステム上で SNMP エージェントを設定することにより、エージェントを手動で起動する必要があります。

イベント SNMPトラップ ライブラリは、以下の図に示すように、いくつかの SiteMinder イベントを SNMPトラップに変換してから、それらを管理アプリケーションに送信します。トラップ ライブラリは、ポリシー サーバによって送信されたイベントをキャプチャし、そのイベントについて SNMPトラップが生成されることになっているかどうかを判別し、トラップを生成します。



注: SNMP エージェントおよび OneView モニタの詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

Windows と UNIX のシステムの場合の前提条件

SNMP エージェントをインストールまたは使用する前にオペレーティング システムにマスタ エージェントをインストールしておく必要があります。

Windows の前提条件

Windows 上の SiteMinder SNMP サポートで SNMP サービスが必要 SNMP サービスのインストールの詳細については、Windows オンライン ヘルプ システムを参照してください。

UNIX システムの前提条件

以下のセクションでは、SNMP をサポートするための UNIX の前提条件について説明します。

Solaris

ネイティブ Solaris SunSolstice マスタ エージェントが必要です。マスタ エージェントはオペレーティング システムに含まれています。

Linux

Red Hat Advanced Server 3.0 でサポートされているマスタ エージェントについては、net-snmp パッケージを net-snmp-5.1-2.1 以降にアップグレードします。

net-snmp パッケージを net-snmp-5.1-2.1 以降にアップグレードするには、net-snmpd の設定で、`-c public -v 1 -p 8001 localhost .1.3.6.1.4.1.2552` の代わりに以下の設定を使用します。

```
proxy -c public -v 1 localhost:8001 .1.3.6.1.4.1.2552
```

HPUX

HPUX マスタ エージェントが必要です。このマスタ エージェントはオペレーティング システムに含まれています。

Windows 上での SNMP エージェントの設定

Windows 上で SNMP エージェントを設定する方法

1. NETE_PS_ROOT 環境変数が SiteMinder インストール ディレクトリに設定されていることを確認します。通常、これは、ポリシー サーバ インストール プログラムによってすでに行われています。
2. `siteminder_home\config\snmp.conf` ファイルを開き、最後の行を編集して `siteminder_home\log\snmp.log` へのフル パスが含まれるようにします。

注: これを実行する必要があるのは、ポリシー サーバ インストール プログラムに SNMP を自動的に設定するように指定しなかった場合のみです。

正しい例: `LOG_FILE=C:\Program Files\Netegrity\siteminder\log\snmp.LOG`

正しくない例: `LOG_FILE=$NETE_PS_ROOT\log\snmp.log`

3. <Windows_dir>/java_service.ini ファイルを編集します。

注: これを実行する必要があるのは、ポリシー サーバ インストール プログラムに SNMP を自動的に設定するように指定しなかった場合のみです。

- a. SERVICE_BINARY_NAME に JavaService.exe のフル パス名を設定します。

例: SERVICE_BINARY_NAME=c:\winnt\JavaService.exe

- b. WORKING_DIR にディレクトリ *siteminder_home*\bin へのフル パスを設定します。

例: WORKING_DIR=C:\Program files\Netegrity\siteminder\bin

- c. JRE_PATH に javaw.exe のフル パスを設定します。

4. *siteminder_home*\bin\thirdparty\proxyreg.exe を実行し、apadll.dll および snmp.conf のレジストリ キーを以下のように変更します。

```
proxyreg.exe full_path_for_apadll.dll full_path_for_snmp.conf
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

例: proxyreg.exe "c:\program files\netegrity\siteminder\ bin\ thirdparty\apadll.dll"
"c:\programfiles\netegrity\ siteminder\ config\ snmp.conf"

5. <WINNT dir>/JavaService.exe を -install オプションを指定して実行し、Netegrity SNMP エージェントを WINNT サービスとして登録します。
6. Windows サービス ダイアログ ボックスを使用して Netegrity SNMP エージェントを起動します。
7. SNMP サービスを再起動します。

Windows で SNMP イベントトラップを設定する方法

Windows で SNMP イベントトラップを設定するために必要なことは、以下のとおりです。

1. SNMP イベントトラップの有効化
2. [snmptrap.config の設定](#) (P. 390)

SNMP イベントトラップの有効化

SNMP のイベントトラップを有効にするには、XPSCConfig ユーティリティを使用して、XPSAudit リストにイベント ハンドラ ライブラリ (eventsnmp.dll) を設定します。eventsnmp.dll のデフォルトの場所は *policy_server_home*\bin です。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール場所を示します。

注: イベント ハンドラ ライブラリを設定するための XPSCConfig ユーティリティの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

SNMP イベントトラップを有効にした後に、snmptrap.conf ファイルを設定します。

snmptrap.conf の設定

SNMP 設定ファイルを設定する方法

1. snmptrap.conf を編集します。

注: snmptrap.conf は、*policy_server_home*\config にあります。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール場所を示します。

2. 受信するように指定するトラップについては、該当する行をコメント解除します。
3. トラップの送信先とする IP アドレス、ポート番号、およびコミュニティを指定します。
4. 新しい変更を含む snmptrap.config ファイルを保存します。
5. ポリシー サーバを再起動します。

UNIX システムでの SNMP エージェントの設定

UNIX システムで SNMP エージェントを設定する方法

1. NETE_PS_ROOT 環境変数が SiteMinder インストール ディレクトリに設定されていることを確認します。通常、これは、ポリシー サーバ インストール プログラムによってすでに行われています。

例: /home/smuser/siteminder

2. ファイル /etc/snmp/conf/RunSubagent.sh を以下のように編集します。
 - a. 以下のように正しい JRE パスを設定します。
JAVA_HOME=\$INSTALL_HOME/bin/jdk/<required_version>/jr
 - b. 正しい SiteMinder パスを設定します。

例: INSTALL_HOME=/home/smuser/siteminder

注: INSTALL_HOME 変数には、SiteMinder インストール ディレクトリのフルパスが含まれます。

3. Solaris での SNMP デーモンの再起動
 - a. root としてログインします。
 - b. /etc/rc3.d に移動します。
 - c. S76snmpdx スクリプトを以下のように 2 回実行します。

sh S76snmpdx stop を実行し、実行中の Solaris マスタ エージェントを停止します。

sh S76snmpdx start を実行し、Solaris マスタ エージェントおよび Netegrity サブエージェントを起動します。

UNIX システムで SNMP イベントトラップを設定する方法

UNIX システムで SNMP イベントトラップを設定するために必要なことは、以下のとおりです。

1. SNMP イベントトラップの有効化
2. [snmptrap.config の設定](#) (P. 392)

SNMP イベントトラップの有効化

SNMP のイベントトラップを有効にするには、XPSConfig ユーティリティを使用して、イベントハンドライブラリ(libeventsnmp.so)を XPSAudit リストに設定します。libeventsnmp.so のデフォルトの場所は *policy_server_home/lib* です。

policy_server_home

ポリシー サーバのインストール場所を示します。

注: イベントハンドライブラリを設定するための XPSConfig ユーティリティの使用の詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

SNMP のイベントトラッピングを有効にした後、snmptrap.config ファイルを設定します。

snmptrap.config の設定

snmptrap.config を設定する方法

1. /home/smuser/siteminder/config にある snmptrap.config を編集します。
2. 受信するように指定するトラップについては、該当する行をコメント解除します。
3. トラップの送信先とする IP アドレス、ポート番号、およびコミュニティを指定します。
4. 新しい変更を含む snmptrap.config ファイルを保存します。
5. ポリシー サーバを再起動します。

ポリシー サーバの停止と再起動

SNMP の設定変更を有効にするには、ポリシー サーバ管理コンソールの [ステータス] タブを使用して、ポリシー サーバを停止してから再起動する必要があります。

Red Hat Enterprise Linux Advanced Server に対する SNMP Get のテスト

SNMP を設定した後に SNMP Get をテストする必要があります。

SNMP Get をテストする方法

1. ネイティブ **SNMP** マスタ エージェントを起動します。マスタ エージェントは自動的に起動されません。マスタ エージェントを起動するには、`/etc/rc1.d` ディレクトリに移動し、以下のコマンドを **root** として実行します。

```
K50snmpd start
```

2. **SiteMinder** サブエージェントを起動します。以下のコマンドを **root** として実行します。

```
sh /etc/init.d/NetegrityAgent
```

3. **SiteMinder** サブエージェントを停止します。以下のコマンドを **root** として実行します。

```
sh $NETE_PS_ROOT/etc/snmp/conf/StopSubagent.sh
```


付録 A: 既存アプリケーション サーバへの 管理 UI のインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[管理 UI インストール オプション](#) (P. 395)
[管理 UI インストール要件](#) (P. 396)
[ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ](#) (P. 401)
[管理 UI インストール チェックリスト](#) (P. 401)
[管理 UI をインストールする方法](#) (P. 402)
[管理 UI を登録する方法](#) (P. 409)
[アプリケーション サーバを停止します。](#) (P. 415)
[管理者クレデンシャル](#) (P. 416)
[管理 UI の高可用性](#) (P. 417)
[Windows での管理 UI のアンインストール](#) (P. 417)
[UNIX での管理 UI のアンインストール](#) (P. 418)

管理 UI インストール オプション

管理 UI は、アプリケーション サーバの実行を必要とします。そのため、2 つのインストール オプションが利用可能です。

- **スタンドアロン インストール** - このオプションは、必須インストーラで必要なアプリケーション サーバ インフラストラクチャを作成します。必須インストーラは、埋め込みアプリケーション サーバ (JBoss) および必要な JDK をインストールします。インストールを開始する前に、管理 UI ホストシステムが最小のシステム要件を満たすことを確認します。

必須インストーラは、インストール成功後に 管理 UI インストーラを起動します。管理 UI インストーラは、埋め込みアプリケーション サーバ インフラストラクチャを使用してインストールを完了します。

注: UNIX にインストールして要件となるインストール メディアをコンソール モードで実行する場合、手動で 管理 UI インストーラを開始してインストールを完了します。

- **既存アプリケーション サーバのインストール** - このオプションでは、既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールすることができます。管理 UI インストーラにより、アプリケーション サーバ固有の情報および必要な JDK の場所を要求されます。インストールを開始する前に、管理 UI ホスト システムがシステムおよびサードパーティーのコンポーネント要件すべてを満たすこと確認します。

以下のセクションは、既存のアプリケーション サーバに 管理 UI をインストールする方法を詳述します。スタンドアロン インストールの詳細については、「管理 UI のインストール」を参照してください。

管理 UI インストール要件

以下のセクションは、既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールするための最小のシステムおよびアプリケーション サーバ要件を詳述します。

管理 UI システム要件

管理 UI ホストは、以下の最小のシステム要件を満たす必要があります。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3** プラットフォームのサポートマトリックスを参照してください。

Windows

管理 UI をインストールする Windows システムは以下の最小システム要件を満たす必要があります。

- **CPU** - シングルまたはデュアル プロセッサ、Intel Pentium III (またはその互換)、700～900 MHz
- **メモリ** - 512 MB RAM 1 GB をお勧めします。

注: WebSphere を実行している場合、2 GB のシステム RAM が必要です。

- **使用可能なディスク領域** - 540 MB

注: WebSphere を実行している場合、2 GB の使用可能なディスク領域が必要です。

- **一時ディレクトリ領域** - 450 MB

- **JDK** -- 管理 UI をインストールするシステムに必須 JDK バージョンが、インストールされていること。
- **画面解像度** - 管理 UI を正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

UNIX

管理 UI をインストールする UNIX システムは以下の最小システム要件を満たす必要があります。

- **CPU**
 - Solaris - Sparc Workstation 440 MHz
 - Red Hat Linux - シングルまたはデュアル プロセッサ、Intel Pentium III (またはその互換)、700～900 MHz
- **メモリ** - 512 MB RAM 1 GB をお勧めします。
注: WebSphere を実行している場合、2 GB のシステム RAM が必要です。
- **使用可能なディスク領域** - 540 MB
注: WebSphere を実行している場合、2 GB の使用可能なディスク領域が必要です。
- **一時ディレクトリ領域** - 450 MB
- **JDK** -- 管理 UI をインストールするシステムに必須 JDK バージョンが、インストールされていること。
- **画面解像度** - 管理 UI を正常に表示するための解像度 1024 x 768 以上、256 色以上

アプリケーション サーバ要件

管理 UI は J2EE アプリケーションで、サポートされているアプリケーション サーバを必要とします。以下の点に注意してください。

- JBoss、WebLogic または WebSphere のサポートされているバージョンは、管理 UI をホストするシステムにインストールされます。
- 管理 UI はアプリケーション サーバ上で展開する唯一のアプリケーションです。

注: サポートされている CA およびサードパーティコンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの [SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポートマトリックス](#)を参照してください。

アプリケーション サーバとしての JBoss

管理 UI ホスト システム上では、サポートされているアプリケーション サーバが必要です。JBoss をインストールするには、[JBoss Web サイト](#)に記載されているインストール手順に従います。

重要: JBoss は、空白を含まないディレクトリパス名内にインストールしてください。

アプリケーション サーバとしての WebLogic

以下のセクションでは、SiteMinder アプリケーション サーバとして WebLogic を使用するための基本的な手順について説明します。

WebLogic のインストール

SiteMinder によってサポートされている WebLogic サーバのバージョンをインストールします。

注: WebLogic サーバのインストールの詳細については、[BEA の WebLogic サードキュメント](#)を参照してください。

WebLogic アプリケーション サーバ インスタンスの作成

管理 UI をインストールする前に、WebLogic インストールの一部である設定ウィザードを使用して WebLogic ドメインを作成し、以下の操作を実行します。

- ドメイン名を書き留めます。管理 UI をインストールするときにドメイン名が必要になります。
- [Basic WebLogic Server Domain] テンプレートを選択します。
- JAVA_HOME 変数が setDomainEnv.cmd/.sh ファイルで必須 Java 環境用のパスに設定されていることを確認します。このファイルは `web_logic_home\user_projects\domains\weblogic_domain\bin` にあります。

`web_logic_home`

WebLogic サーバのインストール パスを示します。

`weblogic_domain`

作成した WebLogic ドメインの名前を示します。

WebLogic ドメインの確認

以下の点を確認します。

- WebLogic が実行されている。
- `http://server.domain.port/console` で WebLogic コンソールにアクセスできる。

例: `http://myserver.mycompany.com:7001/console`

- WebLogic コンソールの [Domain Configurations] の下で、ドメインリンクを選択し、作成した WebLogic ドメインが既存のドメインのリスト内に表示されている。

注: 検証を完了したら、管理 UI インストールの準備をするためにアプリケーション サーバをシャットダウンします。

アプリケーション サーバとしての WebSphere

以下のセクションでは、SiteMinder アプリケーション サーバとして WebSphere を使用するための基本的な手順について説明します。

WebSphere のインストール

IBM ドキュメントに記載されている WebSphere インストール手順に従います。

WebSphere をインストールするときは、WebSphere 6.x が WebSphere とともにインストールされるデフォルトメッセージング (WebSphere 5.1 の埋め込みメッセージング) を使用することを考慮してください。

- (Solaris) グループ mqm および mqbrkrs、ユーザ mqm および root を、IBM インストールドキュメントの説明に従って設定してから、Embedded Messaging サービスをインストールしてください。
- すべての WebSphere バージョンについて、WebSphere をインストールするときに [Server and Client Tools] オプションを必ず選択してください。

WebSphere が動作していることの確認

管理 UI をインストールする前に、IBM によって提供される snoop ユーティリティを使用して、WebSphere が正しくインストールされることを確認します。

WebSphere が動作していることを確認する方法

1. WebSphere が正しくインストールされていることを確認するには、「`http://<fqdn>:port/snoop`」と入力します。

例: `http:MyServer.MyCompany.com:9080/snoop`.

WebSphere が正しくインストールされている場合、ブラウザに [Snoop Servlet—Request Client Information] ページが表示されます。

2. WebSphere アプリケーション サーバ プラグインが正しくインストールされていることを確認するには「`http://<fqdn>/snoop`」と入力します。

例: `http://MyServer.MyCompany.com/snoop`

WebSphere が正しくインストールされている場合、ブラウザに同じ [Snoop Servlet—Request Client Information] ページが表示されます。

これで WebSphere が正常に動作していることを確認しました。

注: WebSphere について追加の支援が必要な場合は、IBM 技術サポートにお問い合わせください。

ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ

環境管理を始めるためには、管理 UI とポリシー サーバとの間に信頼できるリレーションシップが必要です。このリレーションシップは、デフォルト SiteMinder スーパーユーザ アカウント (siteminder) およびパスワードを使用してログインするときに初めて確立されます。これらの認証情報は、ポリシーストアに格納されます。

ポリシー ストアを設定するときは、ポリシー サーバにスーパーユーザ認証情報をサブMITTするために XPSRegClient ユーティリティを使用します。ポリシー サーバは、登録リクエストが有効でありリレーションシップが構築できることを確認するために、これらの認証情報を使用します。

注: ポリシー ストアを自動的に設定するためにポリシー サーバ インストーラを使用した場合、インストーラは認証情報をサブMITTするために XPSRegClient ユーティリティを使用します。

認証情報が提供されてから最初の 管理 UI ログインが発生し得るまでの時間は、24 時間までに制限されています。そのため、いつポリシー ストアが設定されて管理 UI がインストールされるのかによって、管理 UI のインストールのプロセスが決まります。

管理 UI インストール チェックリスト

管理 UI のインストールを開始する前に、以下を完了してください。

- ☐ サポートされているオペレーティング システムを使用していることを確認してください。
- ☐ 管理 UI ホスト システムが最小のシステム要件を満たすことを確認してください。
- ☐ (Linux) 必要な Linux ライブラリが 管理 UI ホスト システムにインストールされていることを確認します。
- ☐ サポートされたアプリケーション サーバが 管理 UI ホスト システム上にインストールされることを確認してください。

- 必要な JDK が 管理 UI ホスト システムにインストールされることを確認してください。
- ポリシー ストアがいつ設定されたか決定します。

ポリシー ストアが 24 時間以上前に設定された場合は、管理 UI をインストールする前に XPSRegClient ユーティリティを使用して、デフォルトの SiteMinder スーパーユーザ アカウント認証情報をポリシー サーバにサブミットします。ポリシー サーバは、管理 UI との信頼できるリレーションシップを構築するためにこれらの認証情報を必要とします。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

詳細情報:

[管理 UI システム要件 \(P. 396\)](#)

[アプリケーション サーバ要件 \(P. 397\)](#)

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス \(P. 551\)](#)

管理 UI をインストールする方法

管理 UI をインストールするには、以下の手順に従います。

1. インストール チェックリストを確認してください。
2. (Linux) 必要な Linux ライブラリ要件を確認します。
3. 管理 UI インストーラ用のアプリケーション サーバ情報を収集します。
4. 管理 UI をインストールします。
5. アプリケーション サーバを起動します。

必要とされる Linux ライブラリ

このコンポーネントの Linux バージョンをインストールまたはアップグレードしている場合、ホストシステム上で以下が必要になります。

```
compat-libstdc++-33.3.2.3-patch_version.i386.rpm
```

この rpm をインストールして、お使いのオペレーティング システム用の適切な 32 ビット C ランタイム ライブラリが使用できることを確認してください。

アプリケーション サーバ情報の収集

管理 UI インストーラは、管理 UI ホストシステムにインストールされるアプリケーション サーバに関する特定の情報を必要とします。

以下のセクションは、アプリケーション サーバのタイプに応じた必要な情報を詳述します。

注: ワークシートは、管理 UI のインストール前に必要な情報を収集および記録するために提供されます。

JBoss 情報

JBoss アプリケーション サーバを使用する場合は、管理 UI をインストールおよび登録する前に、以下の情報を収集します。

- **JBoss インストール フォルダ** - JBoss がインストールされているフォルダへのパス
注: パスにスペースを含めることはできません。
- **JBoss URL** - JBoss ホストシステムの完全修飾 URL
- **JDK** - 必要な JDK のインストール場所
- **SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード** - デフォルト SiteMinder ユーザ アカウント (siteminder) 用のパスワードを識別します。
- **ポリシー サーバシステム名** - 以下を識別します。
 - 管理 UI が登録されるポリシー サーバ
 - ポリシー サーバ ホストシステムの完全修飾名
- **ポリシー サーバ認証ポート** - ポリシー サーバのインストール後にデフォルトの設定を変更した場合は、ポリシー サーバ認証ポートを識別します。ポリシー サーバ管理コンソール内の設定タブは、アクセス制御ポートをリスト表示します。

注: ポリシー サーバ管理コンソールの開始についての詳細は、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

WebLogic 情報

WebLogic アプリケーション サーバを使用する場合は、管理 UI をインストールおよび登録する前に、以下の情報を収集します。

- **WebLogic バイナリ フォルダ** - WebLogic インストール ディレクトリへのパス
例: C:\bea\weblogic
- **WebLogic ドメイン フォルダ** - 管理 UI のために作成した WebLogic ドメインへのパス
例: C:\bea\user_projects\domains\mydomain
- **WebLogic サーバ名** - WebLogic ドメインが設定される WebLogic サーバの名前
デフォルト: AdminServer
- **アプリケーション サーバ URL およびポート** - WebLogic ホストシステムの完全修飾 URL
例: http://mymachine.mycompany.com// 7001
- **JDK** - 必要な JDK のインストール場所
- **SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード** - デフォルト SiteMinder ユーザ アカウント (siteminder) 用のパスワードを識別します。
- **ポリシー サーバ システム名** - 以下を識別します。
 - 管理 UI が登録されるポリシー サーバ
 - ポリシー サーバ ホストシステムの完全修飾名
- **ポリシー サーバ 認証ポート** - ポリシー サーバのインストール後にデフォルトの設定を変更した場合は、ポリシー サーバ 認証ポートを識別します。ポリシー サーバ 管理コンソール内の設定タブは、アクセス制御ポートをリスト表示します。

注: ポリシー サーバ 管理コンソールの開始についての詳細は、「ポリシー サーバ 管理ガイド」を参照してください。

WebSphere 情報

WebSphere アプリケーション サーバを使用する場合は、管理 UI をインストールおよび登録する前に、以下の情報を収集します。

- **WebSphere インストール フォルダ** - WebSphere がインストールされているフォルダへのフル パス
- **WebSphere URL** - WebSphere ホストシステムの完全修飾 URL
- **サーバ名** - アプリケーション サーバの名前
- **プロファイル名** - 管理 UI に使用されているプロファイルの名前
- **セル名** - サーバが置かれているセルの名前
- **ノード名** - サーバが置かれているノードの名前
- **JDK** - 必要な JDK のインストール場所
- **SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード** - デフォルト SiteMinder ユーザ アカウント(siteminder)用のパスワードを識別します。
- **ポリシー サーバシステム名** - 以下を識別します。
 - 管理 UI が登録されるポリシー サーバ
 - ポリシー サーバ ホストシステムの完全修飾名
- **ポリシー サーバ認証ポート** - ポリシー サーバのインストール後にデフォルトの設定を変更した場合は、ポリシー サーバ認証ポートを識別します。ポリシー サーバ管理コンソール内の設定タブは、アクセス制御ポートをリスト表示します。

注: ポリシー サーバ管理コンソールの開始についての詳細は、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

管理 UI のインストール

以下のセクションでは、既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールする方法について詳しく説明します。

インストールする前に

管理 UI のインストールを開始する前に、以下を考慮してください。

- テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用して 管理 UI をインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールする場合には、以下の手順が適用されます。インストールするべきスタンドアロン オプションを使用している場合には、「管理 UI のインストール」を参照してください。
- **重要:** インストール zip には、インストール メディアと同じレベルに `layout.properties` ファイルおよび `Framework` フォルダが含まれています。インストール zip を展開した後にインストール メディアを移動した場合、以下のものを同じ場所に移動しないと、インストールに失敗します。
 - `layout.properties` ファイル
 - `Framework` フォルダ
- **重要:** (UNIX) アクセス権によっては、以下のコマンドを実行することでインストール メディアが存在するディレクトリへの実行アクセス権を追加する必要があります。

```
chmod -R+x directory
directory
```

インストール メディアが存在するディレクトリを指定します。
- **重要:** (UNIX) 管理 UI をインストールするユーザは、アプリケーション サーバがインストールされるディレクトリ用の読み取り/書き込み権限を持っている必要があります。
- (UNIX) 別のサブネットにまたがって 管理 UI インストーラを実行した場合、クラッシュすることがあります。ホスト システムに 管理 UI を直接インストールします。
- レポート サーバと同じシステムに 管理 UI をインストールする場合、ポートのコンフリクトが発生する場合があります。デフォルトでは、両方のコンポーネントがポート 8080 を使用します。

Windows

Windows に 管理 UI をインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. インストール メディアに移動します。
3. *installation_media* をダブルクリックします。

installation_media

管理 UI インストール実行可能ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

4. 完了したインストール ワークシートを使用して、必要な値を入力します。

注: IPv6 アドレスを入力する場合は、角かっこでエントリを囲みます。

例: [2001:db8::1428:57ab]

5. インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

これで、管理 UI がインストールされました。

注: ポリシー サーバに 管理 UI を登録するまでは、環境管理のために 管理 UI を使用することができません。

UNIX GUI

UNIX GUI を使用して 管理 UI をインストールする方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. シェルを開き、インストール メディアに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media gui  
installation_media
```

管理 UI インストール実行可能ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- 完了したインストールワークシートを使用して、必要な値を入力します。

注: IPv6 アドレスを入力する場合は、角かっこでエントリを囲みます。

例: [2001:db8::1428:57ab]

- インストール設定を確認し、[インストール]をクリックします。

これで、管理 UI がインストールされました。

- [完了]をクリックし、システムを再起動します。

これで、管理 UI がインストールされました。

注: ポリシー サーバに 管理 UI を登録するまでは、環境管理のために 管理 UI を使用することができません。

UNIX コンソール

UNIX コンソールを使用して 管理 UI をインストールする方法

- 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
- シェルを開き、インストール メディアに移動します。
- 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media -i console  
installation_media
```

管理 UI インストール実行可能ファイルを指定します。

インストーラが起動します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- 完了したインストールワークシートを使用して、必要な値を入力します。

注: IPv6 アドレスを入力する場合は、角かっこでエントリを囲みます。

例: [2001:db8::1428:57ab]

- インストール設定を確認し、Enter キーを押します。

これで、管理 UI がインストールされました。

6. Enter キーを押します。

インストーラが閉じます。

7. システムを再起動します。

これで、管理 UI がインストールされました。

注: ポリシー サーバに 管理 UI を登録するまでは、環境管理のために 管理 UI を使用することができません。

管理 UI を登録する方法

環境管理に 管理 UI を使用できるようにするために、管理 UI を登録する必要があります。管理 UI を登録すると、管理 UI とポリシー サーバとの間に信頼できる接続が作成されます。

このプロセスは、既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールされた 管理 UI の登録方法について説明します。スタンドアロン オプションを使用してインストールした 管理 UI を登録するには、「管理 UI のインストール」を参照してください。

管理 UI を登録するには、以下の手順に従います。

1. 登録ウィンドウをリセットします。
2. アプリケーション サーバを起動します。
3. 管理 UI を登録します。

管理 UI 登録ウィンドウのリセット

SiteMinder スーパーユーザ クレデンシャルをポリシー サーバにサブミットするために、24 時間以上前に XPSRegClient ユーティリティを使用した場合は、この手順が必要です。クレデンシャルをサブミットしてから、ポリシー サーバと信頼できるリレーションシップの構築を試行するまでの時間は、24 時間以内である必要があります。

注: (UNIX) XPSRegClient を使用する前に、SiteMinder 環境変数が設定されていることを確認してください。環境変数が設定されていない場合は、[手動で設定](#) (P. 436)します。

登録ウィンドウをリセットする方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder_administrator[:passphrase] -adminui-setup -t timeout -r  
retries -c comment -cp -l log_path -e error_path -vT -vI -vW -vE -vF
```

siteminder_administrator

SiteMinder の管理者を指定します。以下の一部として 管理 UI をインストールする場合

- 新しい r12.0 SP3 環境の一部としてインストールする場合は、デフォルトの SiteMinder 管理者アカウント(siteminder)を指定します。
- アップグレードの一部としてインストールする場合は、ポリシー ストア内でのスーパーユーザ権限のある SiteMinder 管理者アカウントを指定します。

注: r12.0 SP1 からアップグレードして、ポリシー ストア内でのスーパーユーザ アカウントを持たない場合は、デフォルトの SiteMinder アカウントを作成するために smreg ユーティリティを使用します。

passphrase

SiteMinder 管理者アカウントのパスワードを指定します。

注: パスフレーズを指定しない場合、XPSRegClient でパスフレーズの入力と確認が求められます。

-adminui-setup

管理 UI が初めてポリシー サーバに登録されていることを指定します。

-t timeout

(オプション) 管理 UI をインストールしてから、ログインしてポリシー サーバとの信頼関係を作成するまでの割り当て時間を指定します。タイムアウト値を超過すると、ポリシー サーバは登録リクエストを拒否します。

測定単位: 分

デフォルト: 1440 (24 時間)

最小制限: 1

最大制限: 1440 (24 時間)

-r retries

(オプション) 管理 UI の登録時に許容される試行の失敗回数を指定します。試行の失敗は、管理 UI への最初のログイン時に、誤った SiteMinder 管理者クレデンシヤルをサブミットすることによって起因する場合があります。

デフォルト: 1

最大制限: 5

-c comment

(オプション) 指定されたコメントを情報目的で登録ログ ファイルに挿入します。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-cp

(オプション) 登録ログ ファイルに複数行のコメントが含まれることを指定します。ユーティリティにより複数行のコメントが求められ、指定されたコメントが情報目的で登録ログ ファイルに挿入されます。

注: コメントは引用符で囲んでください。

-l log path

(オプション) 登録ログ ファイルをエクスポートする必要がある場所を指定します。

デフォルト: `siteminder_home¥log`

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

-e error path

(オプション) 例外を指定されたパスに送信します。

デフォルト: stderr

-vT

(オプション) 詳細レベルを **TRACE** に設定します。

-vI

(オプション) 詳細レベルを **INFO** に設定します。

-vW

(オプション) 詳細レベルを **WARNING** に設定します。

-vE

(オプション) 詳細レベルを **ERROR** に設定します。

-vF

(オプション) 詳細レベルを **FATAL** に設定します。

3. Enter キーを押します。

XPSRegClient は、ポリシー サーバに管理者クレデンシャルを提供します。ポリシー サーバは、管理 UI への最初のログイン時に、登録リクエストを確認するためにこれらのクレデンシャルを使用します。

アプリケーション サーバの起動

既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、以下の手順が適用されます。スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「管理 UI のインストール」を参照してください。

アプリケーション サーバを起動する方法

1. 以下のいずれかの操作を行います。

- **JBoss** - コマンド プロンプトから *jboss_home\bin* に移動します。

jboss_home

JBoss のインストール パスを指定します。

- **WebLogic** - コマンド プロンプトから *domains\bin* に移動します。

domains

管理 UI 用に作成した WebLogic ドメインのパスを指定します。

例: C:\bea\user_projects\domains\mydomain

- **WebSphere** - コマンド プロンプトから *profile\bin* に移動します。

プロファイル

管理 UI 用に作成した WebSphere プロファイル名のパスを指定します。

例: C:\Program

Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\AppSvr01\bin

2. 以下のいずれかの操作を行います。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

- **JBoss**

- Windows: 「run_idm.bat」を入力し、Enter キーを押します。
- UNIX: 「run_idm.sh」を入力し、Enter キーを押します。

- **WebLogic**

- Windows: 「startWebLogic.cmd」を入力し、Enter キーを押します。
- UNIX: 「startWebLogic.sh」を入力し、Enter キーを押します。

■ WebSphere

- Windows: 識別子「startServer.bat」を入力し、Enter キーを押します。
- UNIX: 識別子「startServer.sh」を入力し、Enter キーを押します。

識別子

WebSphere インストール用の識別子を指定します。

例: startServer.bat Server1

アプリケーション サーバが開始されます。

詳細情報:

[管理 UI のインストール](#) (P. 291)

[アプリケーション サーバの起動](#) (P. 305)

管理 UI の登録

環境管理を始めるために、ポリシー サーバに 管理 UI を登録します。

管理 UI を登録する方法

1. 以下のいずれかの操作を行います。

- **Windows** - 管理 UI ショートカットを使用して 管理 UI を開きます。
- **UNIX** - Web ブラウザを開き、*host:port/iam/siteminder/adminui* に移動します。

注: ホスト システムに Web ブラウザがない場合には、ログイン画面にリモート アクセスすることもできます。

host

管理 UI ホスト システムの完全修飾名を指定します。

port

JBoss が HTTP リクエストをリスンするポートを指定します。

SiteMinder 管理 UI のログイン画面が表示されます。

2. [ユーザ名]フィールドに、「siteminder」を入力します。
3. [パスワード]フィールドに、siteminder のアカウント パスワードを入力します。

4. [サーバ]フィールドに、ポリシー サーバ ホストの完全修飾名を入力します。
以下の点について考慮してください。

- 有効な IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスに入ることができます。
- ポートを指定しない場合、デフォルトのポリシー サーバ認証ポートである 44442 がデフォルトで登録されます。

管理 UI が開き、ポリシー サーバに登録されます。

アプリケーション サーバを停止します。

既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、以下の手順が適用されます。スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「管理 UI のインストール」を参照してください。

アプリケーション サーバを停止する方法

1. 以下のいずれかの操作を行います。
 - **JBoss** - 管理 UI ホストシステムから、開始タスク エンジン コマンド プロンプトを開きます。
 - **WebLogic** - 管理 UI ホストシステムから、開始タスク エンジン コマンド プロンプトを開きます。
 - **WebSphere** - コマンド プロンプトから *profile\bin* に移動します。

プロファイル

管理 UI 用に作成した WebSphere プロファイル名のパスを指定します。

例: C:\Program
Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\AppSvr01\bin

2. 以下のいずれかの操作を行います。
 - **JBoss** - 以下のキーボードの組み合わせを入力します。
Ctrl + C
 - **WebLogic** - 以下のキーボードの組み合わせを入力します。
Ctrl + C

■ WebSphere

- Windows: 識別子「stopServer.bat」を入力し、Enter キーを押します。

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドラインウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリースノートを参照してください。

- UNIX: 識別子「stopServer.sh」を入力し、Enter キーを押します。

識別子

WebSphere インストール用の識別子を指定します。

例: stopServer.bat Server1

アプリケーション サーバが停止します。

詳細情報:

[管理 UI のインストール](#) (P. 291)

[アプリケーション サーバを停止します。](#) (P. 306)

管理者クレデンシャル

デフォルトでは、管理 UI は SiteMinder 管理者認証情報用のソースとしてポリシーストアを使用します。たとえばコーポレートディレクトリのような外部ストアを使用するために、管理 UI を設定することができます。

注: 外部管理者ユーザストアの設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

管理 UI の高可用性

予期しない機能停止で SiteMinder オブジェクトの管理が妨げられないように、複数の 管理 UI をインストールします。別の 管理 UI をインストールする前に、以下を考慮します。

- まだ 管理 UI との信頼できる接続を共有していないポリシー サーバに、管理 UI を登録します。別のポリシー サーバに登録することで、1 つのポリシー サーバが機能停止しても両方の GUI が無効になることはありません。
- 管理 UI は、複数のポリシー サーバにフェイルオーバーすることができます。ただし、複数のポリシー サーバを管理するために 管理 UI を設定することができます。
- 既存の 管理 UI が外部 SiteMinder 管理者認証に対して設定されている場合。
 - 同じ外部ストアで新しい 管理 UI を設定します。同じ外部ストアを使用して新しい 管理 UI の設定することにより、すべての SiteMinder 管理者がすべての GUI で利用可能になります。
 - 同じネットワーク識別子を使用して同じ外部ストアへの後続の 管理 UI 接続を設定してください。同じ外部ストアへの複数の 管理 UI 接続で異なるネットワーク識別子を使用することはサポートされていません。

例: 最初の接続を 172.16.0.0 で設定した場合、後続の接続も 172.16.0.0 で作成します。最初の接続を comp001@example.com で設定した場合は、後続の接続も comp001@example.com で作成します。

注: 外部管理者ストアの設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

Windows での管理 UI のアンインストール

システムで不用になった場合は、管理 UI をアンインストールします。

注: 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、以下の手順が適用されます。スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「管理 UI のインストール」を参照してください。

管理 UI をアンインストールする方法

1. アプリケーション サーバを停止します。
2. Windows のコントロール パネルを開き、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。

インストールされたプログラムのリストが表示されます。

3. CA Technologies SiteMinder 管理 UI を選択し、[変更と削除]をクリックします。

注: 管理 UI を r12.0 SP1 からアップグレードした場合、CA SiteMinder 管理 UI に加え、CA SiteMinder Web アクセス マネージャ 管理 UI がリスト表示されます。アップグレード後に 管理 UI をアンインストールするためには、CA SiteMinder 管理 UI を選択します。

管理 UI をアンインストールするプロセスが開始されます。

4. プロンプトに従って、管理 UI をアンインストールします。

注: 共有ファイルを削除するよう要求するメッセージが出る場合は、[すべていいえ]をクリックします。

5. 要求された場合はシステムを再起動します。

管理 UI がアンインストールされます。

UNIX での管理 UI のアンインストール

システムで不用になった場合は、管理 UI をアンインストールします。

注: 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、以下の手順が適用されます。スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「管理 UI のインストール」を参照してください。

UNIX 上の 管理 UI をアンインストールする方法

1. アプリケーション サーバを停止します。
2. シェルを開き、以下のディレクトリに移動します。

```
administrative_ui_home/CA/adminui/install_config_info
```

```
administrative_ui_home
```

管理 UI インストール パスを指定します。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
./smwam-ui-uninstall.sh
```

管理 UI をアンインストールするプロセスが開始されます。

4. プロンプトに従って、管理 UI をアンインストールします。

管理 UI が削除されるとき、インストーラはプロンプトを表示します。

管理 UI がアンインストールされます。

付録 B: インストール ワークシート

このセクションのワークシートを使用して、SiteMinder をインストールまたはアップグレードするために必要な情報を記録します。

ポリシー サーバのワークシート

以下のワークシートを使用し、ポリシー サーバをインストールし、ポリシー サーバコンポーネントを設定するために必要な情報を記録します。

必要な情報のワークシート

ポリシー サーバ インストーラを実行する前に、このワークシートを使用して必要な情報を収集します。

必要な情報	使用する値
JRE の場所	
ポリシー サーバのインストール場所	
暗号化キー値	

OneView モニタ情報のワークシート

OneView モニタを設定する予定である場合は、このワークシートを使用して情報を収集します。

必要な情報	使用する値
JDK パス	
ServletExec インストール ディレクトリ	
ServletExec ポート番号	
Sun Java System 管理者ディレクトリ	
複数の ServletExec インスタンス	

Microsoft ADAM/AD LDS サーバ情報ワークシート

ADAM/AD LDS ポリシー ストアの設定に必要な情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
システム IP アドレス	
サーバ インスタンスのポート番号	
アプリケーション パーティションのルート DN	
管理者ドメイン名	
管理者パスワード	
代替 LDAP 管理者	
SiteMinder スーパーユーザ パスワード	

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報ワークシート

以下のワークシートを使用して、Oracle Directory Server Enterprise Edition ポリシー ストアを設定するために必要な情報を収集します。

必要な情報	使用する値
システム IP アドレス	
ディレクトリ インスタンスのポート番号	
ルート DN	
管理者アカウント	
管理者パスワード	
代替 LDAP 管理者	
SiteMinder スーパーユーザ パスワード	

SQL Server 情報のワークシート

以下のワークシートを使用して、SQL Server ポリシー ストアを設定するために必要な情報を収集します。

必要な情報	使用する値
データベース サーバ名	
データベース名	
データベース ポート	
データベース管理者ユーザ名	
データベース管理者パスワード	
SiteMinder スーパーユーザ パスワード	

詳細情報:

[SQL Server 情報](#) (P. 46)

Oracle RDBMS ワークシート

以下のワークシートを使用して、Oracle RDBMS ポリシー ストアの設定に必要な情報を収集します。

必要な情報	使用する値
データベース サーバ名	
データベース サービス名	
データベース ポート	
データベース管理者ユーザ名	
データベース管理者パスワード	
SiteMinder スーパーユーザ パスワード	

詳細情報:

[Oracle RDBMS 情報](#) (P. 47)

SM キー データベース情報のワークシート

smkeydatabase を設定する予定である場合は、このワークシートを使用して必要な情報を収集します。

必要な情報	使用する値
smkeydatabase パスワード	

ポリシーおよびデータストアのワークシート

以下のワークシートを使用し、設定するために必要な情報を記録します。

- ポリシー ストアとして使用する LDAP データベース
- ポリシー ストアとして使用するリレーショナル データベース
- 監査ログ データベース、キー ストア、またはセッション ストアとしての個々のリレーショナル データベース

CA Directory 情報ワークシート

このワークシートを使用すると、CA Directory データベースをポリシー ストアとして設定するために必要な情報を集めることができます。

必要な情報	使用する値
ホスト情報	
CADSA ポート番号	
ベース DN	
管理 DN	
管理パスワード	

Oracle Directory Server 情報ワークシート

以下のワークシートを使用して、Oracle Directory Server Enterprise Edition（以前の Sun Directory Server Enterprise Edition）をポリシー ストアとして設定するか、または既存のポリシー ストアをアップグレードするために必要な情報を確認できます。

必要な情報	使用する値
ホスト情報	
ディレクトリ サーバのポート情報	
管理 DN	
管理パスワード	
ポリシー サーバのルート DN	
(オプション) SSL クライアント証明書	

詳細情報:

[ディレクトリ サーバ情報の収集](#) (P. 133)

Active Directory 情報ワークシート

このワークシートを使用すると、Active Directory ディレクトリ サーバをポリシー ストアとして設定したり、既存のポリシー サーバをアップグレードするために必要な情報を集めることができます。

必要な情報	使用する値
ホスト情報	
ディレクトリ サーバのポート情報	
管理 DN	
管理パスワード	
ポリシー サーバのルート DN	
(オプション) SSL クライアント証明書	

Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート

ADAM/AD LDS ポリシー ストアの設定に必要な情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
ホスト情報	
ディレクトリ サーバのポート情報	
管理 DN	
管理パスワード	
ポリシー サーバのルート DN	
(オプション) SSL クライアント証明書	

SQL Server 情報のワークシート

このワークシートを使用し、ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように SQL Server データベースを設定するために必要な情報を収集します

(W) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが Windows システムにインストールされる場合にのみ必要です。(U) が付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要です。SQL Server データソースを設定する場合には、別の情報が必要です。

必要な情報	使用する値
データベース インスタンス名	
データベースの管理アカウント	
データベースの管理パスワード	
(W) データソース名	
(W) SQL Server 名	
(U) ポリシー サーバ ルート	
(U) IP アドレス	

Oracle 情報のワークシート

このワークシートを使用し、ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように Oracle データベースを設定するために必要な情報を収集します

(U) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、UNIX に対して Oracle データソースを設定する場合に必要です。

必要な情報	使用する値
(U) ポリシー サーバのインストール パス	
データソース	
データベースの管理アカウント	
データベースの管理パスワード	
Oracle マシン名	
Oracle インスタンス サービス名	
Oracle ポート番号	

Oracle RAC 情報のワークシート

このワークシートを使用し、ポリシー ストアまたは他のタイプの SiteMinder データストアとして機能するように Oracle RAC データベースを設定するために必要な情報を収集します

(U) が前に付いた情報は、ポリシー サーバが UNIX システムにインストールされる場合にのみ必要な情報です。この情報は、UNIX に対して Oracle データソースを設定する場合に必要です。

必要な情報	使用する値
(U) ポリシー サーバのインストール パス	
データソース名	
データベースの管理アカウント	
データベースの管理パスワード	

必要な情報	使用する値
Oracle RAC システム サービス名	
Oracle RAC ノード サービス名	
Oracle RAC ノード IP アドレス	
Oracle RAC ノード ポート番号	

管理 UI のインストールのワークシート

以下のワークシートを使用し、以下の操作を実行するために必要な情報を記録します。

- 管理 UI をインストールします。
- 管理 UI とポリシー サーバとの間の接続の設定。

必須インストーラ ワークシート

必須インストーラを使用した 管理 UI のインストールおよび登録に必要な情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
インストール場所	
管理 UI システム名	
サーバ ポート	
SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード	
ポリシー サーバのホスト名	
ポリシーサーバの認証ポート	

JBoss ワークシート

管理 UI のインストールおよび登録に必要な JBoss 情報を収集するために、以下のワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
JBoss インストール フォルダ	
JBoss URL	
JDK のインストール場所	
SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード	
ポリシー サーバのホスト名	
ポリシーサーバの認証ポート	

WebLogic ワークシート

管理 UI のインストールおよび登録に必要な WebLogic 情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
WebLogic バイナリ フォルダ	
WebLogic ドメイン フォルダ	
WebLogic サーバ名	
アプリケーション サーバ URL およびポート	
JDK のインストール場所	
SiteMinder スーパーユーザ アカウント パスワード	
ポリシー サーバのホスト名	
ポリシーサーバの認証ポート	

WebSphere ワークシート

管理 UI のインストールおよび登録に必要な WebSphere 情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
WebSphere インストール フォルダ	
WebSphere URL	
サーバ名	
プロファイル名	
ノード名	
セル名	
JDK のインストール場所	
SiteMinder スーパーユーザ パスワード	
ポリシー サーバのホスト名	
ポリシーサーバの認証ポート	

ポリシー サーバ登録ワークシート

追加のポリシー サーバへの 管理 UI の登録に必要な情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な情報	使用する値
クライアント名	
パスフレーズ	
ポリシー サーバのホスト名	
ポリシーサーバの認証ポート	

ワークシートのレポート

SiteMinder レポートのインストールに必要な情報を記録するために、以下のワークシートを使用できます。

インストール認証情報ワークシート

必要なインストール認証情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な値	使用する値
(Windows および UNIX) BusinessObjects 管理者 パスワード	
(UNIX) 非 root ユーザ アカウント名	
(UNIX) 非 root ユーザ グループ名	

MySQL レポート データベース ワークシート

必要な MySQL データベース情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な値	使用する値
MySQL root パスワード	
ユーザ名	
パスワード	
データベース名	

SQL Server レポート データベース ワークシート

必要な Microsoft SQL Server データベース情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な値	使用する値
データソース名	
データベース名	
ユーザ名	
パスワード	

Oracle Report データベースのワークシート

このワークシートを使用して、必要な Oracle データベース情報を収集します。

必要な値	使用する値
Oracle Net サービス名	
ユーザ名	
パスワード	

Apache Tomcat ワークシート

必要な Apache Tomcat 情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な値	使用する値
接続ポート	
リダイレクト ポート	
シャットダウン ポート	

レポート サーバ設定ワークシート

レポートテンプレートのインストールに必要な情報を収集するために、このワークシートを使用します。

必要な値	使用する値
BusinessObjects デフォルト管理者パスワード	
SiteMinder 監査データベースタイプ	

レポート サーバの登録のワークシート

このワークシートを使用して、レポート サーバインストール用の必須登録情報を収集できます。

必要な値	使用する値
クライアント名	
パスフレーズ	
ポリシー サーバ ホスト	

付録 C: トラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[ポリシー サーバのトラブルシューティング](#) (P. 435)

[ポリシー ストアのトラブルシューティング](#) (P. 439)

[OneView モニタのトラブルシューティング](#) (P. 441)

[管理 UI のトラブルシューティング](#) (P. 444)

[FSS 管理 UI のトラブルシューティング](#) (P. 452)

[レポートサーバのトラブルシューティング](#) (P. 455)

[アンインストール中に Java エラー メッセージが表示される](#) (P. 458)

[Adobe Acrobat Reader がインストールされない](#) (P. 460)

[ユーザ ストアとしての Active Directory の使用に関する問題](#) (P. 460)

[AE がライブラリ「smjavaapi」のロードに失敗した システム エラー](#) (P. 461)

ポリシー サーバのトラブルシューティング

以下のセクションでは、インストール中にポリシー サーバで発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法案について詳しく説明します。

Solaris 上の NETE_PS_ALT_CONF_FILE 環境変数

Solaris 上にポリシー サーバをインストールした後、nete_ps_env.ksh スクリプトに以下のエントリが含まれている場合があります。

```
export NETE_PS_ALT_CONF_FILE=/export/siteminder/config/.siteminder.conf
```

NETE_PS_ALT_CONF_FILE 環境変数は、stop-all および start-all スクリプトによって使用されます。これらのスクリプトはそれぞれ、ポリシー サーバのサービスを停止、または起動します。.siteminder.conf ファイルはこれらのスクリプトによって作成された一時ランタイム ファイルであり、これによってユーザの SiteMinder 設定が変更されることはありません。

NETE_PS_ALT_CONF_FILE 環境変数を変更しないでください。

ポリシー サーバがインストール後に起動しない

Windows および UNIX システムで有効

症状:

ポリシー サーバをインストールしましたが、起動しません。

解決方法:

不正な JRE バージョンをインストールした可能性があります。正しい JRE バージョンを使用していることを確認します。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの **SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポートマトリックス**を参照してください。

SiteMinder 環境変数がプロファイル ファイルに設定されていない

UNIX で有効

症状:

ポリシー サーバがインストールされましたが、**SiteMinder 環境変数** (`smprofile.ksh`) が `.profile` ファイルに追加されませんでした。そのため、**SiteMinder 環境変数**を手動で設定する必要があります。

解決方法:

SiteMinder 環境変数を追加する方法

1. ポリシー サーバ ホストシステムにログインします。
2. シェルを開き、`siteminder_home` に移動します。

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
smprofile.ksh
```

SiteMinder 環境変数が設定されます。

Winsock エラー 10054 メッセージ

Windows で有効

症状:

ポリシー サーバにログインしようとする、「続行できません。winsock エラー 10054」という内容のメッセージが表示されます。

解決方法:

問題の原因は、以下のいずれかの可能性があります。

- ポリシー ストアに、適切な **SiteMinder** スキーマが含まれていません。正しい **SiteMinder** スキーマをインポートしたことを確認します。
- ポリシー サーバが実行されていません。このサーバを起動するには、ポリシー サーバ管理コンソールの[ステータス]タブを使用します。

重要: Windows Server 2008 上でこのグラフィカル ユーザ インターフェースにアクセスする場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でショートカットを開きます。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

- ポリシー サーバが、ポリシー ストアに正しく接続されていません。ポリシー サーバ管理コンソールの[データ]タブを使用して、[テスト接続]をクリックし、ポリシー ストアが正常に接続することを確認します。正しく接続していない場合、ポリシー ストアでポリシー サーバに指定することにより、[データ]タブのデータソース情報の値をもう一度入力します。

SiteMinder ライセンスの使用

症状:

- 現在ポリシー サーバ評価版ライセンスを使用しており、正式なライセンスを取得して追加する必要があります。
- **SiteMinder** ライセンスを持っていますが見つかりません。
- **SiteMinder** ライセンスを持っていますが、新しい製品キーで更新する方法がわかりません。

解決方法:

SiteMinder ライセンスを要求する方法

1. [テクニカル サポート サイト](#)に移動します。
2. [CA Licensing Inquires]をクリックします。このリンクは[Address Licensing Needs]の下にあります。
[CA Customer Care]サイトが新規ウィンドウで開きます。
3. [Licensing Issue Request]をクリックします。このリンクは[Contact Us]の下にあります。
オンラインのリクエスト フォームが新規ウィンドウで開きます。
4. 必要な情報を入力して、[Submit]をクリックします。

正式な SiteMinder ライセンスをポリシー サーバに追加する方法

1. SiteMinder ライセンスを要求します。
2. ポリシー サーバ ホスト システムにアクセスします。
3. 以下のいずれかを行います。
 - (Windows) `siteminder_home\license` に移動します
 - (UNIX) `siteminder_home/license` に移動します

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。
4. ライセンス ディレクトリに `license.dat` ファイルをコピーします。
5. ポリシー サーバを再起動します。

既存の SiteMinder ライセンスを見つける方法

1. [テクニカル サポート サイト](#)にログインします。
2. [Licensing]をクリックします。[Licensing]は[Support]の下にあります。
[CA Licensing]画面が表示されます。
3. [View Licenses]をクリックします。[View Licenses]は[SiteMinder and Identity Manager Licenses]の下にあります。
それぞれのキーが含まれるライセンス詳細のすべてが表示されます。

ライセンス ファイルに SiteMinder ライセンス キーを適用する方法

1. ポリシー サーバ ホスト システムにアクセスします。
2. 以下のいずれかの操作を行います。
 - (Windows) `siteminder_home\license` に移動します
 - (UNIX) `siteminder_home/license` に移動します

`siteminder_home`

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。
3. `license.dat` ファイルを開きます。
4. サポート サイトから獲得したライセンス キーをコピーし、ライセンス ファイルに貼り付けます。
5. ライセンス ファイルを保存します。
6. ポリシー サーバを再起動します。

ポリシー ストアのトラブルシューティング

以下のセクションでは、インストール中にポリシー ストアで発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法案について詳しく説明します。

多数のオブジェクトを含むポリシー ストア

Windows および UNIX システムで有効

症状:

ポリシー ストアから FSS 管理 UI に例外 `java.lang.IndexOutOfBoundsException` が返されました。

解決方法:

多くのオブジェクトを含むポリシー ストアは、管理 UI に例外 `java.lang.IndexOutOfBoundsException` を返す場合があります。

レジストリ キー

`\HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Netegrity\SiteMinder\CurrentVersion\ObjectStore\MaxObjects` を 100 未満の値 (50 など) に定義します。

SSL 初期化に失敗する

Windows および UNIX システムで有効

症状:

Oracle Directory Server (以前の Sun Directory Server Enterprise Edition) への SSL 暗号化接続を使用しているポリシー ストアに対して、`smldapsetup ldmod -fpstore -ssl1 -c/app/siteminder/ssl/cert7.db` を実行すると、以下のエラー メッセージが表示されます。

SSL initialization failed: error -8174 (security library: bad database.)

解決方法:

1. Netscape Web ブラウザ用の `cert7.db` と同じディレクトリ内に `key3.db` ファイルが存在することを確認します。
2. この `smldapsetup` コマンドを再実行します。`-c` オプションについては、SSL クライアント証明書データベース ファイル (`cert7.db`) が存在するディレクトリのパスを指定します。

例: `cert7.db` が `/app/siteminder/ssl` 内に存在する場合は、`-c/app/siteminder/ssl/cert7.db` を指定します。

ODBC ポリシー ストア インポートが UserDirectory エラーで失敗する

症状:

ODBC ポリシー ストアにポリシー ストア データをインポートするとき、オブジェクト タイプ「UserDirectory」に対してポリシー ストアが「保存」操作に失敗したというエラー メッセージが表示されます。

解決方法:

ODBC ストアの `userDirectory` オブジェクト内のサーバ名が 512 文字より長い可能性があります。これは、デフォルトで SiteMinder に同梱されている MS SQL Server および Oracle のポリシー ストア スキーマ スクリプトによって許可された限度を越えています。

以下のいずれかの操作を行います。

MS SQL Server ポリシー ストアのサポートされているバージョンにポリシー データをインポートする場合

1. `sm_mssql_ps.sql` を開きます。

注: このスキーマ スクリプトは `policy_server_home\db\SQL` にあります。

2. 以下のテキストを探します。

```
CREATE TABLE smuserdirectory5
```

3. 必要に応じて、「`server smstringreq512N`」を、以下のうちの 1 つに変更します。

- `server smstringreq1024,N`
- `server smstringreq4000,N`

4. ポリシー ストア スキーマをポリシー ストアに再インポートします。

5. ポリシー ストア データをインポートします。

Oracle ポリシー ストアのサポートされているバージョンにポリシー データをインポートする場合

1. `sm_oracle_ps.sql` を開きます。

注: このスキーマ スクリプトは `policy_server_home\db\SQL` にあります。

2. 以下のテキストを探します。

```
CREATE TABLE smuserdirectory5
```

3. 必要に応じて、「`server VARCHAR2(512) NOT NULL`」を、以下のうちの 1 つに変更します。

- `server VARCHAR2(1024) NOT NULL,`
- `server VARCHAR2(4000) NOT NULL,`

4. ポリシー ストア スキーマをポリシー ストアに再インポートします。

5. ポリシー ストア データをインポートします。

OneView モニタのトラブルシューティング

以下のセクションでは、インストール中に **OneView** モニタで発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法案について詳しく説明します。

変更された UNIX/Sun Java System Web Server 設定ファイルの修正

UNIX/Sun Java システムに ServletExec/AS をインストールするための手順で説明しているように、ServletExec による Sun Java System Web Server の設定ファイル (obj.conf および magnus.conf) の変更を許可しないことをお勧めします。ServletExec がインストール中にこれらのファイルを変更した場合、ポリシー サーバ インストーラ/ウィザードを使用して FSS 管理 UI および OneView モニタ GUI を設定した後、Web サーバ インスタンスが失敗します。ServletExec インストーラによって、ポリシー サーバからのエントリと矛盾するエントリがファイル内に挿入されます。

Web サーバ インスタンスが失敗しないようにするには、Sun Java System Web Server インスタンスの obj.conf および magnus.conf ファイルから矛盾するエントリを削除します。

1. `/<sunjavasystem_home>/servers/https-<web_server_instance_name>.domain.com/config/magnus.conf` を開き、先頭にある、以下の行を削除します。

```
Init fn="ServletExecInit"  
<ServExec_instance_name>.instances="<IP_address>:<portnumber> "
```

ServExec_instance_name

ServletExec インスタンスの名前を指定します。

IP_address

ServletExec がインストールされたマシンの IP アドレスを指定します。

portnumber

ServletExec インスタンスのポート番号を指定します。

注: ポリシー サーバ設定ウィザードによってファイルの最後に正しいエントリが追加されています。

2. `/<sunjavasystem_home>/servers/https-<web_server_instance_name>.domain.com/config/obj.conf` を開き、ファイルの先頭から 4 行目と 5 行目にある、以下の行を削除します。

```
NameTrans fn="assign-name" from="/servlet/*" name="<ServExec_instance_name>"  
NameTrans fn="assign-name" from="*.jsp*" name="<ServExec_instance_name>"
```

重要: 以下の行は削除しないでください。

2 行目と 3 行目の `name="se-<ServExec_instance_name>"` エントリ。これらの行は、ポリシー サーバ設定ウィザードによって追加されたものです。

3. 同じ `obj.conf` ファイルで、ファイルの終わりから、以下の 2 行目から最後の行までの `<Object name="<ServExec_instance_name>">` セクションを削除します。

```
<Object name="<ServExec_instance_name>">  
Service fn="ServletExecService" group="<ServExec_instance_name>"  
</Object>
```

重要: 以下の行は削除しないでください。

`<Object name="se-<ServExec_instance_name>">` エントリ。これは、ポリシーサーバ設定ウィザードによって追加されたものです。

4. これらのファイルを保存すると、Sun Java System Web Server の [Administration Server] ページから Web サーバ インスタンスを起動できるようになります。

/sitemindermonitor への Windows/IIS 仮想パスが存在しない

Windows で有効

症状:

IIS Microsoft 管理コンソールの [既定の Web サイト] の下に、`/sitemindermonitor` への仮想パスが存在しません。

解決方法:

仮想パスを作成します。

仮想パスを作成する方法

1. [スタート]メニューから[プログラム]-[管理ツール]-[インターネット サービス マネージャ]を選択します。
2. [既定の Web サイト]を選択します。
3. [操作]メニューから[新規作成] - [仮想ディレクトリ]を選択します。
仮想ディレクトリ作成ウィザードが起動します。

4. 仮想ディレクトリの名前(エイリアス)を指定します。以下に例を示します。
`sitemindermonitor`

注: エイリアスには、たとえば、`sitemindermonitor` など、どのような名前も指定できます。

5. [次へ] をクリックします。
6. `<siteminder_installation>\monitor\` へのパスを指定します。
7. [次へ] をクリックします。
8. 実行のアクセス許可を選択します。
9. [完了] をクリックします。

管理 UI のトラブルシューティング

以下のセクションでは、管理 UI の登録で発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法案について詳しく説明します。

ポリシー サーバ接続が登録できない

症状:

管理 UI が利用できないポリシー サーバに登録されるので、別のポリシー サーバ接続を登録しようとしています。スーパーユーザ権限を持つ管理者を使用して管理 UI にログインするとき、「ポリシー サーバ接続の登録」タスクが表示されません。

解決方法:

外部管理者ストアへの接続が設定されたとき、単一ユーザはスーパーユーザ権限が委任されていました。このスーパーユーザ アカウントを使用して管理 UI にログインします。ポリシー サーバ接続が利用できなくなるとき、このスーパーユーザはポリシー サーバ接続を登録することができる唯一のユーザです。

API エラーが表示される

症状:

エージェント API の失敗メッセージが表示されて 管理 UI の登録が失敗します。

解決方法:

ポリシー サーバが起動されていません。ポリシー サーバ管理コンソールを使用して、ポリシー サーバを起動します。

「ファイルに登録がありません」エラーが表示される

症状:

ポリシー サーバへの 管理 UI の登録が、「ファイルに登録の記録がありません」というエラーメッセージと共に失敗します。

以下のときにこのメッセージが表示される場合があります。

- 管理 UI をインストールしており、ポリシー サーバに初めて 管理 UI を登録しようとしているとき
- 管理 UI を登録しており、追加のポリシー サーバ接続を登録しようとしているとき

解決方法:

以下のいずれかの操作を行います。

初めて 管理 UI を登録しようとしている場合

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient siteminder_administrator[:passphrase] -adminui-setup
```

siteminder_administrator

SiteMinder の管理者を指定します。以下の一部として 管理 UI をインストールする場合

- 新しい r12.0 SP3 環境の一部としてインストールする場合は、デフォルトの SiteMinder 管理者アカウント(siteminder)を指定します。
- アップグレードの一部としてインストールする場合は、ポリシー ストア内でのスーパーユーザ権限のある SiteMinder 管理者アカウントを指定します。

注: r12.0 SP1 からアップグレードして、スーパーユーザ アカウントを持たない場合は、デフォルトの SiteMinder 管理者(siteminder)を作成するために smreg ユーティリティを使用します。smreg ユーティリティの使用に関する詳細については、「ポリシー サーバ管理ガイド」を参照してください。

passphrase

SiteMinder 管理者アカウントのパスワードを指定します。

制限:

- パスフレーズは 6 文字以上にする必要があります。
 - パスフレーズには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含めることができません。
 - パスフレーズにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。
3. 登録を完了させるために、デフォルトの SiteMinder 管理者アカウントを使用して 管理 UI にログインします。

追加のポリシー サーバ接続を登録しようとしている場合

1. ポリシー サーバ ホストシステムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient client_name[:passphrase] -adminui
```

client_name

登録する 管理 UI を識別します。

制限: この値は一意である必要があります。たとえば、管理 UI の登録にすでに *smui1* を使用している場合は、「*smui2*」と入力します。

passphrase

管理 UI の登録の完了に必要なパスワードを指定します。

制限:

- パスフレーズは 6 文字以上にする必要があります。
- パスフレーズには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含めることができません。
- パスフレーズにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

3. ポリシー サーバ接続を登録するために 管理 UI にログインします。

「無効な登録ファイルです」エラーが表示される

症状:

追加のポリシー サーバ接続を登録しようとしています。登録は、「無効な登録ファイルです」エラー メッセージと共に失敗します。

解決方法:

入力したパスフレーズが、XPSRegClient を使用して作成したパスフレーズと同一であることを確認します。作成した値は、管理 UI を使用して入力する値と一致する必要があります。

パスフレーズがない場合

1. ポリシー サーバ ホスト システムにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
XPSRegClient client_name[:passphrase] -adminui
```

client_name

登録する 管理 UI を識別します。

制限: この値は一意である必要があります。たとえば、管理 UI の登録にすでに **smui1** を使用している場合は、「**smui2**」と入力します。

passphrase

管理 UI の登録の完了に必要なパスワードを指定します。

制限:

- パスフレーズは 6 文字以上にする必要があります。
- パスフレーズには、アンパサンド(&)またはアスタリスク(*)を含めることができません。
- パスフレーズにスペースが含まれている場合は、引用符でパスフレーズを囲みます。

3. ポリシー サーバ接続を登録するために 管理 UI にログインします。

タイムアウトすることなく登録が失敗する

症状:

管理 UI の登録がタイムアウトにならずに失敗します。

解決方法:

以下の手順を実行します。

- ポリシー サーバをホストしているマシンを ping して使用可能であることを確認します。
- `policy_server_home\bin` にある、以下の登録ファイルを見つけます。

`name.XPSReg`

`policy_server_home`

ポリシー サーバ インストール パスを指定します。

`name`

管理 UI 登録ツール (XPSRegClient) を使用してクライアント名とパスフレーズを作成したときに指定したクライアント名を識別します。

登録ファイルが存在しない場合は、XPSRegClient を実行し、クライアント名とパスフレーズを作成します。

- ポリシー サーバ ログ ファイル (smpls.log) を開き、登録した時間の頃に発生した可能性があるエラーについてそれを確認します。

管理 UI 登録ログが見つからない

症状:

管理 UI 登録をトラブルシューティングしようとしたが、ログ ファイルを見つけることができません。

解決方法:

XPSRegClient は、ログ ファイルを *policy_server_home\log* 内に作成および保存します。ファイル名は *XPSRegClient.date* です。

policy server home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

date

XPSRegClient がファイルを作成した日付を示します。

例: XPSRegClient.2007-12-1.154002

注: 最後の 6 つの数字は、複数のファイルを同じ日に作成する場合、使用できる一意の識別子です。

検索がタイムアウト エラーで失敗する

症状:

ポリシー オブジェクトの検索を完了できません。管理 UI が、検索結果を返す代わりに接続タイムアウト エラーを表示します。

解決方法:

管理 UI を使用して多数のポリシー オブジェクトを検索すると、管理 UI とポリシー サーバとの間の接続がタイムアウトしたり、ポリシー サーバトンネル バッファが破損することがあります。これにより、接続タイムアウト エラーが発生します。この問題は、管理 UI ポリシー サーバ接続タイムアウトを調節し、ポリシー サーバトンネル バッファ サイズ用のレジストリ キーを作成すると解決します。

ポリシー サーバ接続タイムアウトを調節する方法

1. 管理 UI にログインします。
2. [管理]-[管理 UI]-[ポリシー サーバ接続]-[ポリシー サーバ接続の変更]-[検索]をクリックし、ポリシー サーバ接続オブジェクトを開きます。

3. 該当するポリシー サーバを選択し、[サブミット]をクリックします。
4. [詳細]セクションの[タイムアウト]フィールドを 2,000 秒などの大きな値に設定します。

これで、ポリシー サーバ接続タイムアウトの時間が長くなりました。

トンネル バッファ サイズ用のレジストリ キーを作成する方法

1. 以下のポリシー サーバレジストリ キーを作成します。

HKLM\SOFTWARE\Netegrity\SiteMinder\CurrentVersion\PolicyServer\
Max AdmComm Buffer Size

2. このレジストリ キーを 5,910,496 バイト(0x5a2fe0)などの大きな値に設定します。
3. 変更を保存しレジストリを終了します。

注: 接続タイムアウトおよびバッファ サイズを変更しても問題が解決しない場合、管理 UI を再起動してください。

デフォルトのログ ファイルが見つからない場合

症状:

展開された 管理 UI インスタンスのトラブルシューティングを試みているが、デフォルトのアプリケーション サーバ ログ ファイルが見つかりません

解決方法:

スタンドアロン インストール オプションを使用した場合、デフォルトのログ ファイル名は `server.log` です。このログ ファイルは `administrative_ui_home\CA\SiteMinder\adminui\server\default\log.` にあります。

`administrative_ui_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

注: JBoss、WebSphere または WebLogic の既存インスタンスに 管理 UI をインストールした場合は、デフォルトログの詳細についてベンダー固有のドキュメントを参照してください。

デフォルトのログ ファイルは、十分な情報を提供しません。

症状:

展開された 管理 UI インスタンスのトラブルシューティングを試みていますが、デフォルトのアプリケーション サーバ ログ ファイルは十分な情報を提供しません。

解決方法:

SiteMinder 固有のログの設定をするために、**SiteMinderLog4j** プロパティファイルを使用します。ファイルには、ログの設定に関するコメントが含まれます。ファイルの場所は、管理 UI をインストールするために使用されたインストール オプションに応じて決まります。

■ スタンドアロン インストール

スタンドアロン インストール オプションを使用した場合、プロパティファイルは

`administrative_ui_home\CA\SiteMinder\adminui\server\default\deploy\iam_siteminder.ear\user_console.war\META-INF` にあります。

`administrative_ui_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

■ 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャ

既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールした場合、プロパティファイルは

`deploy\iam_siteminder.ear\user_console.war\META-INF` にあります。

`deploy`

アプリケーション サーバがアプリケーションを展開する場所を指定します。

注: 管理 UI を r12.0 SP3 にアップグレードした場合、プロパティファイル `deploy/IdentityMinder.ear/user_console.war/META-INF` にあります。

FSS 管理 UI のトラブルシューティング

以下のセクションでは、FSS 管理 UI および解決方法案の使用で発生する可能性がある一般的な問題について詳しく説明します。

IE で FSS 管理 UI が起動しない

症状:

Internet Explorer で FSS 管理 UI を起動しようとしたが、失敗します。

解決方法:

以下を実行することにより、ブラウザでデフォルト Java Runtime として Java Plug-in が設定されていることを確認します。

1. コントロール パネルで、Java Plug-In を選択します。
2. [詳細]タブで、Microsoft Internet Explorer が選択されていることを確認し、[適用]をクリックします。
 - プラグインが設定されていない場合、FSS 管理 UI は[Downloading Administration]ダイアログ ボックスで無期限に停止します。
 - 依然として FSS 管理 UI が表示できない場合は、次の URL で FSS 管理 UI Browser Compatibility Test を実行します:
<http://www.netegrity.com/uitest>
 - パネルに何も表示されない場合、トラブルシューティングの詳細については、[詳細]をクリックします。

FSS 管理 UI が Windows 上で表示されない

Windows で有効

症状:

FSS 管理 UI をインストールしましたが、表示されません。

解決方法:

80 以外のポートに Internet Information Server (IIS) Web サーバをインストールした場合、FSS 管理 UI が表示されない場合があります。FSS 管理 UI ショートカット URL を編集すると問題が解決します。

ショートカット URL を編集する方法

1. [スタート]ボタンを右クリックし、[開く - All Uses]を選択します。
2. Programs をダブルクリックします。
3. SiteMinder をダブルクリックします。

4. FSS 管理 UI アイコンを強調表示し、右クリックし、[プロパティ]を選択します。
5. [Webドキュメント]タブを選択します。
6. [Webドキュメント]タブの[URL]フィールドで、ポート番号を IIS Web サーバのために設定したものに変わります。
例: IIS Web サーバがポート 81 に配置されている場合、
`http://<fully qualified domain name>:80/siteminder/index.htm`
を `http://<fully qualified domain name>:81/siteminder/index.htm` に変更します。
7. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。

依然として FSS 管理 UI が表示できない場合は、次の URL で FSS 管理 UI Browser Compatibility Test を実行します: <http://www.netegrity.com/uitest>

パネルに何も表示されない場合、トラブルシューティングの詳細については、[詳細]をクリックします。

FSS 管理 UI が Sun Java Web Server 上で起動に失敗する

症状:

Sun Java System Web Server 用に設定された FSS 管理 UI を起動しようとしたが、起動しません。

解決方法:

以下を実行することにより、[Java Enabled Globally]オプションを無効にします。

1. ブラウザ内に次の URL を入力することにより、Sun Java System Enterprise 管理サーバのホーム ページを開きます:
`http://<yourserver.com>:<webserverport>`
`yourserver.com`
Enterprise 管理サーバのドメイン名を指定します。
`webserverport`
ポート番号を指定します。
2. [Select a Server]ドロップダウンメニューで、サーバを選択し、[Manage]をクリックします。
3. [Java]タブを選択します。

4. [Enable Java for class defaultclass]および[Enable Java Globally]をオフにし、[OK]をクリックします。
5. Web サーバを起動します。

IIS 6.0 の使用後に IIS 7.0 で正しい FSS 管理 UI を表示

IIS 6.0 Web サーバ上でブラウザから FSS 管理 UI を開き、同じシステム上のブラウザから FSS 管理 UI にアクセスする場合、IIS 7.0 上で UI にアクセスする前に Java キャッシュをフラッシュする必要があります。

Java キャッシュをフラッシュする方法

1. IIS 6.0 Web サーバ上で FSS 管理 UI を参照するシステムの Java コントロール パネルを開きます。
2. [基本]タブで[インターネット一時ファイル]を選択します。
3. ファイルの削除を選択します。
4. [了解]を選択してコントロール パネルを終了します。
5. ブラウザを再起動します。

レポート サーバのトラブルシューティング

以下のセクションでは、レポート サーバおよび解決方法案の使用で発生する可能性がある一般的な問題について詳しく説明します。

レポート サーバ インストーラにファイル不足エラーが表示される

Windows で有効

症状:

インストール中に、vcredist.msi ファイルがないというメッセージが表示されます。このメッセージでは、ファイルが存在するディレクトリにマップするよう要求されます。

解決方法:

以下のいずれかを行います。

- Microsoft Visual C++ 2005 再頒布可能パッケージをアンインストールします。
- [キャンセル]をクリックしてインストールを続行します。

インストールが正常に完了します。Xcelsius アプリケーションに関して問題が発生した場合は、Microsoft の Web サイトから `vcredist.msi` をダウンロードしてインストールします。

アンインストールでアプリケーションを閉じるよう要求される

Windows 2008 R2 で有効

症状:

レポート サーバをアンインストールしているときに、インストーラによって、続行する前に以下のアプリケーションを閉じるよう要求されました。

- Java Platform SE binary
- BOE120MySQL

解決方法:

アプリケーションを閉じないオプションを選択し、[OK]をクリックします。

インストーラによって自動的にアプリケーションが閉じられると、プロセスは失敗します。

レポート サーバのインストールは、文字に関するエラーで失敗します。

症状:

インストールは、インストール パスで使用了文字に関連するエラーで失敗します。

解決方法:

レポート サーバのインストールは、インストール パス中で以下の文字タイプのみをサポートします。

- 英数字
- スペース

- ダッシュ
- アンダーライン

これらの文字タイプのみを含むように、インストール パスを変更します。

監査を基にしたレポートが結果を返さない

Oracle ベースの監査ストアに有効です。

症状:

監査を基にしたレポートが結果を返しません。

解決方法:

監査データベースを設定するときに使用されたユーザ アカウントが DB ロールを持っているかどうかを判別します。ユーザ アカウントに DB ロールがある場合は、それを削除します。DB ロールは、監査を基にしたレポートが正しい監査テーブルにクエリするのを妨げます。

ポリシー分析レポートが実行できない

Solaris に該当

症状:

ポリシー分析レポートを実行しようとする、以下の内容のメッセージでレポートが失敗します。

データベースからデータを取得できませんでした。

解決方法:

このエラーは以下のいずれかの問題に関連しています。

CRConfig.xml ファイルに Java クラスがありません。

1. `report_server_home/CommonReporting3/bobje/java` に移動します。

`report_server_home`

レポートサーバのインストール パスを指定します。

2. ファイルの **Classpath** セクションに以下のクラスが含まれていることを確認します。
 - smjavaagentapi.jar
 - smanalyzer.jar
3. **JavaBeans** セクションに以下のクラスが含まれていることを確認します。
webadmin-report-ds.jar

レポート サーバとポリシー サーバの間の接続が壊れています。

レポート サーバを再登録します。

レポート サーバが正しく起動しませんでした。

レポート サーバを再起動します。

詳細情報:

[レポートサーバを登録する方法](#) (P. 356)

[レポートサーバを再起動します。](#) (P. 362)

アンインストール中に Java エラー メッセージが表示される

症状:

ポリシー サーバ、Web エージェント、SDK、またはドキュメントをアンインストールしようとしたときに、アンインストール プログラムが停止し、以下のエラー メッセージの 1 つが表示されます。

- "Could not find a valid Java virtual machine to load. You need to reinstall a supported Java virtual machine."
- "No Java virtual machine could be found from your PATH environment variable. You must install a VM prior to running this program."

解決方法:

JRE が PATH 変数に設定されていることを確認します。

Windows 上で PATH 変数に JRE を設定します

PATH 変数に JRE を設定する方法

1. [コントロール パネル]に移動します。
2. [システム]をダブルクリックします。
3. [環境変数]ダイアログ ボックスで、Path システム変数に JRE の場所を追加します。

Solaris 上の PATH 変数での JRE の設定

PATH 変数に JRE を設定する方法

以下のコマンドを実行します。

1. `PATH=$PATH:<JRE>/bin`

JRE

JRE の場所を指定します。

2. `export PATH`

Adobe Acrobat Reader がインストールされない

Windows で有効

症状:

Adobe Acrobat をインストールしようとする、インストール プログラムが停止します。

解決方法:

ポリシー サーバ サービスの実行中に、**Acrobat Reader** のインストール プログラムが停止する場合は、ポリシー サーバ管理コンソールの[ステータス]タブを使用して、ポリシー サーバ サービスを停止します。サービスを停止すると、インストール プログラムが起動します。

重要: Windows Server 2008 上でこのグラフィカル ユーザ インターフェイスにアクセスする場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でショートカットを開きます。詳細については、お使いの **SiteMinder** コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

ユーザ ストアとしての Active Directory の使用に関する問題

症状:

ユーザ ストアとして **Active Directory** を使用するとき、ポリシー サーバがこのストアへ接続できないというエラー メッセージが発行されます。

解決方法:

Active Directory ベースのユーザ ストアを作成するときは、管理 UI で完全修飾ホスト名 (たとえば **host.domain.com**) を指定します。マシンの IP アドレスを使用しないでください。また、**Active Directory** によって、その完全修飾ホスト名で識別されたポリシー サーバにリフェラルが送信されるため、ポリシー サーバがインストールされているマシンから **host.domain.com** および **domain.com** に ping できることを確認します。完全修飾ホスト名が無効で到達できない場合、ポリシー サーバはエラー メッセージを発行します。

AE がライブラリ「smjavaapi」のロードに失敗した システム エラ

Windows および UNIX システムで有効

症状:

許可中に、「AE failed to load library 'smjavaapi'. System error: The specified module could not be found.」というエラー メッセージが表示されます。

解決方法:

Windows の場合は、PATH 変数を
<SiteMinder_installation>\config\JVMOPTIONS.txt に設定します。UNIX システム
の場合は、LD_LIBRARY_PATH を
<SiteMinder_installation>/config/JVMOPTIONS.txt に設定します。

付録 D: 無人インストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[無人インストール](#) (P. 463)

[無人インストールのガイドライン](#) (P. 463)

[デフォルトプロパティファイル](#) (P. 464)

[ポリシー サーバの無人インストールを実行する方法](#) (P. 466)

[管理 UI の無人インストールを実行する方法](#) (P. 484)

[レポートサーバの無人インストールを実行する方法](#) (P. 492)

無人インストール

SiteMinder コンポーネントをインストールした後、無人インストールを使用して、コンポーネントを再度インストールできます。無人インストールでは、ユーザによる操作なしにインストールを完了できます。無人インストールを使用して以下をインストールすることができます。

- ポリシー サーバ
- 管理 UI
- レポートサーバ

無人インストールのガイドライン

各 SiteMinder コンポーネントは、そのプロパティファイルと関連付けられています。すべてのプロパティファイルに、以下のガイドラインが適用されます。無人インストールを開始する前に、以下を確認します。

- デフォルトプロパティファイルを変更する前に、バックアップします。
- パラメータ名、等号(=)およびパラメータの値の間に、決して余分なスペースを追加しないでください。
- 変更後に、ファイルを保存します。

- 決して暗号化パスワードを手動で編集しないでください。これらのパスワードはセキュリティ上の理由で暗号化されており、プレーンテキストでは編集できません。プレーンテキストでパスワードを追加する場合には、暗号化パスワードのパラメータをコメントアウトして、プレーンテキストの参照をコメント解除します。

デフォルトプロパティファイル

デフォルトプロパティファイル内のパラメータを変更するために、テキストエディタを使用します。デフォルトパラメータは、最初のインストール中に入力された情報を反映します。

ポリシーサーバプロパティファイル

ポリシーサーバプロパティファイルのデフォルトの名前および場所は以下のとおりです。

名前

`ca-ps-installer.properties`

場所

`policy_server_home¥siteminder¥install_config_info`

`policy_server_home`

ポリシーサーバのインストールパスを指定します。

管理 UI プロパティファイル

管理 UI のサイレント インストールには、プロパティファイルが 1 つだけ必要とされます。必要なファイルは、選択するインストール オプションによって異なります。利用可能なプロパティファイルのデフォルトの名前および場所は、以下のとおりです。

- **smwamui-installer.properties**

既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールする場合には、このファイルを使用します。

場所

`admin_ui_home¥siteminder¥adminui¥install_config_info`

`admin_ui_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

- **prerequisite-installer.properties**

スタンドアロン インストール オプションを使用してインストールする場合には、このファイルを使用します。

注: このファイルは、スタンドアロン インストール オプションを使用して 管理 UI があらかじめインストールされた場合のみ使用することができます。

場所

`admin_ui_home¥siteminder¥adminui¥install_config_info`

`admin_ui_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

詳細情報:

[管理 UI インストール オプション](#) (P. 292)

レポート プロパティ ファイル

SiteMinder レポートのサイレント インストールには、レポート サーバ用の応答ファイルおよび SiteMinder レポート サーバ設定ウィザード用の応答ファイルが必要です。これらのファイルの名前およびデフォルトの場所は以下のとおりです。

- **cabiresponse.ini**

このファイルを使用してレポート サーバをインストールします。

デフォルトの場所: `report_server_home\CA\SC\CommonReporting3`

`report_server_home`

レポート サーバのインストール パスを指定します。

- **reportserver_config_installer.properties**

このファイルを使用して、SiteMinder レポート テンプレートをインストールします。

デフォルトの場所:

`report_server_home\CommonReporting3\install_config_info`

`report_server_home`

レポート サーバのインストール パスを指定します。

ポリシー サーバの無人インストールを実行する方法

ポリシー サーバの無人インストールを実行するには、以下の手順を完了します。

1. 無人インストールのガイドラインを確認します。
2. ポリシー サーバ プロパティ ファイルをポリシー サーバ ホストシステムからコピーします。
3. 以下のいずれかを行います。
 - ポリシー サーバを再インストールする場合は、ファイルを一時的な場所にコピーします。
 - ポリシー サーバを新しいシステムにインストールする場合は、ファイルをそのシステム上の一時的な場所にコピーします。

注: (UNIX) UNIX ユーザが、このディレクトリからインストールするための適切な権限を持っていることを確認してください。

4. ポリシー サーバのインストール メディアは、プロパティ ファイルと同じ場所にコピーします。
5. ポリシー サーバ インストーラのプロパティ ファイルを変更します。
6. ポリシー サーバのインストーラを実行します。
7. ポリシー サーバのインストールを確認します。

詳細情報:

[無人インストールのガイドライン](#) (P. 463)

ポリシー サーバ インストーラのプロパティ ファイルの変更

インストール変数を定義するために、ポリシー サーバ インストーラのプロパティ ファイルを変更します。このファイル内のデフォルトのパラメータ、パスワードおよびパスは、最初のポリシー サーバインストール中に入力した情報を反映します。

重要: プロパティ テンプレートには、ポリシー サーバの **FIPS** モードの運用を指定する変数 **CA_SM_PS_FIPS140** が含まれています。ポリシー サーバを再インストールする場合は、この変数の値を変更しないでください。必要に応じて、ポリシー サーバを再インストールした後に、**FIPS** モードの運用を変更します。ポリシー サーバの **FIPS** モードの運用の変更の詳細については、「アップグレード ガイド」を参照してください。

ポリシー サーバ全般情報

この全般情報セクションでは、以下を設定できます。

DEFAULT_INSTALL_DIR

ポリシー サーバ インストールの場所を指定します。

DEFAULT_SHORTCUTS_DIR

SiteMinder プログラム アイコンの場所を指定します。

例: C:\¥¥Documents and Settings¥¥All Users¥¥Start or /SiteMinder

注: アイコン機能は Windows 上でのみ有効です。

DEFAULT_JRE_ROOT

JRE のインストール場所を指定します。

DEFAULT_BROWSER

(UNIX のみ) ブラウザのインストール場所を指定します。

例: /usr/dt/appconfig/netscape/netscape

DEFAULT_SMPROFILE_CHOICE

(UNIX のみ) .profile ファイルに smprofile.ksh を追加するかどうかを指定します。「はい」の場合は **true** を、「いいえ」の場合は **false** を指定します。

DEFAULT_ENCRYPTKEY

クリア テキスト暗号化キーの入力を可能にします。このキーにより、ポリシー サーバとポリシー ストアの間で送信されるデータが保護されます。

注: ENCRYPTED_ENCRYPTKEY パラメータをコメントアウトし、DEFAULT_ENCRYPTKEY をコメント解除する場合、無人インストーラでは DEFAULT_ENCRYPTKEY からのクリア テキスト暗号化キー値が使用されます。DEFAULT_ENCRYPTKEY パラメータは、デフォルトでポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_ENCRYPTKEY

暗号化された暗号化キーを表示します。このキーにより、ポリシー サーバとポリシー ストアの間で送信されるデータが保護されます。このキーは、ポリシー サーバの最初のインストール中に入力しており、変更できません。

重要: この暗号化された値は変更しないでください。変更すると、無人インストールを実行するときにポリシー サーバとポリシー ストアとの間の通信が損なわれます。

DEFAULT_ENCRYPTKEY パラメータをコメントアウトし、ENCRYPTED_ENCRYPTKEY をコメント解除する場合、無人インストーラでは ENCRYPTED_ENCRYPTKEY からの暗号化された暗号化キー値が使用されます。

CA_SM_PS_FIPS140

ポリシー サーバの FIPS モードの運用を指定します。

値: COMPAT、MIGRATE、または ONLY

重要: ポリシー サーバを再インストールする場合は、この値を変更しないでください。

ポリシー サーバ機能

この機能セクションでは、以下を設定できます。

DEFAULT_OVMGUI_CHOICE

ポリシー サーバ インストーラが、選択された Web サーバ上に OneView モニタ GUI を設定するかどうかを決定します。

有効値: true または false

true

インストーラは OneView モニタ GUI を設定します。

この値を true に設定すると、OneView モニタ GUI および Web サーバに追加の設定が必要になります。

false

インストーラは OneView モニタ GUI を設定しません。

DEFAULT_WEBSERVERS_CHOICE

ポリシー サーバ インストーラが、指定された Web サーバに、FSS 管理 UI、SiteMinder CGI スクリプト、および OneView モニタを設定するかどうかを決定します。

有効値: true または false

true

インストーラは、指定された Web サーバでこれらのコンポーネントを設定します。

この値を true に設定すると、Web サーバに追加の設定が必要になります。

false

インストーラは、Web サーバでこれらのコンポーネントを設定しません。

DEFAULT_SNMP_CHOICE

ポリシー サーバ インストーラが、ポリシー サーバで SiteMinder SNMP サポートを設定するかどうかを決定します。

有効値: true または false

true

インストーラは SiteMinder SNMP サポートを設定します。

この値を **true** に設定すると、SNMP に追加の設定が必要になります。

false

インストーラは SiteMinder SNMP サポートを設定しません。

DEFAULT_POLICYSTORE_CHOICE

ポリシー サーバ インストーラが、ポリシー ストアを自動的に設定するかどうかを決定します。

有効値: true または false

true

インストーラはポリシー ストアを設定します。

この値を **true** に設定すると、ポリシー ストアに追加の設定が必要になります。

false

インストーラはポリシー ストアを設定しません。

DEFAULT_SMKEYDB_CHOICE

ポリシー サーバ インストーラが、以下のいずれかを実行するかどうかを決定します。

- smkeydatabase の作成。
- 既存の smkeydatabase のパスワードの変更。

有効値: true または false

true

インストーラが **smkeydatabase** を作成するか、または既存の **smkeydatabase** のパスワードを変更します。

この値を **true** に設定すると、**SM** キー データベースに追加の設定が必要になります。

false

インストーラは **smkeydatabase** を作成または更新しません。

OneView モニタの GUI

DEFAULT_OVMGUI_CHOICE パラメータを **TRUE** に設定した場合、以下を設定します。

DEFAULT_JDK_ROOT

JDK のインストール場所を指定します。

DEFAULT_SERVLETEXEC_INSTANCE_NAME

(UNIX のみ) ServletExec インスタンスの名前を指定します。

例: se-testmachine-60psGUI

DEFAULT_SERVLETEXEC_ROOT

ServletExec のインストール場所を指定します。

例: C:\¥¥Program Files¥¥New Atlanta¥¥ServletExec ISAPI または
/export/NewAtlanta/ServletExecAS

DEFAULT_SERVLETEXEC_PORT

(UNIX のみ) ServletExec インスタンスのポート番号を指定します。

例: 7676

Web サーバ

DEFAULT_WEBSERVERS_CHOICE パラメータを **true** に設定した場合、以下を考慮します。

DEFAULT_WEB_SERVER_INFO

ポリシー サーバ インストーラで設定する Web サーバのタイプを指定します。別の Web サーバを設定するか、別の Web サーバ インスタンスを追加する場合、この値は手動で変更しないでください。

設定する Web サーバを参照するポリシー サーバ インストーラ プロパティ ファイルを特定し、このファイルに全エントリをコピーします。

DEFAULT_WEB_SERVER_ROOT

このパラメータには値を入力しないでください。値は必要ありません。

SNMP

SNMP パスワードを変更する場合は、以下を設定します。

DEFAULT_ROOT_PW

UNIX システムの root ユーザ用のクリア テキスト SNMP パスワードの入力を可能にします。ENCRYPTED_ROOT_PW パラメータをコメントアウトし、DEFAULT_ROOT_PW をコメント解除する場合、無人インストーラでは DEFAULT_ROOT_PW からのクリア テキスト SNMP パスワードが使用されます。

デフォルト: DEFAULT_ROOT_PW パラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_ROOT_PW

UNIX システムの root ユーザ用の暗号化された SNMP パスワードを表示します。このパスワードは、UNIX ポリシー サーバの最初のインストール中に入力してあり、変更できません。

重要: この暗号化されたパスワードは変更しないでください。変更するとポリシー サーバと SNMP エージェントとの間の通信が損なわれます。

DEFAULT_ROOT_PW パラメータをコメントアウトし、ENCRYPTED_ROOT_PW をコメント解除する場合、無人インストーラでは ENCRYPTED_ROOT_PW からの暗号化されたパスワードが使用されます。

ポリシー ストア

DEFAULT_POLICystore_CHOICE パラメータを **true** に設定した場合、以下を設定します。

DEFAULT_POLICystore_TYPE

ポリシー ストアとして機能するストアのタイプを指定します。

有効値: LDAP または RDB

LDAP

LDAP ポリシー ストアを指定します。

RDB

ODBC ポリシー ストアを指定します。

DEFAULT_POLICystore_IP

(LDAP) LDAP ディレクトリ サーバ ホストシステムの IP アドレスまたは名前を指定します。

例: 172.16.0.0

DEFAULT_POLICystore_PORT

(LDAP) LDAP ディレクトリ サーバがリスンするポートを指定します。

例: 1356.

DEFAULT_POLICystore_ADMINDN

(LDAP) 以下の権限を持つ管理者の LDAP ユーザ名を指定します。

- スキーマの作成。
- ポリシー ストア ルート オブジェクト下の LDAP ツリーでのオブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。

例: cn=Directory Manager

DEFAULT_POLICystore_ADMINPW

(LDAP) LDAP ディレクトリ サーバの管理者用にクリア テキスト パスワードを入力できます。

ENCRYPTED_POLICystore_ADMINPW パラメータをコメントアウトし、DEFAULT_POLICystore_ADMINPW をコメント解除した場合、無人インストールでは DEFAULT_POLICystore_ADMINPW からのクリア テキスト パスワードが使用されます。

デフォルト: DEFAULT_POLICystore_ADMINPW パラメータは、ポリシーサーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_POLICystore_ADMINPW

(LDAP) LDAP ディレクトリ サーバの管理者用の暗号化されたパスワードを表します。このパスワードは、ポリシー サーバ インストーラが最後にポリシーストアを設定した時に入力されたものです。既存の暗号化された値を使用して、新規ポリシー ストア用の LDAP 管理者パスワードを提供することができます。このパスワードは変更できません。

重要: このパスワードは変更しないでください。パスワードは暗号化されます。DEFAULT_POLICystore_ADMINPW パラメータをコメントアウトし、ENCRYPTED_POLICystore_ADMINPW をコメント解除した場合、インストーラでは ENCRYPTED_POLICystore_ADMINPW からの暗号化されたパスワードが使用されます。

DEFAULT_POLICystore_ROOTDN

(LDAP) LDAP ディレクトリ サーバのルート DN を指定します。

Example: o=example.com

DEFAULT_POLICystore_USER_CHOICE

(LDAP) DEFAULT_POLICystore_ADMINDN パラメータは、スキーマを作成する権限がある LDAP 管理者ユーザ名を必要とします。デフォルトでは、ポリシー サーバはこのアカウントを使用してポリシー ストアを管理します。ポリシー ストアが設定された後、代替りの LDAP ユーザ アカウントがポリシー ストアの SiteMinder データを管理することができます。代替りのアカウントは、オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除の権限を持っている必要があります。

有効値: true または false

true

ポリシー ストアが設定された後、代替りの LDAP ユーザ アカウントがポリシー ストアを管理することを指定します。

false

ポリシー ストアが設定された後、DEFAULT_POLICystore_ADMINDN によって特定された LDAP 管理者ユーザ アカウントがポリシー ストアを管理することを指定します。

DEFAULT_POLICystore_USERDN

(LDAP) 代替りの LDAP ユーザ アカウントの DN を指定します。

例: uid=SMAdmin, ou=people, o=security.com

DEFAULT_POLICystore_USERPW

(LDAP) 代替りの LDAP ユーザのクリア テキスト パスワードを入力できます。ENCRYPTED_POLICystore_USERPW パラメータをコメントアウトし、DEFAULT_POLICystore_USERPW をコメント解除した場合、無人インストーラでは DEFAULT_POLICystore_USERPW からのクリア テキスト パスワードが使用されます。

デフォルト: DEFAULT_POLICystore_USERPW パラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_POLICYSTORE_USERPW

(LDAP) 代わりの LDAP ユーザの暗号化されたパスワードを表します。このパスワードは、ポリシー サーバ インストーラが最後にポリシー ストアを設定した時に入力されたものです。既存の暗号化された値を使用して、新規ポリシー ストア用の代わりの管理者パスワードを設定することができます。このパスワードは変更できません。

重要: このパスワードは変更しないでください。パスワードは暗号化されます。

DEFAULT_POLICYSTORE_USERPW パラメータをコメントアウトし、ENCRYPTED_POLICYSTORE_USERPW をコメント解除した場合、インストーラでは ENCRYPTED_POLICYSTORE_USERPW からの暗号化されたパスワードが使用されます。

DEFAULT_INIT_POLICYSTORE_CHOICE

(LDAP/RDB) ポリシー サーバ インストーラがポリシーを初期化する必要があることを指定します。

有効値: true または false

true

インストーラはポリシー ストアを初期化します。

false

インストーラはポリシー ストアを初期化しません。

DEFAULT_SM_ADMINPW

(LDAP/RDB) SiteMinder スーパーユーザ アカウント(siteminder) のクリア テキストパスワードを入力します。

ENCRYPTED_SM_ADMINPW をコメントアウトし、DEFAULT_SM_ADMINPW をコメント解除した場合、インストーラでは DEFAULT_SM_ADMINPW からのクリア テキストパスワードが使用されます。

デフォルト: DEFAULT_SM_ADMINPW パラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_SM_ADMINPW

(LDAP/RDB) SiteMinder スーパーユーザ (siteminder) の暗号化されたパスワードを表します。このパスワードは、ポリシー サーバ インストーラが最後にポリシー ストアを設定した時に入力されたものです。既存の暗号化された値を使用して、新規ポリシー ストア用の SiteMinder スーパーユーザ パスワードを設定することができます。このパスワードは変更できません。

重要: このパスワードは変更しないでください。パスワードは暗号化されます。

DEFAULT_SM_ADMINPW をコメントアウトし、ENCRYPTED_SM_ADMINPW をコメント解除した場合、インストーラでは ENCRYPTED_SM_ADMINPW からの暗号化されたパスワードが使用されます。

DEFAULT_RDB_DSN

(RDB) ポリシー サーバ インストーラが作成する DSN の名前を指定します。

DEFAULT_RDB_DBSERVER

(RDB) データベース ホスト システムの IP アドレスまたは名前を指定します。

DEFAULT_RDB_DBNAME

(RDB) 次のいずれかを指定します。

- (SQL Server) ポリシー ストアとして機能する SQL Server データベースの名前付きインスタンスまたはデータベース名。
- (Oracle) ポリシー ストアとして機能する Oracle のデータベースのサービス名。

DEFAULT_RDB_PORT

(RDB) データベースがリスニングするポートを指定します。

DEFAULT_RDB_USER_NAME

(RDB) 以下の権限があるデータベース管理者アカウントの名前を指定します。

- スキーマの作成。
- オブジェクトの作成、読み取り、変更、削除。

DEFAULT_RDB_DBTYPE

ポリシー ストアとして機能するデータベースのタイプを指定します。

有効値: DB_MSSQL または DB_ORACLE

DB_MSSQL

SQL Server ポリシー ストアを指定します。

DB_ORACLE

Oracle ポリシー ストアを指定します。

DEFAULT_RDB_PASSWORD

(RDB) データベース管理者のクリア テキスト パスワードを入力できます。

デフォルト: このパラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_RDB_PASSWORD をコメントアウトし、
DEFAULT_RDB_PASSWORD をコメント解除した場合、インストーラでは
DEFAULT_RDB_PASSWORD からのクリア テキスト パスワードが使用されます。

ENCRYPTED_RDB_PASSWORD

(RDB) インストーラが最後にポリシー ストアを設定した時に入力されたデータベース管理者パスワードの暗号化された値を表します。

デフォルト: このパラメータはコメント解除されます。このパラメータをコメントアウトせず、DEFAULT_RDB_PASSWORD がコメント解除されない限り、インストーラではこの値が使用されます。

DEFAULT_KEYSTORE_CONFIG

SiteMinder キー ストアがポリシー ストアと連結されるかどうかを指定します。

有効値: true または false

true

インストーラはキー ストアとポリシー ストアを連結します。

false

インストーラはキー ストアを設定しません。ポリシー ストアを設定した後に、スタンドアロン キー ストアを設定します。

SM キー データベース

DEFAULT_SMKEYDB_CHOICE パラメータを true に設定した場合、以下を設定します。

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB

ポリシー サーバ インストーラで **smkeydatabase** を作成するか、既存の **smkeydatabase** のパスワードを変更するかどうかを指定します。

true

インストーラは **smkeydatabase** を作成します。

false

インストーラは、既存の **smkeydatabase** のパスワードを変更します。

DEFAULT_SMKEYDB_PW

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを **true** に設定した場合、このパラメータに、新しい **smkeydatabase** 用のクリア テキストパスワードを入力できます。

デフォルト: このパラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_SMKEYDB_PW をコメントアウトし、DEFAULT_SMKEYDB_PW をコメント解除した場合、インストーラでは DEFAULT_SMKEYDB_PW からのクリア テキストパスワードが使用されます。

ENCRYPTED_SMKEYDB_PW

ポリシー サーバ インストーラが最後に **smkeydatabase** を設定したときに暗号化された **smkeydatabase** パスワードを表します。

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを **true** に設定した場合、既存の暗号化された値を使用して、新しい **smkeydatabase** 用のパスワードを設定できます。このパスワードは変更できません。

デフォルト: このパラメータはコメント解除されます。このパラメータをコメントアウトせず、DEFAULT_SMKEYDB_PW がコメント解除されない限り、インストーラではこの値が使用されます。

重要: 値が暗号化されるため、このパスワードは変更しないでください。

DEFAULT_OLD_SMKEYDB_PW

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを `false` に設定した場合、このパラメータに、既存の `smkeydatabase` パスワードをクリア テキストで入力できます。

デフォルト: このパラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_OLD_SMKEYDB_PW をコメントアウトし、DEFAULT_OLD_SMKEYDB_PW をコメントを解除した場合、インストーラでは DEFAULT_OLD_SMKEYDB_PW のクリア テキストパスワードを使用します。

ENCRYPTED_OLD_SMKEYDB_PW

ポリシー サーバ インストーラが最後に `smkeydatabase` を設定したときに暗号化された `smkeydatabase` パスワードを表します。

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを `false` に設定した場合、既存の暗号化された値を使用して `smkeydatabase` パスワードを変更できます。このパスワードは変更できません。

デフォルト: このパラメータはコメントアウトされません。このパラメータをコメントアウトせず、DEFAULT_OLD_SMKEYDB_PW がコメント解除されない限り、インストーラではこの値が使用されます。

重要: 値が暗号化されるため、このパスワードは変更しないでください。

DEFAULT_NEW_SMKEYDB_PW

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを `false` に設定した場合、このパラメータに、新しい `smkeydatabase` パスワードをクリア テキストで入力できます。

デフォルト: このパラメータは、ポリシー サーバの最初のインストールの後にコメントアウトされます。

ENCRYPTED_NEW_SMKEYDB_PW をコメントアウトし、DEFAULT_NEW_SMKEYDB_PW をコメントを解除した場合、インストーラでは DEFAULT_NEW_SMKEYDB_PW のクリア テキストパスワードを使用します。

ENCRYPTED_NEW_SMKEYDB_PW

ポリシー サーバ インストーラが最後に `smkeydatabase` パスワードを変更したときに暗号化された `smkeydatabase` パスワードを表します。

DEFAULT_CREATE_SMKEYDB パラメータを `false` に設定した場合、既存の暗号化されたパラメータを使用して `smkeydatabase` パスワードを変更できます。既存の値がわかる場合、暗号化された値のみを使用してパスワードを変更してください。このパスワードは変更できません。

デフォルト: このパラメータはコメントアウトされません。このパラメータをコメントアウトせず、`DEFAULT_NEW_SMKEYDB_PW` がコメント解除されない限り、インストーラではこの値が使用されます。

重要: 値が暗号化されるため、このパスワードは変更しないでください。

`DEFAULT_SMKEYBD_IMPORT_CHOICE`

`DEFAULT_CREATE_SMKEYDB` パラメータを `true` に設定した場合、このパラメータに、インストーラが認証機関 (CA) のデフォルト証明書を `smkeydatabase` にインポートするかどうかを指定します。

`true`

インストーラは CA デフォルト証明書をインポートします。

`false`

インストーラは CA デフォルト証明書をインポートしません。インストーラが `smkeydatabase` を作成した後、これらの証明書は `smkeydatabase` へ手動でインポートされる必要があります。

ポリシー サーバ インストーラの実行

無人インストールを実行し、ユーザによる操作なしでポリシー サーバをインストールします。

インストールする前に

テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用してポリシー サーバをインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

Windows

ポリシー サーバの無人インストールを実行するには、ポリシー サーバ インストール実行ファイルとプロパティファイルをコピーしたディレクトリから以下のコマンドを実行します。

```
installation_media -f ca-ps-installer.properties -i silent
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

installation_media

ポリシー サーバのインストール実行ファイルを指定します。

注: プロパティファイルがインストール メディアと同じディレクトリ内に存在しない場合は、その場所を指定します。引数にスペースが含まれている場合は、二重引用符を使用します。

-i silent

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

例:

```
installation_media -f "C:\Program  
Files\CA\siteminder\install_config_info\ca-ps-installer.properties" -i silent
```

インストールが開始されます。ポリシー サーバをインストールするために、インストーラはプロパティファイル内の指定されたパラメータを使用します。

UNIX

ポリシー サーバの無人インストールを実行する方法

1. シェルを開きます。
2. ポリシー サーバ インストール実行ファイルおよびポリシー サーバ インストール プロパティファイルをコピーしたディレクトリから以下のコマンドを実行します。

```
./installation_media -f ca-ps-installer.properties -i silent
```

installation_media

ポリシー サーバのインストール実行ファイルを指定します。

`-i silent`

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

インストールが開始されます。ポリシー サーバをインストールするために、インストーラはプロパティファイル内の指定されたパラメータを使用します。

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング

ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティングには、以下のファイルを使用します。

- `CA_SiteMinder_Policy_Server_release_InstallLog.log`

インストール ログは、インストール中に発生した成功、警告、致命的でないエラーおよびエラーの数をリスト表示するサマリ セクションを含みます。個別のインストール アクションは、それぞれのステータスと共にリスト表示されます。

release

ポリシー サーバのリリースを指定します。

場所: `siteminder_home\siteminder\install_config_info`

- `ca-ps-details.log`

ポリシー ストア ログは、ポリシー ストア ステータスを詳述します。

場所: `siteminder_home\siteminder\install_config_info`

- `smpls.log`

`smpls.log` は、ポリシー サーバが開始されるときに作成されます。ポリシー サーバが正常にインストールされた場合、このログは以下の行を含みます。

[Info]ジャーナル スレッドが開始され、60 分以上前のコマンドを削除します。

場所: `siteminder_home\siteminder\log`

siteminder_home

ポリシー サーバのインストール パスを指定します。

ポリシー サーバの無人インストールの停止

ポリシー サーバの無人インストールを停止し、指定された Windows システムにポリシー サーバがインストールされないようにします。

インストールを停止する方法

- **Windows** - Windows タスク マネージャーを使用して、`ca-ps-12.0-sp3-win32.exe` および `ps_install.exe` プロセスを停止します。
- **UNIX** - Ctrl + C キーを押します。

管理 UI の無人インストールを実行する方法

管理 UI の無人インストールを実行するには、以下の手順を完了します。

1. 以下のいずれかを実行します。
 - 必須インストーラを使用している場合は、[インストール チェックリスト](#) (P. 294)を確認します。
 - 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールする場合は、[インストール チェックリスト](#) (P. 401)を確認します。
2. サイレント インストール用のガイドラインを確認します。
3. どのプロパティファイルを使用するか決定します。

注: 管理 UI インストール オプションが、使用されるプロパティファイルを決定します。
4. 管理 UI ホスト システムから、以下を実行します。
 - a. プロパティファイルをコピーします。以下のいずれかを実行します。
 - 管理 UI を再インストールする場合には、このファイルを一時的な保存場所にコピーします。
 - 新しいシステムに 管理 UI をインストールする場合には、そのシステム上の一時的な保存場所にこのファイルをコピーします。
 - b. 必須インストーラを使用する場合には、`admin_ui_home¥SiteMinder¥adminui` に移動し、JBoss ライセンス使用条件 (JBoss-ORG-ULA.txt)を確認します。必須インストーラのプロパティファイルには、Lesser General Public License パラメータが含まれます。JBoss ライセンス使用条件に同意し、それを承諾することを確認するために、このパラメータを更新します。

5. プロパティ ファイルをコピーしたのと同じ場所に、インストール メディアをコピーします。

注: 管理 UI インストール オプションが、使用される実行ファイルを決定します。

6. プロパティ ファイルを変更します。
7. 管理 UI インストーラを実行します。
8. ポリシー サーバに 管理 UI を登録します。

詳細情報:

[無人インストールのガイドライン](#) (P. 463)

[管理 UI プロパティ ファイル](#) (P. 465)

必須インストーラのプロパティ ファイルの変更

管理 UI をインストールするためにスタンドアロン オプションを使用している場合は、インストール変数を定義するために必須インストーラのプロパティ ファイルを変更します。デフォルト値は、最後の 管理 UI インストール中に入力された情報を反映します。

一般情報

このセクションで、管理 UI インストールのルート フォルダを指定します。

DEFAULT_INSTALL_FOLDER

インストール中にすべてのサブフォルダが作成されるルート フォルダを指定します。

サーバ情報

このセクションで、JBoss および 管理 UI ホストシステムに関する情報を指定します。このセクションには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_APP_SERVER_PORT

JBoss が HTTP リクエストをリスンするポートを指定します。

DEFAULT_APP_SERVER_HOST

管理 UI ホスト システムの完全修飾名を指定します。

エンド ユーザ ライセンス使用条件

必須インストーラは JBoss をインストールします。これには、Lesser General Public License を承諾する必要があります。このセクションで、ライセンス使用条件の確認および同意を示します。

以下のようにして、ライセンスに同意します。

1. 必ず JBoss ライセンス使用条件 (JBossORG-EULA.txt) を確認してください。

ライセンスは以下の 管理 UI ホスト システムで入手することができます。

`admin_ui_home\siteminder\adminui`

`admin_ui_home`

管理 UI インストール パスを指定します。

2. ライセンス使用条件に同意する場合は、ACCEPT_LGPL_EULA の値を以下のように変更します。

はい

ライセンス使用条件を確認し同意することを示します。

管理 UI インストーラのプロパティファイルの変更

既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャに 管理 UI をインストールする場合は、インストール変数を定義するために 管理 UI インストーラのプロパティファイルを変更します。このファイル内のデフォルト値は、最後の 管理 UI インストール中に入力された情報を反映します。

一般情報

このセクションで、管理 UI インストールのルートフォルダを指定します。

DEFAULT_INSTALL_FOLDER

インストール中にすべてのサブフォルダが作成されるルートフォルダを指定します。

アプリケーション サーバ情報

このセクションで、管理 UI が展開されるアプリケーション サーバの情報を指定します。このセクションには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_APP_SERVER

アプリケーション サーバタイプを指定します。このパラメータは以下の設定を使用します。

JBoss

アプリケーション サーバタイプを **JBoss** に指定します。

WebLogic9

アプリケーション サーバタイプを **WebLogic** に指定します。

WebSphere6

アプリケーション サーバタイプを **WebSphere** に指定します。

DEFAULT_NETE_JAVA_HOME

アプリケーション サーバに必要な **JDK** または **JRE** へのパスを指定します。この値は、アプリケーション サーバのタイプによって決まります。

JBoss

必要な **JDK** の最小バージョンへのパスを指定します。

WebLogic

必要な **JDK** または **JRE** の最小バージョンへのパスを指定します。

WebSphere

必要な **JDK** または **JRE** の最小バージョンへのパスを指定します。

DEFAULT_APP_SERVER_URL

アプリケーション サーバがインストールされるシステムの、完全修飾 **URL** を指定します。

JBoss 情報

このセクションで、JBoss に関する追加情報を指定します。

注: DEFAULT_APP_SERVER の値として JBoss を入力しなかった場合、このセクションに値は必要ありません。

このセクションには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_JBOSS_FOLDER

JBoss インストール ディレクトリへのパスを指定します。

注: パスにスペースを含めることはできません。

WebLogic 情報

このセクションで、WebLogic に関する追加情報を指定します。

注: DEFAULT_APP_SERVER の値として WebLogic9 を入力しない場合、このセクションに値は必要ありません。

このセクションには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_BINARY_FOLDER

WebLogic インストール ディレクトリへのパスを指定します。

DEFAULT_DOMAIN_FOLDER

管理 UI のために作成した WebLogic ドメインへのパスを指定します。

DEFAULT_SERVER_NAME

WebLogic ドメインを設定する WebLogic サーバの名前を指定します。

WebSphere 情報

このセクションで、WebSphere に関する追加情報を指定します。

注: DEFAULT_APP_SERVER の値として WebSphere6 を入力しない場合、このセクションに値は必要ありません。

このセクションには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_WEBSPHERE_FOLDER

WebSphere インストール ディレクトリへのパスを指定します。

DEFAULT_WAS_NODE

アプリケーション サーバが存在するノードの名前を指定します。

DEFAULT_WAS_SERVER

アプリケーション サーバの名前を指定します。

DEFAULT_WAS_CELL

アプリケーション サーバが存在するセルの名前を指定します。

WAS_PROFILE

管理 UI に使用されているプロファイルの名前を指定します。

管理 UI インストーラの実行

無人インストールを実行し、ユーザによる操作なしで 管理 UI をインストールします。

インストールする前に

管理 UI をインストールする前に、以下を考慮します。

- テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用して 管理 UI をインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- **重要:** インストール zip には、インストール メディアと同じレベルに `layout.properties` ファイルおよび `Framework` フォルダが含まれています。インストール zip を展開した後にインストール メディアを移動した場合、以下のものを同じ場所に移動しないと、インストールに失敗します。
 - `layout.properties` ファイル
 - `Framework` フォルダ
- インストール zip は、必須インストーラおよび 管理 UI インストーラを含みます。

必須インストーラを使用して 管理 UI をインストールする場合は、両方の実行ファイルが同じ場所にあることを確認してください。必須インストーラは、インストールを完了させるために、自動的に 管理 UI インストーラを呼び出します。

Windows

管理 UI の無人インストールを実行するには、管理 UI インストール メディアおよびプロパティ ファイルをコピーしたディレクトリから以下のコマンドを実行します。

```
installation_media -f properties_file -i silent
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

installation_media

管理 UI のインストール実行ファイルの名前を指定します 管理 UI インストール オプションが、使用される実行ファイルを決定します。

-f properties_file

プロパティ ファイルへのパスを指定します。パスにはプロパティ ファイル名が含まれている必要があります。管理 UI インストール オプションが、使用されるプロパティ ファイルを決定します。

注: 引数がスペースを含んでいる場合は、二重引用符を使用します。

-i silent

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

例:

```
installation_media -f "C:Program  
Files\CA\SiteMinder\adminui\install_config_info\properties_file" -i silent
```

管理 UI をインストールするために、インストーラはプロパティ ファイル内のパラメータを使用します。

ポリシー サーバに 管理 UI を登録してインストールを完了します。

- スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「[管理 UI を登録する方法](#) (P. 304)」を参照してください。
- 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、「[管理 UI を登録する方法](#) (P. 409)」を参照してください。

UNIX

管理 UI の無人インストールを実行する方法

1. シェルを開きます。
2. 管理 UI インストール メディアおよびプロパティ ファイルをコピーしたディレクトリから以下のコマンドを実行します。

```
./installation_media -f properties_file -i silent
```

installation_media

管理 UI のインストール実行ファイルの名前を指定します 管理 UI インストール オプションが、使用される実行ファイルを決定します。

-f properties_file

プロパティ ファイルへのパスを指定します。パスにはプロパティ ファイル名が含まれている必要があります。管理 UI インストール オプションが、使用されるプロパティ ファイルを決定します。

-i silent

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

管理 UI をインストールするために、インストーラはプロパティ ファイル内のパラメータを使用します。

3. 管理 UI をポリシー サーバに登録してインストールを完了します。
 - スタンドアロン オプションを使用して、管理 UI をインストールした場合には、「[管理 UI を登録する方法](#) (P. 304)」を参照してください。
 - 既存のアプリケーション サーバ インフラストラクチャにインストールした場合には、「[管理 UI を登録する方法](#) (P. 409)」を参照してください。

レポート サーバの無人インストールを実行する方法

管理 UI の無人インストールを実行するには、以下の手順を完了します。

1. [インストール チェックリスト](#) (P. 329)を確認します。
2. [インストーラに必要な情報](#) (P. 336)を収集します。
3. サイレント インストール用のガイドラインを確認します。
4. レポート サーバの応答ファイルおよび SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのプロパティ ファイルにアクセスします。

5. 応答ファイルとプロパティファイルをレポート サーバ ホストシステム上の一時的な場所にコピーします。
6. レポート サーバおよび SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのインストール メディアを、レポート サーバ ホストシステム上の一時的な場所にコピーします。
注: インストール メディアは、テクニカル サポート サイトからダウンロードできます。
7. レポート サーバの応答ファイルを変更します。
8. SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのプロパティファイルを変更します。
9. レポート サーバのインストーラを実行します。
10. SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードを実行します。
11. レポート サーバを登録します。

Windows 用レポート サーバ応答ファイルの変更

インストーラの応答ファイルを変更してインストール変数を定義します。デフォルトの値は、レポート サーバがインストールされ、応答ファイルが保存されたときの入力情報を反映しています。

重要: ファイルを変更する前に、以下を考慮してください。

- 一部のパラメータは、レポート (CMS) データベースとして機能するデータベースのタイプを特定します。プロパティファイルを使用して、インストーラで設定されるデータベースのタイプを変更しないでください。レポート データベースのタイプを変更するには、インストーラを使用して別のプロパティファイルを作成します。
- コマンドラインでパラメータを渡すと、応答ファイルの対応する設定より優先されます。
- インストーラはいくつかのパラメータを自動で生成します。以下は変更しないでください。
 - DATABASECONNECT
 - DATACONNECTION
 - DATABASE_AUDIT_CONNSVR
 - INSTALLDBTYPE

- INSTALL_DB_TYPE
- INSTALLLEVEL
- INSTALLSWITCH
- NEWCMSPASSWORD
- PRIVILEGED
- SINGLESERVER
- SKIP_DEPLOYMENT
- WCADOTNETINSTALL
- WCAJAVAINSTALL
- WCATOMCATINSTALL
- WDEPLOY_LANGUAGES
- WDEPLOY_LATER
- WEBSITE_METABASE_NUMBER
- WEBSITE_PORT
- ADDSOURCE
- ADVERTISE

Install

このセクションでは、応答ファイルの **Install** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

AS_ADMIN_IS_SECURE

Web アプリケーション サーバにアクセスするには管理者クレデンシヤルを渡す必要があることを指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。このパラメータは、SiteMinder がサポートしない **Web** アプリケーション サーバに適用されます。

AS_ADMIN_PASSWORD

Web アプリケーション サーバにアクセスするために管理者アカウントによって使用されるパスワードを指定します。埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンがインストールされている場合、このパラメータの値は空です。

SiteMinder は、埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_ADMIN_PORT

Web アプリケーション サーバがリスンするポートを指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで 8080 になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: 8080

この値は、TOMCAT_CONNECTION_PORT の値と一致する必要があります。

AS_ADMIN_USERNAME

Web アプリケーション サーバにアクセスするために使用される管理者アカウントのアカウント名を指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで admin になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: admin

AS_DIR

埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされるパスを指定します。パスはインストール ディレクトリを使用して自動的に設定されます。

注: パスに円記号が含まれる場合は、円記号を使用してエスケープしてください。

例: "C:¥¥Program Files¥¥CA¥¥SC¥¥CommonReporting3¥¥Tomcat55"

AS_INSTANCE

Web アプリケーション サーバ インスタンスの名前を指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで localhost になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: localhost

AS_SERVER

展開する Java Web アプリケーション サーバのタイプを指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで tomcat55 になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: tomcat55

AS_SERVICE_NAME

Web アプリケーション サーバが Windows にサービスとしてインストールされる場合、サービスの名前を指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで BOE120Tomcat になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: BOE120Tomcat

AS_VIRTUAL_HOST

仮想化された環境にレポート サーバを展開している場合、アプリケーションがバインドされる仮想ホストを指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AUDITINGALLOWED

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、Content Management Server Auditing Database コンポーネントが設定可能かどうかを指定します。

0

監査が許可されることを示します。

1

監査が許可されないことを示します。

SiteMinder 設定: 0

AUDITINGENABLED

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、Content Management Server Auditing Database コンポーネントが有効かどうかを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。

Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

0

監査が有効であることを示します。

1

監査が有効でないことを示します。

SiteMinder 設定: 1

CANODE

Service Intelligence Agent (SIA) ノードの名前を指定します。

注: スペースまたは英数字以外の文字は使用できません。

CADPORT

SIA が接続してリクエストを待機する必要があるポートを指定します。

デフォルト: 6410

CLIENTAUDITINGREPORT

Content Management Server Auditing Database コンポーネントが有効な場合、監査サービスがリスンする必要があるポートを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定: デフォルト値 (6420) のままにします。

CLIENTLANGUAGE

インストールする言語パックを指定します。

SiteMinder 設定: EN

CLUSTERCMS

既存の Content Management Server にサーバを追加しているかどうかを指定します。この値を変更する必要がある場合は、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成することを推奨します。

SiteMinder 設定: False

CMSPASSWORD

既存の SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウントのパスワードを指定します。このパラメータは、カスタムまたは Web 層のインストールにのみ適用されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASEAUDITDRIVER

Content Management Server Auditing Database に対してどのドライバを使用するかを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、デフォルト値 (MySQLDatabaseSubSystem) のままにします。
- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEAUTHENTICATION

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASEAUTHENTICATION_AUDIT

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASECONNECT

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASECONNECT_AUDIT

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASESDB

レポート データベースの名前を指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、デフォルト値 (BOE120) のままにします。
- Microsoft SQLServer レポート データベースを設定している場合は、デフォルト値 (RSDB) のままにします。
- Oracle レポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASESDB_AUDIT

Content Management Server の監査データベースの名前を指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係ありません。Content Management Server Auditing Database は、レポートサーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、デフォルト値 (BOE120_AUDIT) のままにします。
- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEDRIVER

レポート データベースに使用するドライバを指定します。

SiteMinder 設定: デフォルト値のままにします。この値を変更する必要がある場合は、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成してください。

DATABASESDSN

レポート データベース用の ODBC 接続の名前を指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、デフォルト値 (Business Objects CMS) のままにします。
- 既存の Microsoft SQL Server データベースを使用している場合は、DSN を入力します。
- 既存の Oracle データベースを使用している場合は、値を空にしておきます。

DATABASESDSN_AUDIT

Content Management Server Auditing Database の ODBC 接続の名前を指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポートサーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定: デフォルト値 (Business Objects Audit Server) のままにします。

DATABASENWLAYER_AUDIT

Content Management Server Audit Database のタイプを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。

Content Management Server Auditing Database は、レポートサーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定: デフォルト値 (ODBC) のままにします。

DATABASEPORT

レポート データベースがリスンするポートを指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合は、ポートを入力します。

デフォルト: 3306

- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEPORT_AUDIT

Content Management Server Audit Database がリスンするポートを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定: このパラメータの値は必要ありません。

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合は、ポートを入力します。

デフォルト: 3306

- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、このパラメータを空にします。SiteMinder では、Content Management Server の監査は必要とされません。

DATABASEPWD

レポート データベースにアクセスするために管理者アカウントによって使用されるパスワードを指定します。

DATABASEPWD_AUDIT

Content Management Server Auditing Database にアクセスするために管理者アカウントによって使用されるパスワードを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、この値は DATABASEPWD と一致する必要があります。
- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、このパラメータを空にします。

DATABASEPWD_MYSQLROOT

埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、レポート データベースにアクセスするために MySQL root ユーザ アカウントによって使用されるパスワードを指定します。

DATABASERDMS_AUDIT

Content Management Server Auditing Database のタイプを指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係ありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定: このパラメータのデフォルト値を使用します。

DATABASESERVER

Oracle レポート データベースを設定している場合、Oracle データベース サービスの名前を指定します。

注: このパラメータは、Microsoft SQL Server レポート データベースを設定する応答ファイルに含まれます。このフィールドは空にします。

DATABASESERVER_AUDIT

Content Management Server Auditing Database サーバ ホスト システムの名前を指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係ありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、デフォルト値 (localhost) のままにします。
- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、このパラメータを空にします。

DATABASEDRIVER

レポート データベースに使用するドライバを指定します。

SiteMinder 設定: デフォルト値のままにします。この値を変更する必要がある場合は、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成してください。

DATABASEUID

レポート データベースにアクセスするために使用される管理者アカウントの名前を指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、アカウント名を入力します。インストーラは、必要な権限で管理者アカウントを作成します。
- Microsoft SQL Server を設定している場合は、データベース所有者 (DBO) 権限を持つアカウント名を入力します。
- Oracle を設定している場合、次の権限が有効なアカウント名を入力します: create session、create table、create procedure。

また、CONNECT と RESOURCE のロールを有効にしたアカウント名を入力することもできます。両方のロールに対して Admin Option 設定は必ず無効にしてください。

DATABASE_UID_AUDIT

Content Management Server Auditing Database へのアクセスに使用される管理者アカウントの名前を指定します。このパラメータは SiteMinder の監査ベースのレポートとは関係がありません。Content Management Server Auditing Database は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、SiteMinder には使用されません。SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、この値は DATABASEUID と一致する必要があります。
- Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEUSER

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成され、DATABASEUID 値に一致します。

SiteMinder 設定: この値は DATABASEUID 値と一致する必要があります。

DATABASEUSER_AUDIT

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成され、空になります。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DATABASE_AUDIT_CONNSVR

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: connsvr

ENABLELOGFILE

インストーラがインストール ログ ファイルを作成するかどうかを指定します。

0

ログ ファイルを作成しません。

1

ログ ファイルを作成します。

ENABLESERVERS

インストールが完了した時点でサーバを有効にする必要があるかどうかを指定します。

0

サーバを有効にしません。

1

サーバを有効にします。

SiteMinder 設定: 1

EXPANDCMS

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: 1

INSTALL.LP.EN.SELECTED

英語の言語パックをインストールすることを指定します。

SiteMinder 設定: 1

INSTALLDBTYPE

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

INSTALLDIR

レポート サーバがインストールされるディレクトリを指定します。

注: パスに円記号が含まれる場合は、円記号を使用してエスケープしてください。

例: C:¥¥Program Files¥¥CA¥¥SC¥¥CommonReporting3¥¥

INSTALLLEVEL

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

INSTALLMODE

インストール方法を指定します。

New

すべての必要なサーバとクライアント コンポーネントをインストールします。

Custom

特定のサーバおよびクライアント コンポーネントを選択してインストールします。

Web Tier

必要な Web アプリケーション サーバ コンポーネントのみをインストールします。

SiteMinder 設定: New

INSTALL_DB_TYPE

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

MYSQLPORT

埋め込みの MySQL バージョンを使用している場合、MySQL が接続してリクエストをリスンするポートを指定します。

デフォルト: 3306

注: このパラメータは、Microsoft SQL Server をレポート データベースとして設定するプロパティファイルに含まれます。デフォルト値を使用します。

MYSQLSERVER

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

MYSQLSERVER_AUDIT

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

NEWCMSPASSWORD

デフォルトの SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウントのパスワードを指定します。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: このパラメータは変更しません。この値を変更する必要がある場合は、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成してください。

MYSQL_REMOTE_ACCESS

埋め込みの MySQL バージョンをレポート データベースとして使用している場合、リモート アクセスを有効にするかどうかを指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

注: このパラメータは、Microsoft SQL Server をレポート データベースとして設定するプロパティファイルに含まれます。この値は空にします。

NAMESERVER

レポート サーバ ホスト システムの名前を指定します。

NEWCMSPASSWORD

デフォルトの SAP BusinessObjects Enterprise 管理者アカウントのパスワードを指定します。

SiteMinder 設定: このパラメータは変更しません。このパラメータは自動的に生成されます。この値を変更する必要がある場合は、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成してください。

NSPORT

Content Management Server がリスンするポートを指定します。

デフォルト: 6400

REINITIALIZE_CMS_DB

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、データベースが再初期化されることを指定します。

SiteMinder 設定: 1

SINGLESERVER

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

SKIP_DEPLOYMENT

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

SelectODBCDSN

Microsoft SQL Server または Oracle のレポート データベースを設定している場合、このパラメータは自動的に生成されます。このパラメータは変更しないでください。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

TOMCAT_CONNECTION_PORT

埋め込みの Apache Tomcat バージョンが接続してリクエストを待機するポートを指定します。

デフォルト: 8080

TOMCAT_REDIRECT_PORT

埋め込みの Apache Tomcat バージョンがリクエストをリダイレクトするポートを指定します。

デフォルト: 8443

TOMCAT_SHUTDOWN_PORT

埋め込みの Apache Tomcat バージョンの SHUTDOWN コマンドが発行される必要があるポートを指定します。

デフォルト: 8005

WCADOTNETINSTALL

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: False

WCAEXISTINGINSTALL

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: False

WCAJAVAINSTALL

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: False

WCATOMCATINSTALL

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: True

WDEPLOY_LANGUAGES

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: en

WDEPLOY_LATER

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値は空白にします。

WEBSITE_METABASE_NUMBER

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: 1

WEBSITE_NAME

IIS Web アプリケーション サーバを展開している場合、SAP BusinessObjects Enterprise アプリケーションが展開される IIS Web サイトの名前を指定します。

SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: デフォルトの Web サイト

WEBSITE_PORT

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: 80

Features

このセクションでは、応答ファイルの **Features** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

REMOVE

インストールしないクライアント、サーバ、**Web** 層、および他の **BusinessObjects Enterprise** コンポーネントを指定します。

SiteMinder 設定: このパラメータの値は変更しません。この値を変更するには、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成します。

ADDLOCAL

インストールするクライアント、サーバ、**Web** 層、および他の **BusinessObjects Enterprise** コンポーネントを指定します。

SiteMinder 設定: このパラメータの値は変更しません。この値を変更するには、インストーラを使用して別の応答ファイルを作成します。

ADDSOURCE

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

ADVERTISE

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

BIEK

このセクションでは、応答ファイルの **BIEK** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

BIEK_INSTALL_SAMPLES

インストーラが **CA** テンプレートをインストールする必要があるかどうかを指定します。このパラメータは、**SiteMinder** レポート テンプレートとは関係がありません。**SiteMinder** レポート サーバ設定ウィザードが、必要なレポート テンプレートをインストールします。このウィザードは、レポート サーバをインストールした後に実行します。

0

サンプル テンプレートをインストールしません。

1

サンプル テンプレートをインストールします。

SiteMinder 設定: 0

SUPPRESS_REBOOT

インストールが正常に完了した後に、コンピュータを再起動するかどうかを指定します。

0

必要であれば、インストールが正常に完了した後にシステムを再起動します。

1

必要であれば、インストールが正常に完了した後にシステムが再起動されないようにします。インストールを完了するためには手動でシステムを再起動します。

SiteMinder 設定: 1

UNIX 用レポート サーバ応答ファイルの変更

インストーラの応答ファイルを変更してインストール変数を定義します。デフォルトの値は、レポート サーバがインストールされ、応答ファイルが保存されたときの入力情報を反映します。

重要： ファイルを変更する前に、以下を考慮してください。

- 一部のパラメータは、レポート データベースとして機能するデータベースのタイプを特定します。プロパティファイルを使用して、インストーラで設定されるデータベースのタイプを変更しないでください。レポート データベースのタイプを変更するには、インストーラを使用して別のプロパティファイルを作成します。
- コマンドラインでパラメータを渡すと、応答ファイルの対応する設定より優先されます。

レポート サーバ インストーラは、いくつかのパラメータを自動的に生成します。以下は変更しないでください。

- PRODUCTID_NAME
- BOBJVERSION
- DATACONNECTION
- PRODUCTID_VER
- FUNCTION
- LANGUAGES_TO_INSTALL
- EXPANDSERVERS

Manual Settings

このセクションでは、応答ファイルの **Manual Settings** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

MACHINENAME

レポートサーバホストの名前を指定します。この値はローカルサーバ名より優先されます。値を提供しない場合、値はデフォルトでローカルホストシステム名になります。

Paths

このセクションでは、応答ファイルの **Paths** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

BOBJEDIR

bobje ディレクトリのパスを指定します。**bobje** ディレクトリは、共通のレポートディレクトリ内に自動的に作成されます。

例: /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/bobje/

CDDIR

レポートサーバインストールキットの **Disk1** ディレクトリへのパスを指定します。

LICENSEDIR

製品のライセンスが含まれているディレクトリへのパスを指定します。

注: レポートサーバのインストールでは、製品ライセンスを提供する必要はありません。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

Product Information

このセクションでは、応答ファイルの **Product Information** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

BOBJELANG

インストールに使用される言語設定を指定します。

SiteMinder 設定: en

PRODUCTID_NAME

インストールされている製品の名前を指定します。

SiteMinder 設定: BusinessObjects

BOBJEVERSION

BusinessObjects Enterprise のバージョンを指定します。

SiteMinder 設定: 12.0

PRODUCTID_VER

インストールされている製品のバージョンを指定します。

SiteMinder 設定: 12.3

BOBJELICENSEKEY

製品をインストールするのに必要なライセンス キーを指定します。この値は、暗号化されて表示されます。

SiteMinder 設定: この値は変更しません。

PIDKEY

製品 ID キーを指定します。この値は、暗号化されて表示されます。

SiteMinder 設定: この値は変更しません。

Installation Information

このセクションでは、応答ファイルの **Installation Information** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

FUNCTION

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: install

INSTALLTYPE

インストール方法を指定します。

new

すべての必要なサーバとクライアント コンポーネントをインストールします。

custom

特定のサーバおよびクライアント コンポーネントを選択してインストールします。

webtier

必要な **Web** アプリケーション サーバ コンポーネントのみをインストールします。

SiteMinder 設定: new

INSTALLMODE

レポート サーバ インストール オペレーティング モードのカンマ区切りリストを指定します。このパラメータは以下のオプションをサポートします。

- install
- modify

- remove
- interactive

SiteMinder 設定: install

LOCALNAMESERVER

レポート サーバ ホスト システムの名前を指定します。

BOBJEINSTALLLOCAL

ユーザまたはシステムのインストールのどちらを実行するかを指定します。

SiteMinder 設定: user

LANGPACKS_TO_INSTALL

インストールする言語パックを指定します。**SiteMinder** は英語の言語パックのみをサポートします。デフォルトで英語の言語パックがインストールされます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

LANGUAGES_TO_INSTALL

BusinessObjects Enterprise に含まれる言語をすべて指定します。これらの値は、インストールする言語パックではなく、使用可能な言語を表します。

SiteMinder 設定: 値のカンマ区切りリスト

BOBJEUSERNAME

root 以外のユーザ アカウントの名前を指定します。

SiteMinder 設定: この値は、応答ファイルの BIEK セクション内の BIEK_INSTALL_USER の値と一致する必要があります。

EXPANDSERVERS

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

Tomcat

このセクションでは、応答ファイルの **Tomcat** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

INSTALLTOMCAT

埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンをインストールする必要があるかどうかを指定します。

SiteMinder 設定: yes

注: インストーラでは **Web** アプリケーション サーバの既存のインスタンスを設定できますが、**SiteMinder** では埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンのみがサポートされます。

CONNECTORPORT

埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンが接続してリクエストを待機するポートを指定します。

デフォルト: 8080

REDIRECTPORT

埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンがリクエストをリダイレクトするポートを指定します。

デフォルト: 8443

SHUTDOWNPORT

埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンの **SHUTDOWN** コマンドが発行される必要があるポートを指定します。

デフォルト: 8005

Application Server

このセクションでは、応答ファイルの **Application Server** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

AS_DIR

埋め込みの **Apache Tomcat** バージョンがインストールされるパスを指定します。パスはインストール ディレクトリを使用して自動的に設定されます。

例: /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3//bobje/tomcat/

AS_SERVER

展開する Java Web アプリケーション サーバのタイプを指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで tomcat55 になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: tomcat55

AS_INSTANCE

Web アプリケーション サーバ インスタンスの名前を指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、この値はデフォルトで localhost になります。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: localhost

AS_VIRTUAL_HOST

仮想化された環境にレポート サーバを展開している場合、アプリケーションがバインドされる仮想ホストを指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_ADMIN_PORT

Web アプリケーション サーバがリスンするポートを指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、値は空です。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_ADMIN_USERNAME

Web アプリケーション サーバにアクセスするために使用される管理者アカウントのアカウント名を指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、値は空です。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_ADMIN_PASSWORD

Web アプリケーション サーバにアクセスするために管理者アカウントによって使用されるパスワードを指定します。埋め込みの Apache Tomcat バージョンがインストールされている場合、値は空です。SiteMinder は、埋め込みの Apache Tomcat バージョンのみをサポートします。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_ADMIN_SECURE

Web アプリケーション サーバにアクセスするには管理者クレデンシャルを渡す必要があることを指定します。このパラメータは、SiteMinder がサポートしない Web アプリケーション サーバに適用されます。

SiteMinder 設定: false

AS_APPSERVER_ID

アプリケーション サーバの名前を指定します。このパラメータは、SiteMinder がサポートしない Web アプリケーション サーバに適用されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

AS_GROUP_ID

アプリケーション サーバのグループ ID を指定します。このパラメータは、SiteMinder がサポートしない Web アプリケーション サーバに適用されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

WEBDEPLOYACTION

Web アプリケーション サーバ上で実行されるアクションを指定します。

SiteMinder 設定: deploy

REDEPLOYWEBAPPS

このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: true

CMS Cluster

このセクションでは、応答ファイルの CMS Cluster セクションのパラメータについて詳しく説明します。

CMSCLUSTER

既存の Content Management Server にサーバを追加しているかどうかを指定します。

SiteMinder 設定: no

CLUSTER_NAMESERVER

Content Management Server にサーバをクラスタ化している場合、Content Management Server の名前を指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

CLUSTERPORTNUMBER

Content Management Server にサーバをクラスタ化している場合、Content Management Server がリスンしているポートを指定します。この値は、デフォルトで応答ファイルの CMS セクション内の CMSPORTNUMBER の値になります。

SiteMinder 設定: この値は CMSPORTNUMBER の値と一致する必要があります。

CMS

このセクションでは、応答ファイルの CMS セクションのパラメータについて詳しく説明します。

DBTYPE

レポート データベースとして機能するデータベースのタイプを指定します。

SiteMinder 設定:

- MySQL

重要: SiteMinder は、埋め込みの MySQL バージョンのみをサポートします。

- Oracle

重要: レポート サーバは、CA 製品が共有できる CA の共通コンポーネントです。そのため、SiteMinder を除く他の製品でサポートされるデータベースのタイプおよびバージョンに及ぶまで、レポート データベースとしてインストーラで設定することができます。サポートされているデータベースのタイプおよびバージョンのリストについては、「SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォーム サポート マトリクス」を参照してください。

SERVICENAME

レポート データベースとして機能する Oracle データベースのサービス名を指定します。

注: MySQL を設定している場合、この値はデフォルトで BOE120 になります。デフォルト値を使用します。

DATABASEUID

レポート データベースにアクセスするために使用される管理者アカウントの名前を指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、アカウント名を入力します。インストーラは、必要な権限で管理者アカウントを作成します。
- Oracle を設定している場合、次の権限が有効なアカウント名を入力します: create session、create table、create procedure。

また、CONNECT と RESOURCE のロールを有効にしたアカウント名を入力することもできます。両方のロールに対して Admin Option 設定は必ず無効にしてください。

DATABASEPASSWORD

レポート データベースにアクセスするために使用される管理者アカウントのパスワードを指定します。

CMSNAMESEVER

レポート サーバ ホスト システムの名前を指定します。

SiteMinder 設定: この値は、応答ファイルの Installation Information セクション内の LOCALNAMESEVER の値と一致する必要があります。

CMSPORTNUMBER

Content Management Server が接続してリクエストを待機するポートを指定します。

デフォルト: 6400

CMSPASSWORD

集中管理サーバにアクセスする管理者アカウントのパスワードを指定します。このパスワードは BusinessObjects Enterprise システム管理者アカウント用です。

SIANODENAME

Service Intelligence Agent (SIA) ノードの名前を指定します。

注: スペースまたは英数字以外の文字は使用できません。

SIAPORTNUMBER

SIA が接続してリクエストを待機するポートを指定します。

デフォルト: 6410

REINIT

レポート データベースが再初期化される必要があるかどうかを指定します。このパラメータは変更しないでください。このパラメータは自動的に生成されます。

SiteMinder 設定: yes

MySQL

このセクションでは、応答ファイルの **MySQL** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

INSTALLMYSQL

埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールする必要があるかどうかを指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合は、**yes** を入力します。
- **Oracle** レポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

SERVICEPORT

埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合、**MySQL** が接続してリクエストをリスンするポートを指定します。

デフォルト: 3306

注: **Oracle** レポート データベースを設定している場合は、デフォルト値のままにします。

MYSQLHOSTNAME

埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合、**MySQL** ホストシステムの IP アドレスを指定します。**MySQL** ホストシステムはレポートサーバホストシステムと同じです。

MYSQLROOTPASSWORD

埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合、**MySQL root** ユーザ アカウントのパスワードを指定します。

Audit

このセクションでは、応答ファイルの **Audit** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

これらのパラメータは、**SiteMinder** 監査ベースのレポートとは関係がありません。**Content Management Server Auditing Database** は、レポート サーバに固有のアクティビティを監査するために使用され、**SiteMinder** には使用されません。

SiteMinder 監査データベースは、監査ベースのレポートの実行に必要となります。

AUDITINGENABLED

Content Management Server Auditing Database を有効にするかどうかを指定します。

- 埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合、**Auditing Database** は自動的に有効になります。

SiteMinder 設定: yes

- **Oracle** レポート データベースを設定している場合は、**Content Management Server** の監査は必要ありません。

SiteMinder 設定: no

SERVICENAME_AUDIT

Content Management Server によって使用される監査サービスの名前を指定します。**Audit Database** を有効にしていない場合、この値はデフォルトで **BOE120_AUDIT** になります。

SiteMinder 設定: デフォルト値のままにします。

SERVICEPORT_AUDIT

Content Management Server Audit Database が接続してリクエストをリスンするポート番号を指定します。この値はデフォルトで **3306** になります。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの **MySQL** バージョンをインストールしている場合、この値は応答ファイルの **MySQL** セクション内の **SERVICEPORT** の値と一致する必要があります。
- **Oracle** レポート データベースを設定している場合は、デフォルト値のままにします。

MYSQLHOSTNAME_AUDIT

Content Management Server Audit Database ホスト システムの IP アドレスを指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、この値は応答ファイルの MySQL セクション内の MYSQLHOSTNAME の値と一致する必要があります。
- Oracle レポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEUID_AUDIT

Content Management Server Auditing Database へのアクセスに使用される管理者アカウントの名前を指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、この値は応答ファイルの MySQL セクション内の DATABASEUID の値と一致する必要があります。
- Oracle レポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

DATABASEPWD_AUDIT

Content Management Server Auditing Database にアクセスするのに使用される管理者アカウントのパスワードを指定します。

SiteMinder 設定:

- 埋め込みの MySQL バージョンをインストールしている場合、この値は応答ファイルの MySQL セクション内の MYSQLROOTPWD の値と一致する必要があります。
- Oracle レポート データベースを設定している場合は、値を空にします。

Marketing Products

このセクションでは、応答ファイルの **Marketing Products** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

ENABLEMP

手動で有効にするクライアント、サーバ、**Web** 層、および他の **BusinessObjects Enterprise** を指定します。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

DISABLEMP

手動で無効にするクライアント、サーバ、**Web** 層、および他の **BusinessObjects Enterprise** を指定します。

SiteMinder 設定: このパラメータの値を空にします。

BIEK

このセクションでは、応答ファイルの **BIEK** セクションのパラメータについて詳しく説明します。

BIEK_INSTALL_USER

インストーラが使用する非 **root** ユーザを指定します。

BIEK_INSTALL_GROUP

非 **root** ユーザが所属するグループを指定します。

BIEK_CASHCOMP

CA 共有コンポーネント環境変数 (**CASHComp**) が設定されるべきフルパスを指定します。**CASHComp** がすでに設定されている場合、インストーラはこの値を無視します。

BIEK_INSTALL_SAMPLES

インストーラが **CA** テンプレートをインストールする必要があるかどうかを指定します。このパラメータは、**SiteMinder** レポートテンプレートとは関係がありません。**SiteMinder** レポートサーバ設定ウィザードが、必要なレポートテンプレートをインストールします。このウィザードは、レポートサーバをインストールした後に実行します。

0

サンプル テンプレートをインストールしません。

1

サンプル テンプレートをインストールします。

SiteMinder 設定: 0

BIEK_MIGRATE_CMS_DATA

このパラメータは変更しないでください。このパラメータはアップグレードでのみ使用されます。

SiteMinder 設定: 0

BIEK_SOURCE_CMS_PASSWORD

このパラメータは変更しないでください。このパラメータはアップグレードでのみ使用されます。

SiteMinder 設定: この値を空にします。

SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのプロパティファイルの変更

環境設定変数を定義するには、レポート サーバ設定ウィザードのプロパティファイルを変更します。このファイル内のデフォルト パラメータ、パスワード、およびパスには、ウィザードを最後に実行したときに入力した情報が反映されます。

このプロパティファイルには、以下のパラメータがあります。

DEFAULT_BOXI_INSTALL_PATH

レポート サーバのインストール パスを指定します。

DEFAULT_BOXI_PASSWORD

デフォルト **BusinessObjects** の管理者アカウントのパスワードを指定します。

注: **ENCRYPTED_BOXI_PASSWORD** に暗号化された値を使用する場合、このパラメータに値は必要ありません。

ENCRYPTED_BOXI_PASSWORD

デフォルト **BusinessObjects** の管理者アカウントの暗号化パスワードを指定します。

重要: この暗号化された値を変更しないでください。別のパスワードを入力するには、暗号化パスワードをコメント化し、**DEFAULT_BOXI_PASSWORD** に値を指定します。

DEFAULT_AUDIT_DATABASE_TYPE

SiteMinder 監査ストアとして機能するデータベースのタイプを指定します。

注: レポート サーバ設定ウィザードを実行する前に、SiteMinder 監査データベースを設定する必要はありません。

値: 1 または 2

1

Microsoft SQL Server を指定します。

2

Oracle を指定します。

レポート サーバ インストーラの実行

無人インストールを実行し、ユーザによる操作なしでレポート サーバをインストールします。

インストールする前に

レポートサーバをインストールする前に、以下を考慮します。

- テクニカル サポートサイトで、インストール メディアを使用してレポート サーバをインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

- レポートサーバは、32 ビット ネイティブ バイナリとしてコンパイルされ、32 ビット データソースミドルウェア接続を使用するよう設定されます。Windows 64 ビット オペレーティング システムにインストールしている場合は、必ず `odbcad32.exe` を使用して DSN を作成してください。この実行ファイルは、以下の場所にあります。

`install_home\Windows\SysWOW64`

`install_home`

Windows オペレーティング システムのインストール パスを指定します。

- レポートサーバ インストールには、プロセスとして実行する以下のコンポーネントが含まれます。

- Content Management Server
- Server Intelligence Agent

これらのコンポーネントでは、通信に TCP/IP ポートが必要です。インストーラでは、レポートサーバ ホストシステム上のポート競合を防ぐためにデフォルト設定を変更することができます。

- **重要:** インストール zip には、複数のフォルダが含まれています。レポートサーバ インストーラは、このフォルダ構造を必要とします。zip を抽出した後にレポートサーバ インストーラを移動させた場合は、同じ場所にフォルダ構造全体をコピーします。必ずそのフォルダ構造からインストール メディアを実行してください。

詳細情報:

[インストール メディアの検索](#) (P. 552)

Windows

レポート サーバの無人インストールを実行する方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. コマンド プロンプトを開きます。
3. ディレクトリを *temporary_location* に変更します。

temporary_location

インストール メディアをコピーした場所を示します。

4. 以下のコマンドを入力します。

```
installation_media silent path_to_response_file
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

installation_media

レポート サーバ インストール実行可能ファイルの名前を指定します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

path_to_response_file

ファイルへのパスを指定します。パスには応答ファイル名が含まれている必要があります。

注: 応答ファイルは、インストール実行ファイルと同じディレクトリ内になくてもかまいません。

サイレント インストールが開始されます。

UNIX

レポート サーバの無人インストールを実行する方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. root ユーザ権限のあるアカウントを使用していることを確認してください。
3. Bourne シェルを開き、*temporary_location* に移動します。

temporary_location

インストール メディアをコピーした場所を示します。

4. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media silent path_to_response_file
```

installation_media

レポート サーバの実行ファイルの名前を指定します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

path_to_response_file

応答ファイルへのパスを指定します。パスには応答ファイル名が含まれている必要があります。

注: 応答ファイルは、インストール実行ファイルと同じディレクトリ内になくてもかまいません。

サイレント インストールが開始されます。

レポート テンプレートのインストール

無人インストールを実行し、ユーザによる操作なしで **SiteMinder** レポート テンプレートをインストールします。

インストールする前に

テクニカル サポート サイトで、インストール メディアを使用して **SiteMinder** レポート テンプレートをインストールします。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

Windows

レポート テンプレートの無人インストールを実行する方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. レポート サーバが[開始](#) (P. 367)されていることを確認してください。
3. コマンド プロンプトを開きます。
4. インストール メディアをコピーした一時保存場所に、ディレクトリを変更します。

5. 以下のコマンドを入力します。

```
installation_media -f properties_file -i silent
```

重要: Windows Server 2008 上で SiteMinder ユーティリティまたは実行可能ファイルを実行している場合は、管理者としてシステムにログインしている場合でも、管理者権限でコマンドライン ウィンドウを開きます。詳細については、お使いの SiteMinder コンポーネントのリリース ノートを参照してください。

installation_media

SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのインストール実行ファイルの名前を指定します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

-f properties_file

プロパティファイルへのパスを指定します。パスにはプロパティファイル名が含まれている必要があります。

注: プロパティファイルは、インストール実行ファイルと同じディレクトリ内になくてもかまいません。

-i silent

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

レポート テンプレートのインストールが開始されます。

6. インストール完了後に、レポート サーバを再起動します。

注: レポートの作成を開始するために、レポート サーバを登録する必要があります。

詳細情報:

[レポートサーバを登録する方法](#) (P. 356)

UNIX

レポート テンプレートの無人インストールを実行する方法

1. 実行中のすべてのアプリケーションを終了します。
2. レポート サーバが[開始](#) (P. 367)されていることを確認してください。
3. シェルを開き、インストール メディアがある場所に移動します。

4. 以下のコマンドを入力します。

```
./installation_media -f properties_file -i silent
```

installation_media

SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのインストール メディアの名前を指定します。

注: オペレーティング システムごとのインストール メディア名のリストについては、「*Policy Server Release Notes*」のインストールおよびアップグレードの考慮事項を参照してください。

-f properties_file

プロパティファイルへのパスを指定します。パスにはプロパティファイル名が含まれている必要があります。

注: プロパティファイルは、インストール実行ファイルと同じディレクトリ内になくてもかまいません。

-i silent

インストーラがサイレントで実行されるように指定します。

レポートテンプレートのインストールが開始されます。

5. インストール完了後に、レポートサーバを再起動します。

注: レポートの作成を開始するために、レポートサーバを登録する必要があります。

詳細情報:

[レポートサーバを登録する方法](#) (P. 356)

付録 E: 国際環境用のポリシー サーバの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[国際環境内のポリシー サーバ \(P. 533\)](#)

[ポリシー サーバのインストールを計画する際の注意事項 \(P. 533\)](#)

[国際文字をサポートする SiteMinder データストアの設定 \(P. 541\)](#)

国際環境内のポリシー サーバ

ポリシー サーバは、Oracle または SQL Server のデータベース内にある SiteMinder データストア、および国際環境用の LDAP サーバをサポートします。

ポリシー サーバのインストールを計画する際の注意事項

ポリシー サーバをインストールする前に以下の点を考慮します。

- サポートされているオペレーティング システムおよびサードパーティソフトウェアの使用
- サポートされているデータベースの作成
 - ポリシーまたはセッション データを格納するためのデータベースを作成する前に、それらが UTF-8 エンコーディングでフォーマットされることを確認します。

- ユーザストア データベースは UTF-8 エンコーディングに制限されていません。ユーザ データベースはローカル文字セットエンコーディングで作成される場合があります。

例: Oracle 9i 内に日本語文字を格納するために、データベースを JA16EUC エンコーディングまたは JA16SJIS エンコーディングで作成できます。

注: Active Directory ネームスペースはマルチバイト文字をサポートしません。使用しているコード ページに関係なく、SiteMinder は Unicode での定義に従って文字を処理します。コード ページは特殊文字をシングルバイトとして参照する場合がありますが、それが Unicode でマルチバイト文字として定義されている場合、SiteMinder はマルチバイト文字として扱います。

- すべての 管理 UI フィールドがマルチバイト文字をサポートします。
- 一部の FSS 管理 UI フィールドは、その一部がマルチバイト文字をサポートします。
- 一部のポリシー サーバ コンポーネントは、国際環境でマルチバイト文字および ASCII 文字をサポートします。
- SiteMinder はマルチバイト文字 (MBCS) URL をサポートします。

注: サポートされている CA およびサードパーティ コンポーネントのリストについては、テクニカル サポート サイトの SiteMinder r12.0 SP3 プラットフォームのサポート マトリックスを参照してください。

マルチバイト文字をサポートするユーザ インターフェース フィールド

管理 UI および FSS 管理 UI には、マルチバイト文字をサポートするフィールドが含まれています。以下のセクションでは、特定のフィールドについて詳しく説明します。

管理 UI

管理 UI 内のフィールドはすべてマルチバイト文字をサポートします。

Federation セキュリティ サービスの管理 UI

以下の FSS 管理 UI ダイアログ ボックス フィールドはマルチバイト文字をサポートします。

フィールド名	フィールドが配置されているダイアログ ボックス	ダイアログ ボックスにアクセスするために選択する項目
すべての説明フィールド	すべてのダイアログ ボックス	説明フィールドが配置されているすべてのダイアログ ボックス
隣の列に記載されたダイアログ ボックス以外のすべての[名前]フィールド	以下のダイアログ ボックスの[名前]フィールド以外のすべてのダイアログ ボックス ■ SiteMinder[エージェント]ダイアログ ボックス ■ SiteMinder[エージェントグループ]ダイアログ ボックス ■ SiteMinder[エージェント設定オブジェクト]ダイアログ ボックス ■ SiteMinder[ホスト設定オブジェクト]ダイアログ ボックス ■ SiteMinder[エージェントタイプ]ダイアログ ボックス	ダイアログ ボックスにアクセスするために選択する項目 ■ [編集]-[エージェントの作成] ■ [編集]-[システム設定]-[エージェントグループの作成] ■ [編集]-[システム設定]-[エージェント設定オブジェクトの作成] ■ [編集]-[システム設定]-[ホスト設定オブジェクトの作成] ■ [編集]-[システム設定]-[エージェントタイプの作成]
[ユーザ セッションのキャッシュ]グループ下の[DN]フィールド	SiteMinder[キャッシュ管理]ダイアログ ボックス	[ツール]-[キャッシュの管理]
[値]および[単一値を入力]フィールド	SiteMinder ホスト設定オブジェクトの[パラメータの編集]ダイアログ ボックス	[編集]-[システム設定]-[ホスト設定オブジェクトの作成]を選択し、[追加]をクリックする
LDAP および AD のネームスペースの[ルート]、[開始]、[終端]フィールド	SiteMinder[ユーザ ディレクトリ]ダイアログ ボックス	[編集]-[システム設定]-[ユーザディレクトリの作成]
[ユーザ名]フィールド	SiteMinder[ユーザ ディレクトリ]ダイアログ ボックスの[クレデンシャル]および[集合体]タブ	[編集]-[システム設定]-[ユーザディレクトリの作成]

[フィルタ](双眼鏡)フィールド	SiteMinder[ポリシー ドメイン]ダイアログ ボックス	[編集]-[システム設定]-[ドメインの作成]
[条件]グループの[手動設定]フィールド	SiteMinder[パスワード ポリシー]ダイアログ ボックスの	[編集]-[システム設定]-[パスワード ポリシーの作成]
[infix 形式]グループの[値]フィールド	SiteMinder[ユーザの検索]画面	
SiteMinder[アクティブ ルール]エディタ ダイアログ ボックスの[関数のパラメータ]フィールド	SiteMinder[ルール]および SiteMinder[グローバル ルール]ダイアログ ボックス	レルムをクリックし、[レルムの下にルールを作成]を選択する
■ [スタティック]オプションの[変数値]フィールド ■ [DN 属性]オプションの[DN 仕様]フィールド ■ [アクティブ レスポンス]オプションの[パラメータ]フィールド	SiteMinder[レスポンス]および[グローバル レスポンス]ダイアログ ボックス	レスポンスをクリックし、[レスポンスの作成]を選択する
■ [ユーザ]タブ上の、[条件]グループの[手動設定]フィールドと、[infix 形式]グループの[値]フィールド ■ [ルール]タブ上の、レスポンスまたはグローバル レスポンスの設定ダイアログ ボックスの[フィルタ]フィールド(双眼鏡) ■ [詳細]タブ上の、[アクティブ なポリシー]グループの[関数のパラメータ]フィールド	SiteMinder[ポリシー]および[グローバル ポリシー]ダイアログ ボックス	[ポリシー]をクリックし、[ポリシー]を選択する
■ [属性/値]オプションの[値]フィールド ■ [LDAP クエリ]オプションの[検索式]フィールド	SiteMinder[ユーザの検索]画面	複数のダイアログ ボックス

マルチバイト文字をサポートしているポリシー サーバコンポーネント

以下のポリシー サーバ コンポーネントは、国際環境でマルチバイト文字および ASCII 文字をサポートします。

- 管理 UI
- ポリシー サーバ管理コンソール
- 認証方式
 - HTML フォーム
 - X.509 クライアント証明書
 - X.509 クライアント証明書および HTML フォーム
 - X.509 クライアント証明書または HTML フォーム
 - RADIUS CHAP/PAP
 - SecurID 認証
 - 匿名認証
 - カスタム認証
 - インパーソネーション認証
- パスワード サービス

注: パスワード サービスは ASCII 文字に制限されていますが、リダイレクト URL としてマルチバイト文字 URL をサポートできます。
- レスポンス
- Post 維持
- SiteMinder テストツール
- テキストファイルへの監査ログ
- ODBC データベースへの監査ログ
- smobjexport と smobjimport
- XPSEExport と XPSImport
- Java エージェント API

マルチバイト文字 URL のサポート

SiteMinder は、マルチバイト文字 (MBCS) を含んでいる URL をサポートしています。MBCS URL のサポートには、以下のもののサポートが含まれます。

- **国際化ドメイン名 - IDN** (*internationalized domain name*) は、発音区別符号の付いた文字、アラビア文字や中国文字など非ラテン文字を含む非 ASCII 文字を含むことができるインターネットドメイン名です。
- **Internationalized Resource Identifier - IRI** (*Internationalized Resource Identifier*) は、URI (Uniform Resource Identifier) を国際化したものです。IRI には、MBCS セットからの 1 つ以上の ASCII 文字を含めることができます。URI は ASCII 文字のサブセットに制限されています。

MBCS URL のサポートによって、以下が可能になります。

- SiteMinder が、MBCS URL によってアクセスされるリソースを保護する。
- IDN と IRI を使用する特定の認証方式を設定する。

MBCS URL のサポートを有効にする方法

SiteMinder 環境内の MBCS URL のサポートには、以下のことが必要です。

- 保護されたリソースにアクセスするために使用される Web ブラウザが特定の要件を満たしていること。
- 環境内の Web サーバの実装が特定の要件を満たしていること。
- Web エージェント設定オブジェクトから、特定のデフォルト不正文字が削除されていること。

MBCS URL のサポートを有効にする方法

1. Web ブラウザが MBCS URL 用の要件を満たしていることを確認します。
2. Web サーバが MBCS URL 用の要件を満たしていることを確認します。
3. Web エージェント設定オブジェクトを設定します。

MBCS URL 用の Web ブラウザ要件

Web ブラウザは、UTF-8 形式でリソースを提供でき、そのドメイン名に非 ASCII 文字が含まれている Web サーバにリクエストを送信する必要があります。

保護されたリソースにアクセスするために使用される Web ブラウザは、以下の機能を備えている必要があります。

- IDN (Internationalized Domain Names: 国際化ドメイン名) のサポート。
- IRI (Internationalized Resource Identifiers) のサポート。
- UTF-8 形式でのリクエストの送信。

MBCS URL 用の Web サーバ要件

以下の要件の少なくとも 1 つを満たす場合、Web サーバは MBCS URL をサポートできます。

- Web サーバが UTF-8 リクエストをローカル文字セットエンコーディングに変換できる。
または
- Web サーバが UTF-8 形式でファイルを格納できる。したがって、Web サーバが、UTF-8 形式で Web ブラウザから IRI のリクエストを受け取った場合にファイルを提供できる。

マルチバイト文字サポートの有効化

MBCS サポートでは、Web エージェント設定オブジェクトから特定のハイビット ASCII 文字値を削除することが必要です。

注: ハイビット ASCII 文字を削除すると、Web エージェントが特定の文字をブロックするのを防ぎます。

MBCS サポートを有効にする方法

1. 管理 UI を開きます。
2. [インフラストラクチャ]-[エージェント]をクリックします。
3. [エージェント設定]-[エージェント設定の変更]をクリックします。
[エージェント設定の変更]ペインが表示されます。
4. 検索条件を入力し、[検索]をクリックします。
検索条件と一致するエージェント設定オブジェクトが表示されます。
5. 目的のエージェント設定オブジェクトを選択し、[選択]をクリックします。
[パラメータ]グループ ボックスにエージェント設定パラメータがリスト表示されます。

6. BadURLChars の[編集]アイコンをクリックします。
[パラメータの編集]ペインが表示されます。
7. [値]フィールドから以下を削除します。
 - %00-%1f
 - %7f-%ff
8. [OK]をクリックします。
編集された値が、BadURLChars フィールドで表示されます。
9. [サブミット]をクリックします。
Web エージェント設定オブジェクトが MBCS URL をサポートするように設定されます。

MBCS URL を持つリソースの保護

MBCS URL のサポートにより、SiteMinder は、非 ASCII 文字を含む URL によってアクセスされるリソースを保護できます。

レルムおよび関連付けられたルールを作成し、リソースを保護する場合、[リソース]フィールドに MBCS URL を入力できます。ユーザは IDN と IRI をサポートするブラウザを使用して、保護されているリソースにアクセスできます。

注: レルムおよびルールの作成の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

MBCS URL をサポートする認証方式

[サーバ名]フィールドで IDN を指定し、[ターゲット]フィールドで IRI を指定して、以下の認証方式を設定できます。

- SSL を介した基本
- HTML フォーム テンプレート
- SSL を介した HTML フォーム テンプレート
- X509 クライアント証明書
- X509 クライアント証明書およびフォーム

注: Netscape と Firefox は、IDN を含む URL へのリダイレクトを受け付け理ません。フォーム関連の認証方式に対して IDN を入力すると、Punny コードを使用しない限り、失敗します。認証方式の設定の詳細については、「ポリシー サーバ設定ガイド」を参照してください。

国際文字をサポートする SiteMinder データストアの設定

SQL Server または Oracle データベース内に SiteMinder データストアを設定できます。これらのデータストアを設定する場合、ポリシー サーバでは UTF-8 エンコーディングのみがサポートされており、このエンコーディングタイプをサポートするデータベースを使用する必要があることに注意してください。

注: このセクションは、リレーショナル データベース内の SiteMinder データストアの設定を対象としています。LDAP サーバ内でのこれらのストアの設定の詳細については、「ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定」を参照してください。

SQL Server 内の国際 SiteMinder データストアの設定

ポリシー、キー、セッション、またはキー ストアを作成するには、SQL Server データベースに SiteMinder データストアを設定します。

注: デフォルトでは、SQL Server は UTF-8 文字エンコーディングをサポートします。

Oracle での国際 SiteMinder データストアの設定

Oracle での国際 SiteMinder データストアを設定する方法

1. Oracle がインストールされるマシンで、UTF-8 文字エンコーディングをサポートするカスタム Oracle データベースを作成します。

注: 詳細および手順については、Oracle のドキュメントを参照してください。

既存の Oracle データベースが UTF-8 文字エンコーディングをサポートしているかどうか確認するには、以下のクエリを実行します。

```
Select * from nls_database_parameters where parameter =  
'NLS_CHARACTERSET'
```

2. Oracle データベースに SiteMinder データストアを設定することにより、ポリシー サーバ用のポリシー、キー、セッション、またはキー ストアを作成します。

Solaris/LINUX Red Hat ポリシー サーバでの UTF-8 文字の Oracle データベースへのログ記録

Solaris/LINUX Red Hat ポリシー サーバは、Oracle 監査ログ データベースに UTF-8 文字をログ記録できます。この設定を有効にするために、以下の環境変数を設定する必要があります。

簡体字中国語オペレーティング システムの場合

- LANG=zh_CN.utf8

日本語オペレーティング システムの場合

- LANG=jp_JP.UTF-8

LANG 変数をシステム全体またはポリシー サーバ プロセスに対してのみ設定します。

注: 他のアプリケーションに影響を与えないようにするために、ポリシー サーバ プロセスに対してのみこの変数を設定してください。

データベースドライバ変数

- IANAAppCodePage=utf-8

この変数は、<policy_server_installation>/db にインストールされた system_odbc.ini ファイルの該当するデータ ソース定義セクションで設定します。

Oracle クライアントの設定

ポリシー サーバでは Oracle ワイヤ プロトコルドライバを使用するので、Oracle クライアントは必要ありません。ただし、監査ログ データベースからデータを読み取るために、環境に Oracle SQLPLUS クライアントが必要なときは、以下の環境変数のいずれかまたは両方を設定し、マルチバイト文字が正しく表示されるようにすることが必要な場合もあります。

簡体字中国語オペレーティング システムの場合

- LANG=zh_CN.utf8

日本語オペレーティング システムの場合

- LANG=jp_JP.UTF-8

Oracle SQLPlus クライアントの場合

- NLS_LANG (たとえば NLS_LANG=Japanese_Japan.UTF8)

注: 詳細については、オペレーティング システムおよびデータベースのクライアント設定マニュアルを参照してください。

SQL Server 内の日本語ユーザ ストアの設定

ポリシー サーバとともにインストールされた smsampleusers_sqlserver.sql ファイルを使用すると、SQL Server データベース内のユーザ ストアを設定できます。このファイルは、<sitefinder_installation>\db\SQL ディレクトリにインストールされます。

注: ユーザ ストアは UTF-8 形式に制限されていません。ローカル文字セット エンコーディングでユーザ ストアを作成できます。

SQL Server 内に日本語ユーザ ストアを設定する方法

1. 以下を実行することにより、smsampleusers_sqlserver.sql ファイルを編集します。

- a. すべての VARCHAR インスタンスを **nvarchar** に置換します。
- b. 国際化文字列を含む INSERT ステートメントの前に **N** を配置します。

日本語の例

```
insert into SmUser ( UserID , Name, Password,  
LastName, FirstName, ...)
```

```
values (12, N'やまもと',  
'siteminder','guest','guest','guest@mycompany.com...')
```

2. smsampleusers_sqlserver.sql ファイルをインポートします。

注: smsampleusers_sqlserver.sql ファイルのインポートの詳細については、サンプル ユーザ ディレクトリを参照してください。

3. ポリシー サーバユーザ インターフェースの SiteMinder ODBC クエリ方式 ダイアログ ボックスを開き、すべての = %s ステートメントの %s 参照の前に **N** を配置することにより、ポリシー ストアの SQL クエリ方式を変更します。

例: 以下のサンプル クエリ スキーム ステートメントがあるとします。

```
select Name, 'User' from SmUser where Name = '%s' Union select Name,  
'Group' from SmGroup where Name = '%s'
```

これは、以下ようになります。

```
select Name, 'User' from SmUser where Name = N'%s' Union select Name,  
'Group' from SmGroup where Name = N'%s'
```

4. ポリシー サーバを停止してから再起動します。

これで、ユーザ ストア設定が完了し、マルチバイト文字がサポートされるようになります。

Oracle 内での日本語ユーザ ストアの設定

ポリシー サーバとともにインストールされた smsampleusers_oracle.sql ファイルを使用すると、Oracle データベース内にユーザ ストアを設定できます。このファイルは、<siteminder_installation>\db\SQL ディレクトリにインストールされます。

注: ユーザ ストアは UTF-8 形式に制限されていません。ローカル文字セット エンコーディングでユーザ ストアを作成できます。

Oracle 内に日本語ユーザ ストアを設定する方法

1. Oracle の UTF-8 NLS_CHARACTERSET エンコーディングをサポートするユーザ データ用のデータベースを作成します。
2. Oracle の SQL Plus を使用して、smsampleusers_oracle.sql ファイルをインポートします。

注: smssampleusers_oracle.sql ファイルのインポートの詳細については、サンプル ユーザ ディレクトリを参照してください。日本語の文字を挿入する場合、日本語オペレーティング システムからのファイルをインポートしてください。

ユーザ ストアの設定が完了しました。

付録 F: 変更される環境変数

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[変更された Windows 環境変数 \(P. 547\)](#)

[変更された UNIX 環境変数 \(P. 548\)](#)

変更された Windows 環境変数

ポリシー サーバ

ポリシー サーバのインストールは、Windows 環境内の以下の環境変数を追加および変更します。

- NETE_PS_ROOT = \$INSTALL_PATH\$
- NETE_PS_PATH = \$INSTALL_PATH\$/\$bin;
\$INSTALL_PATH\$/\$bin\$/\$thirdparty;\$INSTALL_PATH\$/\$lib
- NETEGRITY_LICENSE_FILE = %NETE_PS_ROOT%\$/\$license\$/\$license.dat
- NETE_JVM_OPTION_FILE = %NETE_PS_ROOT%\$/\$config\$/\$JVMOptions.txt
- NETE_DOC_ROOT=\$INSTALL_PATH\$/\$netegrity_documents
- NETE_PS_OPACK="INSTALLED"
- NETE_JRE_ROOT = HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\JavaSoft\Java Runtime Environment\1.6 in JAVAHOME value
- NETE_JAVA_PATH=%NETE_JRE_ROOT%\$/\$bin;%NETE_JRE_ROOT%\$/\$bin\$/\$server
- NETE_JDK_ROOT = HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\JavaSoft\Java Development Kit\1.6 in JAVAHOME value
- NETE_SHORTCUTS = C:\Documents and Settings\All Users\Start Menu\Programs\SiteMinder

注: これがデフォルトの場所です。

管理 UI

管理 UI のインストールは、Windows 環境内の環境変数を追加しません。

レポート サーバ

レポート サーバのインストールは、Windows 環境内の以下の環境変数を追加および変更します。

- IAM_RPTSRV_HOME=\$REPORT_SERVER_LOC\$
- BOE_SSL_JVMOPTIONS="-Dcom.ca.rptsrv.home=%IAM_RPTSRV_HOME%
-Djava.library.path=%IAM_RPTSRV_HOME%/external/bin"

変更された UNIX 環境変数

ポリシー サーバ

ポリシー サーバのインストールは、UNIX 環境内の以下の環境変数を追加および変更します。

- NETE_PS_ROOT = \$INSTALL_PATH\$
- NETE_PS_PATH = \$INSTALL_PATH\$/\$bin;
\$INSTALL_PATH\$/\$bin\$/\$thirdparty;\$INSTALL_PATH\$/\$lib
- NETEGRITY_LICENSE_FILE = %NETE_PS_ROOT%\$/\$license\$/\$license.dat
- NETE_JVM_OPTION_FILE = %NETE_PS_ROOT%\$/\$config\$/\$JVMOPTIONS.txt
- NETE_DOC_ROOT=\$INSTALL_PATH\$/\$netegrity_documents
- NETE_PS_OPACK="INSTALLED"
- NETE_JDK_ROOT = \$JDK_PATH\$
- NETE_JRE_ROOT = \$JRE_PATH\$
- NETE_JAVA_PATH=%NETE_JRE_ROOT%\$/\$bin\$;%NETE_JRE_ROOT%\$/\$bin\$/\$server

管理 UI

管理 UI のインストールは、UNIX 環境内の環境変数を追加しません。

レポートサーバ

レポートサーバのインストールは、UNIX 環境内の以下の環境変数を追加および変更します。

- IAM_RPTSRV_HOME=\$REPORT_SERVER_LOC\$
- BOE_SSL_JVMOPTIONS="-Dcom.ca.rptsrv.home=\$IAM_RPTSRV_HOME
-Djava.library.path=\$IAM_RPTSRV_HOME%/external/bin"

付録 G: プラットフォーム サポートおよびインストール メディア

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス](#) (P. 551)

[マニュアル選択メニューの使用](#) (P. 552)

[インストールメディアの検索](#) (P. 552)

SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス

SiteMinder によりサポートされる CA およびサードパーティコンポーネントの全体的なリストについては、テクニカル サポート サイトを参照してください。

サポート サイトからサポート マトリックスを参照する方法

1. [テクニカル サポート サイト](#)にログインします。
2. [Support]の下で、[Support By Product]をクリックします。
3. [Select a Product Page]フィールドに「CA SiteMinder」を入力し、Enter キーを押します。

CA SiteMinder 製品ページが表示されます。

4. [Product Status]セクションをスクロールし、CA SiteMinder Family of Products Platform Support Matrices をクリックします。

注: 最新の JDK および JRE バージョンは、[Sun Developer Network](#) でダウンロードできます。

マニュアル選択メニューの使用

SiteMinder マニュアル選択メニューはテクニカル サポート サイトで提供されています。

サポート サイトからサポート マトリックスを参照する方法

1. [テクニカル サポート サイト](#)にアクセスします。
注: ログインする必要はありません。
2. (任意) [Get Support] タブが前面にない場合は、[Get Support] をクリックします。
3. [Find Product News and Support] の下で [Product Pages] をクリックします。
[Support by Product] ページが表示されます。
4. [Select a Product Page] フィールドに CA SiteMinder を入力して Enter キーを押します。
CA SiteMinder 製品 ページが表示されます。
5. マニュアル選択メニューをクリックします。
6. 必要なリリースのリンクをクリックします。
SiteMinder マニュアル選択メニューのメイン ページが表示されます。

インストール メディアの検索

SiteMinder インストール メディアの全体的なリストは、テクニカル サポート サイトで見つけることができます。

サポート サイトからサポート マトリックスを参照する方法

1. [テクニカル サポート サイト](#)にログインします。
2. [Support] の下で、[Download Center]-[Products] をクリックします。
[Download Center] 画面が表示されます。
3. [Select a Product] フィールドに SiteMinder を入力します。
4. [Select a Release] リストからリリースを選択します。

5. [Select a Gen Level]リストからサービス パックを選択します。
6. [Go]をクリックします。

[Product Downloads]画面が表示されます。**SiteMinder** のインストール実行可能ファイルがすべて一覧表示されます。

索引



/sitemindermonitor への Windows/IIS 仮想パスが存在しない - 445

A

Active Directory ObjectCategory インデックス属性のサポート - 158

Active Directory 情報ワークシート - 427

ADAM/AD LDS 要件 - 160

ADAM および AD LDS サーバ情報 - 44, 57, 84, 101

ADAM サーバのパッチ - 160

Adobe Acrobat Reader がインストールされない - 462

AE がライブラリ「smjavaapi」のロードに失敗したシステム エラー - 463

Apache Tomcat のインストール - 342

Apache Tomcat ワークシート - 434

API エラーが表示される - 447

Application Server - 518

Audit - 524

B

BIEK - 513, 526

C

CA Business Intelligence - 20

CA Directory 情報ワークシート - 426

CA Technologies 製品リファレンス - iii

CA ディレクトリ キャッシュ設定の確認 - 126

CA への連絡先 - iii

CMS - 521

CMS Cluster - 520

D

DSA のスーパーユーザ管理者の作成 - 123

DSA を開く - 122

F

Federation セキュリティ サービスの管理 UI - 19, 537

Federation セキュリティ サービスの管理 UI の登録 - 319

FIPS の考慮点 - 41, 81

FSS 管理 UI が Sun Java Web Server 上で起動に失敗する - 456

FSS 管理 UI が Windows 上で表示されない - 455

FSS 管理 UI のトラブルシューティング - 454

FSS 管理 UI の登録 - 319

FSS 管理 UI へのログイン - 326

FSS 管理 UI を登録する前に - 323

FSS 管理 UI を登録する方法 - 324

FSS 管理 UI 用の登録クレデンシャルの作成 - 324

G

GUI モードでの設定ウィザードの実行 - 106

GUI モードによるポリシー サーバのインストール - 88

H

HPUX - 390

I

IE で FSS 管理 UI が起動しない - 455

IIS 6.0 の使用後に IIS 7.0 で正しい FSS 管理 UI を表示 - 457

IIS 7.0 Web サーバのインストール前提条件 - 36

Install - 496

Installation Information - 516

IWS からの SiteMinder 参照の削除 - 111

J

JBoss 情報 - 405, 490

JBoss ワークシート - 431

L

LANG 環境変数の設定解除 - 75

Linux - 390

M

Manual Settings - 514

Marketing Products - 526

MBCS URL のサポートを有効にする方法 - 540

MBCS URL 用の Web サーバ要件 - 541

MBCS URL 用の Web ブラウザ要件 - 540

MBCS URL をサポートする認証方式 - 542

MBCS URL を持つリソースの保護 - 542

Microsoft ADAM/AD LDS サーバ情報ワークシート - 424

Microsoft ADAM/AD LDS 情報ワークシート - 428

Microsoft SQL Server レポート データベース - 340

MySQL - 523

MySQL レポート データベース - 340

MySQL レポート データベース ワークシート - 433

O

Obj.conf と Magnus.conf ファイルのバックアップバージョン - 108

ObjectCategory 属性サポートの有効化または無効化 - 159

ODBC ポリシー ストア インポートが UserDirectory エラーで失敗する - 442

OneView モニタ GUI へのアクセス - 385

OneView モニタ サービスの起動 - 385

OneView モニタ情報 - 43, 56, 83, 100

OneView モニタ情報のワークシート - 423

OneView モニタの GUI - 473

OneView モニタの概要 - 379

OneView モニタのシステム要件 - 380

OneView モニタの設定 - 379, 380

OneView モニタのトラブルシューティング - 443

Oracle 10 g データベースに対する前提条件 - 200

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報 - 45, 58, 85, 102

Oracle Directory Server Enterprise Edition 情報 ワークシート - 424

Oracle Directory Server Enterprise Edition の考慮事項 - 135

Oracle Directory Server Enterprise Edition ポリシー ストアのレプリケート - 136

Oracle Directory Server 情報ワークシート - 427

Oracle RAC 情報のワークシート - 429

Oracle RAC データベースの情報 - 204, 249, 263, 277

Oracle RAC ワイヤ プロトコルドライバの設定 - 212, 256, 270, 284

Oracle RDBMS 情報 - 47, 61, 87, 105

Oracle RDBMS ワークシート - 425

Oracle Report データベースのワークシート - 434

Oracle での国際 SiteMinder データ ストアの設定 - 544

Oracle サンプル ユーザ ディレクトリの設定 - 289

Oracle 情報のワークシート - 429

Oracle スキーマ ファイル - 182

Oracle データ ストアの設定 - 247

Oracle データベースの情報 - 203, 249, 262, 276

Oracle で監査ログを格納する方法 - 261

Oracle でキー情報を格納する方法 - 247

Oracle でセッション情報を格納する方法 - 275

Oracle 内での日本語ユーザ ストアの設定 - 546

Oracle ポリシー ストアの設定 - 200

Oracle レポート データベース - 341

Oracle ワイヤ プロトコルドライバの設定 - 210, 254, 268, 282

P

Paths - 515
Path 変数での JRE の設定 - 63
PATH 変数での JRE の設定 - 109
Product Information - 515

R

Red Hat Enterprise Linux Advanced Server に対する SNMP Get のテスト - 395

S

ServletExec インストール後の IIS ユーザ用権限の設定 - 382
ServletExec をインストールするための前提条件 - 383
SiteMinder キー ストアの概要 - 173
SiteMinder スーパーユーザ パスワードの設定 - 125, 139, 151, 165, 192, 216
SiteMinder スキーマの作成 - 186, 205
SiteMinder プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス - 553
SiteMinder ライセンスの使用 - 439
SiteMinder レポート サーバ設定ウィザードのプロパティファイルの変更 - 527
SiteMinder 環境変数がプロファイル ファイルに設定されていない - 438
SiteMinder 監査データベース - 21
SiteMinder 管理 UI - 20
SiteMinder 用の Oracle データソースの設定 - 206, 250, 264, 278
SiteMinder のキー データベース情報 - 43, 56, 83, 100
SiteMinder のドキュメント - 24
SiteMinder 用の SQL Server データソースの設定 - 187, 226, 233, 241
smlldapsetup および Oracle Directory Enterprise Edition - 135
SM キー データベース - 481
SM キー データベース情報のワークシート - 426
SNMP - 474

snmptrap.config の設定 - 394
snmptrap.conf の設定 - 392
SNMP イベントトラップの有効化 - 52, 392, 394
SNMP サポート - 387
SNMP サポートの概要 - 387
SNMP デーモンの再起動 - 94
Solaris - 390
Solaris 10 ゾーン サポート - 71
Solaris で必要なパッチ クラスタ - 30
Solaris/LINUX Red Hat ポリシー サーバでの UTF-8 文字の Oracle データベースへのログ記録 - 544
Solaris 上の NETE_PS_ALT_CONF_FILE 環境変数 - 437
Solaris 上の PATH 変数での JRE の設定 - 461
Solaris パッチ - 73
SQL Server 内の国際 SiteMinder データストアの設定 - 543
SQL Server サンプル ユーザ ディレクトリの設定 - 290
SQL Server 情報 - 46, 60, 86, 104
SQL Server 情報のワークシート - 425, 428
SQL Server データストアの設定 - 224
SQL Server 内に監査ログを格納する方法 - 232
SQL Server 内にキー情報を格納する方法 - 224
SQL Server 内にセッション情報を格納する方法 - 239
SQL Server 内の日本語ユーザ ストアの設定 - 545
SQL Server 認証モードの考慮事項 - 187
SQL Server のスキーマ ファイル - 181
SQL Server ポリシー ストアの設定 - 183
SQL Server レポート データベース ワークシート - 434
SQL Server ワイヤ プロトコルドライバの設定 - 189, 228, 236, 243
SSL 初期化に失敗する - 442
StartServletExec からの SiteMinder 参照の削除 - 112
Sun Java System 6.0 でのサーブレットの無効化 - 383

T

Tomcat - 518

U

UNIX - 26, 28, 30, 347, 399, 484, 494, 530, 532

UNIX GUI - 301, 355, 409

UNIX 上の 管理 UI のアンインストール - 316

UNIX 用レポート サーバ応答ファイルの変更 - 514

UNIX/Sun Java System 上で OneView モニタ GUI を設定する方法 - 382

UNIX/Sun Java システムでの ServletExec/AS のインストール - 384

UNIX アイテムの削除 - 375

UNIX からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール - 373

UNIX からのレポート サーバのアンインストール - 374

UNIX コンソール - 302, 356, 410

UNIX システムで SNMP イベントトラップを設定する方法 - 393

UNIX システムでの Oracle データソースの作成 - 209, 253, 267, 281

UNIX システムでの SNMP エージェントの設定 - 393

UNIX システムでの SQL Server データソースの作成 - 188, 227, 235, 242

UNIX システムでのポリシー サーバのインストール - 69

UNIX システムの前提条件 - 390

UNIX システム パラメータの変更 - 74

UNIX での 管理 UI のアンインストール - 420

UNIX でのタイムアウト値の増加 - 358

W

WebLogic アプリケーション サーバ インスタンスの作成 - 401

WebLogic 情報 - 406, 490

WebLogic ドメインの確認 - 401

WebLogic のインストール - 400

WebLogic ワークシート - 431

WebSphere が動作していることの確認 - 402

WebSphere 情報 - 407, 491

WebSphere のインストール - 402

WebSphere ワークシート - 432

Web エージェントのインストールの準備 - 317

Web サーバ - 474

Windows - 25, 27, 29, 300, 344, 354, 398, 409, 484, 493, 529, 531

Windows IIS 上での ServletExec/ISAPI のインストール - 382

Windows の必要な更新 - 30

Windows 上の 管理 UI のアンインストール - 314

Windows 用レポート サーバ応答ファイルの変更 - 495

Windows/IIS 上で OneView モニタ GUI を設定する方法 - 381

Windows アイテムの削除 - 375

Windows からのレポート サーバ設定ウィザードのアンインストール - 372

Windows からのレポート サーバのアンインストール - 373

Windows システムでの Oracle RAC データソースの作成 - 207, 251, 265, 279

Windows システムでの SQL Server データソースの作成 - 187, 226, 234, 241

Windows システムでのポリシー サーバのインストール - 33

Windows 上で PATH 変数に JRE を設定します - 461

Windows 上での SNMP エージェントの設定 - 390

Windows で SNMP イベントトラップを設定する方法 - 391

Windows での Oracle データソースの作成 - 206, 250, 264, 278

Windows での 管理 UI のアンインストール - 419

Windows でのタイムアウト値の増加 - 357

Windows と UNIX のシステムの場合の前提条件 - 389

Windows に ServletExec をインストールするための前提条件 - 381

Windows の前提条件 - 389
Winsock エラー 10054 メッセージ - 439

あ

アプリケーション サーバ情報 - 489
アプリケーション サーバ情報の収集 - 405
アプリケーション サーバとしての JBoss - 400
アプリケーション サーバとしての WebLogic - 400
アプリケーション サーバとしての WebSphere - 401
アプリケーション サーバの起動 - 305, 415
アプリケーション サーバ要件 - 399
アプリケーション サーバを停止します。 - 306, 417
アンインストール中に Java エラー メッセージが表示される - 460
アンインストールでアプリケーションを閉じるよう要求される - 458
一般情報 - 487, 488
インストーラのための情報の収集 - 42, 82, 295, 338, 353
インストールする前に - 299, 343, 354, 408, 483, 492, 528, 531
インストール前チェックリスト - 24
インストール チェックリストのレポート - 331
インストール認証情報 - 339
インストール認証情報ワークシート - 433
インストールの概要 - 17
インストール メディアの検索 - 554
インストール ロード マップ - 34, 70, 116, 178, 291, 320, 329
インストール ワークシート - 423
疎ルート ゾーン サポート - 72
エージェント - 22
エージェント ホスト ファイルからのポリシー サーバの参照の削除 - 64, 108
エンド ユーザ ライセンス使用条件 - 488
同じマシン上の OneView モニタ GUI/IIS Web エージェントの制限 - 381

か

監査データベースおよびレポート サーバの接続性 - 369
監査データベースを設定する方法 - 366
監査ログスキーマの作成 - 233, 264
監査を基にしたレポートが結果を返さない - 459
完全ルート ゾーン サポート - 72
管理 UI での監査データベースの登録 - 367
管理 UI のインストール - 291, 299, 407
管理 UI のインストールのワークシート - 430
管理 UI への接続の設定 - 365
管理 UI をインストールする方法 - 294, 404
管理者クレデンシャル - 307, 418
管理ユーザ インターフェースの概要 - 23
キー ストア スキーマの作成 - 226, 250
既存ポリシー ストアでのキー ストアの設定 - 174
Features - 512
クライアント名とパスフレーズの作成 - 359
グローバル ゾーン サポート - 71
検索がタイムアウト エラーで失敗する - 452
国際環境内のポリシー サーバ - 535
国際環境用のポリシー サーバの設定 - 535
個別キー ストアの設定 - 174
コンソール モードでの設定ウィザードの実行 - 107
コンソール モードによるポリシー サーバのインストール - 91

さ

サーバ情報 - 487
残存アイテムの削除 - 65
サンプル SiteMinder のインストール - 17
サンプル ユーザ ディレクトリ - 288
システム要件 - 27, 29
自動スタートアップの設定 - 95
重要な考慮事項 - 117, 180
ジョブ サーバ サービス タイムアウト値の増加 - 357
新規 UNIX アカウントの作成 - 74

スクリプト インターフェース - 66, 113
すべての SiteMinder プロセスの停止 - 109
セッション ストア スキーマの作成 - 241, 277
接続要件 - 31
設定ウィザードの実行 - 62
設定ウィザードの要件 - 97
設定ウィザード用の情報の収集 - 56, 99
設定ウィザードを使用する方法 - 54, 97
設定パーティション内でのユーザ作成を許可します。 - 160

た

対象読者 - 17
タイムアウトすることなく登録が失敗する - 451
多数のオブジェクトを含むポリシー ストア - 441
追加ポリシー サーバの接続を設定する方法 - 308
ディレクトリ サーバ情報の収集 - 118, 133, 147, 161
データベース情報の収集 - 183, 202, 225, 232, 239, 248, 261, 275
デフォルトのポリシー ストア オブジェクトのインポート - 127, 140, 152, 167, 194, 218
デフォルトのログ ファイルが見つからない場合 - 453
デフォルトのログ ファイルは、十分な情報を提供しません。 - 454
デフォルト プロパティ ファイル - 466
デフォルト ポリシー サーバ接続の変更 - 313
登録情報の収集 - 311, 361
登録ツールの実行 - 308
登録前のチェックリスト - 322
トラブルシューティング - 437

な

残りのサービスの削除 - 66

は

必須インストーラのプロパティ ファイルの変更 - 487
必須インストーラ ワークシート - 430

必要とされる Linux ライブラリ - 73, 295, 404
必要な情報 - 42, 82, 100, 203, 248, 261, 275
必要な情報のワークシート - 423
「ファイルに登録がありません」エラーが表示される - 447
プラットフォーム サポートおよびインストール メディア - 553
変更された UNIX/Sun Java System Web Server 設定ファイルの修正 - 444
変更された UNIX 環境変数 - 550
変更された Windows 環境変数 - 549
変更される環境変数 - 549
ポリシー サーバの無人インストールを実行する方法 - 468
ポリシー サーバへの接続設定 - 312
ポリシーおよびデータ ストアのワークシート - 426
ポリシー サーバ - 18
ポリシー サーバ インストーラの実行 - 48, 483
ポリシー サーバ インストーラのプロパティ ファイルの変更 - 469
ポリシー サーバ インストールのトラブルシューティング - 51, 94, 485
ポリシー サーバがインストール後に起動しない - 438
ポリシー サーバからディレクトリ サーバへの参照の設定 - 137, 148, 163
ポリシー サーバからポリシー ストアへの参照の設定 - 124
ポリシー サーバ機能 - 471
ポリシー サーバ クラスターの監視 - 386
ポリシー サーバ コンポーネントの考慮事項 - 37, 78
ポリシー サーバ接続が登録できない - 446
ポリシー サーバ接続の削除 - 313
ポリシー サーバ設定ウィザード - 53, 96
ポリシー サーバ全般情報 - 469
ポリシー サーバ登録ワークシート - 432
ポリシー サーバとの信頼できるリレーションシップ - 293, 403
ポリシー サーバに対する参照データベースの指定 - 191, 215, 230, 237, 245, 259, 273, 287

ポリシー サーバにレポート サーバを登録します - 362
ポリシー サーバのアンインストール - 64, 110
ポリシー サーバのインストールの準備方法 - 73
ポリシー サーバのインストール方法 - 37, 77
ポリシー サーバのインストール要件 - 25
ポリシー サーバのインストールを計画する際の注意事項 - 535
ポリシー サーバの再インストール - 63
ポリシー サーバの再起動 - 143, 155, 170, 197, 221, 231, 239, 246, 260, 274, 288
ポリシー サーバのシステム要件 - 25
ポリシー サーバの停止と再起動 - 394
ポリシー サーバのトラブルシューティング - 437
ポリシー サーバの無人インストール - 53, 96
ポリシー サーバの無人インストールの停止 - 486
ポリシー サーバのワークシート - 423
ポリシー サーバプロパティファイル - 466
ポリシー サーバをアンインストールする方法 - 63, 108
ポリシー サーバをインストールする前に - 35, 76
ポリシー ストア - 19, 475
ポリシー ストア スキーマの作成 - 120, 138, 150, 164
ポリシー ストア データ定義のインポート - 129, 142, 154, 169, 196, 220
ポリシー ストア データ用のベース ツリー構造の作成 - 123
ポリシー ストアとしての Active Directory - 146
ポリシー ストアとしての CA Directory - 118
ポリシー ストアとしての Microsoft ADAM/AD LDS - 160
ポリシー ストアとしての Oracle Directory Server Enterprise Edition - 133
ポリシー ストアの表領域を管理する Oracle 10 g ユーザの作成 - 201
ポリシー ストアの考慮事項 - 39, 54, 79, 98
ポリシー ストアの設定 - 52, 95
ポリシー ストアのトラブルシューティング - 441

ポリシー ストアまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバの設定 - 115
ポリシー ストア用の DSA の作成 - 119
ポリシー ストア用の Oracle 10 g 表領域の作成 - 201
ポリシー ストアを設定する方法 - 118, 134, 148, 162, 184, 204
ポリシーまたはキー ストアとしての LDAP ディレクトリ サーバ - 115
ポリシーまたはキーのストアとしてのリレーショナル データベース - 177
ポリシー分析レポートが実行できない - 459

ま

マニュアル選択メニューの使用 - 554
マルチバイト文字 URL のサポート - 540
マルチバイト文字サポートの有効化 - 541
マルチバイト文字をサポートしているポリシー サーバコンポーネント - 538
マルチバイト文字をサポートするユーザ インターフェイス フィールド - 536
「無効な登録ファイルです」エラーが表示される - 449
無人インストール - 465

や

ユーザ ストアとしての Active Directory の使用に関する問題 - 462

ら

リレーショナル データベースでの SiteMinder データストアの設定 - 177
リレーショナル データベース用のスキーマ ファイル - 180
レポート サーバ インストーラにファイル不足エラーが表示される - 457
レポート サーバ インストーラの実行 - 528
レポート サーバの無人インストールを実行する方法 - 494
レポート サーバを再起動します。 - 364
レポート インストールのしくみ - 337

レポート サーバ - 332
レポート サーバ インストール オプション - 331
レポート サーバ インストールのトラブルシュー
ティング - 352
レポート サーバ インストール要件 - 29
レポート サーバ設定ワークシート - 435
レポート サーバのインストール - 342
レポート サーバのインストールは、文字に関するエラーで失敗します。 - 458
レポート サーバの再インストール - 377
レポート サーバの停止 - 371
レポート サーバの登録のワークシート - 435
レポート サーバのトラブルシューティング - 457
レポート サーバをインストールする方法 - 338
レポート サーバを登録する方法 - 358
レポート スケジューラの開始 - 369
レポート データベースおよび監査データベース
- 334
レポート データベース テーブルの削除 - 376
レポート データベース要件 - 31
レポート テンプレートのインストール - 353, 531
レポート テンプレートをインストールする方法 -
352
レポートのインストール - 329
レポートの考慮事項 - 336
レポート プロパティ ファイル - 468
レポートをアンインストールする方法 - 372
ローカライズ変数の設定解除 - 75

わ

ワークシートのレポート - 433